

広島城遺跡

基町高校グラウンド地点

—広島市中区西白島町所在—

1999

財団法人広島市文化財団



遺跡遠景（南より）

は し が き

アジア大会の開催を契機として広島は街は面目を一新しつつあります。新交通システムアストラムラインの建設、市営中央駐車場及び同庭球場の建設、そして現在も続いている地下街の建設、と近年広島を中心街からは槌音の絶える暇がありません。

こうした大規模な建設工事のラッシュの陰で当財団の前身である財団法人広島市歴史科学教育事業団によって広島城関連の発掘調査が営々と行われてきました。建設現場での、また交通量の多い市街地での調査であるためやむを得ないこととはいえ、夜間調査や覆工板下での調査は厳しいものでした。しかしこうした調査の積み重ねは新たな広島城の姿を間違いなく我々の眼前に示してくれようとしています。

こうした中で今回広島市立基町高等学校の改築に伴って同校のグラウンド部分の一部を調査することとなりました。この地は近世には武家屋敷地であり近代以降は軍の施設があったとされています。これまでの発掘調査が堀の調査が中心であったのに対して初めての本格的な居住地の調査となり、また違った広島城の姿を浮かび上がらせる大きな成果を挙げることができました。

この報告書が少しでも多くの方々に活用され、市民の皆様が郷土の歴史や文化について理解を深められる一助となれば幸いに存じます。最後になりましたが、調査にあたりご指導・ご助言いただきました諸先生方、諸機関各位ならびに発掘調査にご協力いただきました関係機関・調査補助員の方々に厚くお礼申し上げます。

平成 11 年 3 月

財団法人広島市文化財団文化科学部文化財課

例 言

1. 本書は、広島市中区西白島町25番62号において、広島市立基町高等学校改築工事に伴い平成9年度に実施した広島城関連遺跡及び近代の軍関連遺跡の発掘調査報告である。
2. 発掘調査は広島市教育委員会施設部建設課から委託を受けて、財団法人広島市歴史科学教育事業団文化財課が実施した。整理作業は広島市教育委員会建設課から委託を受けて、財団法人広島市文化財団文化科学部文化財課（平成10年4月1日付で、財団法人広島市歴史科学教育事業団と財団法人広島市文化振興事業団の統合により、財団法人広島市文化財団が発足）が実施した。
3. 現地調査は平成9年9月1日から平成9年11月15日まで行った。
4. 本書は福原茂樹が執筆・編集を行った。
5. 遺物の実測・トレース・写真撮影は福原が行った。拓本は福原・住川香代子が行った。
6. 本報告書の挿図等に使用した遺構表示記号は以下のとおりである。
SK：土坑 SD：溝状遺構 SB：建物跡 SE：井戸 SX：その他の遺構
7. 本文中の遺物数は、接合を行ったのちの同一個体ではないと思われる破片数である。
8. 遺構の写真測量・図面作成は株式会社パスコに委託して行った。
9. 遺物の科学分析については株式会社パリノ・サーヴェイに委託して行った。
10. 航空写真の撮影は、スタジオ・ユニに委託して行った。
11. 第1図及び第2図は、広島市都市整備局都市計画課発行の地形図を複製した。
12. 本調査で得られた資料は、広島市教育委員会から委託を受けて、財団法人広島市文化財団文化財課において保管している。

目 次

I はじめに	1
II 位置と歴史的環境	5
III 遺構と遺物	8
IV まとめ	103

挿 図 目 次

第 1 図 広島城周辺関連遺跡分布図	3	第 19 図 SK41実測図	63
第 2 図 本遺跡調査区位置図	4	第 20 図 SK40, SK42, SK43 実測図	64
第 3 図 遺構配置図	50	第 21 図 SK44実測図	64
第 4 図 SK1実測図	51	第 22 図 SK25, SK45, SK46, SK47, SK49実測図	65
第 5 図 SK2, SK3, SK4, SX3 実測図	52	第 23 図 SK48実測図	66
第 6 図 SK5, SK7, SD7, SD8 実測図	53	第 24 図 SK51, SK52, SK53 実測図	66
第 7 図 SK8実測図	54	第 25 図 SK50, SK54, SK55, SK56, SX9実測図	67
第 8 図 SK13実測図	54	第 26 図 SD1 実測図	68
第 9 図 SK9, SK10, SK11, SK12, SX4実測図	55	第 27 図 SD11実測図	68
第 10 図 SK14, SK15, SK16実測図	56	第 28 図 SD2, SE1, SX2 実測図	69
第 11 図 SK17, SK18, SK19, SK20 実測図	57	第 29 図 SD3 実測図	70
第 12 図 SK21, SK22 実測図	58	第 30 図 SD4, SX3 - P5 実測図	71
第 13 図 SK23実測図	58	第 31 図 SK6, SD5, SD6実測図	71
第 14 図 SK24, SK29, SK30, SK31, SK32, SK33, SX6, SX7 実測図	59	第 32 図 SD9, SD10 実測図	72
第 15 図 SK26, SK27, SK28 実測図	60	第 33 図 SD12, SX10 実測図	73
第 16 図 SK34, SX8 実測図	61	第 34 図 SD13 実測図	74
第 17 図 SK35, SK36, SK37, SE2 実測図	62	第 35 図 SB1 実測図	75
第 18 図 SK38, SK39 実測図	63	第 36 図 SB2 実測図	76
		第 37 図 SB3 実測図	77
		第 38 図 SB4 実測図	78
		第 39 図 SE3 実測図	79
		第 40 図 SX1 実測図	79
		第 41 図 SX11実測図	79

第 42 図	SX5実測図 ……………80		出土遺物……………93
第 43 図	SK2, SK7, SK8, SK9, SK11, SK12 出土遺物……………81	第 56 図	SK48, SK49, SK51 出土遺物……………94
第 44 図	SK13, SK14, SK15 出土遺物……………82	第 57 図	SK51, SK52, SK53 出土遺物……………95
第 45 図	SK16, SK17 出土遺物……………83	第 58 図	SK54, SK55 出土遺物……………96
第 46 図	SK17, SK18, SK1 出土遺物……………84	第 59 図	SK56, SD2 出土遺物 ……………97
第 47 図	SK19, SK20, SK21, SK22 出土遺物……………85	第 60 図	SD3, SD4, SD7 出土遺物……………98
第 48 図	SK22 出土遺物……………86	第 61 図	D7, SD8 出土遺物……………99
第 49 図	SK23, SK25, SK27, SK29 出土遺物……………87	第 62 図	SD8 出土遺物……………100
第 50 図	SK30, SK34, SK35, SK37 出土遺物……………88	第 63 図	SX5, SX6, SX7, SX8 出土遺物 ……………101
第 51 図	SK36 出土遺物……………89	第 64 図	SX8 出土遺物等……………102
第 52 図	SK39, SK40, SK41 出土遺物……………90	第 65 図	時期別遺構配置図(1)……………105
第 53 図	K41, SK43 出土遺物……………91	第 66 図	時期別遺構配置図(2)……………106
第 54 図	SK44 出土遺物……………92	第 67 図	K22, SK25, SK30, SK36 出土の土師質瓦質皿 ……………108
第 55 図	SK45, SK47, SK48	第 68 図	土師質瓦質皿A群変遷表……………109
		第 69 図	土師質瓦質皿B群変遷表……………110
		第 70 図	内耳土器変遷表 ……………113

付 表 目 次

表－1	遺跡関連記事年表…………… 5	表－11	SK5出土遺物生産年代表 ……129
表－2	遺構年代表……………103	表－12	SK7出土遺物生産年代表 ……129
表－3	遺構別内耳土器出土状況……………112	表－13	SK8出土遺物生産年代表 ……129
表－4	磁器観察表……………114	表－14	SK9出土遺物生産年代表 ……131
表－5	施釉陶器観察表……………118	表－15	SK11出土遺物生産年代表…131
表－6	焼締め陶器観察表……………122	表－16	SK12出土遺物生産年代表…131
表－7	土師質瓦質土器観察表……………123	表－17	SK13出土遺物生産年代表…132
表－8	その他製品観察表……………127	表－18	SK14出土遺物生産年代表…132
表－9	丸瓦観察表……………128	表－19	SK15出土遺物生産年代表…132
表－10	平瓦観察表……………128	表－20	SK16出土遺物生産年代表…133

表-21	SK17出土遺物生産年代表……	133
表-22	SK18出土遺物生産年代表……	134
表-23	SK19出土遺物生産年代表……	135
表-24	SK20出土遺物生産年代表……	136
表-25	SK22出土遺物生産年代表……	136
表-26	SK23出土遺物生産年代表……	137
表-27	SK24出土遺物生産年代表……	137
表-28	SK27出土遺物生産年代表……	137
表-29	SK28出土遺物生産年代表……	137
表-30	SK29出土遺物生産年代表……	137
表-31	SK30出土遺物生産年代表……	137
表-32	SK34出土遺物生産年代表……	138
表-33	SK35出土遺物生産年代表……	138
表-34	SK36出土遺物生産年代表……	138
表-35	SK37出土遺物生産年代表……	138
表-36	SK39出土遺物生産年代表……	139
表-37	SK40出土遺物生産年代表……	139
表-38	SK41出土遺物生産年代表……	139
表-39	SK43出土遺物生産年代表……	140

表-40	SK44出土遺物生産年代表……	140
表-41	SK45出土遺物生産年代表……	140
表-42	SK47出土遺物生産年代表……	141
表-43	SK48出土遺物生産年代表……	141
表-44	SK49出土遺物生産年代表……	141
表-45	SK5 ャ出土遺物生産年代表 ……	141
表-46	SK52出土遺物生産年代表……	142
表-47	SK53出土遺物生産年代表……	142
表-48	SK54出土遺物生産年代表……	142
表-49	SK55出土遺物生産年代表……	142
表-50	SD2 出土遺物生産年代表 ……	143
表-51	SD3 出土遺物生産年代表 ……	146
表-52	SD4 出土遺物生産年代表 ……	146
表-53	SD6 出土遺物生産年代表 ……	146
表-54	SD7 出土遺物生産年代表 ……	147
表-55	SD8 出土遺物生産年代表 ……	147
表-56	SD11出土遺物生産年代表……	149
表-57	SD12出土遺物生産年代表……	149

図 版 目 次

巻頭図版	遺跡遠景（南より）	b	SK9, SK10（北より）
図版 1 a	遺跡遠景（北より）	c	SK11（東より）
b	調査区全景（北より）	図版 6 a	SK12（北より）
図版 2 a	SK1（北より）	b	SK14（南西より）
b	SK1（完掘後，北より）	c	SK18（西より）
図版 3 a	SK2, SK3, SK4, SX3－P3（西り）	図版 7 a	SK15（南西より）
b	SK8（東より）	b	SK16（北東より）
図版 4 a	SK3（北より）	c	SK17（西より）
b	SK5（南より）	図版 8 a	SK19（南西より）
c	SK6（東より）	b	SK19, SK20（北より）
図版 5 a	SK7（東より）	c	SK23（北より）
		図版 9 a	SK15, SK16, SK17（北より）

- | | |
|---|---------------------------------------|
| b SK17, SK18, SK19, SK20
(南より) | b SK54, SK55, SK56, SX9
(北より) |
| 図版 10 a SK21, SK22 (南より) | 図版 22 a SK55 炭化物出土状況 (西より) |
| b SK24 (南より) | b SD1 (西より) |
| 図版 11 a SK26 (北より) | 図版 23 a SD2 構内堆積状況, SE1
(北より) |
| b SK35, SK36, SK37, SE2
(面より) | b SD2 構内堆積状況 (北より) |
| 図版 12 a SK27 (北より) | 図版 24 a SD2 完掘後 (南より) |
| b SK28 (北より) | b SD2 構内土層断面 (南より) |
| c SK29 (北東より) | 図版 25 a SD2 土層断面 (南より) |
| 図版 13 a SK30 (北より) | b SD3 (面より) |
| b SK31 (東より) | 図版 26 a SD4 (南より) |
| c SK32, SK33 (面より) | b SD4, SX3 - P5 (西より) |
| d SK32, SK33 土層断面 (東より) | c SD5, SB2 (南より) |
| 図版 14 a SK34 (東より) | 図版 27 a SD5, SB2 土層断面 (東より) |
| b SK36, SK37 (北より) | b SD5, SD6 (西より) |
| 図版 15 a SK36 遺物出土状況 (西より) | 図版 28 a SD7, SD8 (東より) |
| b SK38 (南より) | b SD7, SD8, SK7 (東より) |
| c SK40 (東より) | 図版 29 a SD8 遺物出土状況 (北より) |
| 図版 16 a SK39 (東より) | b SD9 構内堆積状況 (北より) |
| b SK41 (北より) | 図版 30 a SD9 (南より) |
| 図版 17 a SK42 (西より) | b SD10 (北より) |
| b SK43 (北より) | 図版 31 a SD11, SX6 (西より) |
| c SK44 (北より) | b SD9, SD10, SD12, SE3,
SX10 (西より) |
| 図版 18 a SK25, SK45, SK46, SK47,
SK49 (西より) | 図版 32 a SD13 東半部 (北より) |
| b SK50, SK54, SK55, SK56,
SX9 (西より) | b SD13 西半部 (北より) |
| 図版 19 a SK48 (南より) | 図版 33 調査区西半部 |
| b SK48 土層断面 (南より) | 図版 34 a SB1, SE1 (北より) |
| c SK49 (北より) | b SB1 - P1 (東より) |
| 図版 20 a SK50 (西より) | 図版 35 a SB1 - P2 (東より) |
| b SK50 土層断面 (西より) | b SB1 - P3 (北より) |
| c SK51 (西より) | c SB1 - p4 (東より) |
| 図版 21 a SK52, SK53 (西より) | 図版 36 a SB1 - P5 (北より) |
| | b SB1 - p6 (西より) |

	c	SB1－P7（北より）		b	SX10（南西より）
図版 37	a	SB1－P8（南より）	図版 50		SX11（東より）
	b	SB1－P9（北より）	図版 51		SK2, SK7, SK8, SK9,
	c	SB3 暗渠断面（西より）			SK11, SK12 出土遺物
図版 38	a	SB2（北より）	図版 52		SK13, SK14, SK15, SK16
	b	SB3（北東より）			出土遺物
図版 39	a	SB3 構内せきとめ石（北より）	図版 53		SK17, SK18, SK19 出土遺物
	b	SB4（南東より）	図版 54		SK19, SK20, SK21, SK22
図版 40	a	SE1 蓋石出土状況（東より）			出土遺物
	b	SE1（西より）	図版 55		SK22, SK23 出土遺物
図版 41	a	SE 埋石出土状況（西より）	図版 56		SK25, SK27, SK29, SK30
	b	SE2（北より）			出土遺物
図版 42	a	SE3（東より）	図版 57		SK30, SK34, SK35, SK37
	b	SE3（東より）			出土遺物
図版 43	a	SX1（西より）	図版 58		SK36 出土遺物
	b	SX2（南より）	図版 59		SK39, SK40, SK41 出土遺物
図版 44	a	SX2 排水口（西より）	図版 60		SK41, SK43, SK44 出土遺物
	b	SX3（北より）	図版 61		SK44, SK45, SK47, SK48
図版 45	a	SX3－P1（北より）			出土遺物
	b	SX3－P2（南より）	図版 62		SK48, SK49, SK51 出土遺物
	c	SK2, SX2－P3（北より）	図版 63		SK51, SK52, SK53, SK54
図版 46	a	SX3－P4（北より）			出土遺物
	b	SX3－P5（北より）	図版 64		SK55, SK56, SD2 出土遺物
	c	SX7（北より）	図版 65		SD2, SD3 出土遺物
図版 47	a	SX5（北より）	図版 66		SD4, SD7 出土遺物
	b	SX5 排水口（西より）	図版 67		SD8 出土遺物
図版 48	a	SX6（北より）	図版 68		SD8, SX5, SX6, SX7,
	b	SX8（北より）			SX8 出土遺物
図版 49	a	SX9（北より）	図版 69		SX8 出土遺物

I は じ め に

平成9年、基町高等学校の改築工事に伴い、建設の主体となる広島市教育委員会施設部建設課から教育委員会生涯学習部文化課に対して建設予定地内における文化財の有無について照会があった。これを受けて文化課は試掘調査を実施し数カ所で溝状遺構等の埋蔵文化財の存在を確認した。再三の協議の結果、計画の変更は困難であり、記録保存も止むなしとの結論に達した。

その結果、平成9年5月に広島市教育委員会施設部建設課から財団法人広島市歴史科学教育事業団へ発掘調査の依頼があり、これを受けて平成9年9月1日から11月15日まで発掘調査を実施した。また、平成10年度に整理作業及び報告書の執筆を行った。

調査の関係者は次のとおりである。

調査委託者 広島市教育委員会施設部建設課

調査主体 財団法人広島市歴史科学教育事業団
財団法人広島市文化財団

調査担当課 財団法人広島市歴史科学教育事業団文化財課（平成9年度）
財団法人広島市文化財団文化科学部文化財課（平成10年度）

調査関係者 平成9年度
中原 照雄 常務理事（現 広島市佐伯区長）
佐川 清 文化財課長
宮田 浩二 文化財課事業係長

平成10年度
竹本 輝男 常務理事
堂官 正昭 文化科学部長
佐川 清 文化財課長
宮田 浩二 文化財課主任

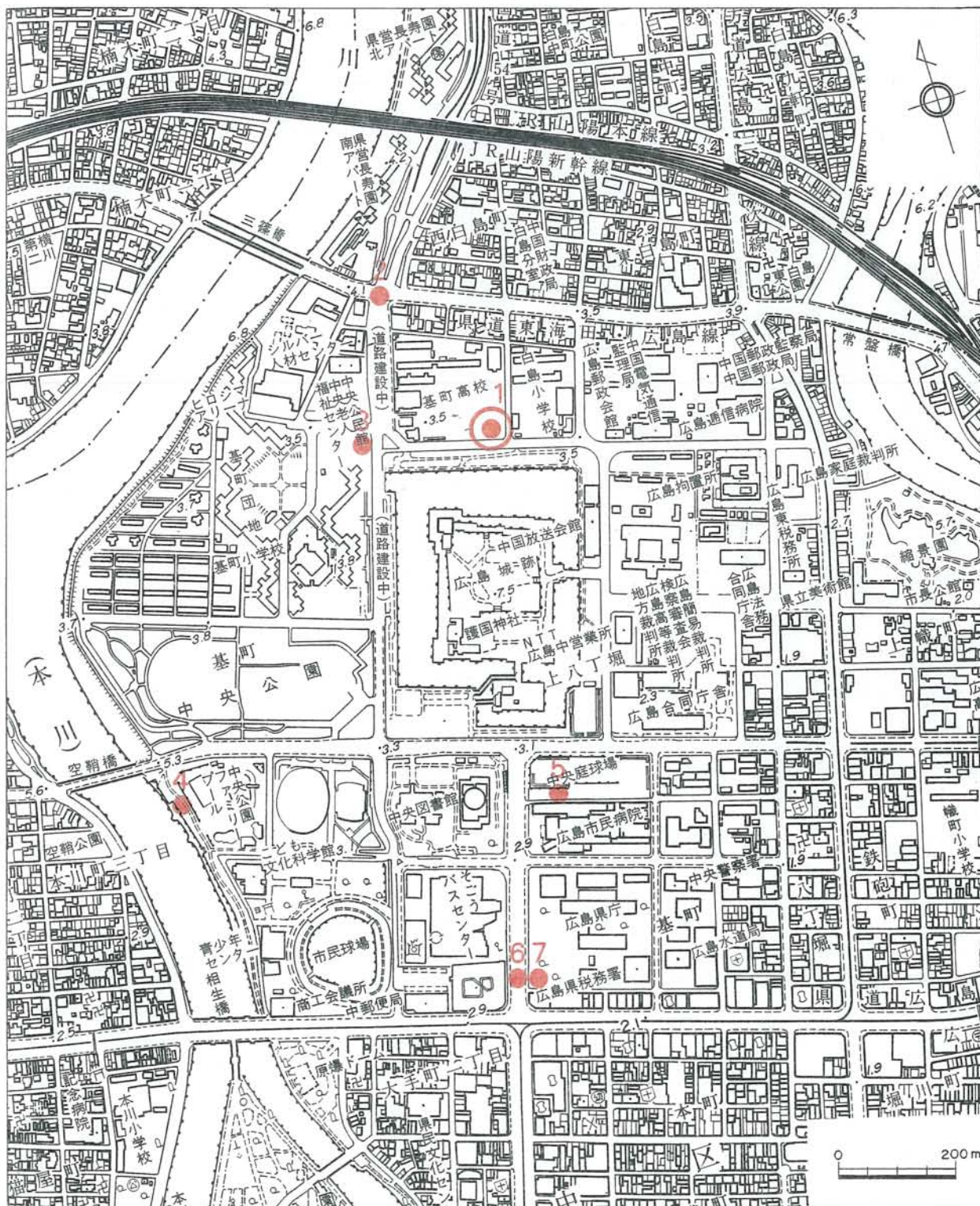
調 査 者 若島 一則 広島市教育委員会生涯学習部文化課文化財係主査（現 同係長）
福原 茂樹 文化財課指導主事

調査補助員（順不同）

岡本利也 沖田健太郎 沖田温 梶谷ミエコ 片島三奈子 加藤垣子 木村武勲 久保陸郎
住川義治 住田益子 谷口敏枝 中島新三 久永昌司 藤岡真弓 藤本朋子 舛田愛子
間瀬未明 宮崎義照 八木康子 山崎瞳 山田逸二 住川香代子 橋本礼子 菅原彰子
酒本由理部

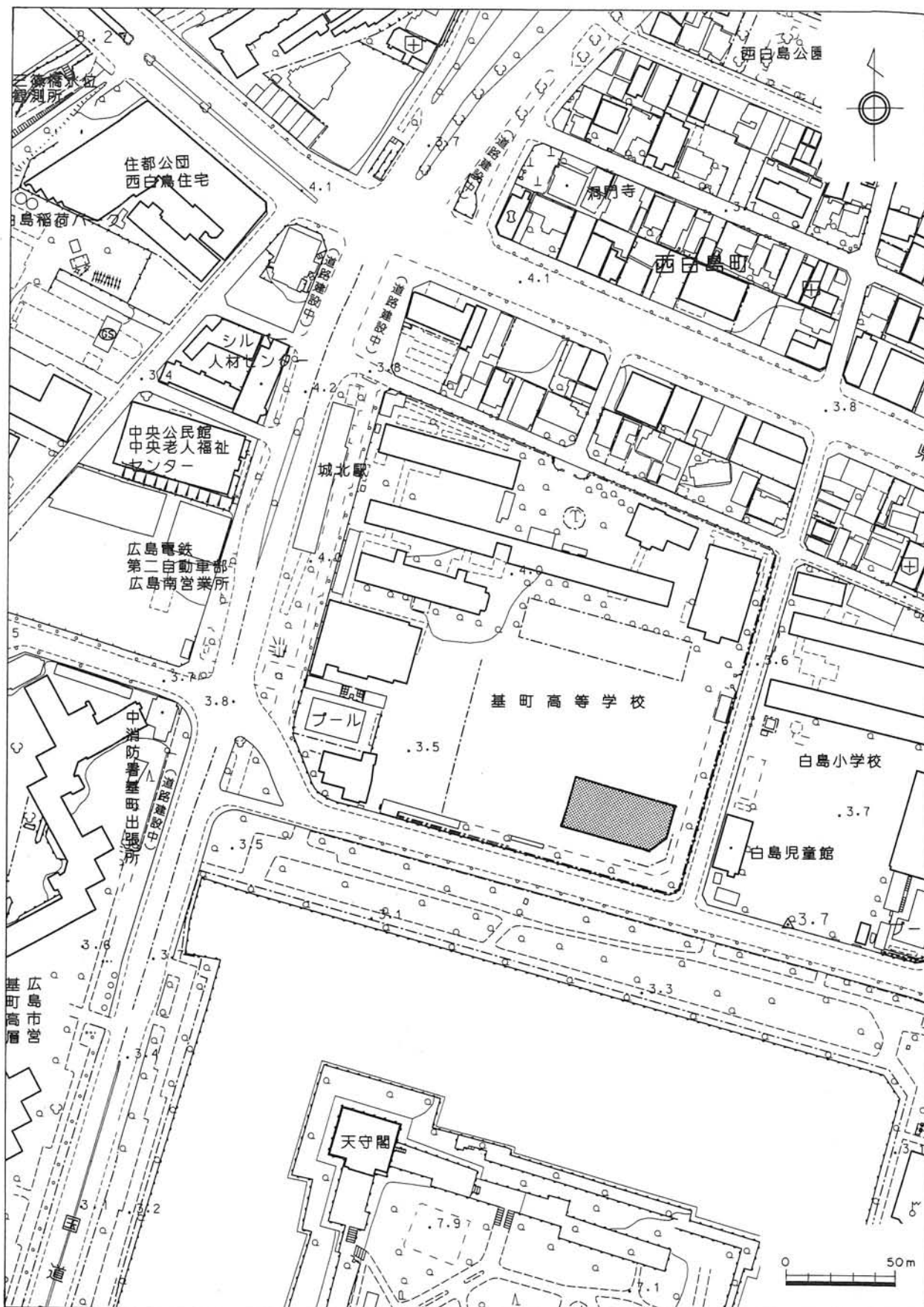
なお、広島市教育委員会建設課、広島市立基町高等学校、同校教職員及び生徒の皆様には調査を円滑に進めるにあたり多大なご配慮とご協力をいただいた。さらに調査にあたっては埋蔵文化財発掘調査指導委員会の広島大学名誉教授 潮見浩氏、同教授 川越哲志氏、同教授 河瀬正利氏、同助教授 古瀬清秀氏に、また報告書の作成にあたっては、次の諸機関、諸氏から広範なご教示をい

ただいた。陶磁器全般については佐賀県教育庁大橋康二氏，財団法人東京都教育文化財団東京都埋蔵文化財センター小林博範氏，財団法人広島県埋蔵文化財調査センター大島裕氏，焼き締め陶器について堺市立埋蔵文化財センター嶋谷和彦氏，岡山市教育委員会乗岡実氏，土師質瓦質土器について小平市教育委員会小川望氏，レンガについて橋本秀夫氏，遺構について東京大学埋蔵文化財調査室成瀬晃司氏，堀内秀樹氏，東京都教育庁古泉弘氏，財団法人東京都教育文化財団東京都埋蔵文化財センター比田井民子氏（順不同）である。ここに記して謝意を表したい。



第1図 広島城周辺関連遺跡分布図 (S = 1 : 10,000)

1. 本遺跡 2. 城北駅北交差点地点 (外堀跡, 櫓台跡)
3. 基町高校前交差点地点 (中堀跡) 4. 外郭櫓台跡 5. 中堀跡
6. 紙屋町交差点地点 (武家屋敷他) 7. 県庁前地点 (武家屋敷他)



第2図 本遺跡調査区位置図 (S = 1 : 2,500)

Ⅱ 位置と歴史的環境

中国山地から流れ出る太田川は広島湾頭に三角州を形成して終息する。広島城はこうした三角州域のうちの、その中央部にある最も大きな「島」に築城された典型的な平城である。この「島」は太田川と京橋川の分流地点を北端とし、その南側に紡錘状に広がり、西側の太田川、東側の京橋川にはさまれる。

本遺跡はかつて「方八丁」と呼ばれた広大な城域の北部、天守閣の北東150mに位置し、洪水に悩まされ続けた広島城にあっても特にその備えを余儀なくされた場所にある。

広島城遺跡基町高校グラウンド地点の沿革についてはおおそ別表のとおりである。絵図・文献史料で知られる限り本地点に人の居住が本格的に始まったのは浅野期に入ってからのものである。『寛永年間広島城下図』等で同地点には屋敷割りがみられる。『芸備事跡考』に1712（正徳2）年に同地に「射的場」があったような記述がなされているが、これについては他の史料がなく正確な位置など詳細は不明である。また、1725（享保10）年には「稽古屋敷」が外堀沿いにつくられたことが知られる。こうしてしばらくは武家屋敷地として使用されたいったようである。ところが1729（享保14）年7月13日の火災を契機として火災の城内に及ぶことを防ぐため当地のいくつかの武家屋敷が撤去され避災地が設けられたのである。『家中屋敷割図』『天明年間の広島城下絵図』でもこうした空き地がみられ、この空き地は「後松原明地」「北之明地」と呼ばれて、のちには「馬場」になっている。この「馬場」は幕末の動乱の中で「演武場」となり、1864（元治元）年9月25日練兵場としての「松原講武所」となる。この「松原講武所」についてはいつ廃止になったのかは明確でないが、明治に入ってからもしばらくは外国人教師を招いての西洋式軍事教練が行われていたようで、1871（明治4）年9月22日には天長節にあたって祝砲を打った記録があるため、この時期までは存続していたことは間違いなからう。その後、1875（明治8）年9月には「広島城内に練兵場を設ける」との記事がみられ、1878（明治11）年には「広島鎮台所轄旧北練兵場内へ射的場ヲ設ケ頃日射的相始メ候付テハ」との記述がみられることからこの頃には「松原講武所」は廃されて練兵場の射的場が設けられていたことが知られる。その後1936（昭和11）年には陸軍幼年学校がこの地につくられたことが知られるものの、正確な位置等を示す史料はない。近代から戦前にかけては当該地のいくつかの写真資料も残っているものの⁽¹⁾いずれの資料でも被写体の性格は明確でない。ただ、周辺には建物が見られるものの、調査地点にはいずれの資料でも建物は見られない。グラウンドのような場所であったようである。戦後、1947（昭和22）年、基町高校の前身である市立中学校がこの地に移転し、1949（昭和24）年4月には基町高校が設立されて現在に至っている。

注)

(1) 広島市『図説広島市史』、1989

表－1 遺跡関連記事年表

時 期	記 事
毛利時代（1590 年代）	「口羽伯耆守」「粟屋又右衛門」「御茶屋」等の名がみえる。（『芸州広島城町割之図』） 「松原」と記し、松の木を描く。（『知新集』所収「毛利氏時代城郭内の図」）
福島時代	「野田九良右エ門」の名とともに松の木を描く。（『知新集』所収「福島氏時代城郭内の図」）
1625（寛永2）年～ 1632（寛永9）年	内堀沿いに道が描かれるとともに、この道の東西両端から北側へ外堀まで直線的に伸び、さらに北側の外堀の沿ってM字状になる道を描く。この中に11の屋敷割を描き、うち10に記名がある。（『寛永年間広島城下図』）
1646（正保3）年 ～1663（寛文3）年	『寛永年間広島城下図』とは若干形状が異なるものの、ほぼ同様の道が描かれる。道に囲まれた部分には「侍町」とだけ記す。（『安芸国広島城所（絵図）』） 『安芸国広島城所（絵図）』と似た形状の道が描かれ、それぞれの道に長さ等が書き込まれている。しかし、道に囲まれた部分には書き込みがない。（『広島絵図（元和五年御入国之砌御城下絵図）』）
1712（正徳2）年	「松原屋敷（牙城北）ノ射的場ヲ廢シ御花畠（牙城ノ西北）ノ北ニ移ス」（『芸備事跡考』）
1725（享保10）年7月13日	「稽古屋敷を白島におこし、藩士およびその子弟に武術を受講させる。（芸藩志拾遺物一六）」
1729（享保14）年3月2日	「広島一本木鼻出火、松原・白島延焼（中略）、この火事の後、火災の城内に及ぶことを防ぐため城濠側の歩行多門の撤去、後松原の侍屋敷の移転を行い、馬場兼避災地を設ける（知新集三・七）」
1734（享保19）年12月	「白島稽古屋敷を講学館と改称する（芸藩志拾遺物一六）」
1743（寛保3）年10月30日	「藩府白島にある講学館を廃し、月次講釈をしばらく中止する（事蹟緒鑑四六）」
1743（寛保3）～ 1754（宝暦4）年	『寛永年間広島城下図』と同様の道が描かれ内堀沿いの道には「表松原」と記す。『寛永年間広島城下図』とは若干屋敷割が異なっており、特に中央部分の3軒から4軒分が空き地とされている。「御花畠」の北に「射的場」は描かない。（『家中屋敷割図』）
1785（天明5）年ころ	『寛永年間広島城下図』と同様の道とともにM字型の地割の中央部に新たに南北方向の道が見られる。M字型の地割の西側の大部分は草色に彩色され「空地」藪地」となっている。また、新たにつくられた南北の道と内堀沿いには同じく朱色で「稽古屋敷」を描く。「御花畠」の北に「射的場」は描かない。（天明年間の広島城下絵図）
1786（天明6）年正月24日	「藩府後松原に火災予防のため不寝番の番所を設ける（事蹟緒鑑二七）」
1789（寛政元）年8月28日	「一 後松原備押場学問所北ノ明地へ所替之事」（『事蹟緒鑑広島本・江戸本』）
1796（寛政8）年4月10日	「一 後松原明地、山田屋江御預地、馬場ニ相成候事」（『事蹟緒鑑広島本・江戸本』）
同年10月9日	「一 右馬場仕様之事」（『事蹟緒鑑広島本・江戸本』）
1797（寛政9）年8月3日	「一 後松原明地を北之明地と唱候様被仰出候事」（『事蹟緒鑑広島本・江戸本』）
同年9月25日	「於御国北之明地、以来松原明地与相唱并於場所弓馬稽古之義触達有之との事」（『事蹟緒鑑広島本・江戸本』）
1800（寛政12）年ころ	『天明年間の広島城下絵図』と同様の形状の道を描く。また、内堀沿いの道の北に「松原」と記す。「花畑」の北に「射場屋敷」を描く。（『広島城域内全域図』）

1804（文化元）年10月24日	「一 松原明地西之方并東之方喰違之處、大手共先頃之大風ニ吹倒候付、下地植附有之候杉江植足し、直ニ杉垣ニ」相成、東之方も少々葭垣有之候付、葭垣仕足置、追々ニ者杉垣根ニ可相成との事、一東之方玉土手根者葭垣ニ而者、北御門辺より見込見苦敷ニ付、二・三間ほと者杉植付の方ニ申談との事」（『事蹟緒鑑 広島本・江戸本』）
1862（文久2）年9月	「松原調馬場を演武場とする（芸藩志一七）」
1864（元治元）年9月25日	「城北に練兵場を新設し松原講武所と称す（芸藩志三七）」
1864（元治元）年ころ	『天明年間の広島城下絵図』『広島城城郭内全域図』では屈曲するように描かれていたM字形の地割りの中央を南北に通っていた道が直線的になり、道の西に「松原講武所」、東には10の屋敷割が見える。また、外堀沿いの道が描かれない。（『御家中屋敷絵図重宝記』）
1868（明治2）年10月10日	「……松原講武所に於いて軍隊諸職員及び兵卒に英式教練を伝習せしめか之か入学諸規則を定む……」（『芸藩志』） 「……英教師は専ら練兵に従事せしむる事と為り、依て其居所も松原講武所内なる矢倉を修繕して其居室と為し之れに移住せしむ」（『芸藩志』）
1869（明治2）年ころ	『御家中屋敷絵図重宝記』と同様に、M字形の地割りの中に「松原講武所」と10の屋敷割を描く。また、外堀沿いの道が描かれない。（『家中屋敷割図』）
1870（明治3）年1月10日	「軍備（各職員を附したる正式編制の軍隊）は松原講武所に於いて又普通藩士の練兵及び剣槍術の修行は東講武所に於いて執行する事に改め……」（『芸藩志』）
1871（明治4）年9月22日	「天長節に当たるので、午前八時松原講武所天軍艦豊安号において祝砲を発する（広島市史四）」
1872（明治5）年4月	「第一小区内地名改正之事……後松原同（北町・・筆者注）二番丁内白島同三番丁……」（『広島新聞』第二号）
1875（明治8）年6月	「広島城内に練兵場を設ける」（『新修広島市史』年表）
1878（明治11）年12月13日	「……広島鎮台所轄旧北練兵場内へ射的場ヲ設ケ頃日射的相始メ候付テハ……」（「県甲第百七十五号」『広島新聞』第一七七号）
1889（明治22）年3月	「白島町工兵兵営が完成し、工兵第五大隊が移転する」（『新修広島市史』年表）
1897（明治30）年9月1日 同年9月15日	「基町の広島陸軍地方幼年学校が開校する（植木新之助日記）」 「基町の砲兵第三方面広島署を廃止し、そのあとに広島陸軍兵器支廠をおく（植木新之助日記）」
1936（昭和11）年4月1日	「基町に広島陸軍幼年学校が復活開校する」（『新修広島市史』年表）
1947（昭和22）年9月	「市立中学校が基町陸軍幼年学校跡に校舎を新築して移転」（『新修広島市史』年表）
1949（昭和24）年4月1日	「基町……高等学校創立」（『新修広島市史』年表）

注）絵図等については広島市立中央図書館編の『広島城下町絵図集成』1990、『新修広島市史』の付図を参照している。史料については特に記述がないものはいずれも広島市教育委員会『史跡広島城跡史料集成』第1巻、1989、あるいは『新修広島市史』の年表から引用している。

Ⅲ 遺構と遺物

1. 遺跡の概要

本遺跡は広島城のいわゆる搦手、本丸とは内堀を隔てた北側、通称北の廓に位置する。本遺跡のさらに北側には外堀があり、ちょうど内堀と外堀にはさまれた地点になる。搦手とはいえ広島城天守閣は本丸の一番奥まった北西隅に建てられているため本遺跡と天守閣はわずか150mしか離れていない。調査時には本遺跡は広島市立基町高等学校のグラウンド内にあたり、日々高校生たちが活動していた正にその足元であった。今回、校舎の改築に伴い東西48m、南北25mの約1,200m²の範囲の発掘調査を行った。

調査にあたっては、まずグラウンドの整地層約1mを重機によって剥いだ。その後、調査区の南端と東端に重機によって深さ約30cm～1mのトレンチを掘った。そのため、調査区の南端・東端では遺構が検出できていない。こうして土層を確認した後、大きく2層に分けて埋土を下げていった。

戦後すぐに学校のグラウンドになったということもあって地下埋設物等による攪乱も少なく、遺構の遺存状況は概ね良好であった。しかし、多い所で3つの遺構が上下層に重なっており、後につくられた遺構が下層の遺構を破壊しているものも多かった。しかしながら、広島市の市街にもこれほどしっかりと近世・近代の遺構が残っていることを明らかにするには十分であったと思われる。

遺構は土坑56基、溝状遺構13本、建物跡4軒、井戸3基、その他の遺構11が確認された。遺構番号は基本的に東側から順につけており、時期の前後などは考慮していない。また、調査時の呼称をそのまま使用しているため、その性格に若干の混乱がある。遺物は陶磁器・土器・瓦類を中心に金属製品、石製品、銭貨などが出土している。遺物は各遺構ごとに述べている。

2. 遺構と遺物

(1) 土坑

・SK1（第4図）

本土坑は調査区の南東隅部に位置する。西側でSD3と切り合っている。切り合い関係から本土坑が後につくられた。本土はさらに調査区南へ続いているが、確認部分の形状及び規模は上端が南北辺610cm、東西辺190cmの長方形で、底部も南北辺550cm、東西辺150cmの長方形である。底部は平らで深さは全体的に155cmである。

本土坑の埋土上東端には5か所の集石部が約120cm間隔で一列に並んでみられた。集石は一部ばらけていたもののそれぞれに一部重なり合いながら掘り方が確認された。すなわち、一旦布掘り状に掘り方を掘ったのち土を埋めもどし、さらに土坑の東端一列に5か所の壺掘りをし、そこに石を埋めていったものと考えられる。その性格については明確でないが、5か所の集石は柱を支える基礎とも考えられ、このように近い間隔で一列に柱が並ぶ構造物としては塀や柵のようなものが想定で

きる。S D 2 と 12cm と近接しており、なおかつこれと平行していることから溝と敷地の境界のこうした施設の基礎であった可能性があるが、類例の確認ができなかったため本報告書では土坑のひとつとして扱った。

本土坑内からは200点ほどの陶磁器、焼締めと土師質瓦質土器60点ほど、瓦十数点が出土した。基礎工事の土坑の埋めもどしの際に混入したものと思われる。出土陶磁器は明末の景德鎮の青花から幕末の瀬戸・美濃の端反碗までであるが、明治以降の遺物は含んでおらず本土坑は幕末から明治初め頃に埋め戻された可能性が高い。

・ S K 2 （第 5 図）

本土坑は調査区の北東部に位置する。北側で S K 3 , S K 4 と、南側で S X 3 - P 3 と切り合っている。切り合い関係より S K 4 → S K 3 → S K 2 の順である。また、S X 3 - P 3 とは本土坑が先行する。

本土坑の形状及び規模は南側で S X 3 - P 3 と切り合っているため明確でないが、元々は上端は径 80cm の円形、底部も径 70cm の円形であったと思われる。深さは 6cm ほどである。本土坑のみならず S X 3 - P 3 から多くの遺物が出土したが、これは本土坑の遺物が再投棄されたものと考えられる。そこで両者の遺物はすべて本土坑の遺物として扱う。本土坑内からは磁器 31 点、陶器 36 点、焼締め 2 点、土師質瓦質土器四十数点、瓦 4 点が出土した。小土坑であるが遺物はびっしりとつまっておりゴミ穴と考えられ、遺物も一括廃棄されたものである可能性が高い。生産年代のわかる出土陶磁器のうち最も新しいものは 1820 年～60 年の端反碗である。したがって本土坑もその頃のものである可能性がある。

・ S K 3 （第 5 図）

本土坑は調査区の北東部に位置する。西側で S K 2 , S K 4 と切り合っている。本土坑の形状及び規模は上端が長径 110cm、短径 75cm の長円形、底部も長径 95 c m、短径 60 c m の長円形で、底部は平らで深さは 10 cm ほどである。

本土坑内からは磁器 1 点、陶器 1 点、土師質瓦質土器 1 点の計 3 点しか出土しておらず、その性格も明確でないが、ゴミ穴の可能性はある。

・ S K 4 （第 5 図）

本土坑は調査区の北東部に位置する。南側で S K 2 , S K 3 と切り合っている。形状及び規模は上端は隅丸長方形で南北辺 280 c m、東西辺 100 c m、底部も南北辺 250cm、東西辺 80 c m の隅丸長方形である。底部は全体的に平らで深さは 30cm である。本土坑は形状が明瞭であり、形状を意識して掘り込まれたようにも思われる。規模、形状は S K 39, S K 41 等に類似している。ゴミ穴としては出土遺物の数も少なく他の何らかの施設であった可能性も考えられる。

本土坑からは磁器 5 点、陶器 4 点、土師質瓦質土器 7 点、瓦 3 点が出土したのみである。陶磁器

は1点を除いて細片ばかりであり、磁器のうち最も新しいものは18世紀代のものである。土師質瓦質土器は1点が皿なのを除いて残りはおそらくすべて同一個体の内耳土器であると思われる。口縁部が強く外反するタイプである。遺物の量が少ないため明確ではないが、18世紀代の遺構である可能性がある。

・ S K 5（第6図）

本土坑は調査区のほぼ中央部に位置する。形状及び規模は上端が長径140cm、短径95cmの不整形な卵形、底部も長径125cm、短径75cmの不整形な卵形である。深さは中央部でもっとも深く38cmである。

本土坑内からは磁器2点、陶器4点、土師質瓦質土器3点、瓦8点が出土した。規模も小さく形状もあまり明瞭でなく遺物の出土もたいへん少なかったためその性格についてははっきりしない。なお生産年代のわかる出土陶磁器は表11のとおりである。

・ S K 6（第31図）

本土坑は調査区の中央部やや東よりに位置する。南側でS D 6と切り合っており、S D 7、S D 8の上層にある。切り合い関係より本土坑はS D 6よりも後につくられた。形状及び規模は上端は南西角のない不整形な隅丸方形で、底部は北辺90cm、南辺60cmの台形である。深さは中央部でもっとも深く78cmである。

土坑内の埋め土の上部には、拳大から人頭大の割り石が詰まっており、ほぼ中央部にそれらの石に抑えられるように径10cm程度の本が立てられていた。さらにその下には丸釘や木片等を含んだ攪乱土が詰まっており、底部付近にはほぼ中央部に南北方向に向いて幅10cmほどの材木が埋められていた。材木の腐食が著しくその形状や規模は明確にしえず、したがってこれらの性格についてもよくわからなかった。何らかの施設であった可能性も残るが、ゴミ穴に投棄されたものと判断した。

本土坑内からは陶磁器、土師質瓦質土器類が100点余り出土した。そのうち最も新しいものは近代の型紙刷りの磁器であった。しかし、本土坑に先行するS D 6からは銅版印刷の遺物が出土しており、瀬戸では銅版印刷が始まるのが1888（明治20）年とされている⁽¹⁾ことから、本土坑もこの頃埋め戻された可能性がある。なお、本土坑は明らかにS D 6の埋め土を切っており、S D 6の遺物が混入している可能性がある。

・ S K 7（第6図）

本土坑は調査区の中央部やや東よりに位置する。南側でS D 8と切り合っており、切り合い関係より本土坑はS D 8よりも後につくられた。S D 8と切り合っているためもとの形状及び規模は明確でないが、現状では上端は一辺が140cmほどの菱形で底部は長辺80cm、短辺60cmの平行四辺形である。深さは南部でもっとも深く70cmである。

本土坑内からは磁器6点、陶器7点、焼締め3点、土師質瓦質土器2点、鉄製品10点余り、青銅製品1点が出土した。出土状況からゴミ穴と考えられる。生産年代のわかる出土陶磁器は表12のと

おりであるが、S D 8と本土坑は同じレベルの地表面から掘り込まれているため、本土坑の掘り方は確実にS D 9の埋土を掘り込んでいる。そのため本土坑の遺物中に本来S D 9に含まれていたものが混入している可能性もある。いずれにせよ先行するS D 8が幕末までの遺物を含んでいることから、それより後の遺構であることは確実である。焼締め3点のうち1点は堺又は中国地方の播鉢である。土師質瓦質土器の中には焼塩壺を1点含む。また、鉄製品は大部分は錆が著しくその品種は明らかでないが、丸釘が含まれている。青銅製品（S K 7-12）はキセルの吸い口で、古泉分類のV期（18世紀後半）⁽²⁾である。

・ S K 8（第7図）

本土坑は調査区のほぼ中央部に位置する。砂地に掘られていたため形状の特定が不確かであったが、上端は径360 c mの円形、底部は長径310 c m、短径265 cmの不整形な長円形であると思われる。深さは南部でやや深く80 cmである。

本土坑内からは磁器174点、陶器151点、焼締め34点、土師質瓦質土器89点、瓦9点が出土した。大量の遺物が出土したものの土坑の規模や出土状況からゴミ穴とは考えにくい。何らかの施設が廃絶した後埋め戻されたものと思われるが、その性格については明らかにしえなかった。生産年代のわかる出土陶磁器は表13のとおりである。S K 8-99～103は近代のものであるが、100を除いていずれも型紙刷りや銅版印刷等ではなく工業用コバルトで文様を手描きしたものであり比較的初期のものと言える。あとは幕末までにおさまる。したがって本土坑も明治初期に埋め戻された可能性が高い。陶磁器については合計で325点もの出土があったが、その生産年代は近世全般にわたっている。磁器は生産年代のわかる103点のうち輸入物は16世紀末から17世紀初めの景德鎮窯の2点及び18世紀後半から19世紀初めの徳化窯のものが1点である。特にS K 8-64は広島城では初めての徳化窯の遺物であり、近世中頃の青花の出土としても珍しい。103点のうちの器種が特定できる近世の遺物は95点であるが、このうち碗は40点、碗蓋が3点、皿が16点（手塩皿を除く）、小坏が4点、鉢が5点、瓶が13点である。瓶の割合が他の遺構に比べて多いのが目だつ。陶器は18世紀以降の関西系の遺物が目立ち、近世前半に大部分を占める肥前産では刷毛目装飾を施したものが目立っている。焼締めについては、34点のうち播鉢が13点あり、その内訳は備前4点、堺7点、明石1点、中国地方又は備前が1点である。備前はいずれも17世紀のものであり、堺は18・19世紀のものであることから、18世紀になって備前播鉢の流入が減少していることは明白である。ただし、播鉢以外の備前系の遺物は壺等を中心に8点見られ、備前が18世紀以降播鉢の生産を減らし、他の器種の生産へ移行していったことが考えられる。

・ S K 9（第9図）

本土坑は調査区のほぼ中央部の北よりに位置する。南側でS X 4と切り合っている。切り合い関係から本土坑が先行している。上端は長径95 c m、短径70 cmの長円形、底部も長径80 cm、短径40 cmの長円形である。底部は全体に平らで深さは25 cmである。

本土坑内からは磁器31点、陶器32点、焼締め4点、土師質瓦質土器21点、瓦2点が出土した。出土状況からゴミ穴と考えられ、遺物も一括廃棄されたものである可能性が高い。生産年代のわかる出土陶磁器は表14のとおりである。近代以降の遺物は含まれておらず幕末の端反碗までであり、したがって本土坑もその頃の遺構である可能性が高い。

磁器については17世紀後半に生産されたものから幕末のものまで幅広いが、陶器についてはすべて近世後期の遺物であり、しかもS K 9-30以外はすべて関西系の土瓶・小碗である。S K 9-46は堺播鉢、S K 9-47は土師質の焙烙鍋である。また、土師質瓦質土器には燗炉が2点見られ、細片のため図示しえなかったが一方には①の刻印が見られる。瓦は2点のうち1点は赤瓦である。

・ S K 1 0 （第 9 図）

本土坑は調査区北端の中央に位置する。形状及び規模は上端は長辺が55cm、短辺が40cmの台形状、底部も長辺が40cm、短辺が30cmの台形状で、深さは中央部で最大で10cmである。南東隅部に20cm角ほどの石があり、上部が水平で据え置かれたようにも見えるが、その性格は明確でない。

本土坑に伴う遺物は出土しなかった。

・ S K 1 1 （第 9 図）

本土坑は調査区の中央部の北端に位置する。形状及び規模は上端は不整形な長円形で長径が95cm、短径が80cm、底部も長径が50cm、短径が30cmの不整形な長円形である。底部は全体に平らで深さは22cmである。

本土坑内からは陶磁器11点、土師質瓦質土器3点、瓦2点が出土した。出土状況からゴミ穴と考えられる。生産年代のわかる出土陶磁器は妻15のとおりである。出土陶磁器の量が少ないため明確でないが、近代の遺物は含まれておらず、したがって本土坑も19世紀から幕末頃のものである可能性がある。

・ S K 1 2 （第 9 図）

本土坑は調査区の中央部の北端に位置する。形状及び規模は上端は長径145cm、短径70cmの長円形で、底部も長径110cm、短径40cmの長円形である。底部は全体に平らで深さは35cmである。

本土坑内からは磁器45点、陶器30点、焼締め2点、土師質瓦質土器20点、瓦3点が出土した。全体に遺物が密につまっており、ゴミ穴と考えられ、遺物も一括廃棄されたものである可能性が高い。生産年代のわかる出土陶磁器は表16のとおりである。S K 12-32だけが近代のものであるが、型紙刷りや銅版印刷ではなく工業用コバルトで文様を手描きしたものであり比較的初期のものと言える。あとは幕末までにおさまる。したがって本土坑も幕末から明治初期にかけてのものである可能性が高い。磁器については器種のわかるもの25点のうち碗及び碗蓋が16点、坏及び小坏が4点と多くを占めているのが目立つ。逆に皿が1点（紅皿は除く）と少ない。陶器は関西系が目立っており、幕末における全体的な傾向と合致している。S K 12-46は内耳土器で体部が内湾した後口縁部が外

反するタイプものである。

・ S K 1 3 (第 8 図)

本土坑は調査区の中央部の北端に位置する。西側で S B 4 と切り合っており、切り合い関係から本土坑が先行する。西側の一部が S B 4 と切り合っており検出できなかったが、現状では形状及び規模は上端で長径 150 c m, 短径 75 c m の不整形の長円形, 底部も長径 120 c m, 短径 60 c m の長円形である。深さは西部でもっとも深く 55 c m である。

本土坑内からは磁器 9 点, 陶器 9 点, 土師質瓦質土器 4 点が出土した。出土状況からゴミ穴と考えられる。生産年代のわかる出土陶磁器は表 17 のとおりである。出土陶磁器の量が少ないため明確でないが, 18 世紀代までのものといえる。したがって本土坑もその頃のものである可能性がある。S K 13-16 は内耳土器で口縁部は外反せず丸くおさめる。

・ S K 1 4 (第 1 0 図)

本土坑は調査区の中央部やや面よりの北端に位置する。遺構全体が S B 4 と重複しており、共伴する遺物より本土坑の方が先行している。本土坑の形状及び規模は上端で長径 180 c m, 短径 115 c m の長円形で, 底部も長径 165 c m, 短径 100 c m の長円形である。深さは西南部でもっとも深く 18 c m である。埋め土は炭混じりであった。形状が不明瞭で, 深さも近接する他の土坑群よりも浅く, 規模も異なっているため土坑にならない可能性もあるが, 周辺にのみ炭があったこと, 出土陶磁器が少量ではあるが生産年代が近接していることから土坑として扱った。性格については明確でない。

本土坑内からは磁器 4 点, 陶器 3 点, 焼締め 1 点, 土師質瓦質土器 3 点, 瓦 1 点, 石製品 1 点が出土した。生産年代のわかる出土陶磁器は表 18 のとおりである。出土陶磁器の量が少ないため明確でないが, 17 世紀の第 4 四半期から 18 世紀の初めのものといえる。したがって本土坑もその頃のものである可能性がある。石製品は水晶と思われ火打ち石の可能性があるが, 類例が確認できなかった。

・ S K 1 5 (第 1 0 図)

本土坑は調査区の中央部やや面よりの北端に位置する土坑群のひとつである。遺構全体が S B 4 と重複しており、共伴する遺物より本土坑の方が先行している。本土坑は調査区の北端にかかっていたため完掘できていない。確認できた形状及び規模は上端で径 115 c m の半円形で, 底部も径 100 c m の半円形である。深さは南西部でもっとも深く 42 c m である。

本土坑内から大量の石と磁器 9 点, 陶器 18 点, 焼締め 9 点, 土師質瓦質土器 12 点及び 50 点以上の瓦が出土した。全体に石と遺物がびっしりとつまっていたことからゴミ穴と考えられ, 遺物も一括廃棄されたものである可能性が高い。生産年代のわかる出土陶磁器は表 19 のとおりであり, 広東碗・端反碗を含まず, 1780 年前後に廃棄されたものであろう。したがって本土坑もその頃のものであ

出土遺物のうち磁器はすべて肥前であり, 瀬戸・美濃等で磁器の生産が始まる前の様相を示して

いる。また、陶器では肥前が目立つが18世紀になると関西系も見える。二彩手（S K 15-14）、刷毛目装飾（S K 15-17）の皿や鉢が目立つ。また肥前の播鉢が3個体出土している。広島城では県庁前地点で報告されている^④が、あまり出土例はない。焼締めのうち播鉢は出土全個体数を見ると、堺が6点、堺か中国地方と思われるものが3点であるのに対し備前は出土していない。また、その他の焼締めでも中国地方と思われるものが5点出土しているのが目立っている。また、内耳土器の口縁部が3点あり、いずれも強く外反するタイプのものである。

・ S K 1 6 （第 1 0 図）

本土坑は調査区の中央部やや面よりの北端に位置する土坑群のひとつである。遺構全体がS B 4と重複しており、共伴する遺物より本土坑の方が先行している。本土坑の形状及び規模は上端は長辺110cm、短辺85cmの隅丸長方形で、底部は長径80cm、短径50cmの長円形である。深さは中央部でもっとも深く60cmである。

本土坑内から大量の石と磁器58点、陶器63点、焼締め23点、土師質瓦質土器33点、石製品1点及び50点以上の瓦が出土した。全体に石と遺物がびっしりとつまっておりゴミ穴と考えられ、遺物も一括廃棄されたものである可能性が高い。生産年代のわかる出土陶磁器は表20のとおりであり、1800年前後に廃棄されたものであろう。したがって本土坑もその頃のものである。

出土遺物のうちS K 16-1は青花であるが、それ以外の磁器はすべて肥前であり、瀬戸・美濃等で磁器の生産が始まる前の様相を示している。また、陶器では肥前が目立つが18世紀になると関西系のものが目立つ。三彩手や刷毛目装飾の皿や鉢が多く、磁器がつくられるようになると碗等の飲食器類は減ってくるようである。また、播鉢の出土状況をみるとS K 16-54～57が堺、S K 16-58が備前である。出土した全個体数をみると堺が7点、備前が7点と拮抗している。

・ S K 1 7 （第 1 1 図）

本土坑は調査区の中央部やや面よりの北端に位置する土坑群のひとつである。遺構全体がS B 4と重複しており、共伴する遺物より本土坑の方が先行している。本土坑の形状及び規模は上端は長径170cm、短径120cmの長円形で、底部も長径120cm、短径90cmの長円形である。深さは中央部でもっとも深く45cmである。

本土坑内から大量の石と磁器55点、陶器53点、焼締め23点、土師質瓦質土器22点及び70点以上の瓦が出土した。全体に石と遺物がびっしりとつまっておりゴミ穴と考えられ、遺物も一括廃棄されたものである可能性が高い。生産年代のわかる出土陶磁器は表21のとおりであり、広東碗・端反碗を含まず、1780年前後に廃棄されたものであろう。したがって本土坑もその頃のものである。

出土遺物のうちS K 17-1, 2は青花であるが、それ以外の磁器はすべて肥前であり、瀬戸・美濃等で磁器の生産が始まる前の様相を示している。また、陶器では肥前が目立つが18世紀になると関西系のものが目立つ。三彩手や刷毛目装飾のものが多く、17世紀後半から18世紀前半にかけての陶器の生産地での状況が反映されているように思われる。また、播鉢の出土状況をみるとS K 17-

79が堺，S K 17-78が備前，S K 17-76，77が中国地方である。出土した全破片数をみると堺が10点，備前が6点，中国地方が2点，丹波が1点と，堺が半分を占めている。

・ S K 1 8 (第 1 1 図)

本土坑は調査区の中央部やや面よりの北端に位置する土坑群のひとつである。遺構全体がS B 4と重複しており，共伴する遺物より本土坑の方が先行している。本土坑の形状及び規模は上端は長辺100cm，短辺70cmの隅丸長方形，底部も長辺85cm，短辺55cmの隅丸長方形である。深さは南西部でもっとも深く36cmである。

本土坑内から拳大から人頭大の大量の石と磁器23点，陶器20点，焼締め11点，土師質瓦質土器12点，瓦4点以上及び石製品1点が出土した。全体に石と遺物がびっしりとつまっていたことからゴミ穴と考えられ，遺物も一括廃棄されたものである可能性が高い。生産年代のわかる出土陶磁器は表22のとおりであり，広東碗・端反碗を含まず，1780年前後に廃棄されたものであろう。したがって本土坑もその頃のものである。

出土遺物のうち磁器はすべて肥前であり，瀬戸・美濃等で磁器の生産が始まる前の様相を示している。S K 18-24は土灰箱の袋物で，肥前か朝鮮である。朝鮮であれば15～16世紀のものの可能性カミある。また，焼締め10点のうち播鉢が7点あり，備前が2点，堺が2点，備前から中国地方と思われるものが3点ある。ただし備前はいずれも16世紀末から17世紀前半につくられたものである。石製品は砥石の破片である。

・ S K 1 9 (第 1 1 図)

本土坑は調査区の中央部やや面よりの北端に位置する土坑群のひとつである。遺構全体がS B 4と重複しており，共伴する遺物より本土坑の方が先行している。また，西側でS K 20と切り合っており，切り合い関係より本土坑が後からつくられている。なお，本土坑は調査区の北端にかかっていたため完掘できていない。確認できた形状及び規模は上端で長辺125cm，短辺120cmの隅丸長方形，底部は一辺95cmの隅丸方形である。深さは北部でもっとも深く48cmである。

本土坑内から拳大から人頭大の大量の石と磁器73点，陶器57点，焼締め25点，土師質瓦質土器35点，銭貨1点，硯1点及び100点以上の瓦が出土した。全体に石と遺物がびっしりとつまっていたことからゴミ穴と考えられ，遺物も一括廃棄されたものである可能性が高い。生産年代のわかる出土陶磁器は表23のとおりである。S K 19-73が唯一19世紀代の生産であるが，19世紀になって生産の始まったと考えられる瀬戸・美濃系，関西系の磁器が全くみられないことから，19世紀初め頃に廃棄されたものである可能性が高い。したがって，本土坑もこの頃のものである。

出土遺物のうち磁器は前述のようにS K 19-1が潭州窯の色絵火皿であるが，それ以外の磁器はすべて肥前であり，瀬戸・美濃等で磁器の生産が始まる前の様相を示している。特に18世紀代のものに遺物が集中しているのが目立つ。また，陶器は18世紀になると関西系がシェアを伸ばしてくるという点では他の同時期の遺構と変わらないが，生産地が比較的バラエティーに富んでいる。S K

19-74の貝目積み痕の残る灰箱の皿は山口辺りで生産された可能性もある。近世初頭には珍しい。また、瀬戸・美濃系がS K 19-89の腰鍔碗他7点、中国地方系5点と目立っている。さらにその他の産地として信楽系が4点含まれている。広島城遺跡では信楽については17世紀の前半頃焼締めが若干混じる程度で陶器の出土はまれである。また、肥前の壺・親類も多く出土しており、これも注目される。焼締めの播鉢については堺が2点、中国地方が6点、そのいずれかと思われるものがS K 19-110を含め2点で中国地方系が多い。備前については表面に赤泥を塗ったものが3点、焼締めが7点出土しているものの、いずれも播鉢ではない。土師質瓦質土器については内耳土器が7点でそのうち5点が口縁部で、大きく外反するもの3点、短く外反するもの、外反しないものがそれぞれ1点ずつであった。短く外反するもの以外は内耳が確認できないが、短く外反するものについてはきれいに穿孔されている。銭貨は寛永通宝である。(S K 19-111)

・ S K 2 0 (第 1 1 図)

本土坑は調査区の中央部やや面よりの北端に位置する土坑群のひとつである。遺構全体がS B 4と重複しており、共伴する遺物より本土坑の方が先行している。また、東側でS K 19と切り合っており、切り合い関係より本土坑が先行している。S K 19と東側で切り合っているため西側部分しか遺存していないが、遺存部分の形状及び規模は上端は一辺50 c mほどの隅丸方形、底部は長辺30 c m、短辺20 c mの隅丸長方形である。深さは東部でもっとも深く10 c mである。

本土坑内からは磁器5点、陶器1点、焼締め1点、土師質瓦質土器2点、瓦1点が出土した。出土状況からゴミ穴と考えられる。生産年代のわかる出土陶磁器は表24のとおりである。遺物の数が少ないので明確にしがたいが、一応18世紀の前半までにおさまる遺物のみであり、本土坑もその頃のものである可能性が大きい。また切り合い関係から本土坑よりもあとにつくられたと思われるS K 19から出土した遺物が前述のように19世紀初頭までのものであるから、遺物からみても前後関係は間違いなからう。土師質瓦質土器のうち内耳土器の口縁部が1点あり、強く外反するタイプのものである。

・ S K 2 1 (第 1 2 図)

本土坑は調査区の中央部やや面よりに位置する小土坑である。形状及び規模は上端が径30 c mの不整形な円形、底部は長径12 c m、短径6 c mの長円形である。深さは南部でもっとも深く約10 c mである。

本土坑内からは磁器9点が出土した。出土状況からゴミ穴と考えられ、遺物も一括廃棄されたものである可能性が高い。9点のうち8点は近代以降の遺物でうち7点は型紙刷りである。したがって本土坑も明治以降の遺構である。S K 21-2は型紙刷りの皿で、同種のものが他に3点ある。S K 21-3, 4もいずれも型紙刷りの碗であるが、外面の文様が異なっている。

・ S K 2 2 (第 1 2 図)

本土坑は調査区の中央部西よりに位置する。南側でS D 10と切り合っている。切り合い関係から

本土坑が先行する。南側でS D 10と切り合っているが、現状では上端は隅丸二等辺三角形で長さ340 cm、幅120 cm、底部は長径35 cm、短径20 cmの長円形である。深さは中央部でもっとも深く90 cmである。幅に対して深さが他の土坑に比べて深く、本遺跡の中でも特異な形状といってよい。

本土坑内からは磁器39点、陶器41点、焼締め6点、土師質瓦質土器64点、瓦1点、土人形4点が出土した。出土状況からゴミ穴と考えられ、遺物も一括廃棄された串のである可能性が高い。生産年代のわかる出土陶磁器は表25のとおりであり、1800年頃までにおさまる可能性が大きい。したがって本土坑もその頃のものであろう。

出土遺物のうち磁器はすべて伊万里であり、瀬戸・美濃等で磁器が生産される以前の様相を示している。また、陶器では関西系が圧倒的に多く碗・鍋・土瓶が目立つ。焼締めのうち5点が播鉢のうち4点が備前である。S K 22-70のみが堺であるが備前はいずれも17世紀代のものであり、必ずしも廃棄当時の流通を反映してはいまい。土師質瓦質土器のうち皿は23点あるが、うち図示しえた10点を含めて次項で詳述する。内耳土器は29点あったがその肉そのまま立ち上がり丸くおさめるタイプの口縁部がS K 22-81, 82の2点をはじめ計6点、口縁部が強く外反するタイプのものは7点あった。S K 22-82には内耳部分に花状の刻印が見られる。前者は色調が白っぽく胎土が粗く瓦質的で、後者は色調が黒っぽく胎土は比較的細かく土師質的である。また、チリトリの柄状のものが1点あったがこれは胎土は前者と同じでS K 22-82と類似した刻印がみられた。その他の土師質瓦質土器は焔炉が9点、不明が2点ある。焔炉についてはおそらく3個体分ある。

・ S K 2 3 (第 1 3 図)

本土坑は調査区の北西隅部に位置する。西側でS D 10と切り合っており、切り合い関係より本土坑が先行している。西側はS D 10と切り合っているため遺存していないが、もともとの形状及び規模は上端が長径155 cm、短径110 cm程度の長円形、底部も長径145 cm、短径100 cm程度の長円形であったと思われ、底部は全体に平らで深さは25 cmである。

本土坑内からは磁器9点、陶器4点、焼締め1点、土師質瓦質土器17点、瓦7点、青銅製品2点、銭貨2点、基石1点が出土した。出土状況からゴミ穴と考えらる。遺物の数が少ないので明確にしがたいが生産年代のわかる出土陶磁器は表26のとおりであり、19世紀前半から幕末の頃に廃棄されたものであろう。したがって本土坑もその頃のものであろう。

遺物の数は少ないものの青銅製品や銭貨、基石などが出土している。S K 23-13は轡で径1.5 mmの青銅製で一方に耳搔き状のヘラが付き、もう一方は二股に分かれる。分かれる部分には径1.1 cm、厚さ2 mmのドーナツ状の円盤が付く。S K 23-14は同じく青銅製で径1.1 cm、厚さ0.5 mmほどの頭があり、本体は六角形に成形されている。鋏のようなものと思われる。S K 23-15, 16はいずれも寛永通費であり、いわゆる新寛永の3期の銅一文銭で1677～1747年父は1756～1781年に鑄造されたものである⁽⁴⁾。偶然入り込んだものか、廃棄されたものか、意図的に埋められたものか明確でない。S K 2 3 - 1 7は黒の基石である。

・ S K 2 4 （第 1 4 図）

本土坑は調査区の南西部に位置する。東側は S D 10 と切り合っており、切り合い関係より本土坑が先行している。東側は S D 10 と切り合っているため遺存していないが、現状の形状と規模は上端が北辺 45 cm、南辺 85 cm の台形、底部は北辺 45 cm、南辺 60 cm の台形である。深さは東部でもっとも深く 25 c m である。

本土坑内からは磁器 6 点、陶器 5 点、土師質瓦質土器 2 点が出土した。出土状況からゴミ穴と考えられる。遺物の数が少ないので明確にしがたいが生産年代のわかる出土陶磁器は表 27 のとおりであり、18 世紀後半に廃棄されたものであろう。したがって本土坑もその頃のものであろう。

・ S K 2 5 （第 2 2 図）

本土坑は調査区の西端中央部に位置する。北側で S K 47 と、南側で S K 46 とそれぞれ切り合っており、S K 44、S X 10 の下層にある。切り合い関係は明瞭でなかったが、出土遺物より本土坑が S K 46、S K 47 より先行する。形状及び規模は上端は北辺 70 cm、南辺 140 c m の不整形な台形で、底部は不整形である。底部は全体に平らで深さは 30 c m ほどである。

本土坑内からは磁器 86 点、陶器 57 点、焼締め 14 点、土師質瓦質土器百点余り、瓦 10 点、土人形 4 点が出土した。出土状況からゴミ穴と考えられ、遺物も一括廃棄されたものである可能性が高い。磁器のうち最も新しいものでも 18 世紀代に入る明確なものがなく、17 世紀末頃までにおさまると思われる。したがって本土坑もその頃のものである。

出土遺物の磁器のうち S K 25-1 は有田・南川原地区で焼成された上質の鉢である。陶器では兵器手を含んだ京焼風の碗が 9 点ある。土師質瓦質土器 123 点のうち皿は 58 点で、そのうち図示しえた 14 点については次項で詳述する。内耳土器の口縁部は 14 点あり、強く外反するものが 11 点、短く外反するものが 2 点、外反しないものが 2 点あった。

・ S K 2 6 （第 1 5 図）

本土坑は調査区の中央部西よりに位置する。東側で S D 10 と、西側で S K 28 と切り合っており、

S K 27 の下層にある。切り合い関係から S K 28 → S K 26 → S K 27 → S D 10 の順である。本土坑はいくつものゴミ穴が重複して形成されたものであり、それぞれの形状の特定が困難であったため S K 26 として一括した。そのため全体としての形状は不整形であり、1 つの遺構を示しているものではないが、全体としては長さ 490 cm、最大幅 310 cm で、底部は北部で一段深くなっており、深さは 90 cm である。

本土坑内からは数百点にのぼる大量の陶磁器・土器類が出土した。前述のように出土状況からいくつものゴミ穴が重複しているものと考えられる。遺物のうち最も新しいものでも幕末までにおさまることからその頃まではゴミ穴として繰り返し掘り返されたものであろう。

・ S K 2 7 (第 1 5 図)

本土坑は調査区の中央部やや面よりに位置する。S K 26, S K 28の上層に位置し、したがって本土坑がS K 26, S K 28の後につくられている。形状及び規模は上端は径115 c mの円形, 底部は長径105 cm, 短径85 c mの不整形な長円形である。底部は不規則な凹凸があり, 最も深いところで25 cmである。

本土坑内からは磁器5点, 土師質瓦質土器5点, 瓦1点が出土した。出土状況からゴミ穴と考えられる。遺物の量がすくないため明確にしがたいが, 生産年代のわかる出土陶磁器は表28のとおりである。しかし, 先行しているS K 26から幕末の遺物も出土しており, 本土坑もその頃のものである可能性がある。

・ S K 2 8 (第 1 5 図)

本土坑は調査区の中央部やや面よりに位置する。東側でS K 26と切り合っており, S K 27の下層にある。切り合い関係は明瞭でなかったが, 出土遺物よりS K 26より本土坑が先行すると思われる。本土坑の形状及び規模は上端は不整形なL字形で, 東西が190 cm, 南北で150 cmである。底部は東西が180 cm, 南北で150 cmである。深さは最大で40 cmである。

本土坑内からは磁器8点, 陶器1点, 焼締め1点が出土した。出土状況からゴミ穴と考えられる。遺物の量がすくないため明確にしがたいが, 生産年代のわかる出土陶磁器は表29のとおりであり, 18世紀前半におさまっていることからこの頃投棄された可能性があり, 本土坑もその頃のものである可能性がある。

・ S K 2 9 (第 1 4 図)

本土坑は調査区の南西部に位置する。形状及び規模は上端は西辺が70 c m, 東辺が140 cmの不整形な台形で, 底部も西辺が55 cm, 東辺が125 cmの不整形な台形である。深さは南部で最大13 cmである。遺物の量も少なく, 形も不整形で何らかの施設とは考えにくいことからゴミ穴と思われる。

本土坑内からは磁器3点, 陶器4点, 土師質瓦質土器4点が出土した。遺物の数は少ないが, 生産年代のわかる出土陶磁器は表30のとおりであり, 18世紀の前半までに埋められたものと思われる。したがって本土坑もその頃のものと思われる。

・ S K 3 0 (第 1 4 図)

本土坑は調査区の南西部に位置する。形状及び規模は上端は径62 cm, 底部は径54 cmの円形である。深さは全体に22 cmである。周辺は粘土質であったがこれを給麗な円柱形にくり抜いたような形状であり, 本遺跡から出土した50以上の土坑の中でも極めて特異な形状であった。

本土坑内からは磁器6点, 陶器9点, 焼締め1点, 土師質瓦質土器19点が出土した。遺物の数は少ないが, 生産年代のわかる出土陶磁器は表31のとおりであり, 18世紀初めおそくとも前半に埋められたものと思われる。

出土土師質瓦質土器19点のうち18点は土師質の皿である。残りの1点はS K 30-15の内耳土器で

ある。内耳には焼成前の上から下へのしっかりとした穿孔がある。18点の土師質の皿のうち図示した13点については次項で詳述する。

・ S K 3 1（第 1 4 図）

本土坑は調査区の南西部に位置する。形状及び規模は上端は1辺27cmの不整形な正方形、底部も一辺20cmの不整形な正方形である。深さは中央部でもっとも深く16cmである。底部中央に1辺が12cmほど石があるが、置かれたものかどうかは明確でない。

本土坑内に伴う遺物は出土しなかった。

・ S K 3 2（第 1 4 図）

本土坑は調査区の南西部に位置する。S X 10の下層にある。漆喰土坑であり上辺は遺存していないが、現状での形状及び規模は上端は径58cmの円形、底部も径50cmの円形である。底部は平らで深さは30cmが遺存する。S K 33も漆喰土坑であり、位置的にも隣接していることから本土坑とセットであると思われる。便檜のようなものとも想像されたため埋土の寄生虫卵分析及び珪藻分析を行ったが、鞭虫卵が1個検出されたのみで、好清水性種の珪藻が検出された。そのため貯水のための施設等の可能性もある。

本土坑内からは遺物は出土しなかった。

・ S K 3 3（第 1 4 図）

本土坑は調査区の南西部に位置する。S X 10の下層にある。漆喰土坑であり上辺は遺存していないが、現状での形状及び規模は上端が一辺が70cmの正方形である。底部も一辺が60cmの正方形である。底部は平らで深さは35cmが遺存する。

本土坑内からは磁器2点、瓦1点が出土した。出土遺物が少ないため埋め戻された時期については明確でない。

・ S K 3 4（第 1 6 図）

本土坑は調査区の面よりに位置する。南西側でS X 8と切り合っており、S X 10の下層にある。切り合い関係から本遺構がS X 8より後につくられている。周囲に長さ20cm程度の石を縦長に9個配し、全体はわからなかったが底部にも石を置いている。S X 8と切り合っている部分にも同様に石が配されていたことから、もともとの形状及び規模は上端は径100cmの円形、底部も径70cmの円形であったと思われる。底部はほぼ平らで深さは20～25cmである。

本土坑内からは磁器10点、陶器4点、焼締め5点、土師質瓦質土器11点、瓦10点が出土した。遺構の状況から何らかの施設であったと思われるが性格については明らかでない。生産年代のわかる出土陶磁器は表32のとおりである。遺物の数が少ないので明確にしがたいが、18世紀末から19世紀のものと思われるS K 34-14の土癌の蓋が最も新しい遺物で、この頃に埋め戻された可能性が高い。

S K 34-15の播鉢は、見込み部分の播り目を中央部を丸く残すように外へ向かって引いており、その特徴から明石である。他の3点の播鉢はいずれも中国地方のものである。

・ S K 3 5 (第 1 7 図)

本土坑は調査区の西部に位置する。北側でS E 2と切り合っており、S X 10の下層にある。切り合い関係より本土坑がS E 2に先行する。遺存部分の形状及び規模は上端は長径120cm、短径60cmの半長円形、底部も長径90cm、短径40cmの長円形である。底部は全体的に平らで深さは15cmである。

本土坑内からは磁器1点、陶器5点、焼締め2点、土師質瓦質土器1点、瓦2点が出土した。出土状況からゴミ穴と考えられる。生産年代のわかる出土陶磁器は表33のとおりである。出土遺物の数が少ないため明確でないが、18世紀後半までにおさまっており、本土坑もその頃のものである可能性がある。

・ S K 3 6 (第 1 7 図)

本土坑は調査区の中央部西よりに位置する。東側でS E 2と、北側でS K 37と切り合っており、S X 10の下層にある。S E 2とは切り合い関係から本土坑が先行する。またS K 37との切り合い関係は明瞭でなかったが出土遺物より本土坑が先行している。東側がS E 2と切り合っており遺存していないが、もともとの形状及び規模は上端は長円形で長径225cm、短径135cm、底部も長径150cm、短径60cmの長円形であったと思われる。深さは中央部でもっとも深く95cmである。

本土坑内からは磁器24点、陶器17点、焼締め6点、土師質瓦質土器65点、砥石1点及び瓦1点が出土した。出土状況からゴミ穴と考えられ、遺物も一括廃棄されたものである可能性が高い。生産年代のわかる出土陶磁器は表34のとおりであり、およそ18世紀の前半におさまるものと思われる。したがって本土坑もその頃のものである。

出土遺物のうちS K 36-1は 州窯の色絵鉢である。S K 36-6は青磁の瓶で体部上半に胴部最大径がくるものと思われ、体部全体には縦横に陰刻文がある。S K 36-11の鬚盥は体部外面の上半は雨降り文の染め付けを施し、下半は鉄漿を塗る。S K 36-24は岸岳の可能性がある。S K 36-34は関西系の低火度釉の蓋物である。焼締め6点のうち3点が播鉢でいずれも中国地方のものと思われる。土師質瓦質土器65点のうち、皿が50点、内耳土器が14点、焼塩壺の蓋が1点である。皿については図示しえた13点を含めて次項で詳述する。内耳土器の14点のうち口縁部は6点でS K 36-50、51を含めていずれも強く外反するタイプのものであった。

・ S K 3 7 (第 1 7 図)

本土坑は調査区の西部に位置する。南側でS K 36と切り合っており、S X 10の下層にある。切り合い関係は明確でなかったが、出土遺物より本土坑がS K 36より後からつくられている。本土坑の形状及び規模は上端は東西方向に長軸をとる長方形で長辺70cm、短辺55cm、底部は南北方向に長軸をとる長辺55cm、短辺35cmの長方形である。深さは南部でもっとも深く55cmである。

本土坑内からは磁器3点、陶器4点、土師質瓦質土器5点が出土した。出土状況からゴミ穴と考えられ私生産年代のわかる出土陶磁器は表35のとおりである。出土遺物の数が少ないため明確でないが、18世紀後半までにおさまっている。そのため本土坑もその頃のものであろう。

・ S K 3 8 （第 1 8 図）

本土坑は調査区の南西隅部に位置する。本土坑の形状及び規模は上端は不整形な長円形で長径125cm、短径80cm、底部も長径110cm、短径60cmの不整形な長円形である。深さは中央部でもっとも深く38cmである。

本土坑に伴う遺物は出土しなかった。

・ S K 3 9 （第 1 8 図）

本土坑は調査区の南西隅部に位置する。本土坑の形状及び規模は上端が不整形な隅丸長方形で北辺が125cm、南辺が85cm、東辺が290cm、西辺が320cmである。底部も北辺が110cm、南辺が45cm、東辺が255cm、西辺が290cmの不整形な隅丸長方形である。深さは中央部でもっとも深く45cmである。

本土坑内からは磁器49点、陶器29点、焼締め7点、土師質瓦質土器百数十点、石製品1点、瓦10点及び青銅製品1点が出土した。出土遺物の量が多かったためゴミ穴とも考えられるが、その形状が他のゴミ穴と異なっていることや規模が大きいことなどから、何らかの施設を埋め戻す際にゴミ穴として利用したことも考えられる。そうであるならば、遺物も一括廃棄されたものである可能性が高い。もともとの土坑の性格については明確でない。生産年代のわかる出土陶磁器は表36のとおりであり、一部18世紀後半にかかるものがあるものの、18世紀前半までにおさまる可能性が高い。したがって本土坑が廃棄され、埋め戻されたのもその頃であろう。

出土遺物の陶器のうち腰鏝、片口の口の部分を含め瀬戸・美濃のものが3点あった。土師質瓦質土器が大量に出土したが多くは内耳土器である。口縁部25個のうち強く外反するタイプのものがSK39-57を含めて21個・短く外反するタイプのものが2個、外反しないタイプのものが2個であった。また、土師質瓦質の皿についてはSK39-58～61が出土した。58～60については大きさは近いが、58が薄手で体部が内湾し色調が橙褐色なのに対して、59は厚手で体部は直線的、色調も灰色で、60は薄手で灰白色である。61は径が小さく浅いタイプである。58、59、60は口縁部にススが付着し灯明皿として使用されたことが明らかなのに対して、61はススが付着しない。SK39-62はキセルの吸い口である。小泉分類によればV期にあたるものと思われるが、V期は18世紀後半とされていることから若干のずれがある。

・ S K 4 0 （第 2 0 図）

本土坑は調査区の南西隅部に位置する。SK41の上層につくられており、本土坑が後からつくられたものである。形状及び規模は上端は不整形な隅丸長方形で、北辺70cm、南辺60cm、東辺95cm、西辺60cmである。下端も不整形な隅丸長方形で、北辺60cm、南辺50cm、東辺80cm、西辺50cmである。

深さは中央部でもっとも深く 25 cmである。

土坑内からは磁器 7 点、陶器 6 点、焼締め 1 点、土師質瓦質土器 20 点余りが出土した。出土状況からゴミ穴と考えられる。生産年代のわかる出土陶磁器は表 37 のとおりであり、およそ 1850 年前後におさまるものと思われる。したがって本土坑もその頃のものである。

出土遺物のうち S K 40-14 は内耳土器であり、口縁部が短く外反するタイプのものである。内耳部分には花の刻印があり内耳と口縁部の境がわからないように平らになでる。上から下へきれいに穿孔するが穴は下方の径が小さくなる。S K 40-15 は涼炉の部品である。

・ S K 4 1 (第 1 9 図)

本土坑は調査区の南西隅部に位置する。S K 40, S K 43 の下層につくられており、本土坑が先行する。形状及び規模は、上端は不整形な隅丸長方形で北辺 210 cm, 南辺 195 c m, 東辺 90 c m, 西辺 70 c m, 底部は長辺 190 cm, 短辺 60 cm の隅丸長方形である。深さは北東部で最大 28 cm である。

本土坑内からは磁器 13 点、陶器 3 点、焼締め 3 点、土師質瓦質土器 16 点が出土した。出土状況からゴミ穴と考えられる。出土遺物が少ないため明確でないが生産年代のわかる出土陶磁器は表 38 のとおりであり、18 世紀前半におさまる可能性がある。したがって本土坑もその頃のものであろう。

出土遺物のうち焼締め 3 点はすべて播鉢であり、うち S K 41-17 を含めて 2 点は堺である。土師質瓦質土器のうち 15 点は内耳土器であるが、口縁部が 4 点含まれており S K 41-18 をはじめすべて口縁部が短く外反するタイプである。

・ S K 4 2 (第 2 0 図)

本土坑は調査区の南西隅部に位置する。形状及び規模は上端は卵形で長径が 150 c m, 短径が 95 cm, 底部は長径が 115 cm, 短径が 71 cm の長円形である。底部は全体に平らで深さは 18 cm である。

本土坑の内側には青灰色の粘質土と赤土の混じった土があたかも塗られたように層をなしていた。これは耐水性をよくするための工夫とも考えられ、何らかの水周りの施設だった可能性も考えられた。しかし、青灰色の粘質土と赤土の混じった土の珪藻分析の結果、陸生珪藻の産出率が約 70 % あり、明確にできなかった。

本土坑からは陶磁器 2 点と土師質瓦質土器 2 点が出土したのみである。

・ S K 4 3 (第 2 0 図)

本土坑は調査区の南西隅部に位置する。S K 41 の上層にあり、本土坑があとからつくられている。形状及び規模は上端が長径 90 c m, 短径 45 cm の長円形, 底部も長径 35 c m, 短径 30 cm の長円形である。深さは中央部でもっとも深く 20 cm である。

本土坑内からは磁器 11 点、陶器 10 点、焼締め 1 点、土師質瓦質土器数十点、瓦 4 点が出土した。出土状況からゴミ穴と考えられる。遺物の数は少ないが生産年代のわかる出土陶磁器は表 39 のとおりであり、幕末頃に廃棄されたものである可能性が高い。したがって本土坑もその頃のものである。

う。

出土遺物のうち陶磁器については肥前以外、特に関西系の割合が極めて高く、19世紀初頭から幕末にかけての広島における陶磁器シェアの様相をよく表している。土師質瓦質土器のうちS K 43-22は焔炉で底部と体部の一部しか遺存していないが、後述するS K 44-34と胎土・焼成が類似しており同種のものと思われる。S K 43-23は内耳土器で、体部が内湾した後外反するタイプである。内耳土器はS K 43-23を含めて10点出土しており、そのうち口縁部は7点である。すべて外反するタイプのものである。器形のわかる4点はすべてS K 43-23と同じで、同一個体である可能性も大きい。S K 43-25は軒丸瓦の瓦当面である。

・ S K 4 4 （第 2 1 図）

本土坑は調査区の西部に位置する。S X 7の下層にあり、本土坑が先行している。本土坑の形状及び規模は上端が長径140 cm、短径50 cmの長円形、底部も長径120 cm、短径35 cmの不整形な長円形である。深さは中央部でもっとも深く25 cmである。

本土坑内からは磁器19点、陶器19点、焼締め1点、土師質瓦質土器数十点、瓦数十点及び青銅製品2点が出土した。浅い小さい土坑であるが遺物がぎっしり詰まっており、ゴミ穴と考えられ、遺物も一括廃棄されたものである可能性が高い。生産年代のわかる出土陶磁器は表40のとおりであり、19世紀前半から幕末の頃に廃棄されたものであろう。したがって本土坑もその頃のものである。

出土遺物のうち磁器ではS K 44-18、19の広東碗が最も新しく、陶器では19世紀代の関西系の土瓶がたいへん多い。釉は錆釉、鉄釉、灰釉、胎土も灰色で硬質なものから黄褐色で軟質のものまでさまざまである。土師質瓦質の遺物のうち焔炉が3個体もある。S K 44-35は焼成がよく比較的遺存状況が良かったため全体の器形カミわかる貴重な例である。平らな底部から体部は真っ直ぐ立ち上がり、口縁端部は内側に向かって肥厚する。正面の口縁部から中央部にかけて大きく削り込みがあり、下端は受け口状の張り出しを持つ。体部内面上方に3つの角状の突起があるが先はいずれも折れていると思われる。底部外面は周縁部のみ台状に高くアーチ状の切り込みが2か所ある。また、正面の受け口状の張り出しの下には透かし彫りが見られる。江戸遺跡の両角分類⁽⁵⁾ではちょうど当てはまる器形はないが、鉢AⅡイ7、鉢AⅢ口5等が似る。S K 44-36は上半部が遺存しないが下半部はS K 44-35と同様のつくりでおそらく上半部も類似したものであったと思われる。S K 44-35と比べると胎土・焼成とも悪い。もう1点は遺存状態が悪く図示しえなかったがS K 44-35と同様のものであると思われる。いずれも全体的にスス等の付着は少なく、特に底部付近は全く火に接した形跡はない。S K 44-35では受け口状の張り出しの上部のみにススの付着が見られ、何らかの付属物を下に置いて使用した可能性もある。S K 44-37はひょうそくで平底の皿に切り込みのある筒状の突起を持つ。両角分類の皿CⅠハ1にあたる。S K 44-38は焙烙鍋である。

・ S K 4 5 （第 2 2 図）

本土坑は調査区の西端部に位置する。西側でS K 47、S K 49と切り合っており、S X 10の下層に

ある。切り合い関係から S K 47, S K 49 よりも本土坑が先行する。形状及び規模は上端は長辺 210 c m, 短辺 190cm の隅丸長方形で、底部も長辺 170cm, 短辺 160 c m の隅丸長方形である。深さは中央部でもっとも深く 60 cm である。

本土坑内からは磁器 6 点, 陶器 13 点, 焼締め 6 点, 土師質瓦質土器 27 点, 瓦 4 点及び青銅製品 1 点が出土した。出土状況からゴミ穴と考えられる。生産年代のわかる出土陶磁器は表 41 のとおりであり, およそ 17 世紀の前半におさまるものと思われる。したがって本土坑もその頃のものである。

出土遺物のうち磁器は輸入磁器と初期伊万里, 陶器も唐津は砂目段階までで黄瀬戸や瀬戸黒などを含む。この遺物構成は広島城遺跡県庁前地点第 2 号溝状遺構出土遺物と類似しているが, 県庁前地点第 2 号溝状遺構は初期伊万里を含まない。両者の比較から本土坑は伊万里出現直後の遺構といえ, 逆に県庁前地点第 2 号溝状遺構は伊万里出現直前の遺構といえる。すなわち S K 45-3, 4 は広島に伊万里が流通しはじめたまさに直後の遺物といえる。県庁前地点第 2 号溝状遺構はその遺物構成を大坂などの例と比較した結果福島期に廃絶したものと考えた。本土坑はそれより若干遅れて浅野期の初期に廃棄されたものである可能性がある。焼締め 6 点はすべて備前であり, そのうち S K 45-20 を初め 2 つの播鉢を含む。土師質瓦質土器 27 点のうち皿は S K 45-21 を含めて 16 点, 焼塩壺 1 点, 甕 1 点その他 9 点である。青銅製品はキセルの雁首で (S K 45-22), 補強帯があり・遺存していないが肩の部分の変色しており, もともと肩が存在していたことは間違いない。とすると古泉分類のⅡ期～Ⅲ期で 17 世紀前半ないし後半に相当しよう。

・ S K 4 6 (第 2 2 図)

本土坑は調査区の西端部に位置する。北側で S K 25 と切り合っており, S X 10 の下層にある。切り合い関係は明確でなく出土遺物も少ないため前後関係は明らかでない。本土坑の形状及び規模は上端は長さ 200cm, 幅は最大で 100cm の不整形で、底部も長さ 180 c m, 幅は最大で 95cm の不整形である。深さは中央部でもっとも深く 18 cm である。

本土坑内からはわずかに陶器 1 点, 焼締め 1 点, 瓦 1 点が出土したのみであり, 本土坑の性格や時期については明らかにしえなかった。

・ S K 4 7 (第 2 2 図)

本土坑は調査区の西端部に位置する。東側で S K 45 と切り合っており, 切り合い関係より本土坑の方が先行している。また, S K 48 の下層にあり, 本土坑が先行している。本土坑の形状及び規模は, 上端は北辺 70cm, 南辺 170cm の台形, 底部も北辺 50cm, 南辺 125cm の台形である。深さは東部でもっとも深く 45cm である。本土坑内には一抱えほどある石が底部と北側の壁際に一つずつ埋められていた。その性格については明らかでないが, 廃棄されたものと思われる。

本土坑内からは磁器 8 点, 陶器 3 点, 焼締め 3 点, 土師質瓦質土器 12 点, 瓦 1 点, 銭貨 1 点, 鉄製品 6 点及び石製品 1 点が出土した。出土状況からゴミ穴と考えられる。出土遺物が少ないため明確でないが生産年代のわかる出土陶磁器は妻 4 2 のとおりであり, 18 世紀前半におさまる可能性がある。

る。したがって本土坑もその頃のものと思われる。なお、S K 47-9が、S X 8-3と接合した。

出土遺物のうち焼締め3点はすべて擂鉢であり、S K 4ト10を初めいずれも17世紀後半から18世紀の中国地方窯の可能性がある。土師質瓦質土器のうち内耳土器の口縁部が3点あり（S K 47-11～13）、いずれも口縁部が大きく外反するタイプであるが、S K 47-13は口縁端部が内巻き状に下垂する。S K 47-14は土師質の皿で口縁部にはススが付着する。S K 47-15は平瓦の瓦当で中央の三葉飾りが上から下へ開き、その先端がその外の唐草に接続する。銭貨はS K 47-16の寛永通寶である。いわゆる古寛永の銅一文銭で1636～1659年に鑄造されたものである。石製品は硯である。

・ S K 4 8 （第 2 3 図）

本土坑は調査区の西端部中央に位置する。S K 47の上層にあり、本土坑が後からつくられている。本土坑は土層観察から一旦径120cmほどの掘り方を掘ったのちあらかじめ漆喰で成形した円柱状の製品を掘り方向に埋置したものである。上端は欠損していたが遺存部分の形状及び規模は、上端は径94cmの円形で、底部も径84cmの円形である。底部は水平で深さは全体的に20cm遺存していた。

土坑内からは磁器12点、陶器13点、土師質瓦質土器60点弱、瓦4点が出土した。漆喰で固めてあることからもともとは何らかの施設だったと思われるが、出土状況から廃絶時に遺物が混入したものと思われる。生産年代のわかる出土陶磁器は表43のとおりであり、幕末までにおさまるものと思われる。したがって本土坑もその頃廃絶されたものである。

出土遺物のうち磁器はS K 48-8から11が関西系で、磁器についても19世紀になると肥前がシェアを落としている様子が伺われる。S K 48-20は中国地方窯の鉢である。S K 48-21は焙烙鍋である。内耳土器の口縁部が1点見られるが大きく外反するタイプである。

・ S K 4 9 （第 2 2 図）

本土坑は調査区の西端部に位置する。本土坑の形状及び規模は上端が径240cmの半円形、底部も径150cmの半円形である。底部は全体に平らで深さは40cmである。土坑内には黒色土が充満していた。

本土坑内からは磁器10点、陶器9点、焼締め4点、土師質瓦質土器二十数点、銭貨1点及び石製品1点が出土した。出土状況からゴミ穴と考えられる。遺物の数は少ないが生産年代のわかる出土陶磁器は表44のとおりであり、いずれも18世紀前半におさまっている。したがって本土坑もその頃のものであろう。

出土遺物のうちS K 49-17, 18は見込み蛇の目粕剥ぎの折り縁皿で、黒色のかかなり濃い鉄粕を施している。粕剥ぎ部には砂目痕が見られる。S K 49-19は柿色の低火度粕を施した賓盟で関西系のものである。S K 49-20は焼締めの皿であり、口縁部は1/4ほどしか遺存していないが多量のススが付着している。関西から中国地方のものである。S K 49-21は備前の擂鉢である。擂鉢は1点のみであるが、S K 49-20も含めて4点の焼締めはすべて備前である。S K 49-22, 23, 24は内耳土器であり、口縁部はいずれも強く外反する。S K 49-22, 23は内耳が遺存し、いずれも上から下へきれいに穿孔されている。S K 49-25, 26, 27は土師質の皿である。いずれもろくろ成形で口径は

9.4 c m前後、体部は内湾する。成形方法や大きさは類似するが、胎土・色調はそれぞれ異なっている。S K 49-25は体部から底部の一部にタール状の付着物が、また口縁端部にも若干スス状の付着物が見られる。しかし、灯明具として使用したのかは明らかでない。また他の2点についてはスス等は見られない。S K 49-20の焼締めの皿が明らかに灯明皿として使用された痕跡があるのに対して極めて好対称である。S K 49-28は寛永通費である。いわゆる古寛永の銅一文銭で1636～1659年に製造されたものである。

・ S K 5 0 (第 2 5 図)

本土坑は調査区の西端部に位置する。本土坑の形状及び規模は上端は長径70cm、短径60 c mの不整形な長円形、底部も不整形な長円形で長径35 cm、短径28 cmである。深さは周縁部でもっとも深く18 cmである。土坑内には貝殻を細かく砕いたものがびっしりと詰まっていた。単なるゴミ穴とは考えづらく性格は明確でないが貝殻根石の可能性がある。(6)

本土坑からは陶磁器1点と焼締め1点が出土したのみである。

・ S K 5 1 (第 2 4 図)

本土坑は調査区の北西隅部に位置する。東側でS D 10と切り合っており、切り合い関係から本土坑が先行している。また、S K 54の上層にあり、本土坑が後からつくられている。東側でS D 10と切り合っているため西側しか遺存しておらず、現状の形状及び規模は上端が長径100 c m、短径80 cmの長円形、底部も長径90 c m、短径70 cmの長円形である。深さは西側部分でもっとも深く35 c mである。

本土坑内からは磁器17点、陶器7点、焼締め5点、土師質瓦質土器三十数点、瓦2点及び青銅製品1点が出土した。出土状況からゴミ穴と考えられる。遺物の数は少ないが生産年代のわかる出土陶磁器は表45のとおりであり、19世紀代の関西系陶器があるものの、磁器は19世紀前半までにおさまっており、19世紀初めから前半期に廃棄されたものである可能性が高い。したがって本土坑もその頃のものであろう。

出土遺物のうちS K 51-23～26は土師質の皿である。大きさにより大きく23、24と25、26に分けられる。それぞれ器形や色調は少しずつ異なっているが、同種のものと考えてよかろう。いずれも完形ではないが、口縁部にススの付着はみられない。S K 51-27、28は内耳土器である。内耳土器の口縁部は5点あり、強く外反するものが2点、短く外反するものがS K 51-27を含めて2点、外反しないものがS K 51-28のみである。S K 51-29は青銅製品である。用途は不明であるが鍵のようなものと考えられる。

・ S K 5 2 (第 2 4 図)

本土坑は調査区の北西隅部に位置する。S K 53の東15 cmに位置し両土坑は近接している。両土坑とも漆喰土坑であり、セットで設けられたものであることは間違いない。S K 54、S K 55の上層にあり、本土坑が後からつくられている。漆喰は底部のみしか遺存していなかったが、現状での形状

と規模は上端は径90cmの円形、底部は長径80cm、短径70cmの長円形である。底部は全体に平らで深さは15cmである。S K 53とセットで設けられているためその性格については便槽のようなものが考えられるが、明確でない。

本土坑内からは磁器10点、陶器5点、焼締め2点、土師質瓦質土器70点余りが出土した。生産年代のわかる出土陶磁器は表46のとおりである。磁器では19世紀前半の広東碗、陶器では19世紀代の関西系の土瓶や袋物があり、本遺構もその頃に埋め戻された可能性が大きい。陶器では中国地方系のものが2点あり、遺物の時期や構成はS K 53に類似している。おそらく同時に廃絶されたものと思われる。内耳土器の口縁部が6点出土しているがいずれも強く外反し、体部は一旦内湾したのち口縁部に至る器形のものである。また、内耳はS K 52-13ではたいへん小さくなり、穴も穿孔はするものの小さく、下まで突き抜けていない。明らかに機能はしておらず、退化している。S K 52-14では内耳は申し訳程度に張りつけるが、とうとう穴はなくなってしまう。他の1点はしっかりと穿孔する。

・ S K 5 3 （第 2 4 図）

本土坑は調査区の北西隅部に位置する。S K 52の西15cmに位置し両土坑は近接している。両土坑とも漆喰土坑であり、セットで設けられたものあることは間違いない。S K 55の上層にあり、本土坑が後からつくられている。漆喰は南西部分の下部が遺存していたのみであるが、現状での形状と規模は上端は径105cmの半円形、底部も径70cmの半円形である。深さは中央部でもっとも深く25cmである。前述のようにS K 52とセットで設けられているためその性格については便槽のようなものが考えられるが、明確でない。

本土坑内からは磁器22点、陶器21点、焼締め14点、土師質瓦質土器数十点、瓦十数点、土人形3点、青銅製品1点及び鉄製品4点が出土した。生産年代のわかる出土陶磁器は表47のとおりである。磁器では19世紀前半の広東碗や蓋付き碗の出土が、陶器でも19世紀代の関西系の土瓶や瓶の出土が多く、本遺構もその頃に埋め戻された可能性が大きい。陶器のうち中国地方系のものが5点出土しているのが目立つ。内耳土器の口縁部が5点出土し、そのうち強く外反するものが4点、外反しないものが1点であった。青銅製品はS K 53-29のキセルの雁首で、古泉分類のV期、18世紀後半にあたろう。

・ S K 5 4 （第 2 5 図）

本土坑は調査区の北西隅部に位置する。S K 51、S K 52の下層に位置し、本土坑が先行している。東側でS D 10と、北側でS K 56とそれぞれ切り合っている。S D 10とは切り合い関係から本土坑が先行するが、S K 56とは切り合い関係が明確でなかった。しかし、出土遺物より本土坑が後につくられていることからS K 56→S K 54→S D 10の順となる。東側でS D 10と切り合っているためもとの形状及び規模は明らかでないが、現状では上端は長径290cm、短径170cmの不整形な長円形、底部は東辺180cm、西辺250cmの不整形な台形である。底部は全体に平らで深さ35cmである。土坑内

には 30 cm 角ほどの石が 4 個埋まっていた。

本土坑内からは磁器 20 点、陶器 12 点、焼締め 6 点、土師質瓦質土器 41 点、瓦 22 点及び青銅製品 2 点が出土した。出土状況からゴミ穴と考えられる。生産年代のわかる出土陶磁器は表 48 のとおりであり、およそ 18 世紀の前半におさまるものと思われる。したがって本土坑もその頃のものである。

出土遺物のうち S K 54-32 は瀬戸・美濃と思われる茶入れである。焼締め 6 点はすべて備前であるが、S K 54-33 を初めうち 3 点は播鉢である。土師質瓦質土器は内耳土器 23 点、皿 11 点その他 7 点である。皿は 11 点のうち口縁部にススが大量に付着するものが 2 点あるが、その他のものは S K 54-34 の口縁部に 1 か所ススが付着するだけで残りのものには痕跡が見られない。内耳土器のうち口縁部の形態がわかるものは 7 点あるが S K 54-36 を初めそのうち 6 点は大きく外反するもの、1 点が短く外反するものである。青銅製品は S K 54-37 はキセルの吸い口で、小泉分類では V ないし VI 期、18 世紀後半から 19 世紀以降になろうが、ラウとの接合部がラッパ状に開いており形状が異なっている。S K 54-38 は釣針であろう。

・ S K 5 5 (第 2 5 図)

本土坑は調査区の北西隅部に位置する。S K 52、S K 53 の下層にあり本土坑が先行している。本土坑の形状及び規模は上端は長径 210 cm、短径 130 c m の北西部のはり出した不整形な長円形、底部も長径 115 cm、短径 65 cm の長円形である。深さは中央部でもっとも深く 45 cm である。

本土坑内からは磁器 30 点、陶器 13 点、焼締め 4 点、土師質瓦質土器 8 点、瓦 1 点が出土した。出土状況からゴミ穴と考えられる。生産年代のわかる出土陶磁器は表 49 のとおりであり、およそ 18 世紀の前半におさまるものと思われる。したがって本土坑もその頃のものである。位置的にも隣接していることや、出土遺物の生産年代が近いことから、S K 54 と前後してつくられたものと思われる。

出土遺物のうち S K 55-1 は景德鎮窯の白磁皿で内面体部に陽刻文を施す。高台内にはカンナ痕のような中央から端に向けての線状の痕跡がある。島台内側部分には砂粒が大量に付着する。S K 55-6 は有田の瑠璃粕の碗である。広島城ではこれまであまり出土例がない。S K 55-18 は大振りの白磁の碗で体部外面は右上から左下へ彫り込んでいる。焼締め 4 点はいずれも備前ないし備前系と思われる、うち 3 点は播鉢である。土師質瓦質土器 8 点のうち内耳土器の口縁部が 3 点あるがいずれも口縁部が強く外反するタイプである。

・ S K 5 6 (第 2 5 図)

本土坑は調査区の北西隅部に位置する。南側で S K 54 と、東側で S D 10 と切り合っている。S K 54 との切り合い関係は明瞭でなかったが、出土遺物より本土坑が先行する。また S D 10 とは切り合い関係から本土坑が先行する。東側で S D 10 と切り合っているため、全体の形状及び規模は明らかでないが、現状では上端は長辺が 200 cm、短辺 50 cm の台形で、底部も長辺が 140 cm、短辺 45 c m の不整形な台形である。深さは中央部でもっとも深く 50 cm である。

本土坑内からは陶器 6 点、焼締め 1 点、焼塩壺の蓋 1 点、砥石 1 点が出土した。出土状況からゴ

ミ穴と考えられる。遺物の量は少ないが生産年代のわかる出土陶器はいずれも16世紀末から17世紀初めのごく限られた時期の遺物であることから17世紀初頭に一括廃棄されたことは確実であり、したがって本土坑もその頃のものである。

出土遺物のうちS K 56-1は山瀬窯の藁灰神を施した皿でいわゆる岸母系陶器である。16世紀末のものである。S K 56-2は内面口縁部から外面体部に藁灰穂を流し掛けした唐津播鉢、S K 56-3はいわゆる絵唐津の皿、S K 56-4は灰釉を施した唐津の碗でいずれも16世紀末から17世紀初頭のものである。その他、志野や備前の水差しの蓋など同時期の遺物と考えてよからう。伊万里出現前の遺構である県庁前地点第2号溝状遺構が砂目の遺物を含むのに対してそれがなく、それ以前の土坑とも考えられるが、遺物の量が少ないため明確でない。しかし、もちろん本遺跡の中でも最も古い遺構の一つであり、毛利期から福島期の遺構であることは確実であろう。

(2) 溝状遺構

・ S D 1 (第 2 6 図)

水溝状遺構は調査区の東端部分に位置する石組の溝状遺構で鐘状の屈曲部のみが遺存していた。規模は東西方向に長さ160cm、南北方向に285cm、幅は約28cmである。本来はS D 5、S D 6を経てS B 3へ続いていたものと思われ、S D 5の状況からも石敷であった可能性が高いが、遺存していない。そのため本来の深さは不明である。石組は1石しか積まれていなかった。また、屈曲部の45cm程度南の東側の石組の間にしっくいにつくられた幅15cmほどの溝状のものが80cmにわたって確認された。水溝状遺構に接続する何らかの施設である可能性がある。

水溝状遺構はS D 2の上層にあり、本遺構の方が後につくられている。水溝状遺構からは若干の陶磁器、瓦等の遺物が出土した。陶磁器は出土量は少ないが、16世紀後半から17世紀初めに生産されたものと考えられる潭州窯産の青花から近代以降の型紙刷りのものまで幅広い。また、前述のようにS B 3と同時に作られたものであり、同建物跡と同じく近代以降の遺構である。

・ S D 2 (第 2 8 図)

水溝状遺構は調査区の東部に位置し、南北方向に長さ21.6mにわたって確認した。幅は上端は約220cm、深さは45cmである。溝は南端が北端より10cmほど低くなっている。S D 1の下層にあり水溝状遺構が先行している。また、北側でS B 1、S E 1と切り合っており、切り合い関係よりいずれよりも水溝状遺構が先行している。溝の底部の東西両側には1辺30cm程度の切り石が並べられており、その間を埋めるように大小形状さまざまな石が敷き詰められていた。両側の切り石は一段分しか遺存していなかったが、溝の深さから考えて本来はさらに石垣が数段つまれていた可能性がある。出土状況は東西の両岸で大きく異なっていた。東側はいかにも積み重ねられていた石垣の裏込め状の小石が多く出土したのに対して、西側にそれらしき石等は確認されなかった。また、藩内には大量の砂が埋められていたが、底部付近には漆喰と瓦が混ざったものや赤土が大量に確認された。藩内の埋め土の土層観察からこうした漆喰・瓦・赤土等は溝の東側からのみ流入していることがわかった。

すなわち、水溝状遺構の東岸には瓦を載せた漆喰塗りの壁が立っており、これが港内に倒壊した様子を示していると思われる。とすれば、東岸にのみ見られた石垣の裏込め状の多くの小石は、こうした壁の基礎であったことも考えられ、そうすれば東西で様相が異なっていたことも理解できる。水溝状遺構は南側が低くなっていることや、東側に集水用の枡も設けられていることから、内堀への排水路であると考えられる。また、内堀に直行する方向につくられており境界施設も兼ねていた可能性が大きい。なお、埋土下層に大量に存在した赤・黒・白の層をなす土壌を分析したところ、赤はマサ土、白は炭酸カルシウムによって構成される漆喰、黒は漆喰に炭化した植物片が混入したことによるとの結果が出た。すなわち壁土に一旦植物片を混入した漆喰を塗り、さらに白漆喰を上塗りして仕上げた様子が例える。

水溝状遺構からは磁器140点余り、陶器80点余り、土師質瓦質土器数十点及び大量の瓦が出土した。生産年代のわかる出土陶磁器は表50のとおりである。遺物は最下層の赤土中のもの、その上の漆喰・互層に含まれていたもの、さらにその上の埋土に分けて取り上げた。しかし、赤土層にも型紙刷りの遺物が含まれており、遺物の差異は認められなかった。前述のように型紙刷りの遺物が含まれており、明治以降に埋め戻されたことは確実であるが、出土地点や向き、規模等から考えて松原講武所の東の境界と考えるのが最も適当ではあるまいか。そうするとつくられたのも1864年頃となる。松原講武所は明治以降もしばらく存続していたことが知られており、下限も一致しよう。

・ S D 3（第29図）

水溝状遺構は調査区の南東部に位置し、東西方向に長さ8.9mにわたって確認した。幅は上端で最大約120cm、底部で65cm、深さは最大で40cmである。東西両方ともにさらに伸びていると思われ、特に西側についてはS B 3のトレンチの土層断面で確認している。東側でS K 1と、西側でS B 3と切り合っており、中央部分をS D 4が横断している。切り合い関係よりS D 4、S B 3より本遺構が先行しており、出土遺物よりS K 1よりも本遺構が先行している。遺構内には黒色土が充満していた。水溝状遺構は内堀とほぼ平行して掘られていることから屋敷割りの溝のようなものが考えられよう。

水溝状遺構からは磁器15点、陶器14点、土師質瓦質土器29点、瓦5点、石製品2点、青銅製品1点及び土製品1点が出土した。生産年代のわかる出土陶磁器は表51のとおりである。1670年までにおさまるものと考えられ、本遺構の下限もその頃と考えられる。磁器については大部分がいわゆる初期伊万里といわれる草創期の伊万里であり、これまでの広島城の調査でこれだけの初期伊万里が1つの遺構からまとまって出土したのははじめてで、貴重な資料となろう。陶器では唐津に混じって福岡あるいは萩と思われるもの（S D 3-22, 27）が見られる。これは広島における近世初め頃の陶器組成の特徴であろう。また、呉須絵と鉄絵の両方を描いた京焼（S D 3-29）も見られる。瓦はコビキBと、内面にゴザ状の圧痕を持つ丸瓦が出土した。焼締めは6点すべてが備前でうち3点は播鉢である。土師質瓦質土器のうち内耳土器の口縁部はS D 3-30～32で、いずれも強く外反するタイプである。S D 3-33は土師質の皿で口縁部にススが付着する。S D 3-34は黒の基石である。

・ S D 4 （第 3 0 図）

本溝状遺構は調査区の南東部に位置し、南北方向に長さ14.2mにわたって確認した。幅は上端で最大約55cm、底部で10～33cm、深さは10～20cmである。北に向かって幅を減じ終息するが、南へは調査区外へさらに伸びている。南側でS D 3とほぼ直行し、北側ではS X 3－P 5及びS B 2と切り合っている。切り合い関係よりS D 3→S D 4→S B 2の順でつくられている。S X 3－P 5との前後関係は明らかでない。

本溝状遺構からは磁器11点、陶器19点、焼締め1点、土師質瓦質土器二十数点及び瓦14点が出土した。生産年代のわかる出土陶磁器は表52のとおりである。広東碗・端反碗を含まず18世紀代までのものである。水溝状遺構の下限もその頃と考えられる。

出土遺物のうちS D 4-15は足付きの火皿で、S D 3-25と同一個体である。本来S D 3の遺物であったものが、両者の重複部分で混入したものであろう。青磁を意識したものと思われる。S D 4-26は焼塩壺である。器形から両角分類(7)のB a イで刻印は見られないが堺藤左エ門系で17世紀代のものであろう。内耳土器の口縁部が3点あり、S D 4-25を含み強く外反するものが2点で、外反しないものが1点ある。S D 4-27は軒平瓦で三葉の中心飾りから唐草が上から下へ一転する。

・ S D 5 （第 3 1 図）

本溝状遺構は調査区のほぼ中央部やや東よりて、東西方向に長さ3.6mにわたって確認した。S D 8の上層にあり、本遺構があとからつくられている。幅は約16cm、深さは6cmである。両側に石が組まれ、底にも石が敷かれていた。S D 6のところで後述するように当初はS D 6を経てS B 3まで続いていたものと思われる。西側でS B 2と切り合っているが、これもS D 6のところで述べるように本溝状遺構が先行すると思われる。

なお、本遺構に伴う遺物は出土しなかった。

・ S D 6 （第 3 1 図）

本溝状遺構は調査区のほぼ中央部で、東西方向に長さ7.2mにわたって確認した。S D 7の上層にあり、本溝状遺構が後からつくられている。また、北側でS K 6と切り合っている。切り合い関係より本遺構が先行する。幅は上端で最大約120cm、底部で最大78cm、深さは最大で40cmである。

本溝状遺構からは磁器60点余り、陶器23点、焼締め1点及び瓦13点が出土した。生産年代のわかる出土陶磁器は表53のとおりである。明治以降の工業用コバルトによる型紙刷りのものを多く含み、銅版印刷のものも1点含まれる。

本溝状遺構は東に接するS D 5の延長線上にあり、なおかつ溝状遺構内にはいくつかの石が敷かれたように並べられており、元々はS D 5がS B 3の北側石組溝まで接続していたものが、一部石を抜き取られたために生じた溝であると考えられる。石組みが遺存しているS D 5がちょうどS B 2の内側にあたる部分であることから、S B 2が建てられたあとに建物の外にあたる本溝状遺構の部分が廃絶されたものと考えられる。

・ S D 7（第 6 図）

本溝状遺構は調査区のほぼ中央部で、東西方向に長さ8.4mにわたって確認した。幅は上端で最大150cm、底部で最大120cm、深さは最大で70cmである。東西両側にさらに伸びていると思われる。北側でS D 8と切り合っている。切り合い関係は明確でなかったが、出土遺物より本遺構が先行する。また、本遺構はS K 6、S D 6、S B 2の下層にあり、本遺構が先行している。

本溝状遺構からは磁器15点、陶器23点、焼締め10点、土師質瓦質土器三十数点及び瓦4点が出土した。生産年代のわかる出土陶磁器は表54のとおりである。いずれも18世紀の前半までに生産されたものであり、これにより本遺構の下限はこの頃と考えられる。

出土遺物で注目されるのは、S D 7-16の岸岳系唐津及びS D 7-43の丸瓦である。岸岳系唐津は1594年に岸居城主波多氏が改易されるとともに陶工たちも離散してしまったといわれている。しかし、消費地遺跡においてその出土状況から疑問も呈されており、事実広島城遺跡でも岸母系唐津が他の唐津に比べて先行している様相は確認できていない。しかしながら現段階では、前述のような理由から毛利期のものに限定される可能性が高い陶磁器である。また、S D 7-43はいわゆるコビキAの丸瓦である。瓦については1583年の大坂城築城からコビキBに変わったといわれている。これについても消費地遺跡の調査から、地方ではこのAからBへの転換はもっと後であったともいわれる。広島城の調査でコビキAが出土することもこのことを裏付けていると思われる。しかし、現状では広島城ではこのコビキAの特徴を持った瓦が、最も古い瓦、すなわち毛利期に使用されていた瓦である可能性は高いと思われる。S D 7からはこの両者が出土していることになり、上限は築城当初とも考えられる。

出土陶磁器のうちS D 7-1は14～15世紀の龍泉窯の三足盤の足であり、300年近くも伝世していた可能性がある。S D 7-29は低火度釉を施した建物を模した置物と思われる。S D 7-38は備前の茶入れのようなものと思われる。播鉢についてはS D 7-39をはじめ5つの破片が出土したが、生産年代に違いはあるもののいずれも備前であった。18世紀の前半段階までは播鉢は備前のシェアが高かったことを伺わせる。S D 7-40、41は内耳土器の口縁部でいずれも強く外反するタイプである。S D 7-42は土師質の皿で口縁部は1/5しか遺存しないがススは付着しない。

・ S D 8（第 6 図）

本溝状遺構は調査区のほぼ中央部で、東西方向に長さ4.9mにわたって検出した。幅は上端で最大180cm、底部で最大110cm、深さは最大で80cmである。北側でS K 7と、南側でS D 7とそれぞれ切り合っており、S K 6、S D 5、S B 2の下層にある。切り合い関係からS K 7よりも、出土遺物からS D 7よりも後につくられている。西側へ掘り方が続いている。

本溝状遺構からは磁器89点、陶器91点、焼締め21点、土師質瓦質土器70点余り、瓦8点及び青銅製品1点が出土した。生産年代のわかる出土陶磁器は表55のとおりである。いずれも幕末までのもので工業用コバルトによる近代以降の磁器は見られない。そのため、本遺構の下限は幕末から明治初めころと考えられる。

本遺構出土遺物のうち、陶磁器の大部分は18世紀以降に生産されたものである。磁器については大部分が肥前ないしは肥前系である。しかし、19世紀代になると瀬戸・美濃のもの（S D 8-52, 54, 55, 56）や関西系（S D 8-48, 49, 50, 53）のものが見られるようになる。陶器については18世紀後半より関西系のものが多数を占めるようになる。焼締めについては播鉢が15点出土し、そのうち備前1点、堺又は中国地方8点、堺5点、肥前1点であった。土師質瓦質土器では3種類の皿が出土した。口径は9.2cm（復元）のものと5.8cm前後のものに大きく分けることができる。9.2cmのものは灰白色を呈し、体部は内湾する（S D 8-111）。5.8cm前後のものは体部が内湾しながら外上方へ伸びるもの（S D 8-112, 113）と外反して外上方へ伸びるもの（S D 8-114～116）に分かれ前者には口縁部にススが付着するが、後者には見られない。さらにS D 8-112は成形がたいへん丁寧で胎土はやや黄色がかった褐色であるのに対して、S D 8-113は成形は粗く褐色である。S D 8-113はS D 8-112とS D 8-114～116の中間的な性格を持つように思われる。また、S D 8-111～113が口縁部にススが付着し、灯明皿として用いられたと思われるのに対して、S D 8-114～116は規格・成形方法共に極めて類似し、灯明皿以外の目的で同時に何らかの意図を持って使用された可能性が高いと思われる。内耳土器の口縁部は4点ありいずれも強く外反するタイプのものである。S D 8-117は体部が一旦内湾する器形である。口縁部は2破片分で2/3が遺存するが内耳は確認できず、退化している可能性が高い。S D 8-118, 119は焜炉である。

・ S D 9（第32図）

本溝状遺構は調査区のほぼ中央部に位置し、南北方向に長さ26.8mにわたって検出した。幅は上端が200cm、底部が125cm程度である。南端と北端の底部のレベル差は確認できない。深さは90cmほどである。南北ともにさらに調査区外へ伸びている。

本溝状遺構はS B 3, S B 4と接してつくられているが、両建物跡の周囲を巡る瓦敷きや石組の暗渠の水は、一旦S X 5に集められそこから本溝状遺構に流れ込む構造になっていることや、本溝状遺構の向きが両建物跡と平行していることから、一体のものとして同時に建設された可能性が高いと思われる。

本溝状遺構の底部東側には1辺50cmほどの自然石が敷き並べられ、南端の箇所だけにその上に30～40cm角の切り石が据えられていた。他の自然石の上にも漆喰状のものが付着しており、元々は全体に同様の石が並べられていたと考えられる。また、溝状遺構の深さから考えて切り石がさらに数段積まれていた可能性が高く、石垣状になっていた石を撤去した痕跡を示していると思われる。さらに西側については、底部に直径5～10cm程度の石が壁際から幅35cmほど敷き並べられており、東側と同様に南端の箇所だけにその上に切り石が据えられていた。基礎構造は異なるものの同様の石垣があったものと思われる。

また、本溝状遺構の埋め土はたいへんきれいな砂であった。ただし、特にS B 3やS B 4に面する部分では、建物側から多くの小石混じりの土が流れ込んで来ていた。建物跡に面する、溝の東側の壁は一樣に大量に拳大の石を含んでおり、石垣の裏込め状のものと考えられるが、石を撤去した

際にこれが溝内へ崩れ落ちた状況を示しているものと考えられる。これに対して西側の壁はそれほど多くの石を含んでおらず、これらの石は建物の基礎を固める意味もあったと思われる。

本溝状遺構からは磁器80点余り、陶器30点余り、青銅製品数点等の遺物が出土した。出土陶磁器の生産年代は16世紀末の潭州窯のものから近世をとおしてのものがある。そして、近代以降のクローム青磁、型紙刷り、銅版印刷のものも見られる。

本溝状遺構はS B 3, S B 4等からの排水を堀へ流すためのものであったと思われるが、さらに南北とも調査区外へ伸びており、これらの建物だけのためにつくられたわけではなく、周辺一帯の排水用としてかなり大規模につくられたものであろう。また、この溝状遺構はその方向が内堀に直行するわけでも南北正方位を向いているわけでもない。このきわめて不自然な向きに対応する施設としては、1894（明治27）年の地図⁽⁸⁾に描かれる軍の射的場が考えられる。

・ S D 1 0 （第 3 2 図）

本溝状遺構は調査区の中央部西よりに位置し、南北方向に長さ28.5mにわたって検出した。幅は55cm～60cm、深さは60cmである。南北ともにさらに調査区外へ伸びている。S D 9の西280cmにあり、向きは平行している。S K 22, S K 23, S K 24, S K 26, S K 51, S K 54, S K 56及びS D 12, S D 13と切り合っている。切り合い関係からいずれの遺構よりも水溝状遺構が後からつくられたものである。また、S X 10は本遺構の上層にあり、本遺構が先行している。本溝状遺構は、両側に25～50cm角程度の切り石を2～3石積み、その内側に玉砂利が厚さ約50cmにわたって敷かれていた。土層断面では本遺構はS D 9の後からつくられており、方向がS D 9と平行していることや、さらに本遺構に使用されている切り石が四角の石を半裁したもので、その石はS D 9に使用されていた石ども考えられることからS D 9を廃絶して直後にこれに代わるものとしてつくられた可能性がある。

本溝状遺構に伴う遺物は検出されていない。

・ S D 1 1 （第 2 7 図）

本溝状遺構は調査区の中央部西よりに位置する素掘りの溝状遺構で東西方向に長さ4.8mにわたって確認した。幅は上端で約35cm前後、底部で最大26cm、深さは東部で最大で30cmである。溝は東端が西端より15cm低くなっている。西側は試掘トレンチで壊されていたが、調査区外へ伸びている可能性がある。

本溝状遺構の東端には漆喰で固めた揺鉢状のくぼみがある。本遺構とこの漆喰との関係は明確でなかった。

本溝状遺構から磁器9点、陶器7点、焼締め1点、土師質瓦質土器6点及び瓦5点が出土した。生産年代のわかる出土陶磁器は妻56のとおりである。陶磁器は出土量は少ないがいずれも17世紀後半から19世紀前半のものであり、本遺構の下限も19世紀前半頃と考えられる。本溝状遺構の性格及びつくられた時期については明らかにしえなかった。

・ S D 1 2 （第 3 3 図）

本溝状遺構は調査区の面よりに位置する漆喰をはった溝状遺構で、東西方向に伸び S D 9 に開口する部分と、これに接続する南北方向に伸び調査区南端で西に屈曲する部分の 2 つに大きく分かれる。前者は長さ 13 m、深さは最大で 9 c m、西端に比べ東端が 33 cm 低い。後者は南北方向に長さ 4.2 m、東西方向に長さ 5.4 m を確認した。

本溝状遺構から磁器 15 点、陶器 4 点、焼締め 1 点及び瓦 1 点等の遺物が出土した。生産年代のわかる出土陶磁器は表 57 のとおりである。陶磁器は出土量は少ないが、14 世紀中頃から 15 世紀中頃に生産されたものと考えられる龍泉窯の青磁から近代以降の型紙刷りのものまで幅広い。本遺構が S D 9 に接する部分の S D 9 をはさんだ延長線上を精査したが、延長部分は確認できなかったため、本遺構は S D 9 に開口しているものと判断できる。したがって本遺構は S D 9 と同時期につくられた可能性が大きいと思われる。また、検出されたのは漆喰のみであるがその形状から元々は瓦等が乗っていた可能性もあろう。

・ S D 1 3 （第 3 4 図）

本溝状遺構は調査区の北西隅部に位置する石組の溝状遺構である。さらに東西両方向へ伸びていたと考えられる。中央部で S D 10 と切りあっており、S X 9－P 4 の上層にある。切りあい関係より本遺構が先行する。中央部分を S D 10 に切られているが、現状では規模は南東から北西方向に長さ 460 cm、幅は上端、底部とも 40 c m、深さ 25 cm である。石組みは 1 段しか遺存しておらず、底部には一部を除いて石は敷かれていなかった。

本溝状遺構の掘り方からは磁器 5 点、陶器 8 点、土師質瓦質土器 6 点、瓦 1 点が出土した。遺物の量が少ないので明確でないが磁器には 18 世紀末から 19 世紀前半の肥前系の広東碗が含まれており、本遺構もその頃につくられた可能性がある。土師質瓦質土器には径が小さく器高の低いタイプの皿がみえる。

（ 3 ） 建物跡

・ S B 1 （第 3 5 図）

本建物跡は調査区北東隅部に位置する。全体で S D 2、S X 2 と切り合っており、中央部で S E 1 と重複している。切り合い関係より S D 2、S X 2 より本遺構が後からつくられている。本遺構と S E 1 の関係は明確にしえなかったが、同時に存在していた可静性、すなわち S E 1 の石屋であった可能性もある。本建物跡に伴うと思われる柱穴を 9 個確認したが、S B 1－P 1 に対応する位置には確認されなかった。また、本建物跡はさらに北側の調査区外へ続いている可能性もあるが、現状では規模は南北 6 間（10.8 m）×東西 1 間半（2.7 m）である。桁行の柱間寸法は心心で 270 c m、梁行の柱間寸法も心心で 270 cm である。柱穴は S B 1－P 1 は掘り方が確認できず、表面の平らな石を 3 個敷き並べたものである。その他の 8 個の柱穴はいずれも径 110 c m 前後、深さ 20 c m ほどの穴を掘った後、拳大ほどの礫を詰める。そして P 2～P 5 と P 9 はその上に四角い石を花びら状に並べ中

央の柱が立っていたと思われる部分は漆喰で固められていた。その痕跡から判断すると柱は30cm角の角材である。また、P6～P8は一番上の部分に比較的平らな人頭大ほどの石を3個から5個程度隙間無く敷き並べていた。その他の建物跡に比べると作りは極めて簡素でせいぜい長屋状の建物であったものと思われる。なお、SB1-P1については、その位置がSB1-P2からSB1-P5に至る心心のラインから若干ずれていることもあり、本遺構とは別の柱穴である可能性も大きい。

礎石の掘り方からは10点余りの陶磁器・土器類が出土したが、つくられた時期を特定するには至らなかった。ただし、先行するSD2、SX2が明治初めの遺物を含んでいたことから本遺構が近代以降のものであることは間違いない。

・SB2（第36図）

本建物跡は調査区東部北端に位置する。南側でSD4と、東側でSX1と、西側でSD5、SD6、SX4とそれぞれ切り合っている。切り合い関係よりいずれの遺構よりも本建物跡が後につくられている。また、溝状遺構の項で前述したようにSD5とSD6は本来続いていたものであったが、本建物跡と重複していたSD5の部分が残って、本建物跡の外にあたるSD6の部分が石組みの石を抜き取られ廃絶されたのは本建物跡ができたあとのことと考えられる。よって本建物跡はSD6と同時期に存在したと考えられるSB3、SB4よりも新しいことになる。

本建物跡はさらに北側の調査区外へ続いているが、検出した部分は桁行12.6m、梁行6mである。構造は周囲に幅75cm、深さ90cmほどの溝を掘り、その中に拳大の石を詰め、ところどころに一辺40cm程度の方形の石を配している。南東角にはこうした石を4個敷き並べている。また、心心で270cmごとに梁行方向にも溝を掘り4列が確認できる。こちらは幅50cm、深さ15cmのごく浅い溝で石も比較的平らで一抱えほどあるものを一石のみ埋置している。前者のものが建物の外壁の基礎で、後者のものは建物内の部屋の間仕切りの基礎であろうか。そうすると幅270cm、奥行き540cm、すなわち1間半×3間の部屋が並んでいたことになる。

本建物跡に伴う遺物は出土しなかった。

・SB3（第37図）

本建物跡は調査区中央部の南半部に位置する。西側でSD9と、北東角でSD6と接し、東側でSD3と切り合っている。SD3とは切り合い関係から本建物跡が後からつくられている。溝状遺構の項で前述したが、SD5はSD1の延長であり、なおかつSD6はSD5の延長であり、その石組みの抜き取り痕であるが、これが本建物跡の北東角へ接していることから、SD1、SD5、SD6と本建物跡は本来一体のものであったと考えられる。本建物跡は南側へさらに調査区外へ続いているが、現状で南北桁行方向に13.5m、東西梁行方向に6mを確認した。本建物跡は南北2つの部分から成り立っている。北半部には北面と東面に石組の溝が廻っている。長さは北面は415cm、東面は330cmで幅は北面が30cm、東面で25cmである。北面の溝は暗渠であったと思われるが北側の石組

みは2段積まれているの対して、南面は1段のみで、1段目の上端あたりに石の蓋がされていた。深さは蓋下端から底部まで20cmである。東面の溝は屈曲部から3.4m南東へ延び、そこで立石状の石で塞がれて終わっている。これらの石組み溝の内側25cmから30cmほどに石の詰まった溝が石組み溝に沿うように廻っている。溝は幅60cm、深さ30cmほどで石組の溝と同様鍵形に屈曲する。上部には拳大から一抱えほどの石を隙間無く詰めている。南半部には東側に瓦が直線的に3.4m並んで置かれる。おそらく本来は石組みがあったものと思われる。瓦の幅が36cmであることからおそらく溝の幅も同じであったろう。この瓦列の40cm内側にも幅75～90cmほどの溝が廻っており、北半部と同様に北端で鍵形に西へ折れている。底部には一抱えほどもある石が1～2石埋置され、上部には拳大の河原石を隙間無く詰めている。そしてところどころに上端が1辺50cmの正方形の石が置かれている。また、心車で360cmごとに梁行方向にも溝を掘り2列が確認できる。北側の溝については幅45cm、深さ35cmで、底部に礫を詰め、上部に比較的平らな35cm角ほどの石を配している。

このように本建物跡は南北2つの部分に分かれるが全体として1つの建物であり、周囲の石組溝の切れる部分が入口であったと思われる。本建物跡を廻る溝は前述のように場所によって形状が異なるが建物の周囲の雨落ちの排水溝であると思われる。その内側の石の詰まった溝は建物の基礎と思われる、1辺が50cmの正方形の石が柱の礎石でその間の部分に壁があったものと思われる。ただし、この雨落ち溝及び石の詰まった溝は建物跡の北面と東面にしか巡っていない。前述のように南側部分については調査区外へ続いているため定かではなく、西側部分についてはS D 9と接している。溝状遺構の項で述べたようにS D 9には本来石垣があったと思われ、特に東側の石垣については裏込め状に大量の石が詰められており、なおかつ根石には一抱えもある河原石を2列以上配して根固めをしている。しかし、西側にはこうした裏込めがみられず、根石も径5cm程度の小石を帯状に配するのみである。こうした東西両岸の構造の違いは明らかに上屋構造の違いに由来するものと思われる。すなわち、東岸は上部の建物を支持するため堅固につくられていると考えられる。とすれば本建物跡とS D 9は同時につくられ存在したと考えられ、S D 9の東岸が本建物跡の西側の基礎になっていたと考えてよからう。

本建物跡は全体としてみると心車で360cm、2間間隔で梁行方向に建物の基礎が入っており、これは建物内の部屋の間仕切りの基礎であろうか。そうすると幅360cm、奥行き450cm、すなわち2間×2間半の部屋が並んでいたことになる。

本遺構に伴う出土遺物は東面の雨落ち溝の石組の石の抜取り穴から近代の型紙刷りが出土しているが、前述のように本建物跡はS B 4及びS D 9と同時につくられた可能性が高いためS B 4と同様、明治の初めから昭和にかけての遺構と考えられる。

・ S B 4 （第 3 8 図）

本建物跡は調査区中央部の北半部に位置する。西側でS D 9と接し、東側でS K 13と切り合っており、北側でS K 14～S K 20と重複している。切り合い関係や出土遺物からいずれも本建物跡が後からつくられている。本建物跡は北側へさらに調査区外へ続いているが、現状で南北方向に10.8m、

東西方向に8.3mを確認した。建物跡は東面と南面に石組の溝が廻っている。溝は瓦敷きで東面に9.9m、南面に5.8m伸び、幅30cm、深さは12cm前後である。溝の石組みは1石のみである。瓦敷き溝の石組みのすぐ内側に幅1m程度、深さ60cmの溝が廻っている。溝の底部には一抱えほどもある石が2石ばと埋置され、上部には拳大の河原石を隙間無く詰めている。そして建物跡の南西角部に上端のユ辺が50cmの正方形の石を置きそこから180cm（1間）間隔の場所には同様の石が据えられている。瓦敷き溝は北端が最も高く、次第に高度を減じS X 5に至っている。建物の周囲の雨落ちの排水溝であると思われる。その内側の石の詰まった溝は建物の基礎と思われ、180cm（1間）間隔に配された1辺が50cmの正方形の石が柱の礎石でその間の部分に壁があったものと思われる。ただし、この瓦敷き溝及び石の詰まった溝は建物跡の東面と南面にしか巡っていない。前述のように北側部分については調査区外へ続いているため定かではなく、西側部分についてはS D 9と接している。前述のようにS D 9の東岸は上部の建物を支持するため堅固につくられていると考えられるから、S B 3の場合と同様にS D 9の東岸が本建物跡の西側の基礎になっていたと考えてよからう。すなわち本建物跡とS D 9も同時につくられ存在したと考えられる。また、本建物跡の性格としては、S B 2やS B 3と異なり梁行方向には礎石や基礎などの構造物は一切みられないことから、堀だけが巡るような中空のスペース、つまり倉庫のようなものが想定できよう。

本建物跡の瓦敷き溝の埋め土からは磁器34点、陶器6点、焼締め2点、土師質瓦質土器2点、ガラス製品1点及び金属製のボタン1点が出土した。磁器34点のうち銅版印刷の蓋物が1点、型紙刷りの碗が8点、皿が10点、瓶2点、クローム青磁が2点と近代以降の遺物が23点ある。うち1点は昭和のものであり、本建物跡はその頃まで機能していたものと思われる。

（４）井戸

・ S E 1（第28図）

本井戸は調査区北東部に位置する。S D 2と切り合っており、切り合い関係より本遺構が後からつくられている。建物跡の項で前述したようにS B 1との関係は明確でない。径210cmの円形の掘り方に人頭大ほどの石が詰め込まれた状態で見つかり、これらの石を撤去すると約75cm下がった所に一旦段差がついていた。そこには1辺が90cmで隅を落としたような厚さ23cmほどもある平らな巨石を確認した。この石をチェンブロックを使って撤去するとその下から井戸の掘り方が見えさらに人頭大ほどの石が詰め込まれていた。この石を取り除いていくと上端から125cm下がったところから木製の井戸枠が確認された。井戸枠は腐食が著しくまた十分掘り下げられなかったため構造は明確でなかったが、縦方向に板材を入れているのがわかった。分析の結果、板材はヒノキ属の生木であった。なお深さは190cmまでしか掘り下げなかった。

本井戸内からは磁器2点、陶器4点、土師質瓦質土器1点、瓦11点が出土した。磁器のうち1点は近代の型紙刷りである。なお、丸釘が1本出土したが木片が付着しており、井戸枠を止めるために使用していたものと思われる。出土遺物の数が少ないため井戸のつくられた時期は明確でないが、本井戸に先行するS D 2やS X 2からも型紙刷りの遺物が出土しているから近代以降の遺構である

ことは間違いない。

・ S E 2 (第 1 7 図)

本井戸は調査区西端の中央部に位置する。南側で S K 35 と、西側で S K 36 とそれぞれ切り合っており、S X 10 の下層にある。切り合い関係から本井戸が S K 35、S K 36 より後につくられている。井戸内は拳大から人頭大の石で埋められており、周囲には径140cmの範囲で掘り方が確認された。上から徐々に石を取り除いていったが上部には井戸枠が遺存しておらず、80cmくらい掘り進んだところで木枠を確認した。埋め石があったことからその場所までは少なくとも井戸であったことは確実で、井戸の上部には枠がなかった可能性が高い。井戸は径60cmでヒノキ属の生木の板材を縦方向に使用し井戸枠としていた。遺存状態が悪かったことと崩落の危険があったため深く掘り下げなかったことからそれ以上の構造はよくわからなかった。

本井戸の掘り方及び埋め石の中からは陶磁器・焼締めが90点余り、土師質瓦質土器・瓦が20点ほど出土した。新しいものは18世紀後半から19世紀初めにかけての筒型碗、広東碗の蓋、高台内に銘のある山内町筒江窯の皿、関西系の土瓶などが出土した。本井戸に先行する S K 35 の遺物が18世紀後半まで、S K 36 の遺物が18世紀前半までであるから、本井戸がつくられたのは18世紀後半と思われる、廃絶したのは19世紀初め頃と思われる。

・ S E 3 (第 3 9 図)

本井戸は調査区西端の中央部に位置する。井戸内は人頭大から一抱えほどある石で埋められており、周囲には径170cmの範囲で掘り方が確認された。井戸は径70cmで漆喰で枠がつくられていた。漆喰の枠には28cmおきに継ぎ目が見られ、掘り方の範囲で一旦井戸を掘り下げたのち漆喰で円柱状につくった枠を下から順に積みながら掘り方を埋めていったものと考えられる。なお深さは1m程度までしか掘り下げなかった。

本井戸の掘り方の埋め土からは陶磁器・土器類が22点出土した。一番新しいものは18世紀末から19世紀初めにかけての碗2点である。本井戸が S E 2 と近接しており、構造的には S E 2 が木枠であるのに対して漆喰枠を使用し明らかに新しい形態を持っていることから、S E 2 の代替としてその廃絶の直後につくられた可能性がある。すなわち前述のように S E 2 の廃絶が19世紀初め頃と考えられることから、その頃につくられた可能性がある。

(5) その他の遺構

・ S X 1 (第 4 0 図)

本遺構は調査区の東部中央に位置する石列である。東側で S D 2 と切り合っており、切り合い関係より本遺構が先行している。S D 2 をまたいで南東方向から北西方向にかけて9.8mあまりが確認されたが、本来の形状は不明である。面は南側を向いてそろっているが土層断面をみると石の前後に掘り方があり、幅115cmほど溝状に掘ってから埋め置いたことがわかる。石は1石のみである。前

面に溝状の遺構は確認できず裏込め状のものもなかったことから、何らかの境界施設等と考えられる。

本遺構に伴うと思われる遺物は出土せず、遺構の時期についてもS D 2以前のものであることしかわからない。

・ S X 2 (第 2 8 図)

本遺構は調査区東端に位置する石組みの枡状遺構である。西側でS D 2と接し、S B 1-P 3と切り合っている。切り合い関係からS B 1-P 3より本遺構が先行している。本遺構はその位置や形状からS D 2に付属する施設であることは間違いなく、おそらく同時につくられ使用されていたものと思われる。形状及び規模は上端の内法は1辺が120cm×150cmの長方形で、底部内法も同様である。本遺構は規模に大小はあるものの45cm×25cm×30cmほどのレンガ状の切り石を積み上げてつくられており、底部にも大きさはまちまちであるが上面が平らな石を敷き並べている。S D 2に接する西面の北部分の天端の石が積まれておらず、S D 2に対しての通水口になっている。本遺構の位置が調査範囲の一番東端にあたることから、本遺構の東側の状況が明らかでなく、本遺構への流入経路は不明である。この枡の性格については、S D 2に対しての通水口が枡の上部についていることから汚水の浄化枡のような意味合いが考えられる。また、通水口のレベルまでは当然水は溜まっていたはずであるから、あるいは貯水槽のようなもので、洗い物等に供されていたのかもしれない。

本遺構からの出土遺物は磁器10点、陶器5点、焼締め2点、土師質瓦質土器11点、瓦3点である。磁器には近代の型紙刷りの碗が含まれており、本遺構もその頃のものと思われる。

・ S X 3 (第 5 図, 第 3 0 図)

本遺構は調査区の北東部に位置する柱穴群である。P 1からP 4はS B 1とS B 2の間に、P 5はS B 2の南175cmにそれぞれ位置し、P 3はS K 2とP 5はS D 4とそれぞれ切り合っている。切り合い関係からP 3は後からつくられているが、P 5については明確でない。P 1は上端は長径70cm、短径40cmの長円形で、底部も長径5.5cm、短径28cmの長円形である。深さは南部でもっとも深く20cmである。底部に1辺15cmの石が置かれ、その横に径20cmの柱痕が残っていた。P 1からは土師質瓦質土器3点が出土した。P 2は上端は長径58cm、短径36cmの長円形で、底部は径27cmの円形である。深さは中央部でもっとも深く26cmである。径14cmの柱痕が半円状に残っていた。P 3は上端は長径70cm、短径35cmの長円形で、底部も長径50cm、短径20cmの長円形である。深さは中央部でもっとも深く20cmである。底部に一辺16cmの石が置かれ、その横に径17cmの柱痕が残っていた。P 4は上端は長径48cm、短径40cmの長円形で、底部も長径35cm、短径26cmの長円形である。底部は全体に平らで深さは20cmである。底部に一辺20cmの石が置かれているが、柱痕は残っていなかった。P 5は上端は長径55cm、短径35cmの長円形で、底部も長径50cm、短径25cmの長円形である。深さは西部でもっとも深く12cmである。底部に一辺15cmの三角形の石が置かれ、その横に径14cmの柱痕が残

っていた。柱穴間の間隔はP 1－P 2, P 2－P 3が心心で180cm, P 1－P 4が170cmである。これらの柱穴群は構造が同じであることや位置が近いこと、一部直線上に並んでいるものもあるため同一の構造物の柱穴である可能性がある。しかしその性格については明らかでない。なお、分析の

結果P 3の柱痕はヒノキ属の生木であった。他の柱痕も同様であると思われる。

・ S X 4（第 9 図）

本遺構は調査区のほぼ中央部の北よりに位置する不明遺構である。北側でS K 9と切り合っている。切り合い関係は明確でなかったが、出土遺物より本遺構が後からつくられている。長さ5m, 幅最大280cm, 深さ25cmほどの不定型な溝状の窪みに、拳大の碎石が詰まっていた。東側はS B 2と接していて、S B 2の西側の基礎石列と本遺構の碎石群が混ざり合うような出土状況であった。

本遺構の性格であるが不整形であることや深さも全体に浅いことから、ゴミ穴等の遺構とは考えにくい。何かの原因でできた窪地を整地し均すために碎石が入れられた可能性が考えられる。ではその整地がなされた時期についてであるが、碎石群の中から出土した遺物の中に近代の型紙刷りのものが入っていることから近代以降に行われたものであることは間違いない。

本遺構からは数十点の陶磁器等の遺物が出土したが、前述のように整地に伴って混入したものであると思われるため詳しく報告はしない。

・ S X 5（第 4 2 図）

本遺構は調査区中央部やや面よりに位置する石組の枡状遺構である。南をS B 3, 北をS B 4, 西をS D 9に接しており、3者に囲まれた位置にある。建物跡の項で前述したようにこの3者は同時につくられ機能していたと考えられ、本遺構もこれらの3者に付随する施設で一体のものであることは間違いなからう。形状及び規模は内法が上端、底部とも150cm×105cmの長方形である。本遺構は規模に大小はあるが40cm×25cm×30cmほどの角柱状に切り出された石が、南面と東面の一部には1段、他の部分には2段それぞれ積み上げられていた。しかし、1段の部分は後ろの土の部分が露出しており、おそらく全体に2段積みまれているものが一部抜き取られた状態を示していると思われる。底部には石は敷かれていなかった。また、S D 9に接する西面の2段目の石が一つ、上にずらされており、S D 9に対しての通水口になっている。S B 3の北面を廻る暗渠が本遺構の南東隅で開口していたと思われ、またS B 4の瓦敷き雨落ち溝も本遺構の北東隅に接続していた。本遺構の底部の北東部分には65cm×35cm×32cmの下部をアーチ状に切り抜いた切り石が転落していたが、出土状況や規模から判断してS B 3に伴う暗渠の開口部の石ではないかと思われる。本遺構の性格については、2軒の建物跡の雨落ち溝が注いでいることや、通水口が枡の上部についていることから排水の浄化枡のような意味合いが考えられる。また、通水口のレベルまでは当然水は溜まっていたはずであるから、あるいは貯水槽のようなもので、S X 2同様洗い物等に供されていたのかもしれない。

本遺構からの出土遺物は磁器18点、陶器2点、焼締め2点、銭貨1点、ガラス製品1点である。

磁器 18 点のうち近代の型紙刷りの碗が 4 点、皿が S X 5 - 1, 2 をはじめ 9 点、銅版印刷の碗 1 点である。銭貨は明治 26 年の青銅製 5 銭硬貨である。また、S B 4 の瓦敷き雨落ち溝と本遺構が接合する箇所にレンガの細片が 15 点埋められていた。長さのわかるものはなかったが、すべて幅 10.5 cm、厚さ 5.5 cm であり、いずれも大正 14 年にレンガの J E S 規格ができる前のものである。明治 30 年代前後からレンガ造りの本格的な展開がなされレンガも大量生産の時代を迎える。⁹⁾ 本遺物も平の部分にワイヤーカットの痕跡が見られることから明治 30～40 年代の大量生産の時代のものである。そのレンガは明らかに再利用されたものであるから、本遺構もそれ以後にも機能していたことになる。

・ S X 6 (第 1 4 図)

本遺構は調査区の南西部に位置する埋甕遺構である。口径 32.4 cm、器高 27.2 cm、底径 14.1 cm の瓦質の甕を口縁部を下にして埋置してあった。底部には河原石がはまり込んで割れており、もともと底部が割れていたのか、廃棄する際に石を投げ込んで割ったのかは判然としない。また、本遺構の周辺には粘質土が張られており、甕も口縁部はそこに埋められていた。さらに掘り方が確認できなかったことから、床張りと甕を埋める作業は同時に行われたものであろう。粘質土がわざわざ本遺構の周囲にのみ張られていたことから、本遺構は何らかの水周りの施設と考えられる。名古屋城跡の類例¹⁰⁾では「甕を伴う土坑」には「口縁を上に向けた状態」のものと「口縁を下に向けた状態」のものがあり、後者は甕の内面に「付着物はみられなく、汚水等を一時蓄え、地面に吸収させるための汚水処理用の施設の一部」であると報告されており、また、これらは底部が打ち欠かれている。こうした施設は「断続的に少量の汚水を出す、『手水鉢』等と組み合わせられ設置された」とされている。これを受けて広島城遺跡県庁前地点で出土した埋甕遺構もこうした施設と報告されている。県庁前地点で出土したものは土師質であり、本遺構の瓦質のものとは胎土は異なっているが、器形は類似しており、同様の施設と判断してよかろう。もしこうした考えが正しいなら、甕の底部はもとも打ち欠かれて無かったことになる。

なお、本遺構に伴うと思われる遺物は出土しなかったため、遺構の時期については明らかでない。

・ S X 7 (第 1 4 図)

本遺構は調査区の南西部、S X 6 の西 240 cm に位置する埋甕遺構である。肥前の甕を口縁部を上にして埋置してあったが甕自体は東半分しか遺存しておらず、規模等は明確でないが、現状で底部 13.6 cm、高さ 23.0 cm であった。周囲が砂地だったためか掘り方は確認できず、おそらく甕大の穴を掘りそこに埋置したものであろう。県庁前地点で出土した甕や S X 6 は土師質瓦質土器であったが本遺構では陶器が用いられている点が異なっているものの、性格は類似したものが考えられよう。

なお、本遺構に伴うと思われる遺物は出土しなかったが、本遺構に使用されている甕は 17 世紀後半から 18 世紀の肥前のものであり、遺構もこの頃のものであろう。

・ S X 8 (第 1 6 図)

本遺構は調査区の面よりに位置する石組遺構である。北東部で S K 34 と切り合っており、切り合い関係より本遺構が先行する。東西 320cm, 南北 210cm の長方形の掘り方の縁辺に石を積み並べている。石積みは最大でも 2 石分しか遺存していなかった。東側が比較的残りがよい。石積みの内法は上端で東西 240cm, 南北 130cm の長方形, 底部では東西 230cm, 南北 120cm の長方形である。本遺跡で出土した近世の石組み遺構の中では最もしっかりした構造であり, 断ち割って土層断面を確認したところ床面の下は自然堆積層でこれより下に遺構面はなかった。地下室のような遺構かとも考えられるが, 遺構の床面に薄くではあるが粘土層が確認されたことや, 他都市の例川などから水溜めのような施設の可能性もある。

断ち割りトレンチ内の石組み根石の直下から S X 8-1 が出土した。1630～70 年代の伊万里の青磁の鉢であった。また, 遺構の埋め土の中からは 70 点余りの陶磁器と数点の土器が出土した。S X 8-10 は焼塩壺の蓋で内側に明瞭な網目痕がある。S X 8-11 は薬研と思われる, 中央に四角い穴があく。石製に似せるためか表面には灰泥が塗られているが土製である。出土遺物のうち最も新しいものは S X 8-2 の中国・清代の色絵の小坏で, 18 世紀後半から 19 世紀前半のものである。また, 1780～1810 年代の端反碗の前の段階の碗も数点出土している。さらに本土坑より後につくられた S K 34 から出土した最も新しい遺物が 18 世紀末から 19 世紀初めのものであった。これらを考え合わせると本遺構の廃絶時期も 1800 年前後と考えられよう。

・ S X 9 (第 2 5 図)

本遺構は調査区の北西隅部に位置する柱穴群である。P 4 は S D 13 の下層にある。P 1 は上端は長径 42cm, 短径 36cm の長円形で, 底部も長径 32cm, 短径 25cm の長円形である。底部は平らで深さは全体的に 30cm であり, 中央部に 20cm 角ほどの石が埋置されていた。石の天端は T. P. 192cm である。P 1 からは陶器 2 点, 土師質瓦黄土器 1 点, 瓦 1 点が出土した。陶器はいずれも 17 世紀前半のもので 1 点は砂目の唐津の皿である。P 2 は上端は長辺 60cm, 短辺 50cm の隅丸長方形で, 底部は径 35cm の円形である。底部は平らで深さは全体的に 58cm であり, 中央部に 20cm 角ほどの石が埋置されていた。石の天端は T. P. 192cm である。P 2 からは遺物は出土しなかった。P 3 は上端は長径 56cm, 短径 50cm の長円形で, 底部は径 35cm の円形である。底部は平らで深さは全体的に 60cm で, T. P. 176cm である。P 3 からは磁器 1 点, 陶器 5 点, 土師質瓦質土器 6 点, 瓦 15 点, 銭貨 1 点が出土した。陶磁器のうち生産年代の明らかな 3 点はいずれも 17 世紀代のものである。土師質瓦質土器には焼塩壺が 2 点含まれている。銭貨は永楽通宝である。いわゆる天正永楽で天正かち慶長期に鑄造されたものであろう。P 4 は上端は径 46cm の円形で, 底部も径 36cm の円形である。底部は平らで深さは全体的に 44cm で, T. P. 190cm である。P 4 からは陶器 3 点, 焼締め 1 点, 土師質瓦質土器 10 点が出土した。陶器, 焼締めには 19 世紀代のものが含まれる。

P 1 と P 3 からはいずれも 17 世紀代の遺物が出土しているのに対して P 4 からは 19 世紀代の遺物が出土している。P 1－P 2 は心いで 160cm, P 2－P 3 は同じく 130cm, P 3－P 4 は同じく 100cm

である。P 1, P 2, P 3がセットの可能性はある。しかし、調査区の端であり全体が出土していない可能性や、遺物の量が少ないことから明確ではない。

・ S X 1 0 (第 3 3 図)

本遺構は調査区の西側部分に広く広がる石刻遺構である。北東から南西方向に伸びる部分とそれに接続するように北西から南東方向に伸びる部分がある。前者は調査区外へさらに伸び、後者は南端はS K 32付近で消滅している。さらに伸びていたかどうかは不明である。前者は40cm角ほどの一抱えほどの大きな石や5 c mほどの礫を幅75cm, 15mにわたって敷き並べている。図面ではS D 10の部分まで8m25cmしか描かれないが、現場ではS D 9土から調査区北端まで確認した。後者は5cmほどの礫を幅40cm, 全長12mにわたって敷き並べている。たいへん多くの遺構の上層にあり、これらのすべての遺構よりも後からつくられている。したがって本遺跡で最も新しい遺構のひとつと考えられる。遺構の性格については塀あるいは溝のような構造物の基礎ではないかとも思われる。しかし、本遺構に伴うと思われる他の部分の構造が全くわからないため明確でない。また、交差する部分が直角に交わらないこともその性格をさらに不透明にしている。

本遺構の礫内及び下からは陶磁器・土器類が十数点出土した。陶磁器はいずれも近世のものと思われるが、本遺構よりも先行しているS D 9からは近代の型紙刷りが出土しており、建物跡の項でも前述したように昭和まで機能していた可能性もあることから、本遺構はそれ以降のものである。

・ S X 1 1 (第 4 1 図)

本遺構は調査区の南東隅に位置する不明遺構である。長さ120cm, 幅120cmにわたって確認した。その性格については不明である。また、本遺構に伴う遺物は出土しなかった。

3. 小結

ここでは、本遺跡の遺構のうち10点以上の実測可能な土師質瓦質皿が出土したものについて整理を試みる。

S K 22出土の土師質瓦質皿は口径によって大きく7.7 c m以上とそれ以下に分けられる。S K 22-74は遺存している口縁部から判断して前者のグループに含まれる。7.7 c m以上のグループ(A)は色調、胎土、成形にそれぞれ異なった特徴を持っており細分できない。このグループの特徴としてS K 22-71以外は口縁部にススが大量に付着し、灯明皿として使用されたことが明確である。7.7cm以下のグループはさらに体部が外湾し口径も6cm以上あるグループ(B 1)とそれ以外(B 2)に細分される。Bグループは口縁部の遺存状態が悪いものが多いが、明らかにススの付着はないか又は少なく、Aグループとは異なる使用方法が想定される。ところがS K 22-71のみは口径は大きいもののススが付着せず注目される。なお、図示しえなかった残りの13点のうちAと思われるものが6点、うち口縁部が5点でススの付着するものが2点、Bと思われるものが6点、うち口縁部が2点でススの

	口縁部径	底部径	器 高	体部径状	色 調	糸切り回転	ス ス	口縁部遺存	グループ
SK22-71	8.4	5.5	1.4	直線的	黄褐色	右	なし	2 / 3	A
SK22-72	8.1	5.1	1.6	直線的	橙褐色	右	大量	完形	A
SK22-73	7.7	5.3	1.3	内湾気味	白色	右	大量	完形	A
SK22-74	不明	不明	不明	直線的	灰白色	右	大量	1 / 5	A
SK22-75	5.4	4.1	0.8	内 湾	肌色	右	1 か所	完形	B2
SK22-76	(5.7)	4.6	1.0	内 湾	茶褐色	右	なし	1 / 3	B2
SK22-77	(5.8)	4.5	0.9	内 湾	茶肌色	不明	少量	1 / 2	B2
SK22-78	6.1	4.7	1.0	外 湾	橙褐色	右	なし	1 / 2	B1
SK22-79	(5.3)	4.0	1.0	内 湾	橙茶色	右	なし	1 / 6	B2
SK22-80	(6.7)	(5.1)	0.8	外湾気味	肌色	右	なし	1 / 3	B1

付着するものは1点であった。さらにS K 36出土のCタイプと同種のものが1点あった。

S K 25出土の土師質瓦質皿は口径によって大きく10cm程度以上のグループ(A)と7cm以下のグループ(B)に分けられる。Aグループはさらに12.6cm以上のもの(A1), 11cm前後から11.9cmのもの(A2), 9cmから10cm前後のもの(A3)に細分される。A1はS K 25-5の1点のみである。A2はS K 25-6~12までの7点ある。それぞれは胎土や器形が少しずつ異なっているように見受けられさらに細分できる可能性もある。しかしいずれも色調は白色から灰肌色系で似通っており、何よりいずれの個体にも口縁部には大量のススが付着している。そのためA2は灯明皿として使用されたことが明らかである。A3はS K 25-13と14の2点である。器形はA2に近いがいずれも橙褐色を呈する。1点にはススが付着するが1点には見られない。しかし、いずれも口縁部の遺存率が悪いため、ススが付着している可能性もある。BはS K 25-15~18の4点である。Bは底径が広

	口縁部径	底部径	器 高	体部径状	色 調	糸切り回転	ス ス	口縁部遺存	グループ
SK25-5	12.6	7.7	2.2	内湾気味	黄灰色	右	少量	2 / 3	A1
SK25-6	11.0	5.6	2.2	内湾気味	灰肌色	右	大量	完形	A2
SK25-7	11.3	6.6	1.8	内 湾	灰肌色	右	大量	ほぼ完形	A2
SK25-8	11.3	5.2	2.3	直線的	灰肌色	右	大量	ほぼ完形	A2
SK25-9	10.9	6.0	2.2	内湾気味	灰肌色	右	大量	4 / 5	A2
SK25-10	11.1	7.0	2.3	内 湾	灰肌色	右	大量	1 / 2	A2
SK25-11	(10.9)	(5.9)	1.9	内 湾	灰肌色	右	大量	1 / 3	A2
SK25-12	(11.9)	(7.3)	2.2	内湾気味	黄白色	右	大量	1 / 4	A2
SK25-13	(9.2)	(5.3)	1.9	内 湾	橙褐色	右	少量	1 / 4	A3
SK25-14	(10.1)	(5.7)	1.9	内 湾	橙褐色	右	なし	1 / 4	A3
SK25-15	6.7	5.6	1.0	直線的	黄白色	左	なし	完形	B1
SK25-16	6.5	4.4	1.3	内 湾	橙灰色	右	なし	完形	B2
SK25-17	(7.0)	(5.4)	1.0	直線的	黄茶色	右	なし	1 / 3	B1
SK25-18	(6.6)	(5.5)	0.9	内 湾	明灰色	右	なし	1 / 4	B1

く器高が低い偏平なものと（B 1）、底径が狭く器高が高い（B 2）ものとの細分できる。そしてBはAと対照的に口縁部にススが付着するものがなく、明らかに灯明皿以外の使用方法が想定される。

S K 30出土の土師質瓦質皿の13点の特徴については下表のとおりである。口径が8.0cm以上のグループと6.0cm～7.0cm前後のグループに大きく分けることもできるが、口径が8.0cm以上のグループはS K 30-16と25の2点しかなくそれ以上の共通点はない。そこでここでは器形や胎土から分類してみる。

	口縁部径	底部径	器 高	体部径状	色 調	糸切り回転	ス ス	口縁部遺存	グループ
SK30-16	8.2	5.1	1.5	直線的	橙褐色	右	若干	完形	A1
SK30-17	6.2	4.6	1.0	内湾気味	橙黄色	右	なし	完形	A1
SK30-18	6.1	4.6	1.1	内湾気味	橙灰色	右	若干	完形	A1
SK30-19	6.4	4.2	1.2	内湾気味	肌灰色	右	なし	完形	A2
SK30-20	(6.0)	(3.7)	1.0	内湾肌	灰色	右	なし	1 / 2	A2
SK30-21	6.9	5.6	1.2	内 湾	白色	右	なし	完形	C
SK30-22	6.6	4.5	0.9	内 湾	肌色	右	なし	3 / 4	B
SK30-23	6.9	4.7	1.1	内 湾	黄白色	左	なし	2 / 3	B
SK30-24	(5.9)	(4.2)	0.9	内 湾	濃肌色	右	なし	ほとんどなし	B
SK30-25	(9.7)	(5.6)	1.6	直線的	黄灰色	不明	なし	1 / 3	C
SK30-26	6.5	4.0	1.0	外湾気味	肌灰色	右	なし	2 / 3	A3
SK30-27	6.6	5.0	1.1	直線的	肌灰色	右	なし	6 / 7	A3
SK30-28	(6.3)	(4.8)	1.2	内 湾	濃肌色	右	なし	ほとんどなし	A3

A 類：内面底部の凹凸が大きく、口径に対して器高が高いもの。体部は内湾し口縁端部は丸くおさめる。

A 1：A 類のうち成形が丁寧で上質のもの。口縁部はきれいな円を描き色調はややオレンジ色がかかる。特にS K 30-17, 18は大きさ・器形・成形方法ともに酷似し、出土時には合わせ口状に口縁部が合わされた状態であった。S K 30-16は体部が直線的であるがその他の特徴からこのグループとした。

A 2：A 類のうちA 1と大きさ・器形・成形方法ともに似るが、若干づくりが粗いもの。色調も肌灰色である。

A 3：その他のA 類のもの。色調や基本的な成形方法はA 2に近いがさらに粗製のもの。体部が内湾しないもの（S K 30-26）や口縁端部を尖り気味におさめるもの（S K 30-27）がある。

B 類：内面底部の凹凸が小さく、偏平なもの。

C 類：その他のもの。

これらの土師質の皿はその多くが口縁部にススの付着が見られず、見られるものもほんのわずかであり、長時間灯明皿として使用された痕跡はない。上述のような大きさや成形方法に様々な特徴を持つものが混ざっているのであるが、いずれも灯明皿以外の目的で使用されたことは間違いない。本土坑の特異な形状とも合わせてこれらの土師質皿の使用方法も考えなければなるまい。

S K 36 出土土師質瓦質皿は大きく口径9.0 cm以上のもの（A）、7.0 cm前後のもの（B）、それ以

	口縁部径	底部径	器 高	体部径状	色 調	糸切り回転	ス ス	口縁部遺存	グループ
SK36-37	10.1	6.4	1.8	直線的	灰白色	右	大量	1 / 2	A
SK36-38	13.4	6.4	2.6	内湾気味	灰白色	右	大量	2 / 3	A
SK36-39	10.1	5.5	2.1	内湾	橙灰色	右	少量	1 / 3	A
SK36-40	9.0	4.0	1.8	内湾気味	橙褐色	右	大量	1 / 2	A
SK36-41	(7.0)	(6.1)	1.0	内湾気味	茶肌色	右	なし	1 / 3	B
SK36-42	7.0	6.1	1.0	内湾気味	茶肌色	右	1 か所	完形	B
SK36-43	7.1	6.0	1.1	直線的	茶肌色	右	若干	完形	B
SK36-44	7.1	6.2	1.1	直線的	茶肌色	左	若干	完形	B
SK36-45	6.9	5.7	1.1	直線的	茶肌色	右	若干	完形	B
SK36-46	7.1	5.7	1.1	直線的	茶肌色	右	若干	完形	B
SK36-47	(7.3)	5.6	1.0	直線的の内	茶肌色	右	1 か所	1 / 4	B
SK36-48	7.6	5.9	1.1	内湾気味	茶肌色	右	若干	完形	B
SK36-49	4.7	3.0	1.4	内湾	灰肌色	不明	なし	3 / 4	C

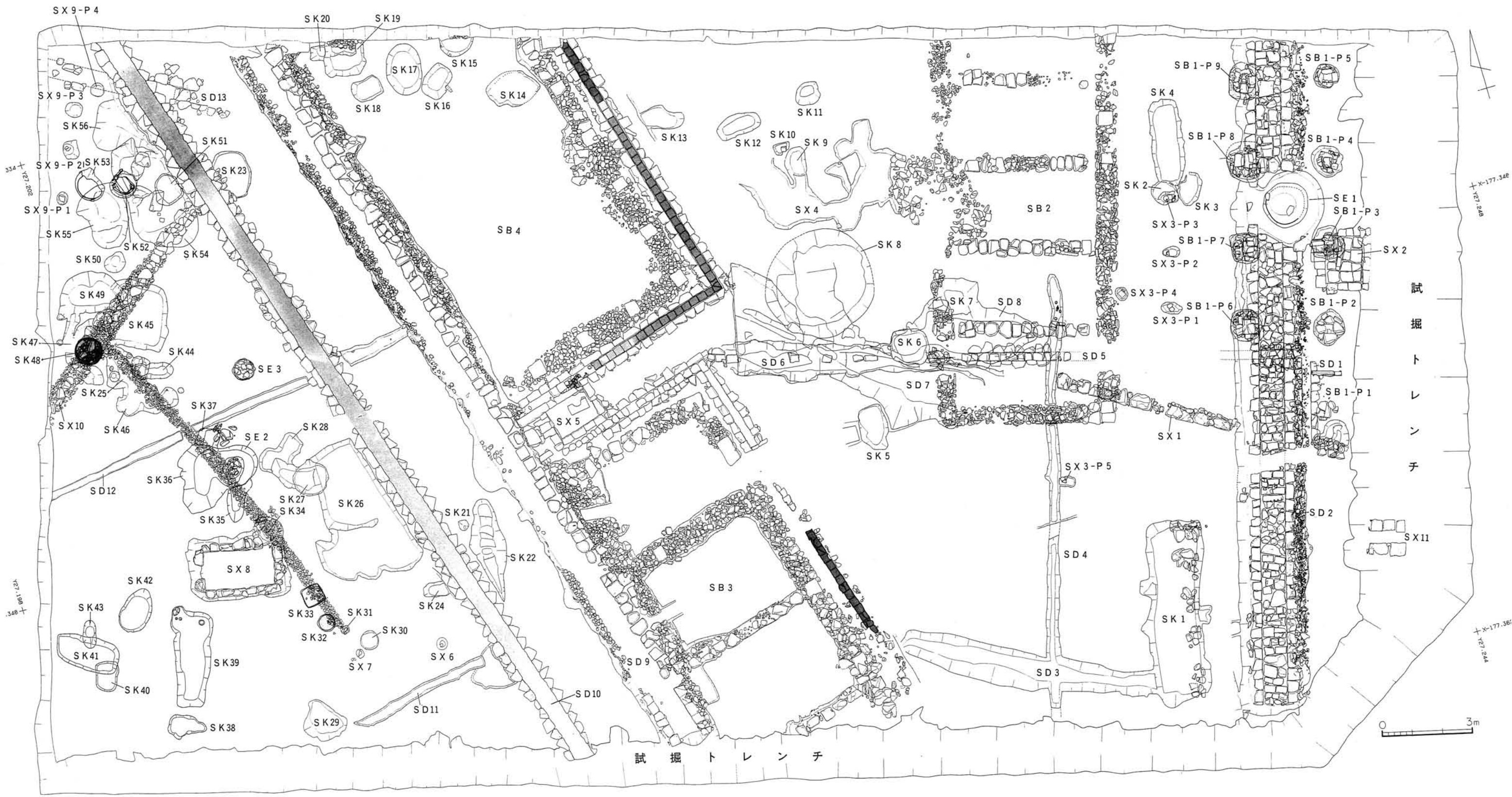
下のもの（C）に分けられる。BはS K 36-41～48の8点である。これらには、色調が似る、胎土に茶褐色の小粘土塊が混入している、ススが余り付着していない（使用方法が同じ）、体部の立ち上がり直線的などの共通点が見られ明らかに同じ産地のものである。ただしS K 36-48のみが若干口径、底径ともに大きい。逆にその他の5点はS K 36-49を除いて、ススが大量に付着していることを除けば類似性に乏しい。特にS K 36-49は器形も大きく異なる上全体に金箔らしきものの痕跡も見られ、その性格は他のものとは異なるであろう。逆にS K 36-39は色調、胎土に茶褐色の小粘土塊が混入していることなどが前者に類似しており、器形は異なるものの同一産地の可能性が高い。いずれにせよ、同一産地のセットと思われる8点と他の5点の間には同じ土師質の皿でありながら完全に使用方法が異なっていることが読み取れる。なお、その他の皿の破片37点のうち、Bと思われるものが26点、色調・胎土が前者と異なり体部が長く立ち上がりのゆるやかなものが9点あったので、Bのセットはもう数枚あったものと思われる。

以上のようにこれらの土師質瓦質皿には遺構に関係なく一定の共通性が見られこのことについては「Ⅳまとめ」の章で述べたい。なお、現在の段階ではこれらの土師質瓦質皿については近世全体として産地、器形、胎土などによる分類は困難であり、各遺構ごとに分類するにとどめた。

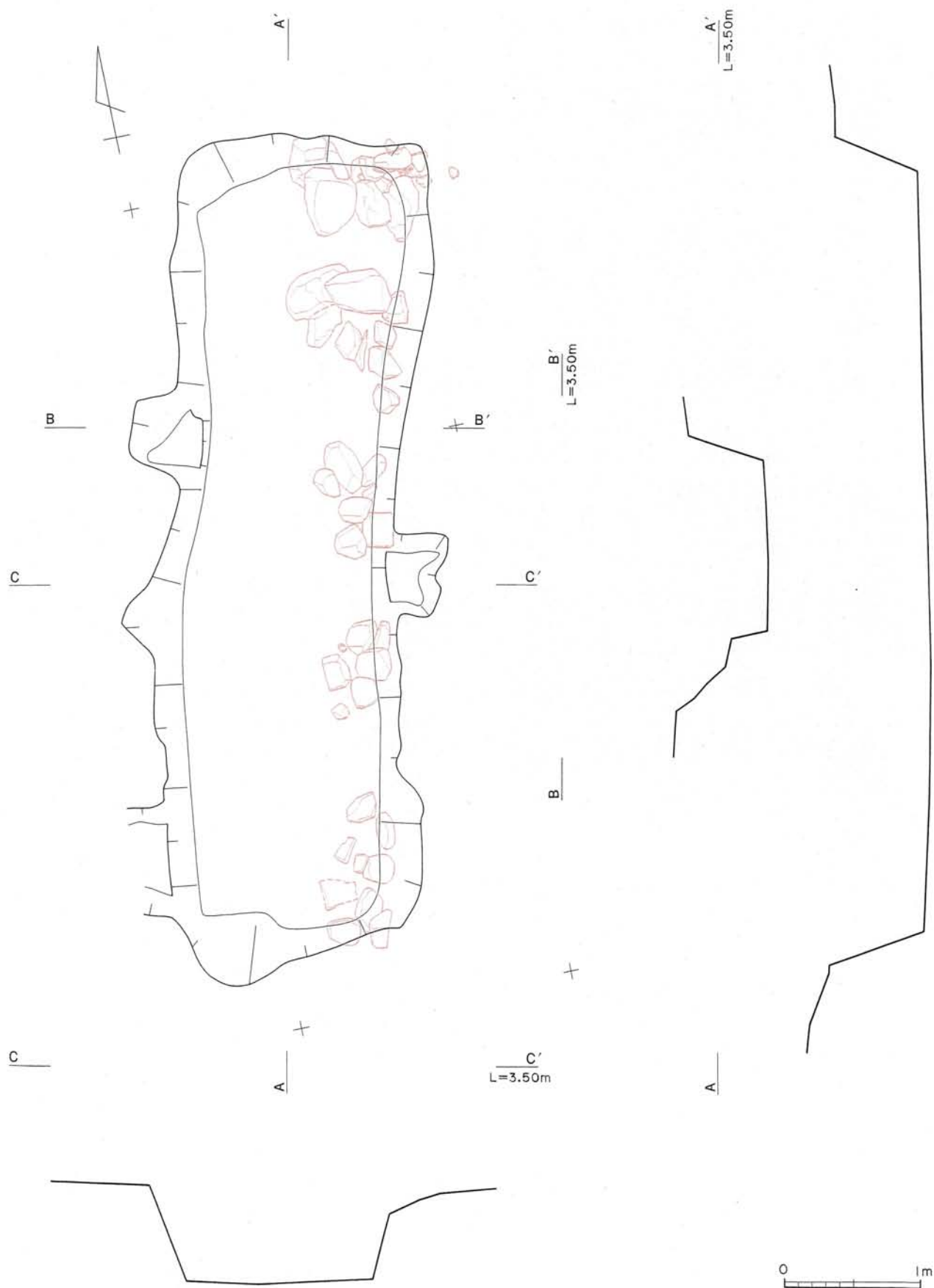
注)

- (1) 堀内秀樹「東京大学本郷構内の遺跡出土陶磁器の編年的考察」『シンポジウム江戸出土陶磁器・土器の諸問題Ⅱ』、江戸陶磁土器研究グループ、1996
- (2) 古泉弘『江戸の考古学』ニュー・サイエンス社、以下キセルの分類・編年はこれによる。
- (3) 財団法人広島市歴史科学教育事業団『広島城県庁前地点発掘調査報告』1994、以下同地点に関する記述はこれによる。
- (4) 永井久美男『近世の出土銭Ⅱ』兵庫埋蔵銭調査会 1998、以下銭貨の分類・編年はこれによる。
- (5) 両角まり「瓦質土師質土器類の分類について」『シンポジウム江戸出土陶磁器・土器の諸問題Ⅱ』、江戸陶磁土器研究グループ、1996

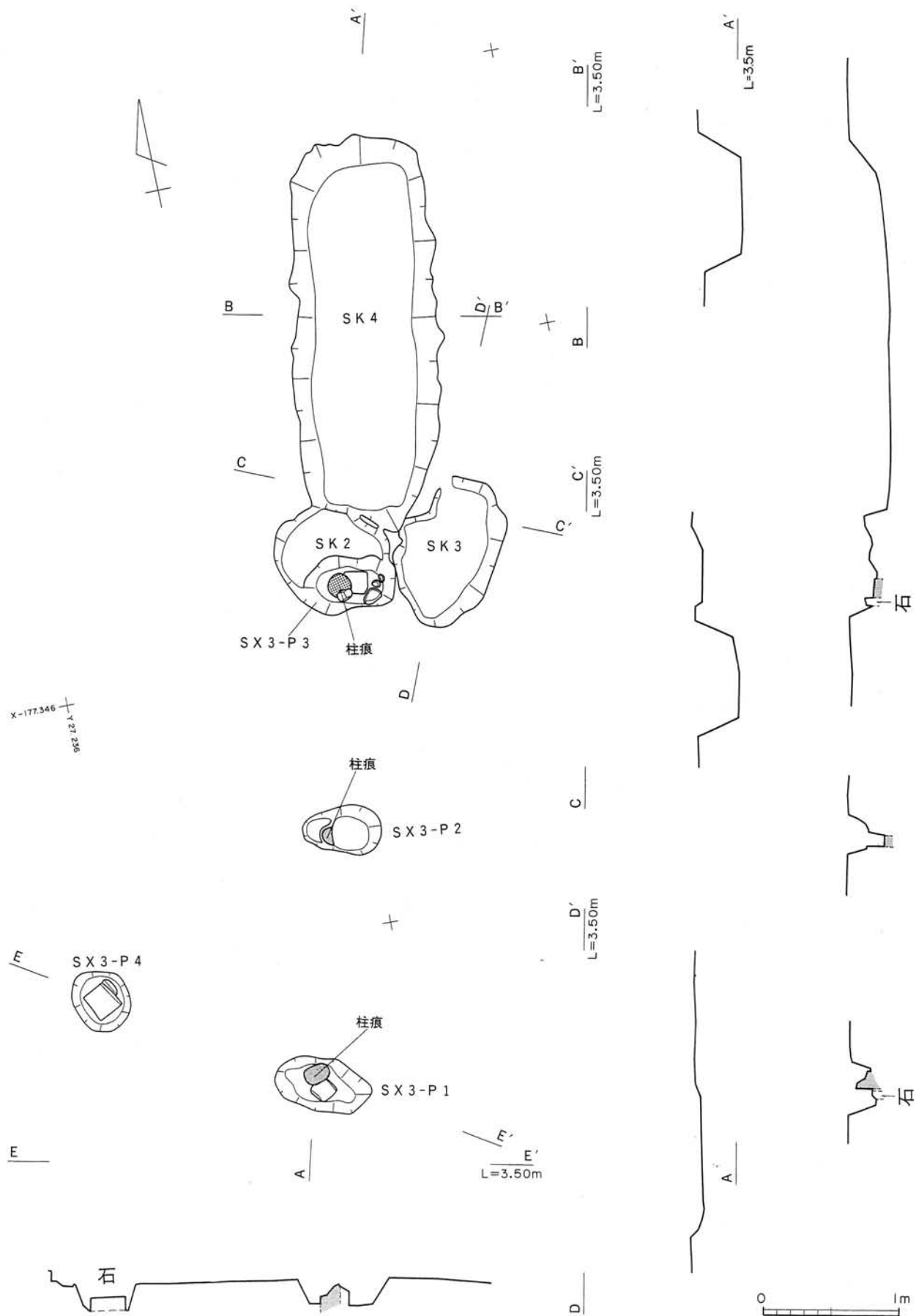
- (6) 君津郡市考古資料刊行会『富津陣屋跡発掘調査報告書』1997
- (7) 両角まり「C1－d－ホ系土師質塩壺類の形式学的検討」『シンポジウム江戸出土陶磁器・土器の諸問題Ⅱ』, 江戸陶磁土器研究グループ, 1996
- (8) 『新修広島市史』付図
- (9) 日本産業遺跡研究会, 文化庁歴史的建造物調査研究会『建物の見方・しらべ方 近代産業遺産』ぎょうせい, 1998
- (10) 愛知県埋蔵文化財センター『名古屋城三の丸遺跡 (Ⅰ)』1990
- (11) 豊田裕章「関西における石積壇の諸問題」『第3回関西近世考古学研究会大会 近世都市の構造発表要旨』関西近世考古学研究会, 1991



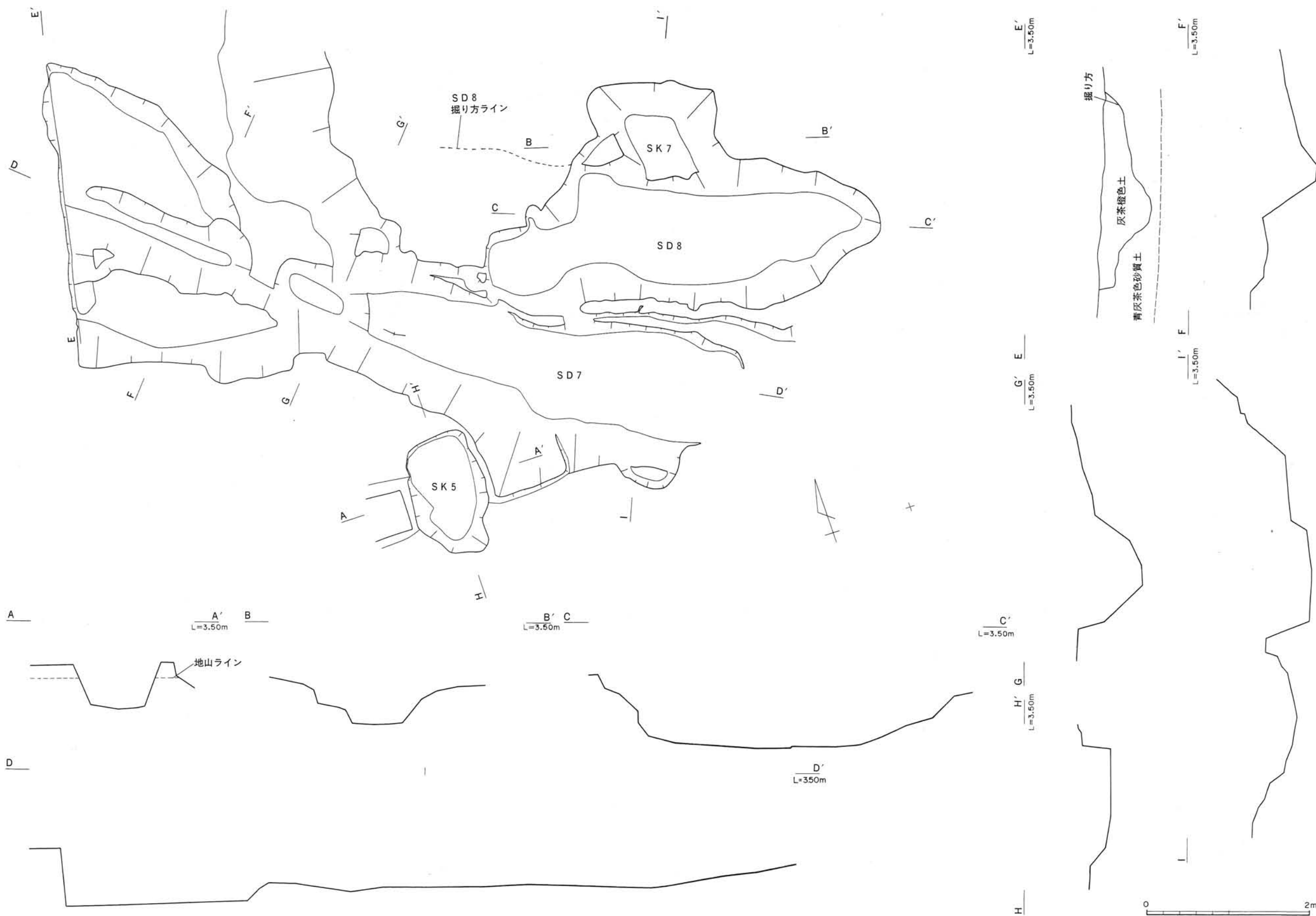
第3図 遺構配置図



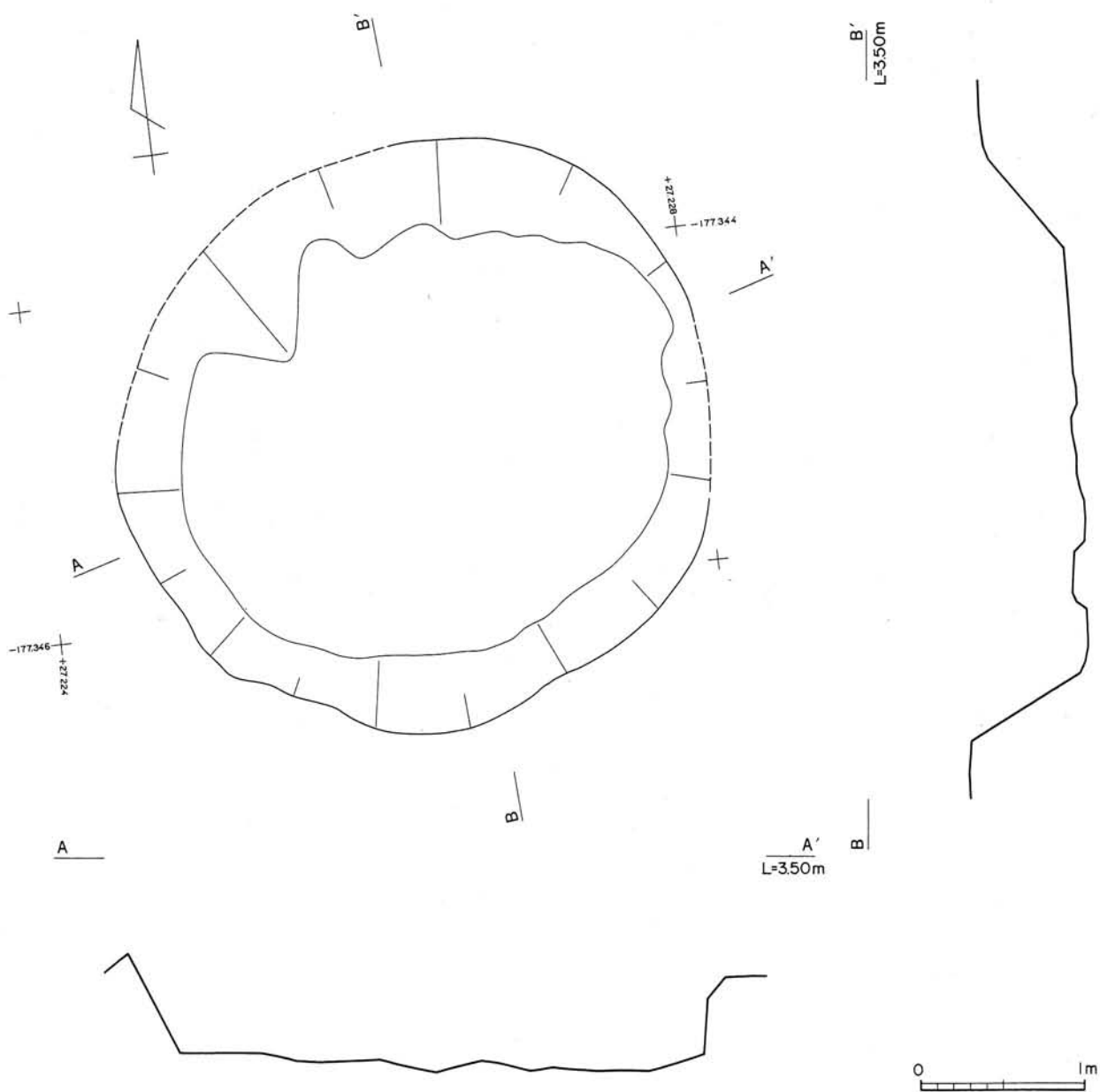
第4図 SK1 実測図



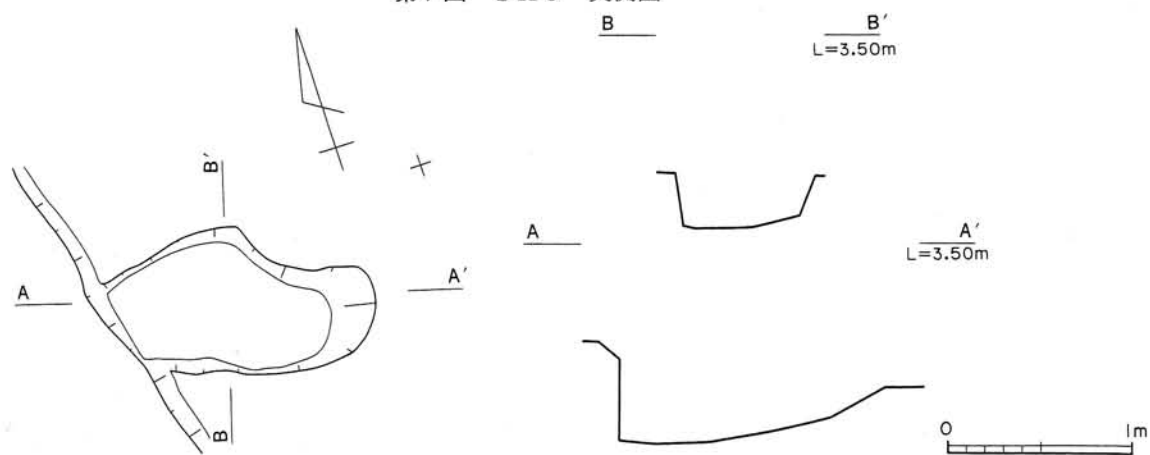
第5図 SK2, SK3, SK4, SX3 実測図



第6図 SK5, SK7, SD7, SD8 実測図



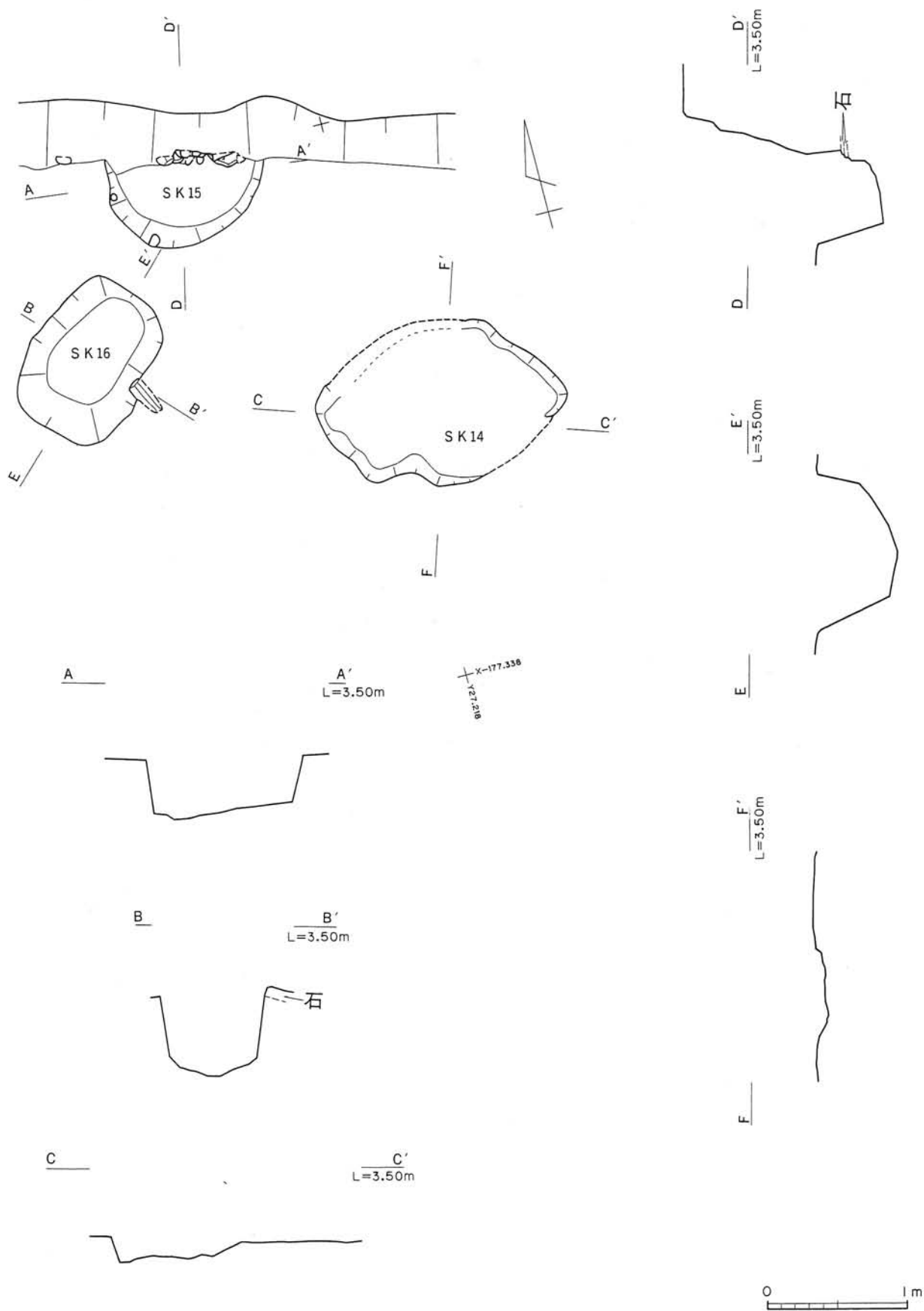
第7図 SK8 実測図



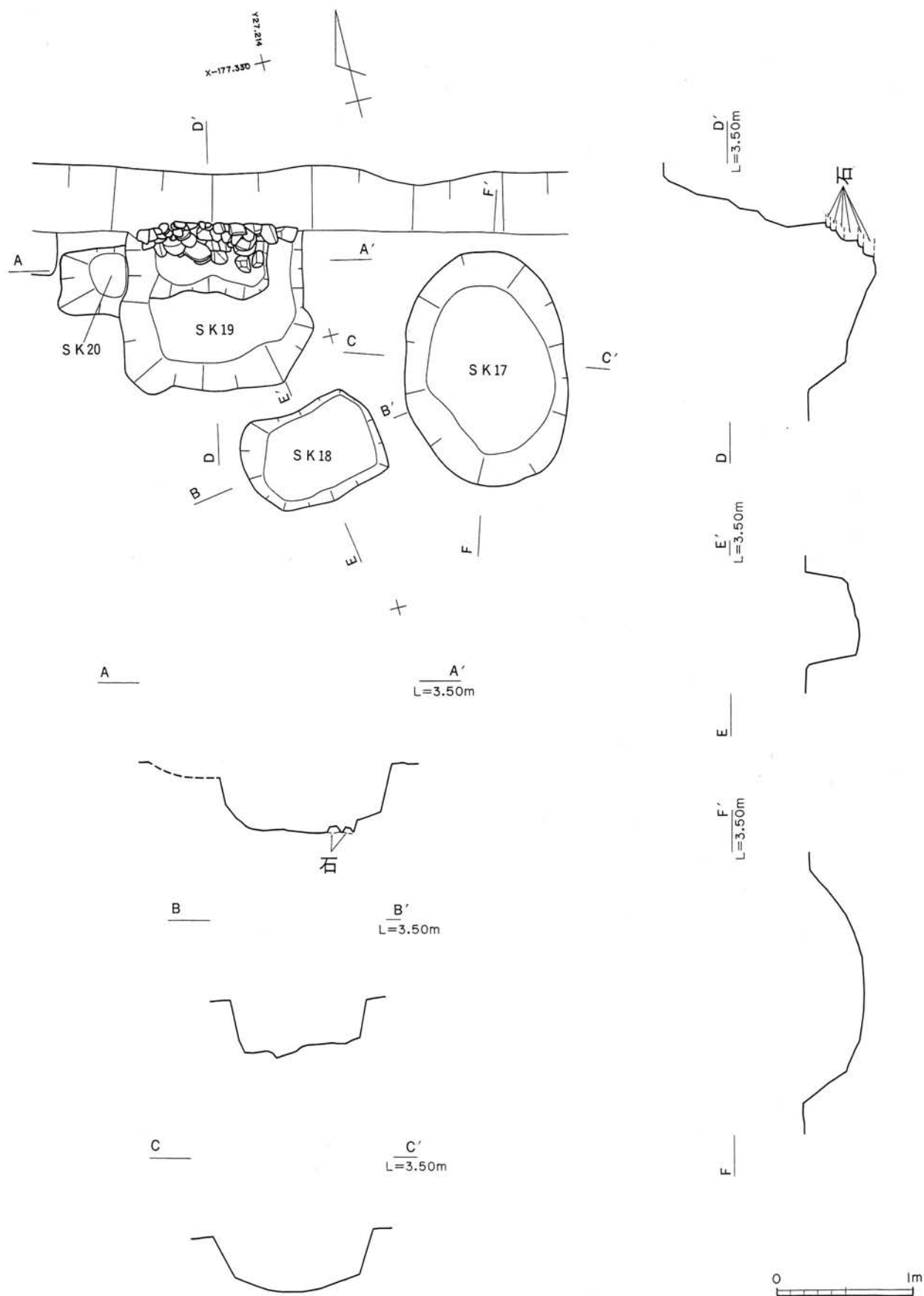
第8図 SK13 実測図



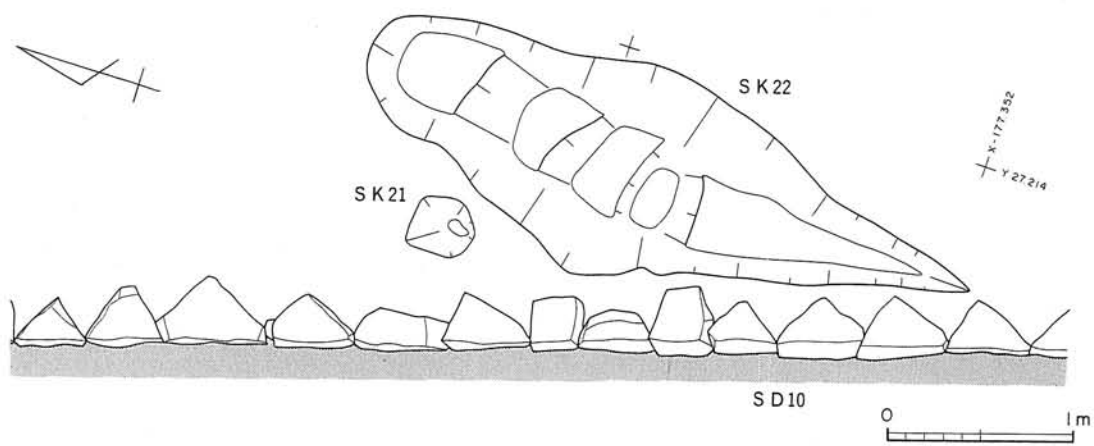
第9図 SK9, SK10, SK11, SK12, SX4 実測図



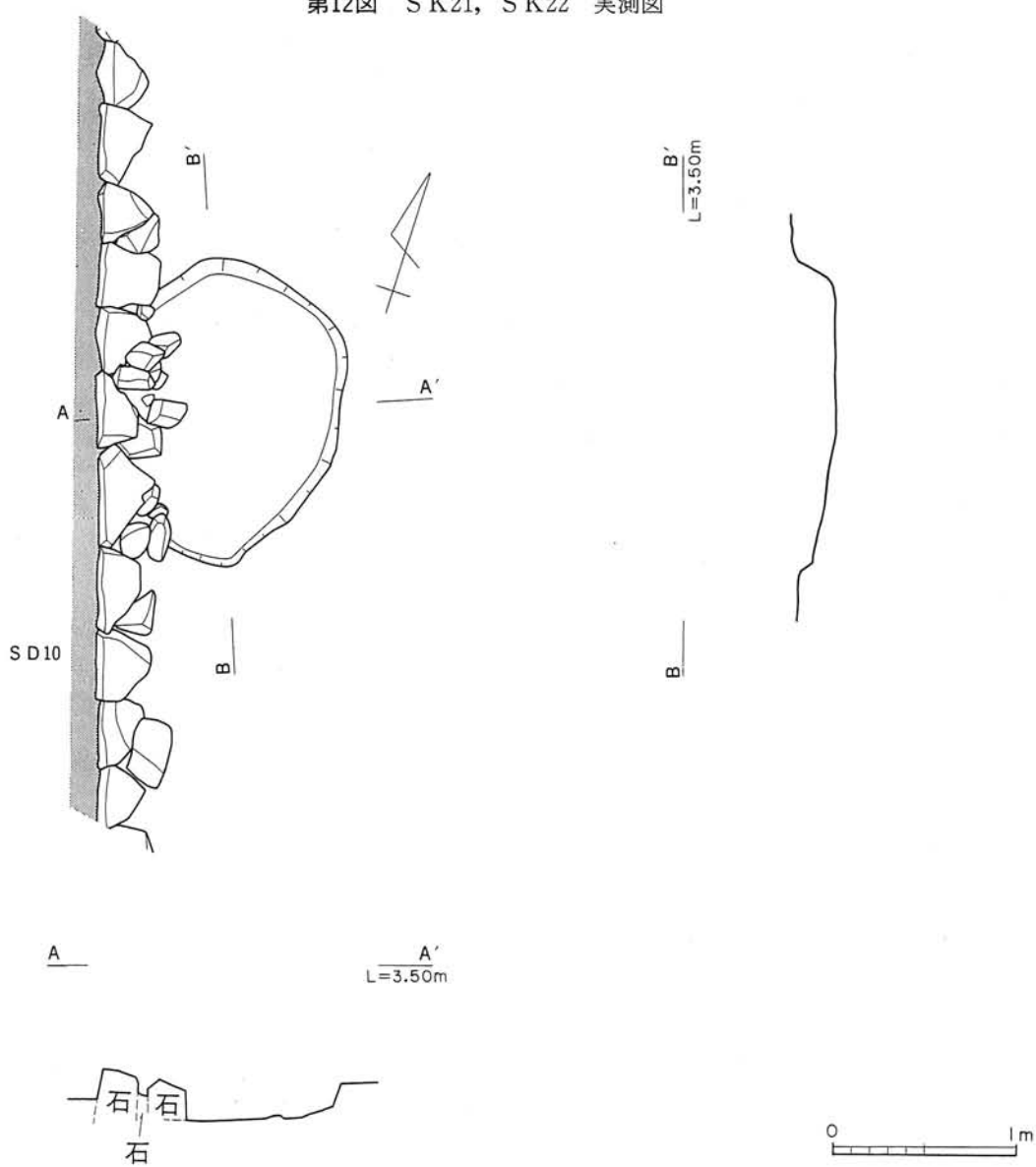
第10図 SK14, SK15, SK16 実測図



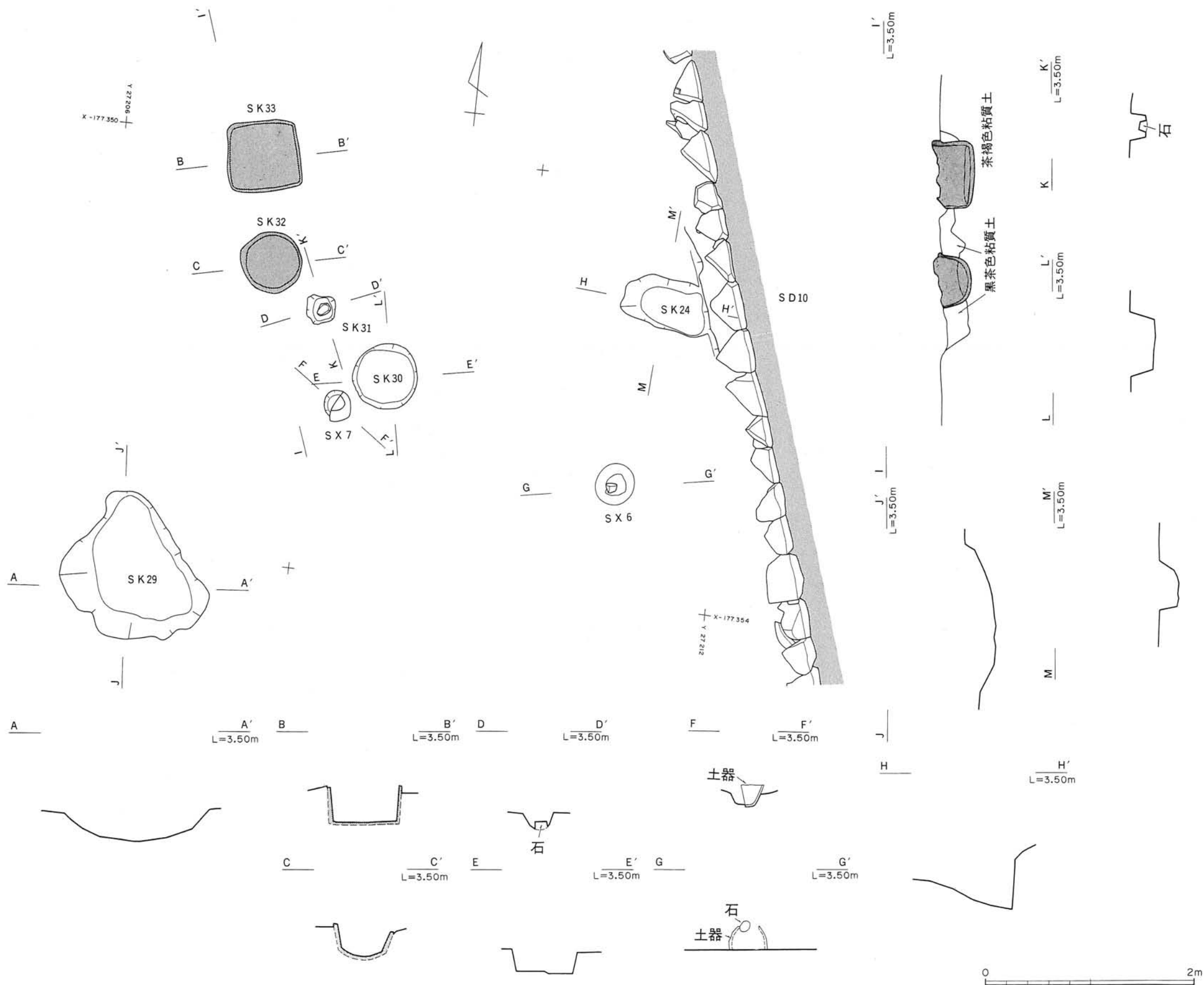
第11図 SK17, SK18, SK19, SK20 実測図



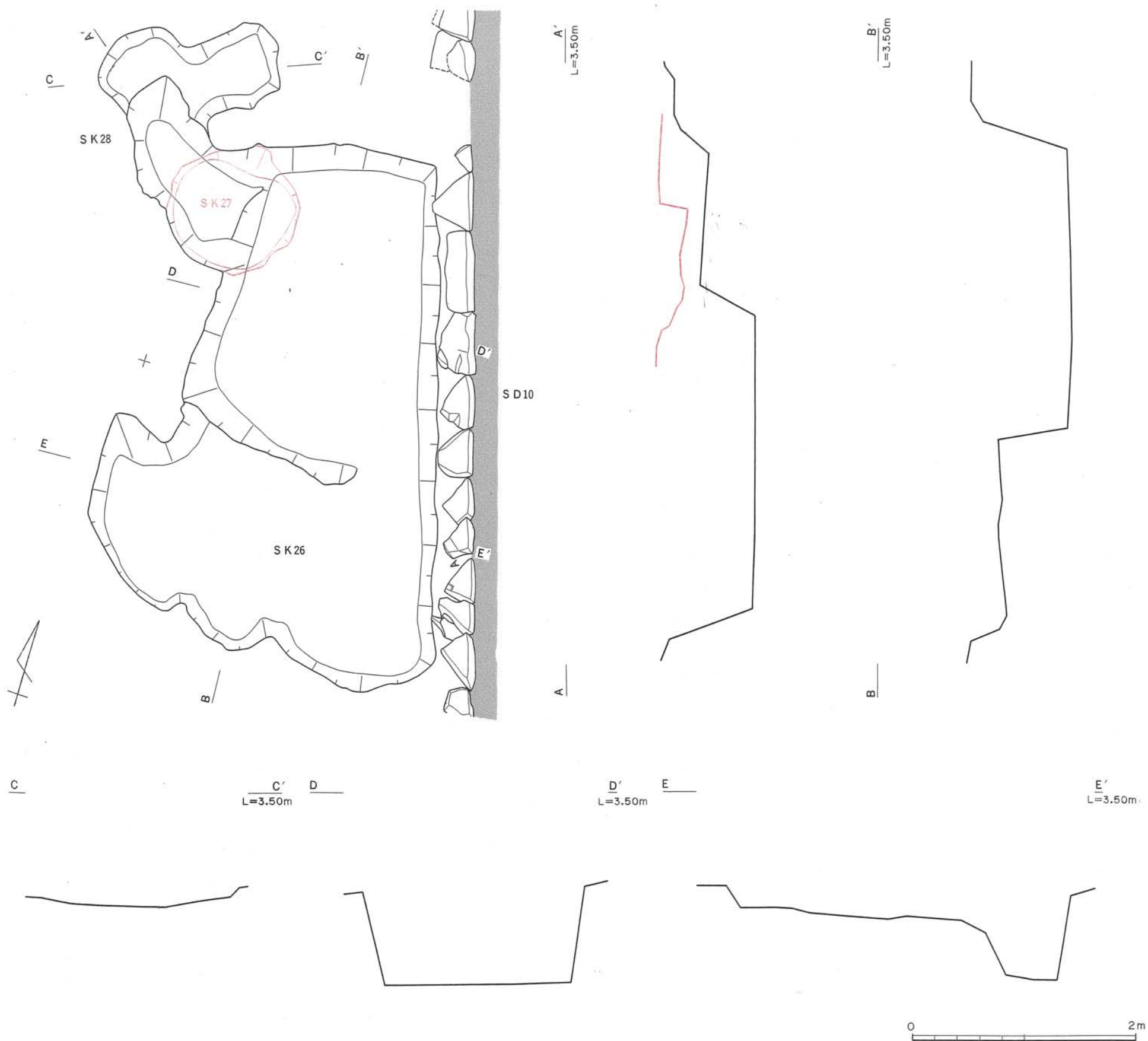
第12図 SK21, SK22 実測図



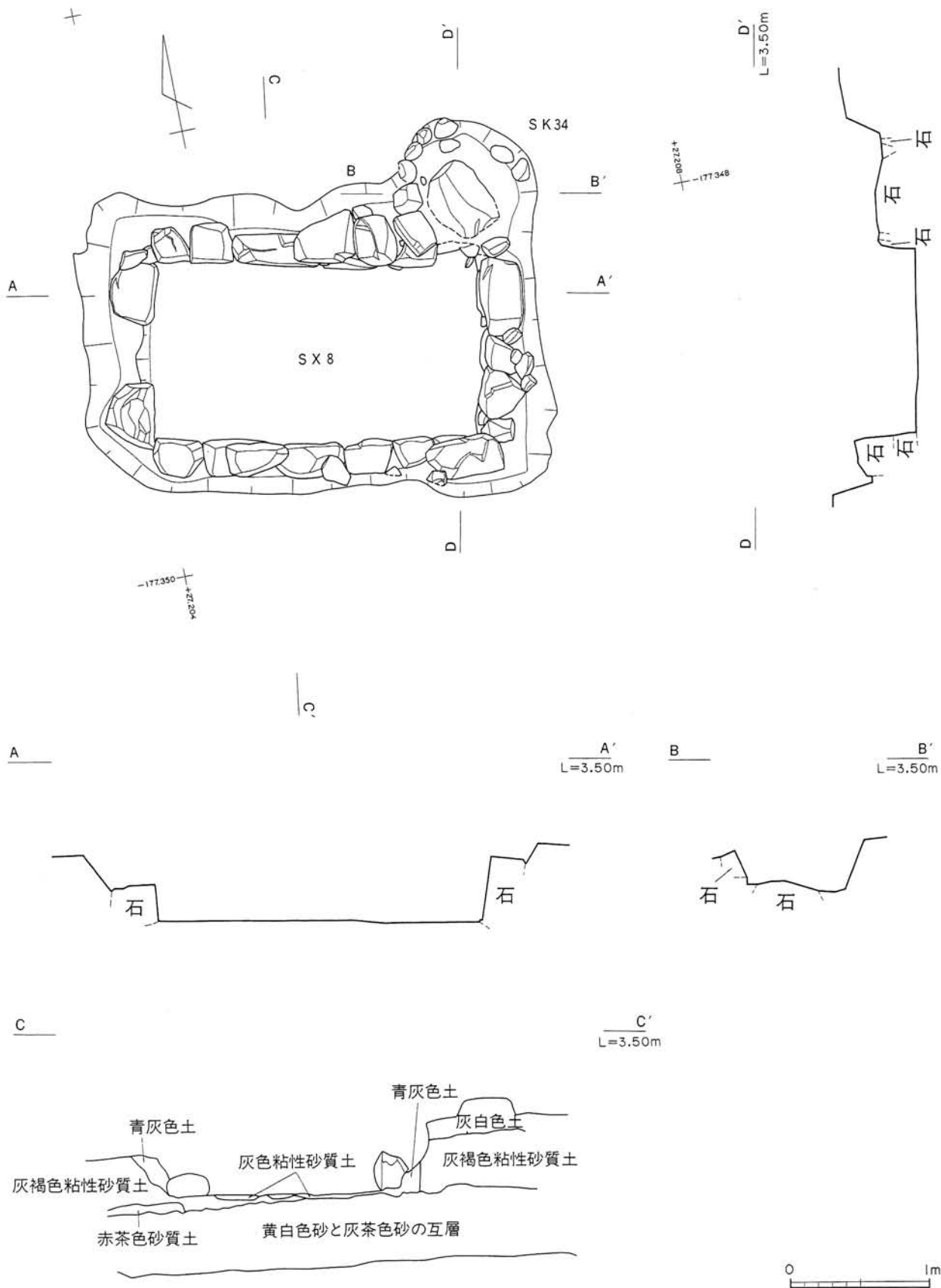
第13図 SK23 実測図



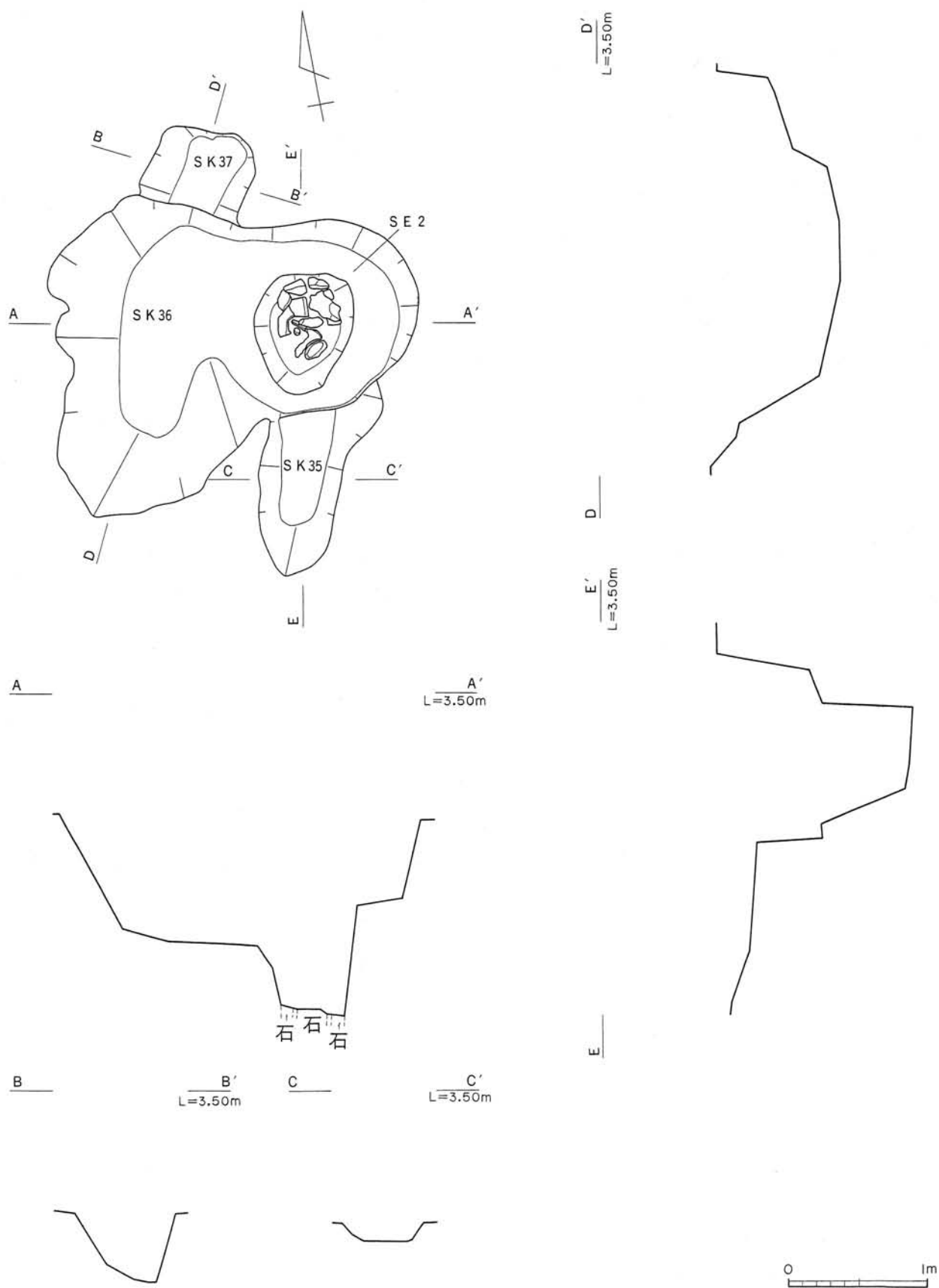
第14図 SK24, SK29, SK30, SK31, SK32, SK33, SX6, SX7 実測図



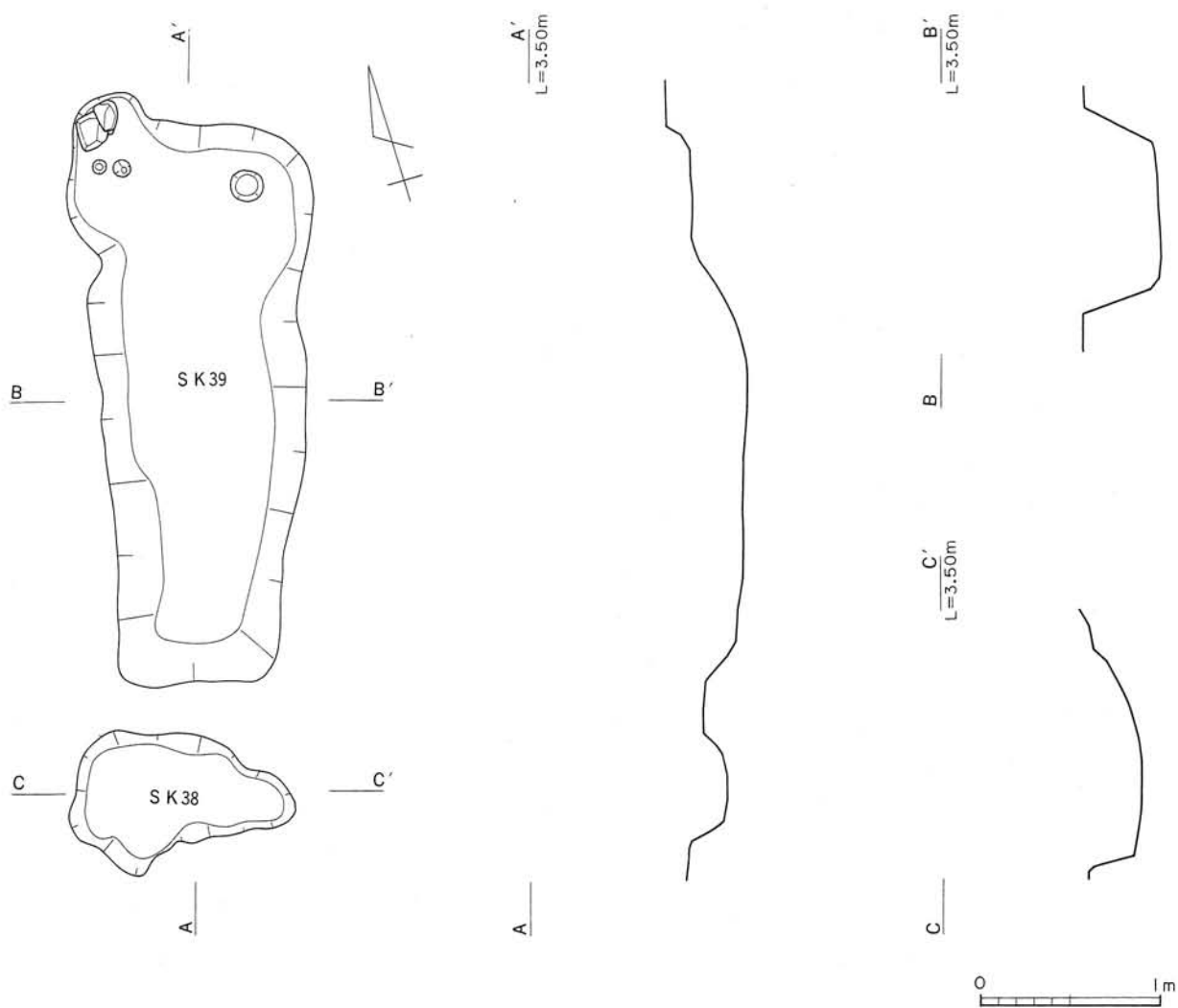
第15図 SK26, SK27, SK28 実測図



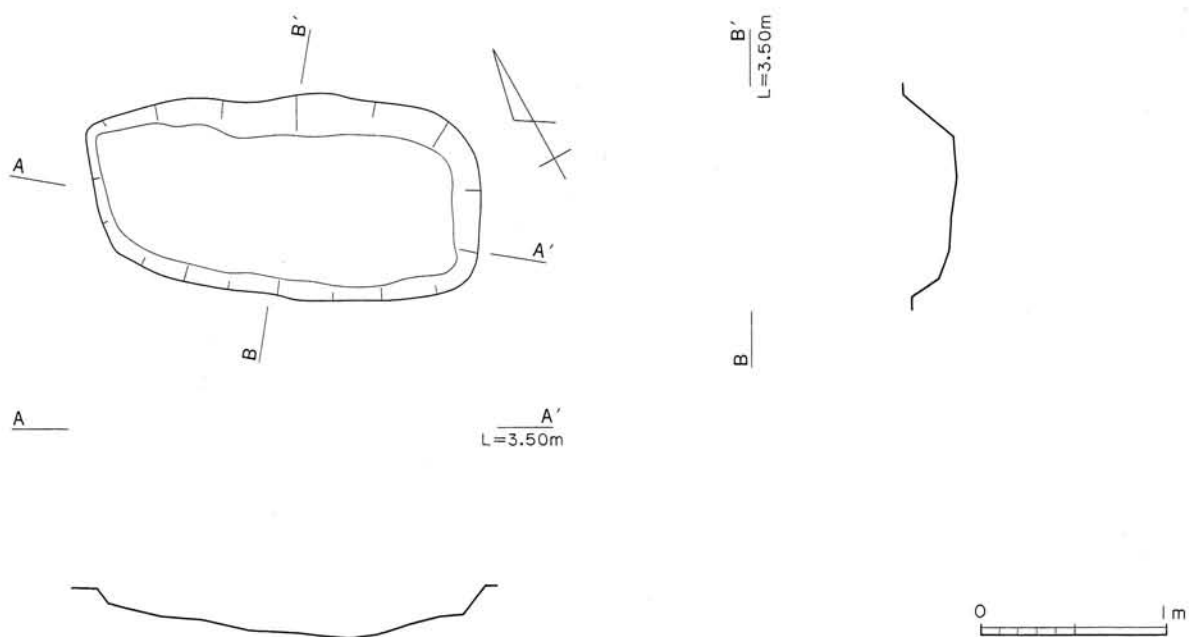
第16図 SK34, SX8 実測図



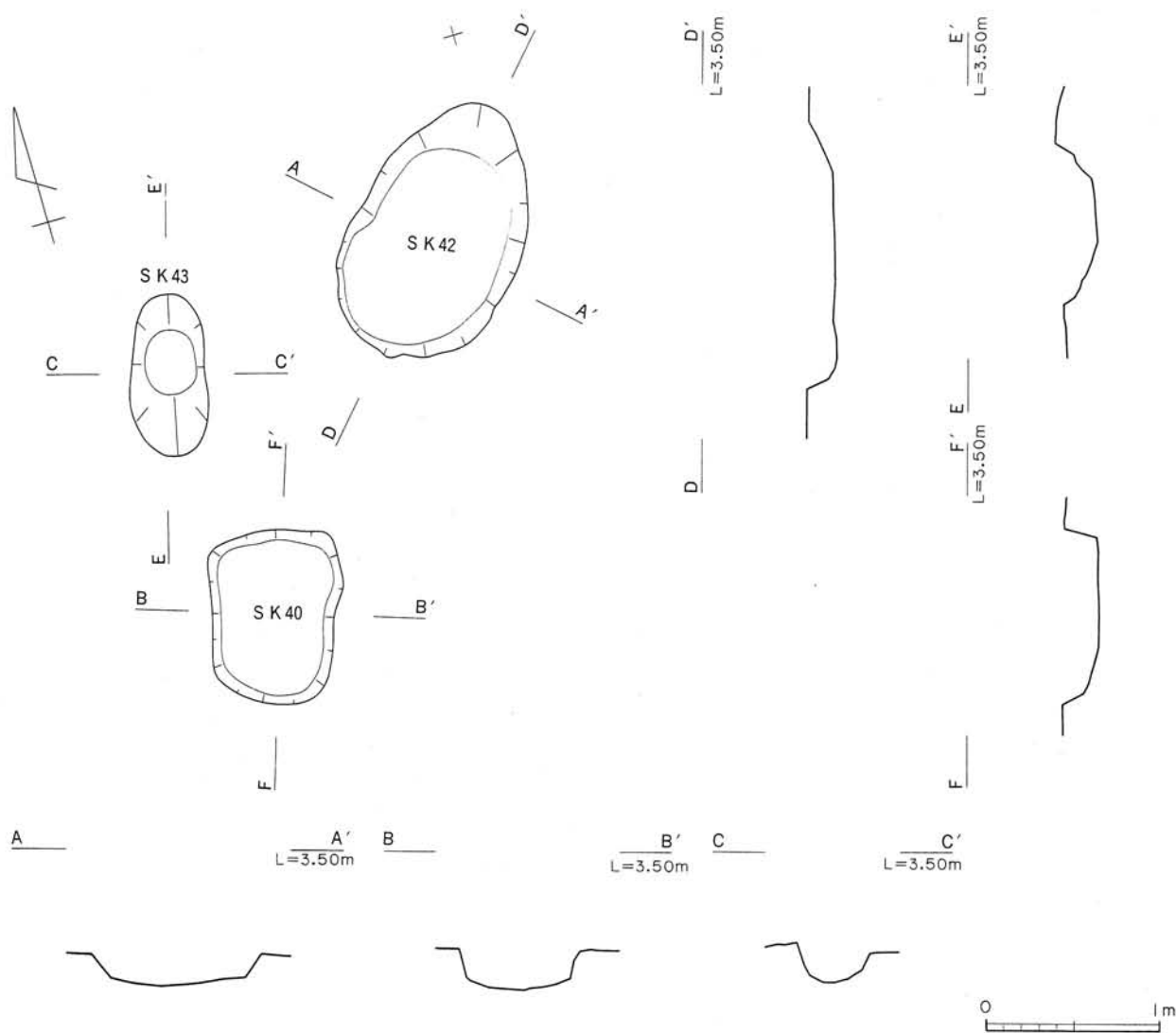
第17图 SK35, SK36, SK37, SE2 实测图



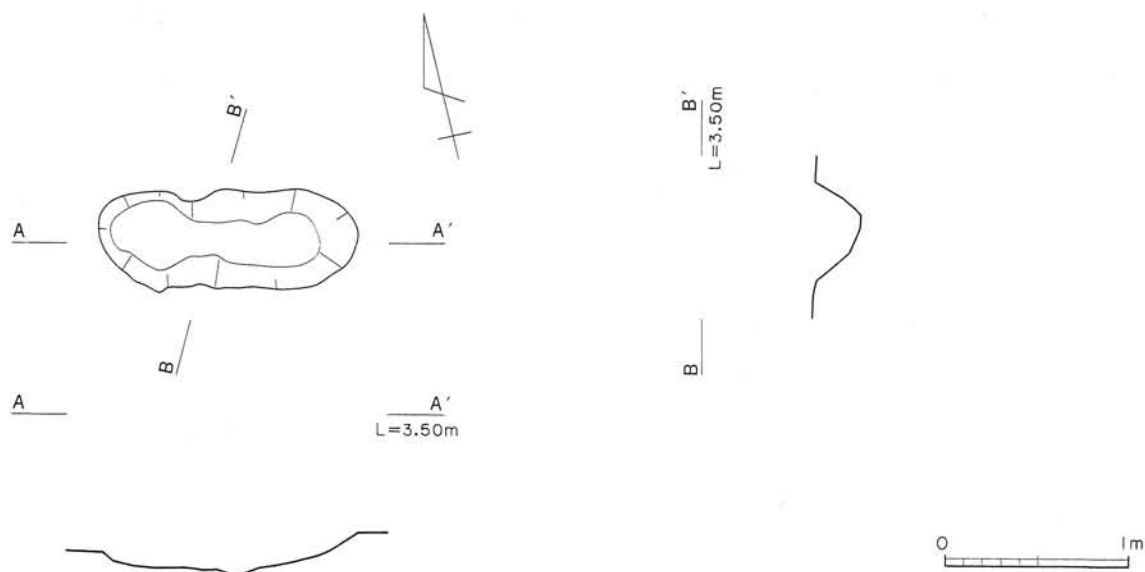
第18図 SK38, SK39 実測図



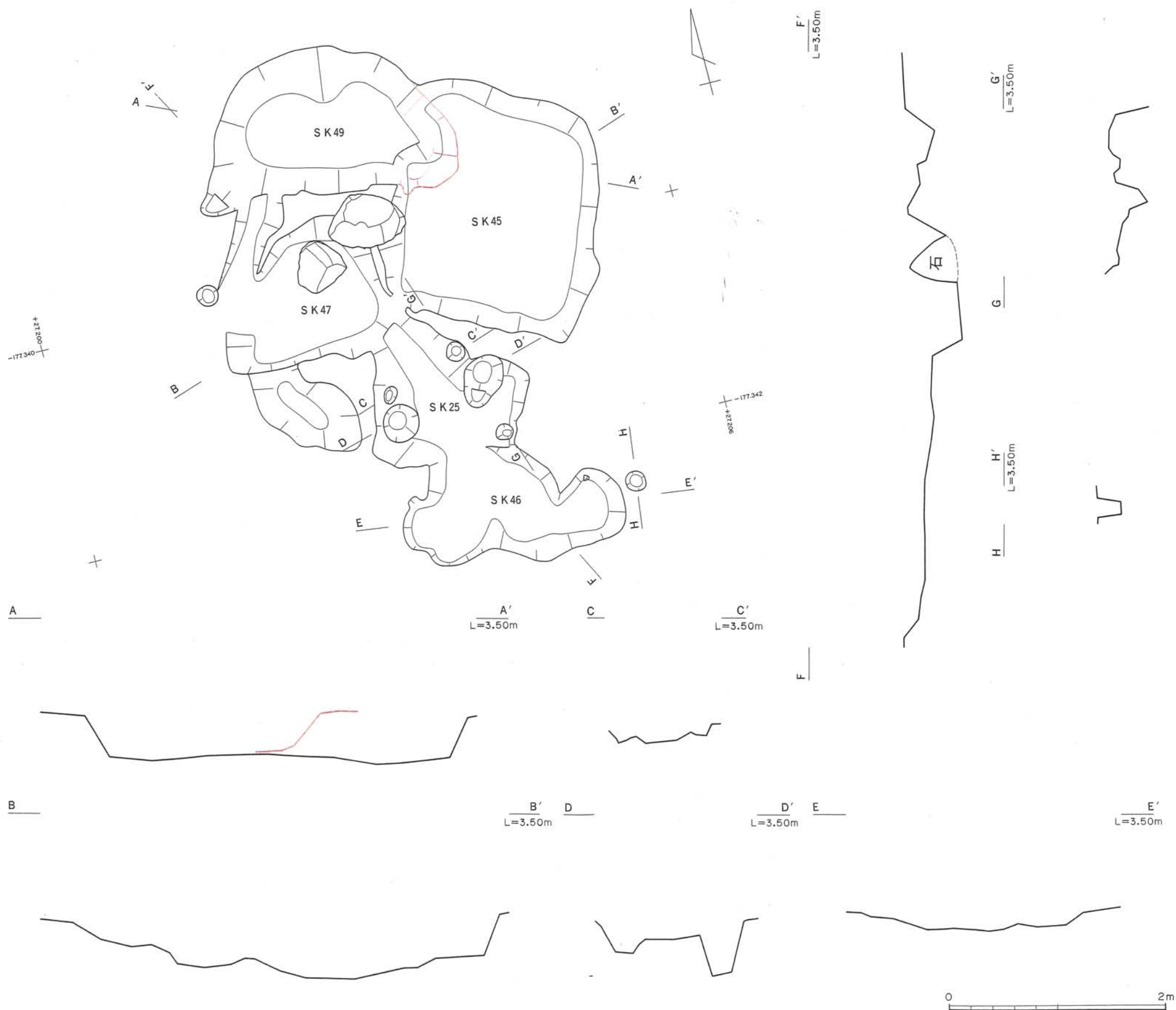
第19図 SK41 実測図



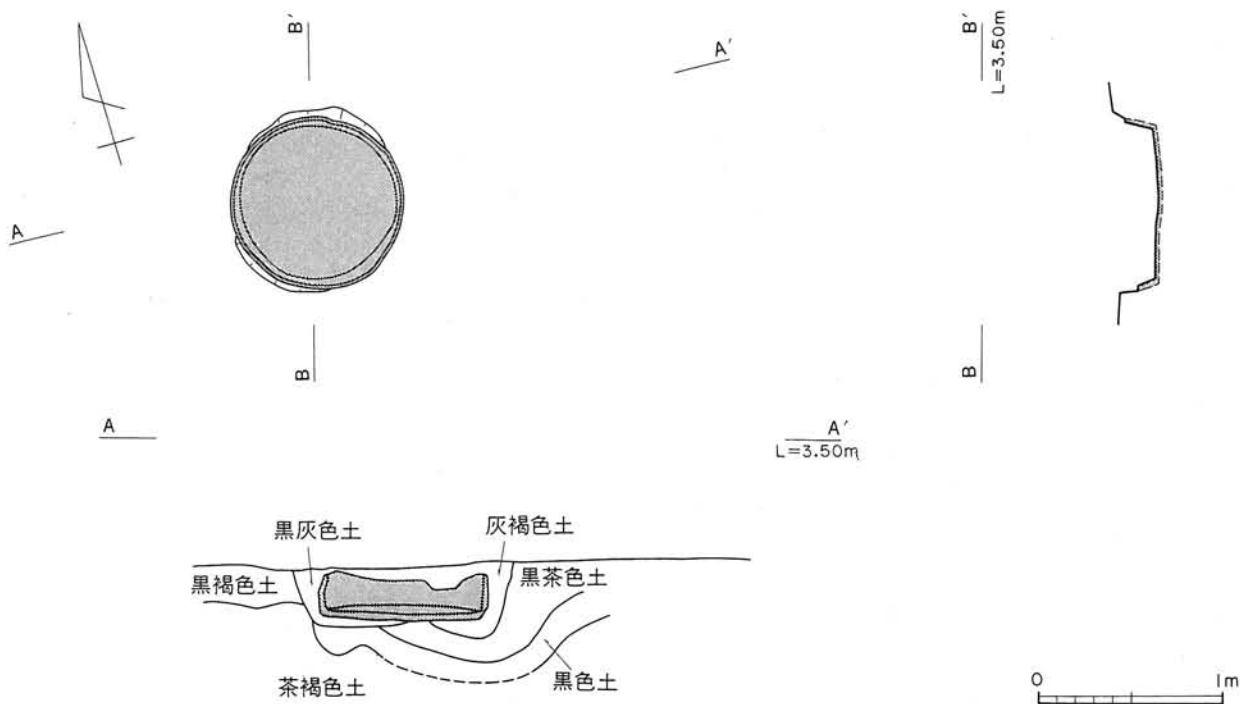
第20図 SK40, SK42, SK43 実測図



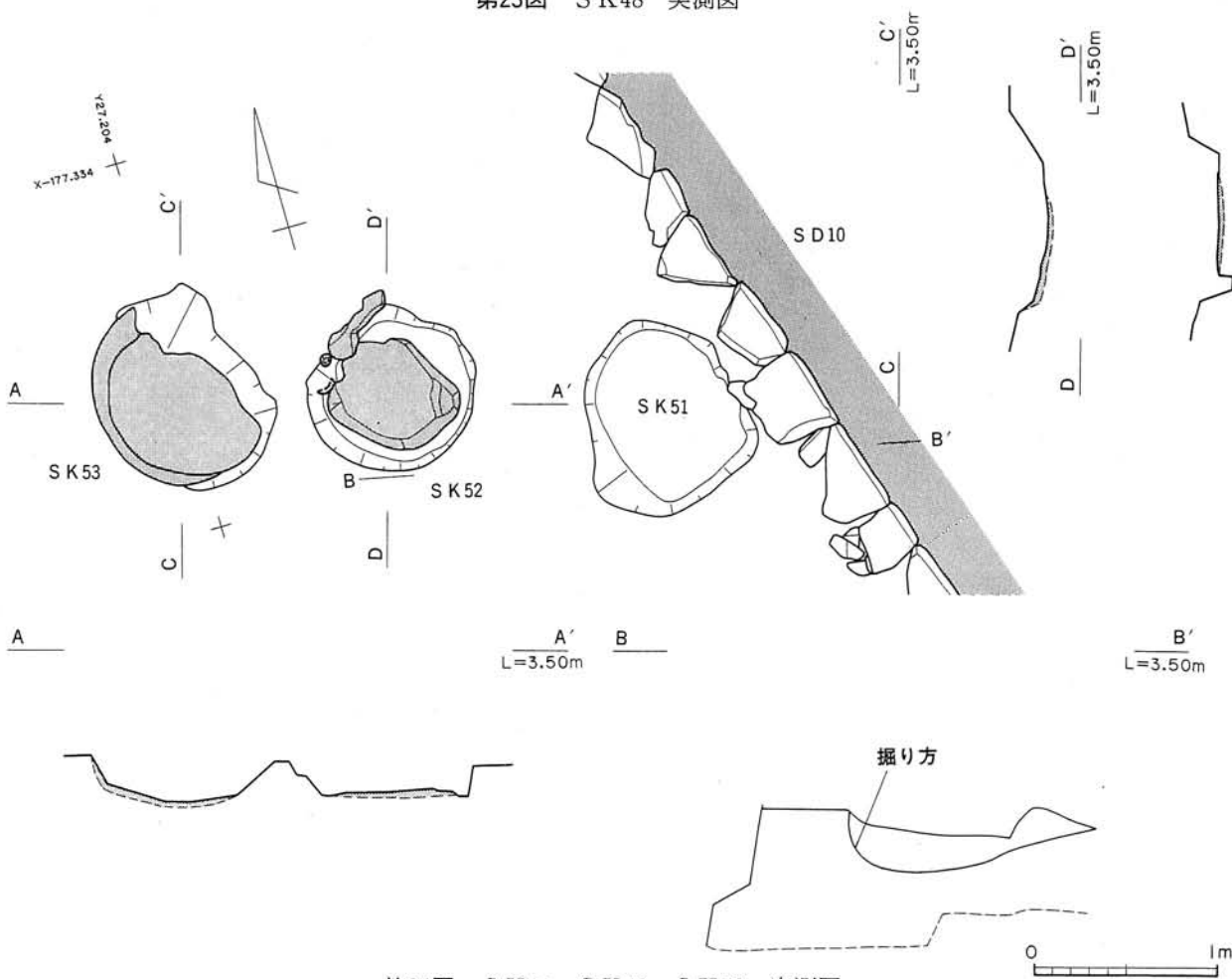
第21図 SK44 実測図



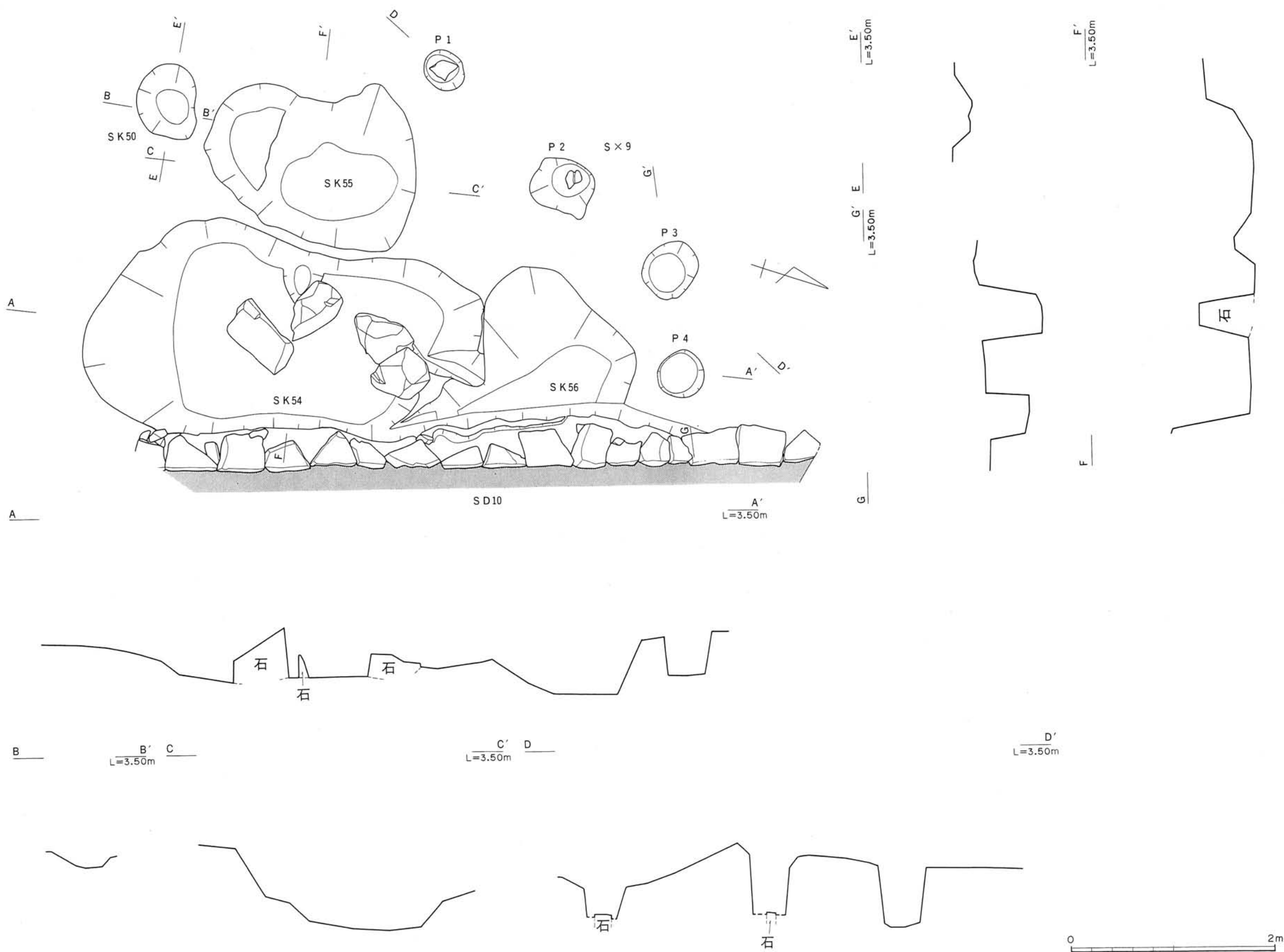
第22図 SK25, SK45, SK46, SK47, SK49 実測図



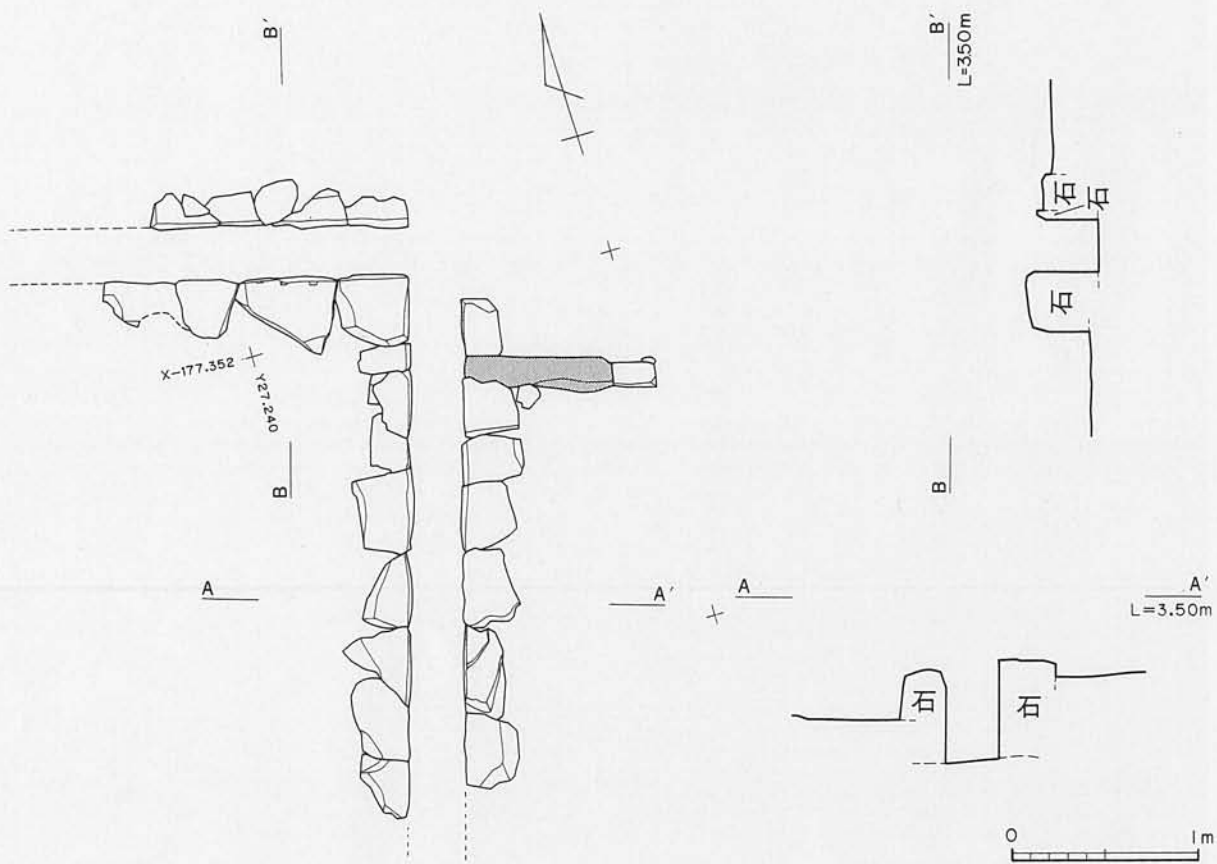
第23図 SK48 実測図



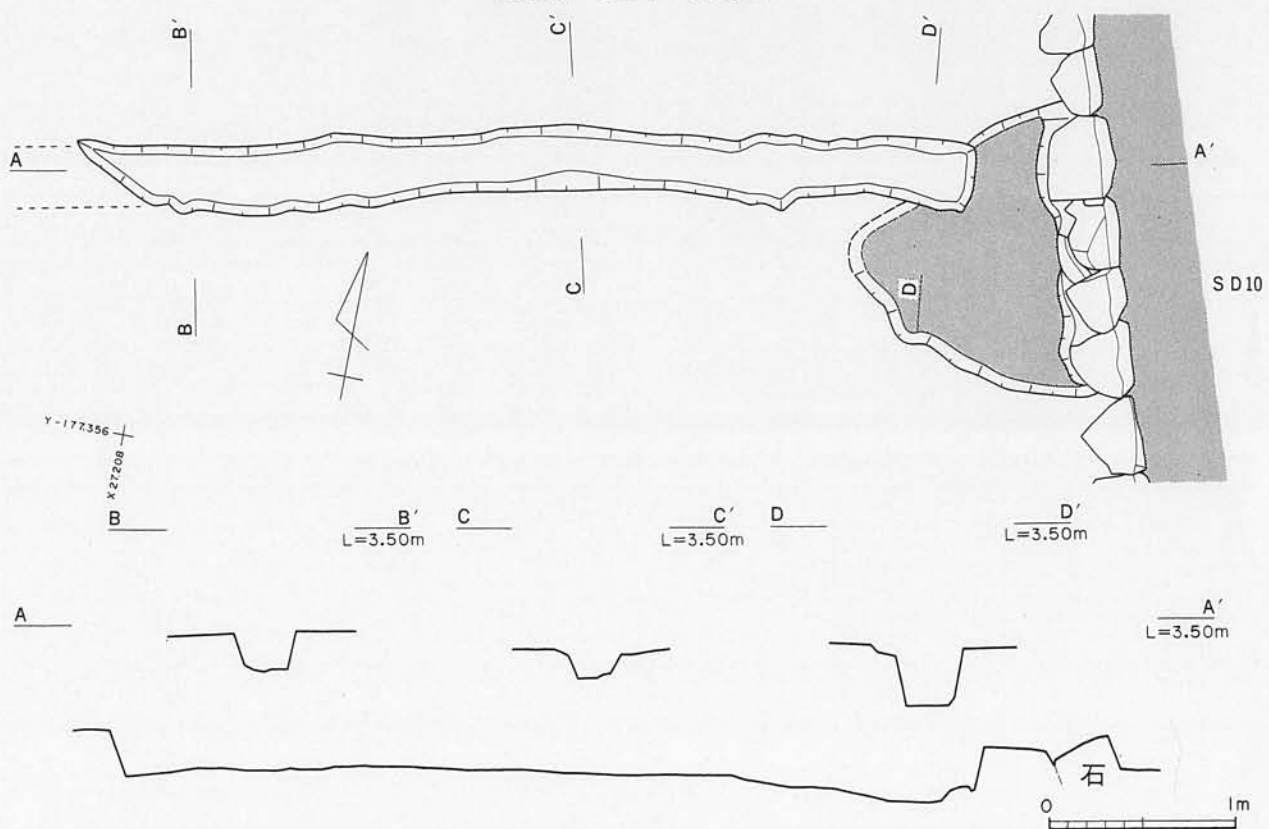
第24図 SK51, SK52, SK53 実測図



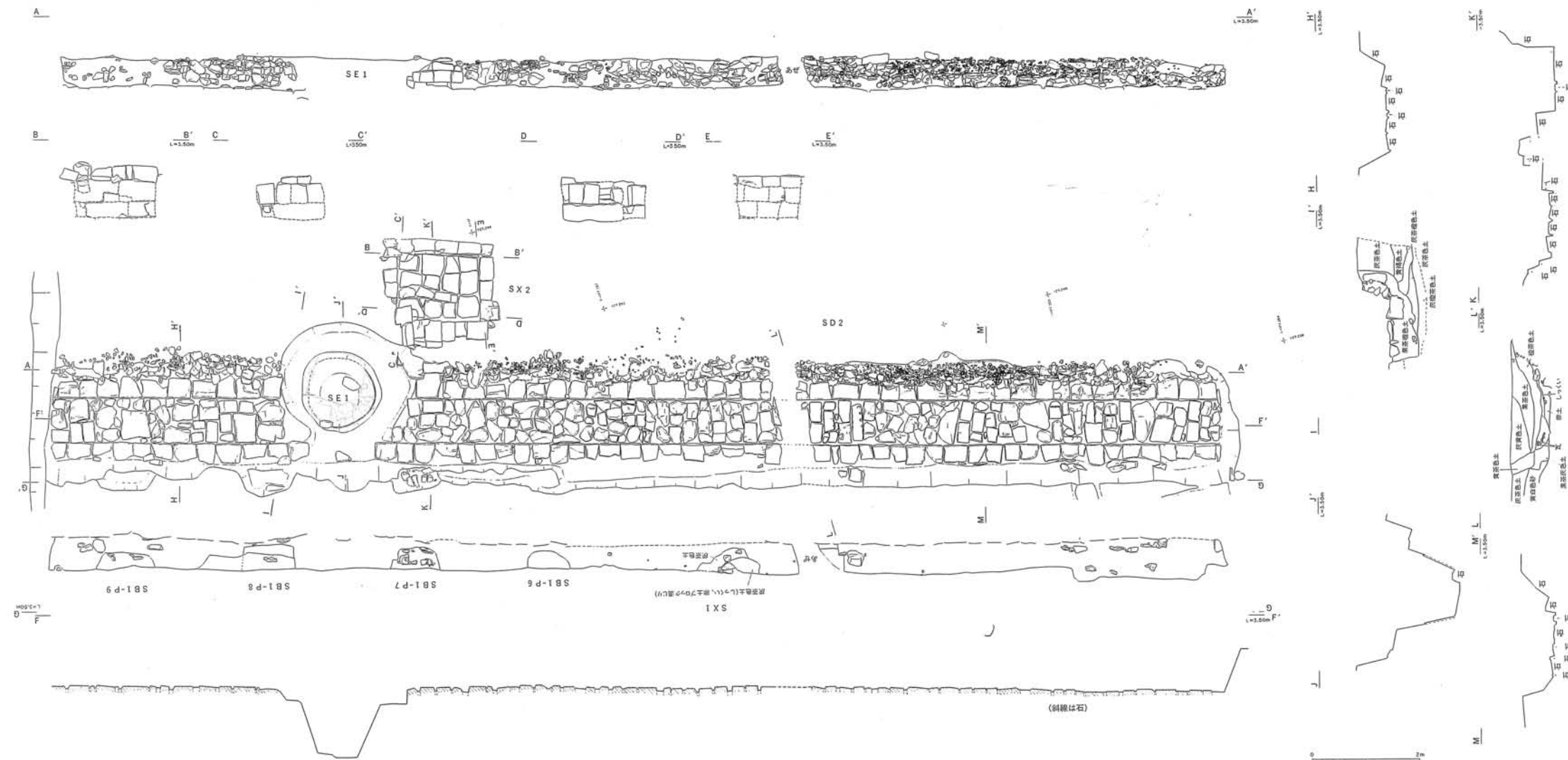
第25図 SK50, SK54, SK55, SK56, SX9 実測図



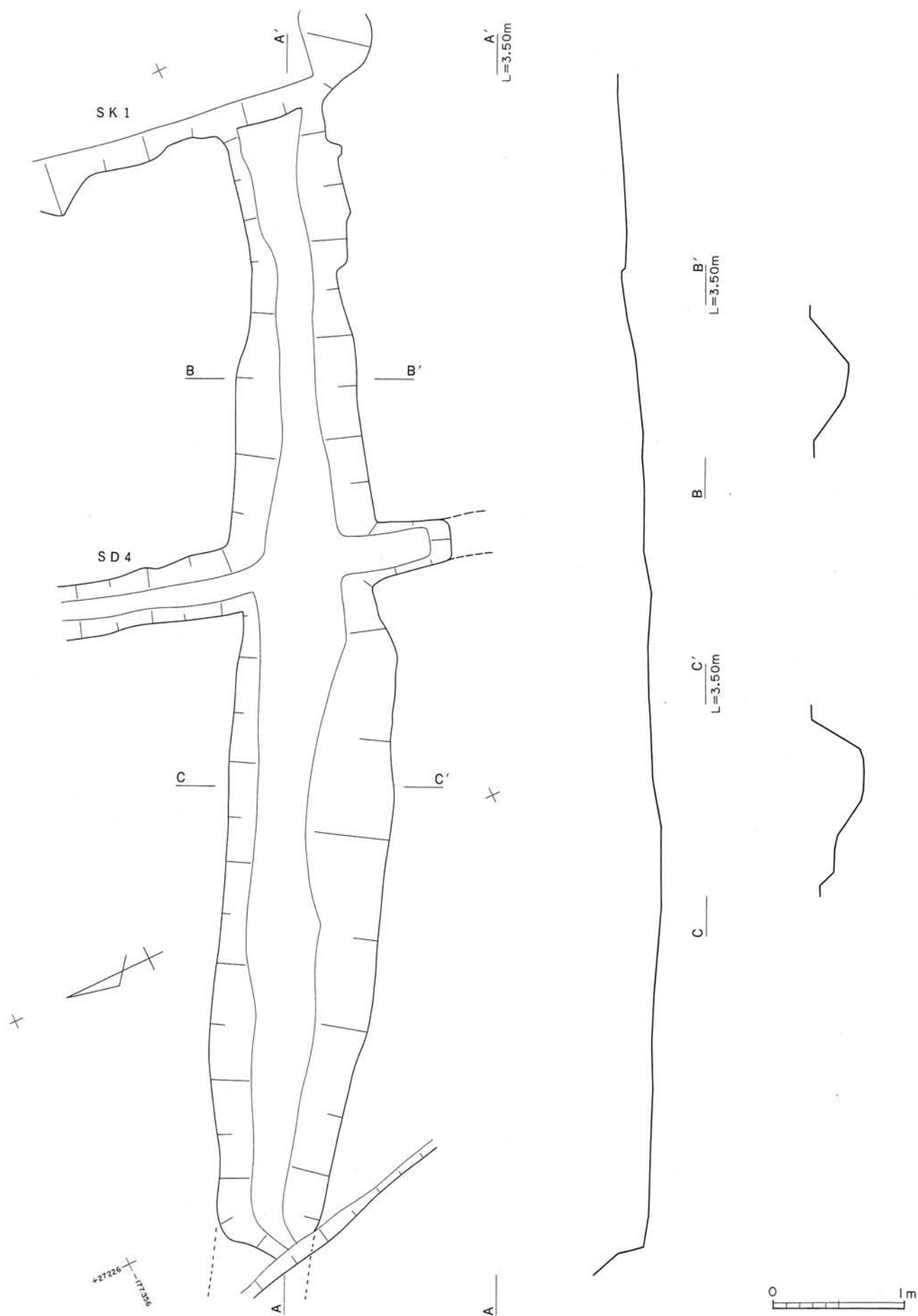
第26図 SD1 実測図



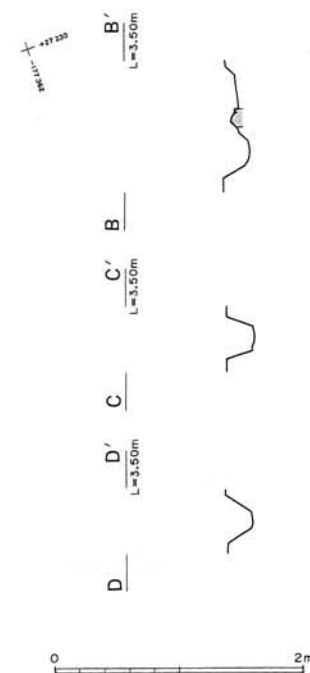
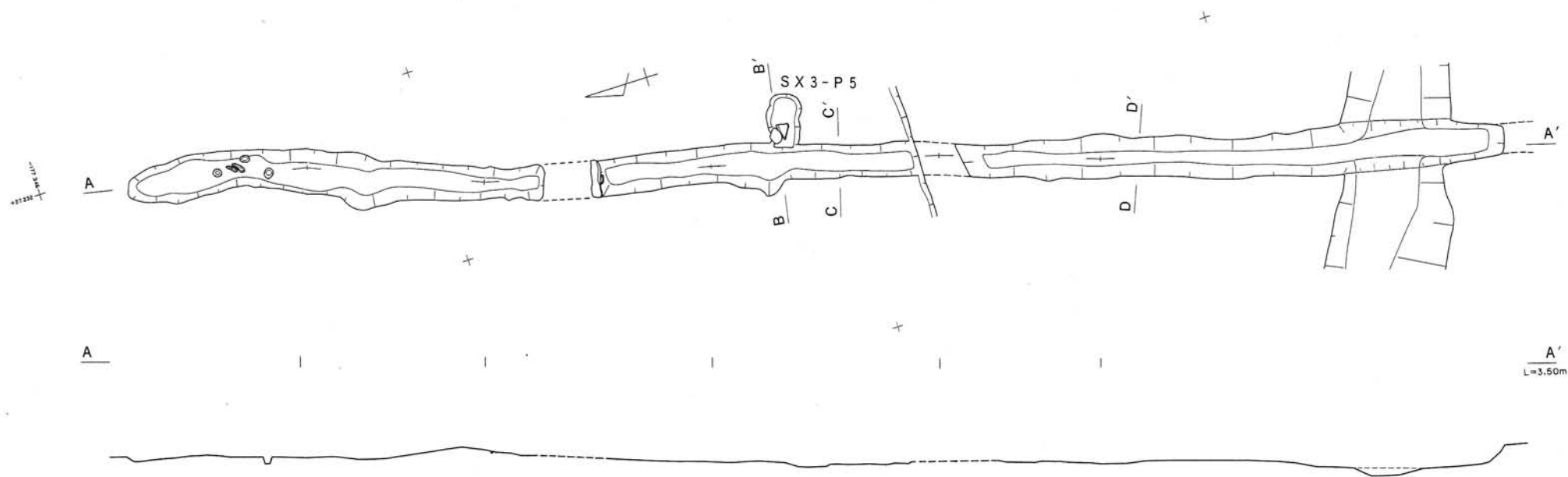
第27図 SD11 実測図



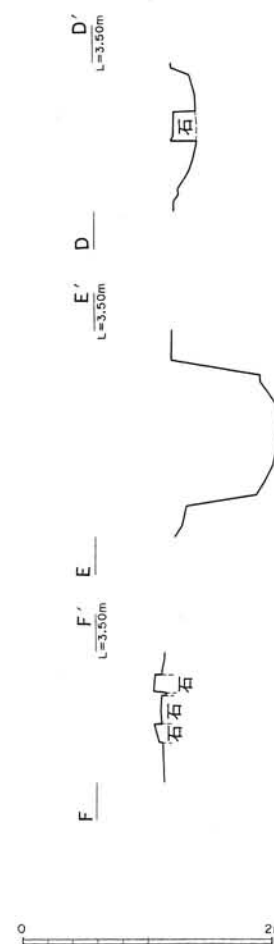
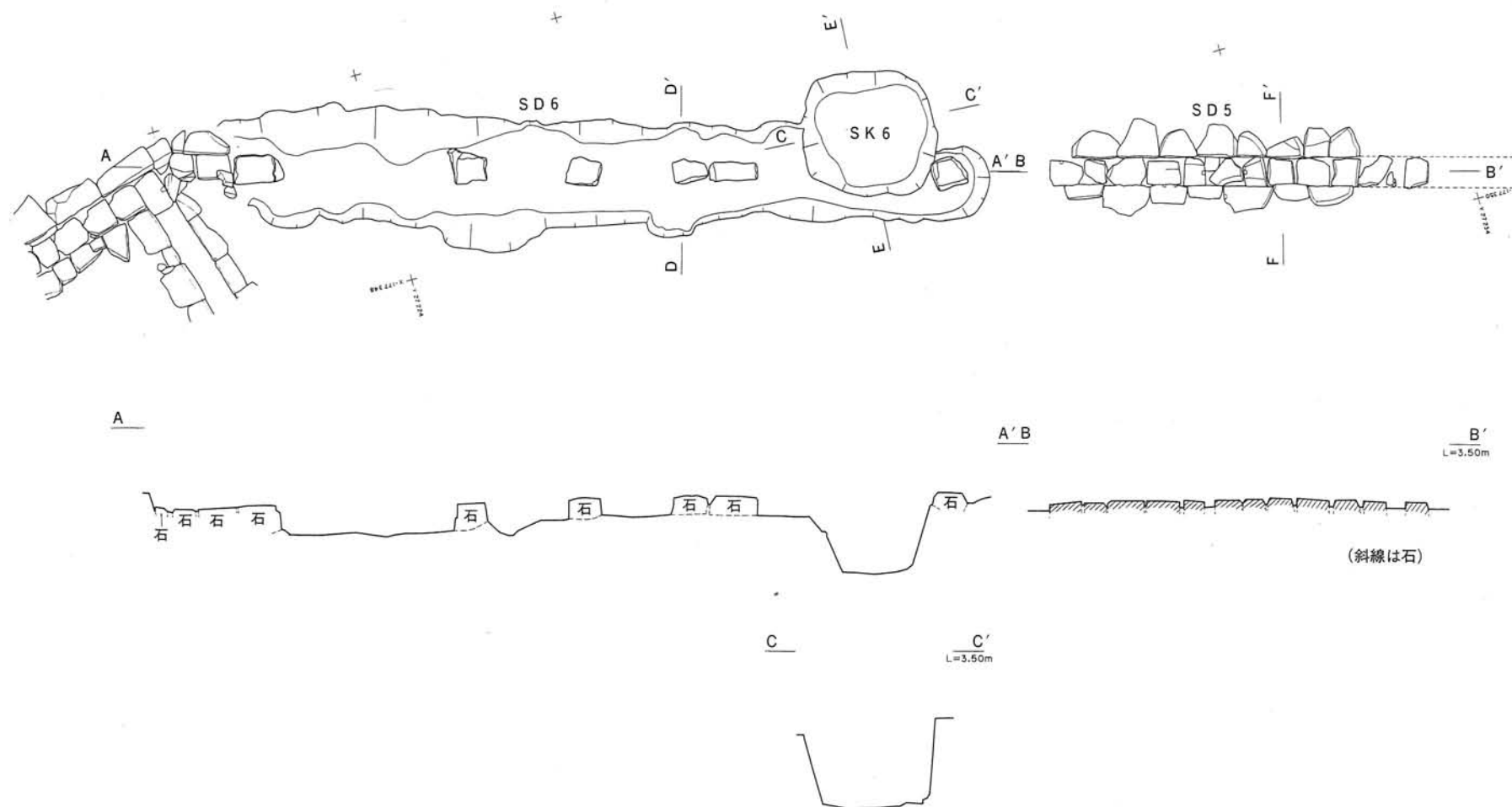
第28図 SD2, SE1, SX2 実測図 (BB', CC', DD', EE'は写測時の投影面を表している)



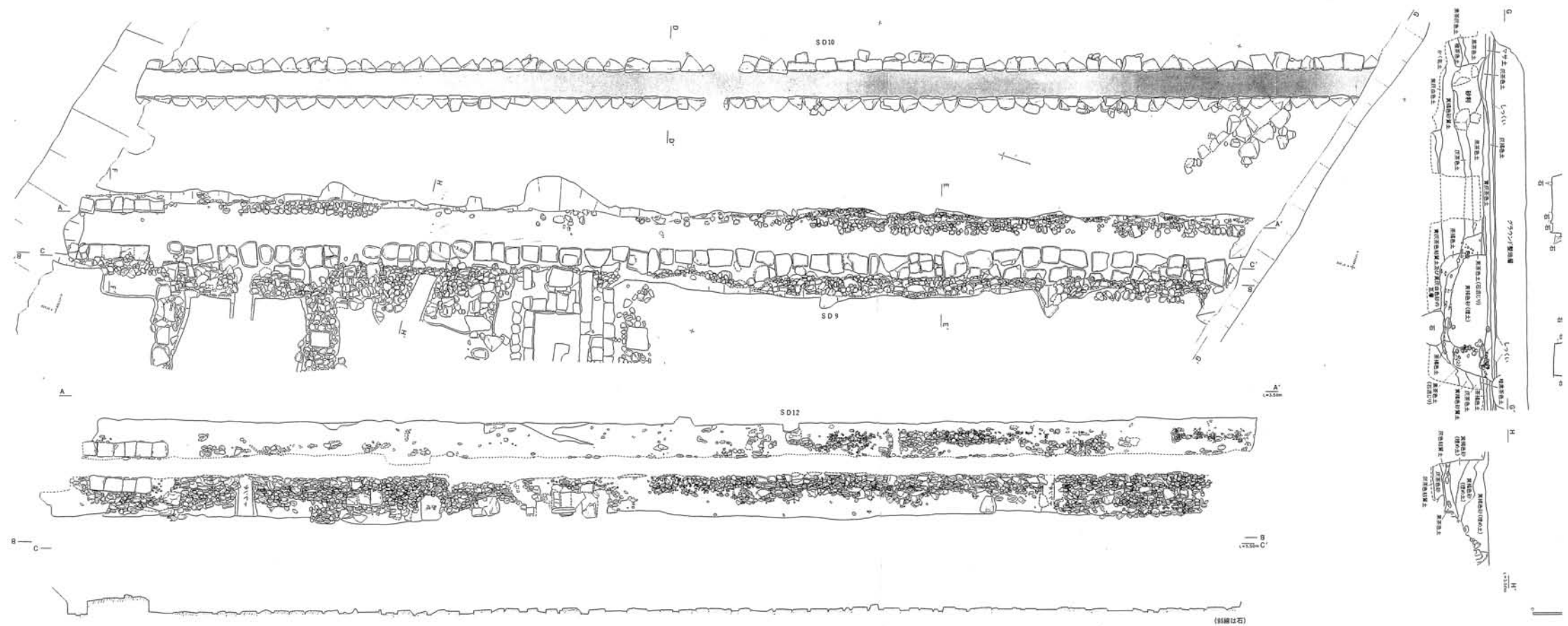
第29图 SD 3 实测图



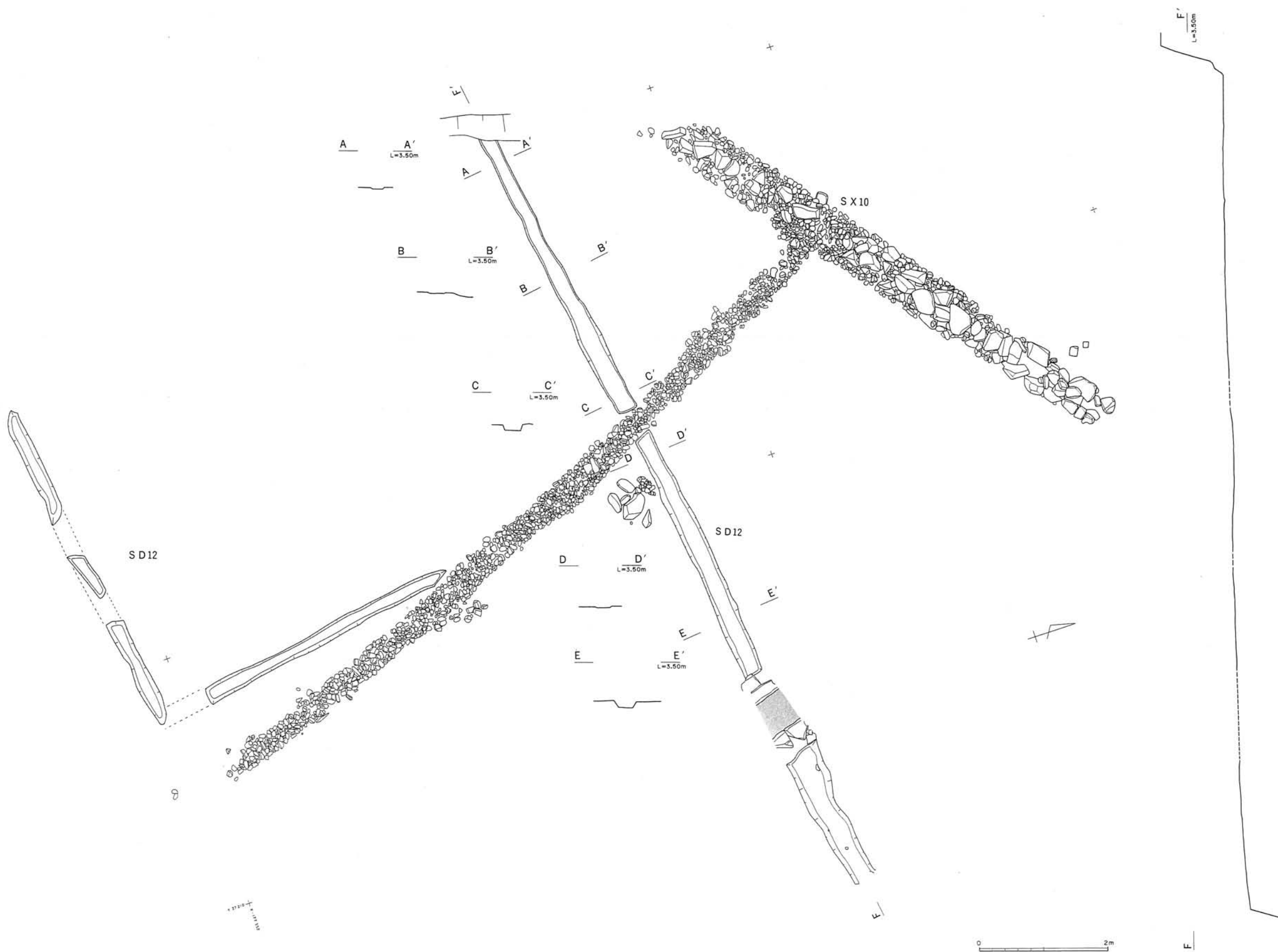
第30図 SD4, SX3-P5 実測図



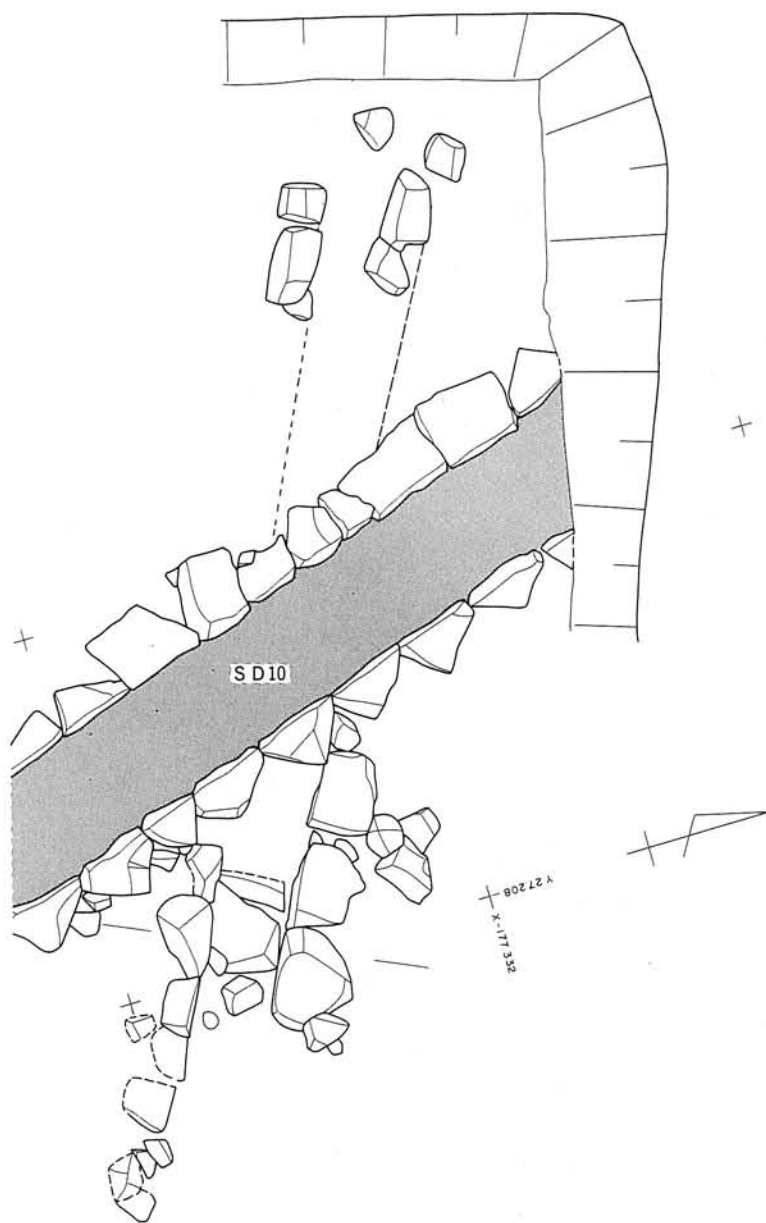
第31図 SK6, SD5, SD6 実測図



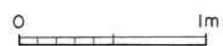
第32図 SD9, SD10 実測図



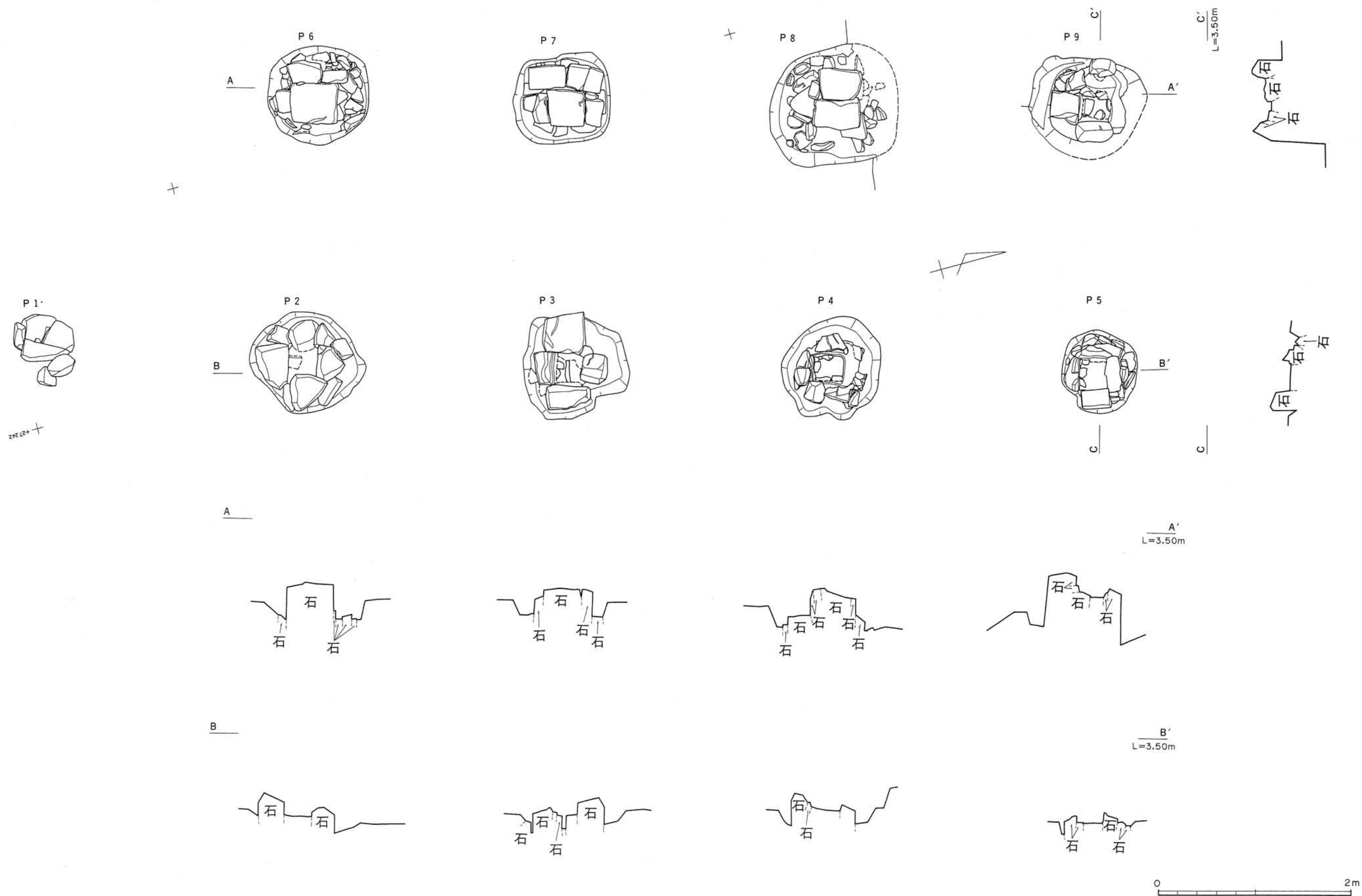
第33図 SD12, SX10 実測図



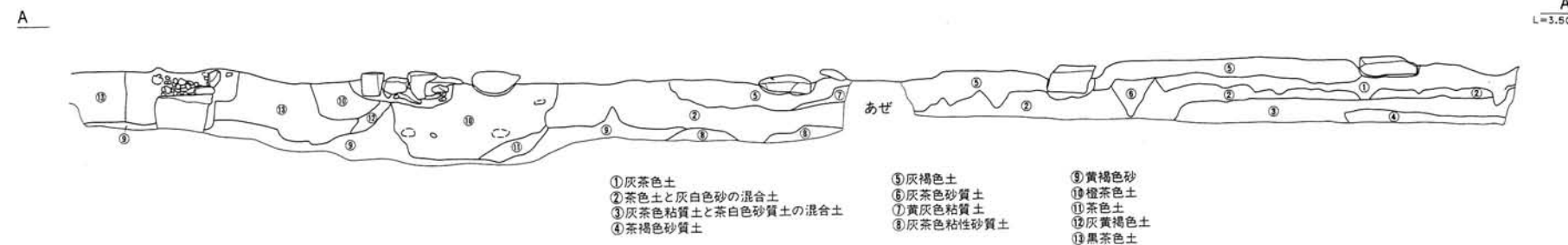
— L=3.50m —



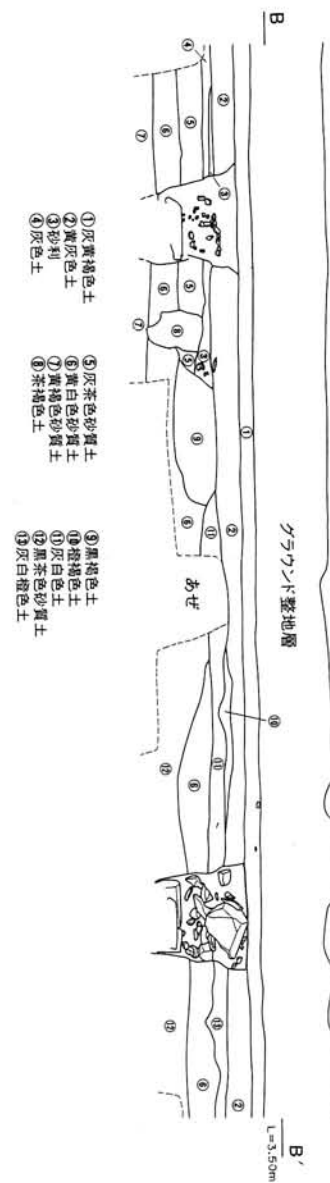
第34図 SD13 実測図



第35图 SB1 实测图

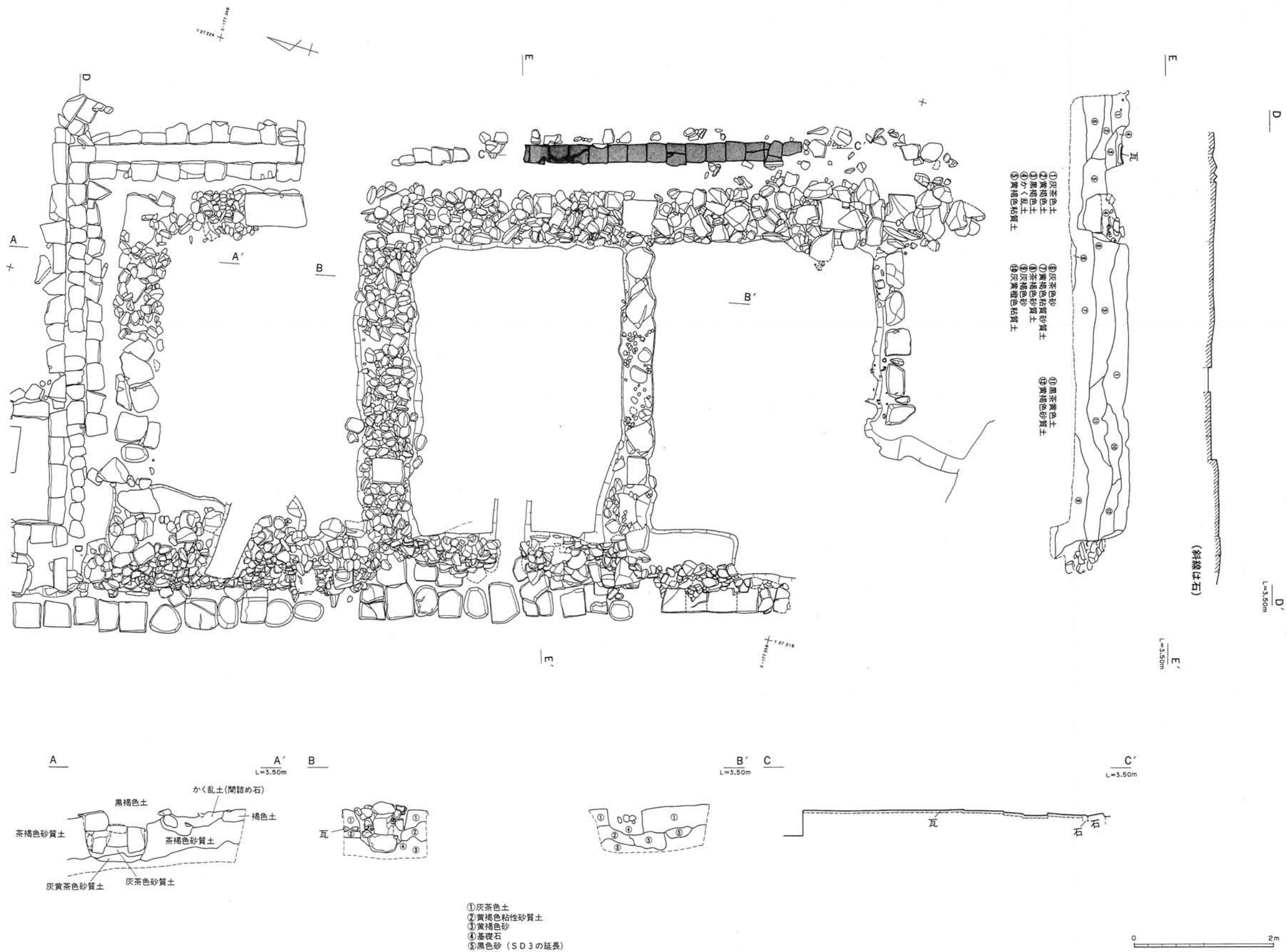


- | | | |
|---------------------|------------|---------|
| ① 灰茶色土 | ⑤ 灰褐色土 | ⑨ 黄褐色砂 |
| ② 茶色土と灰白色砂の混合土 | ⑥ 灰茶色砂質土 | ⑩ 橙茶色土 |
| ③ 灰茶色粘質土と茶白色砂質土の混合土 | ⑦ 黄灰色粘質土 | ⑪ 茶色土 |
| ④ 茶褐色砂質土 | ⑧ 灰茶色粘性砂質土 | ⑫ 灰黄褐色土 |
| | | ⑬ 黒茶色土 |



- | | | |
|---------|----------|----------|
| ① 灰黄褐色土 | ⑤ 灰茶色砂質土 | ⑨ 黒褐色土 |
| ② 黄灰色土 | ⑥ 黄白色砂質土 | ⑩ 橙褐色土 |
| ③ 砂利 | ⑦ 黄褐色砂質土 | ⑪ 灰白色土 |
| ④ 灰色土 | ⑧ 茶褐色土 | ⑫ 黒茶色砂質土 |
| | | ⑬ 灰白褐色土 |

第36図 SB2 実測図



第37図 SB3 実測図 (アミは瓦)



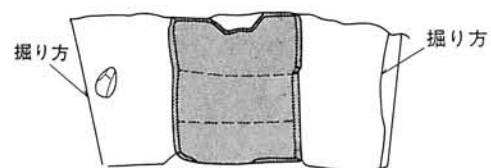
漆喰枠出土後



掘り下げ前



L=3.50m

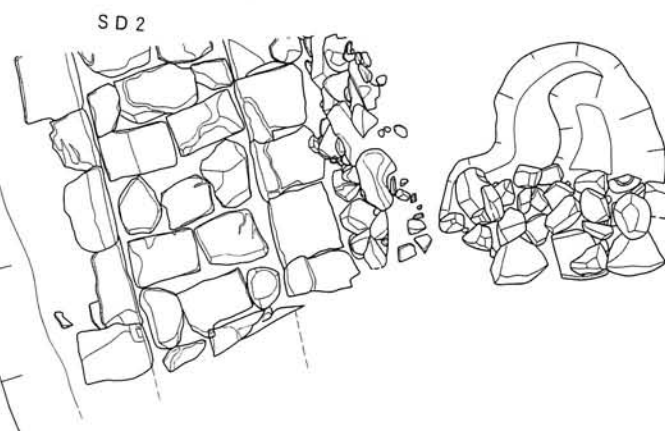
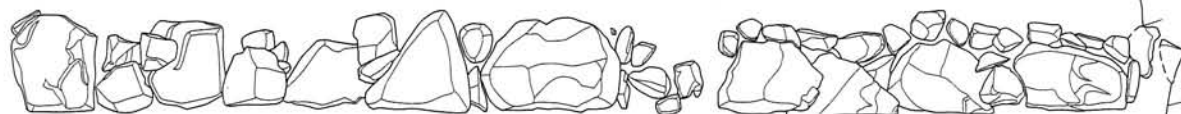


第39図 SE 3 実測図

0 1m

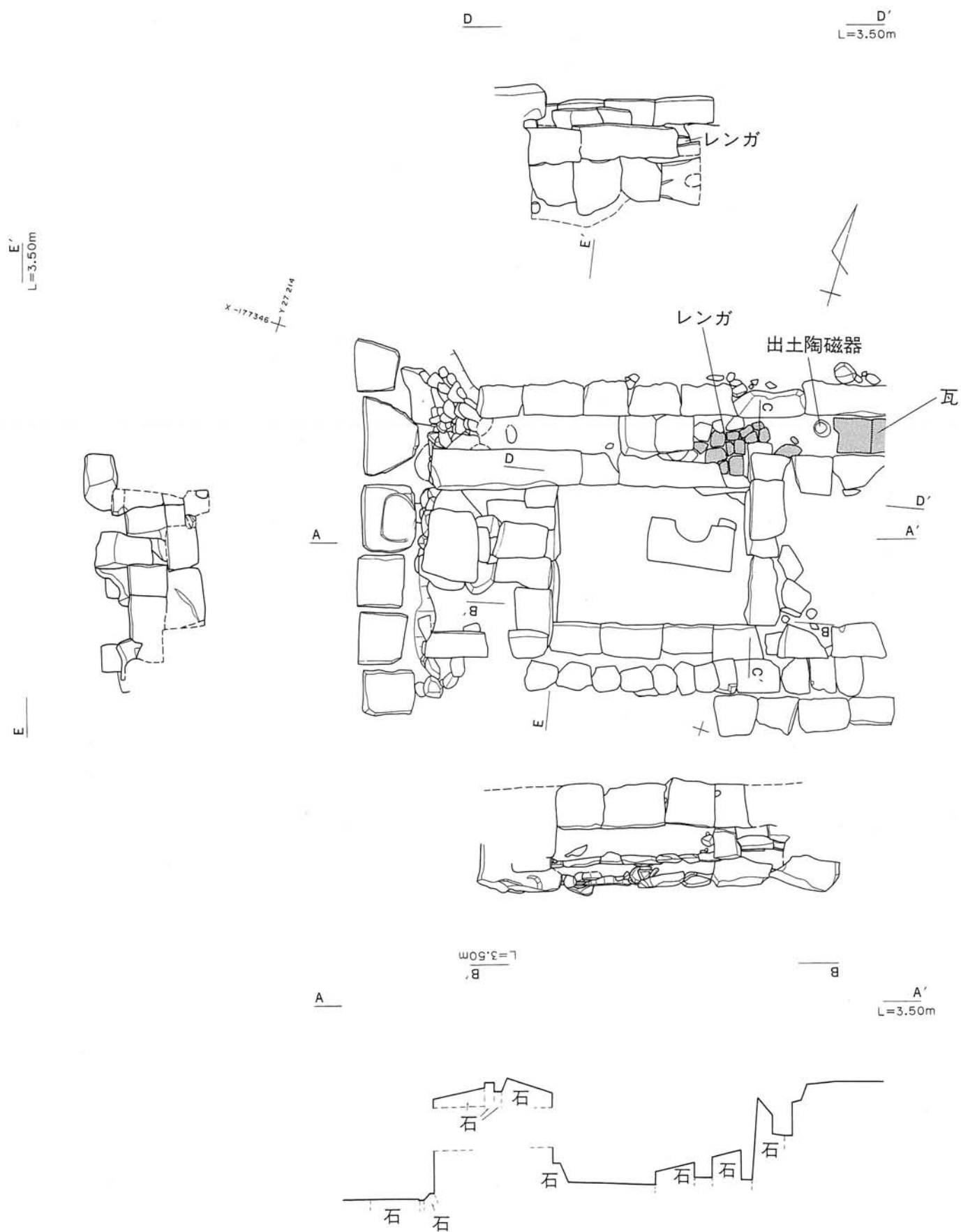
0 1m

第41図 SX11 実測図

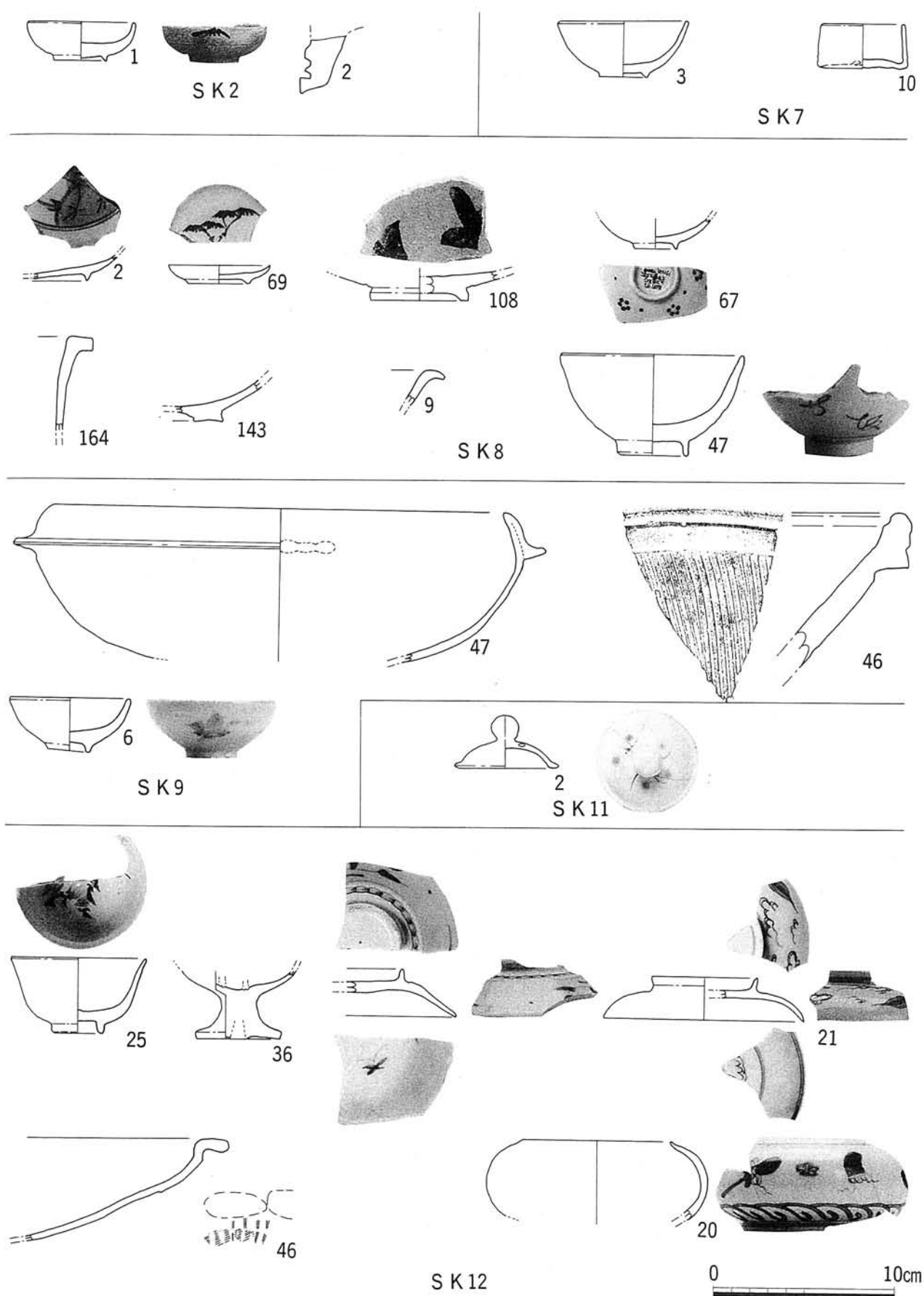


0 2m

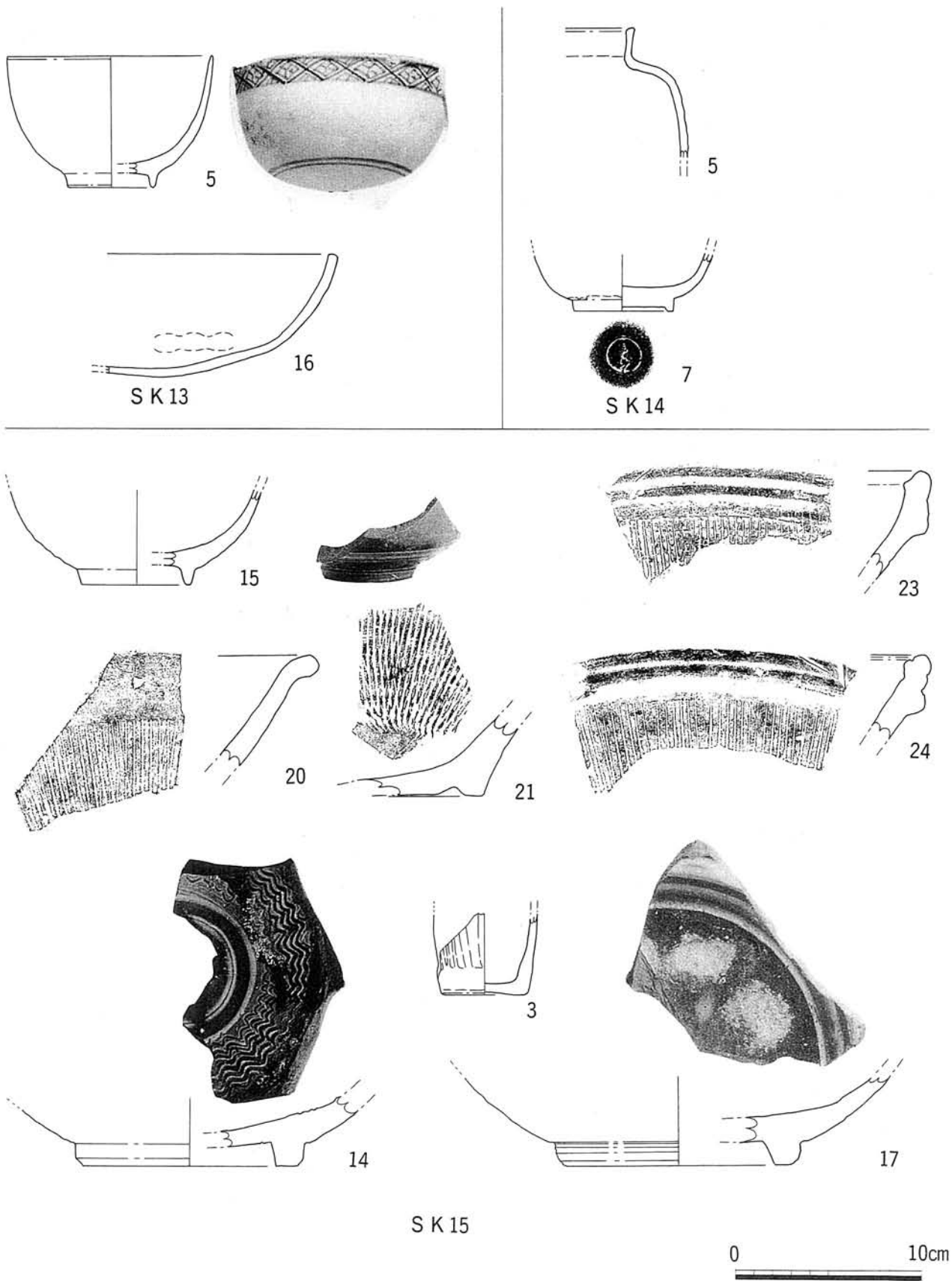
第40図 SX 1 実測図



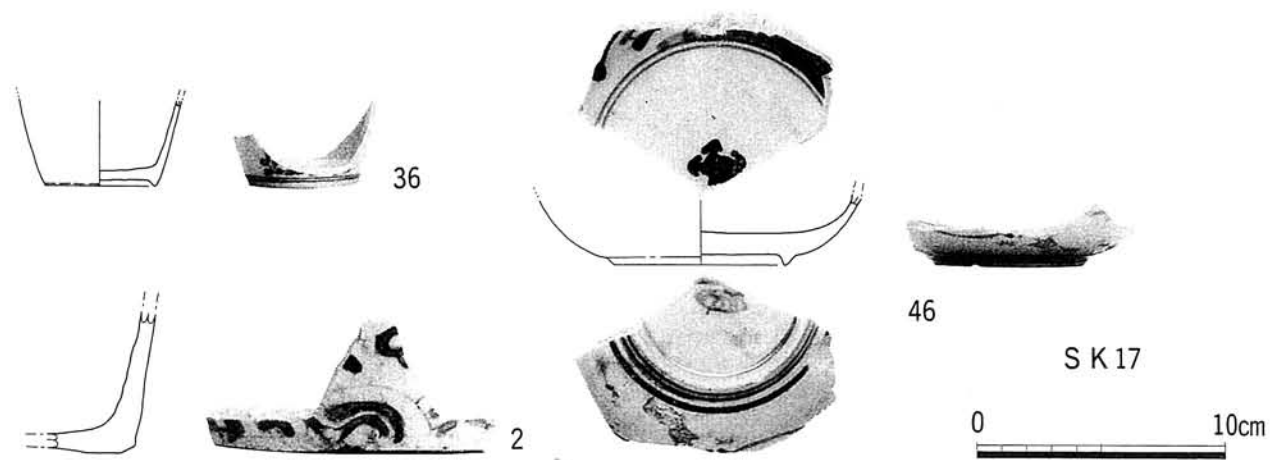
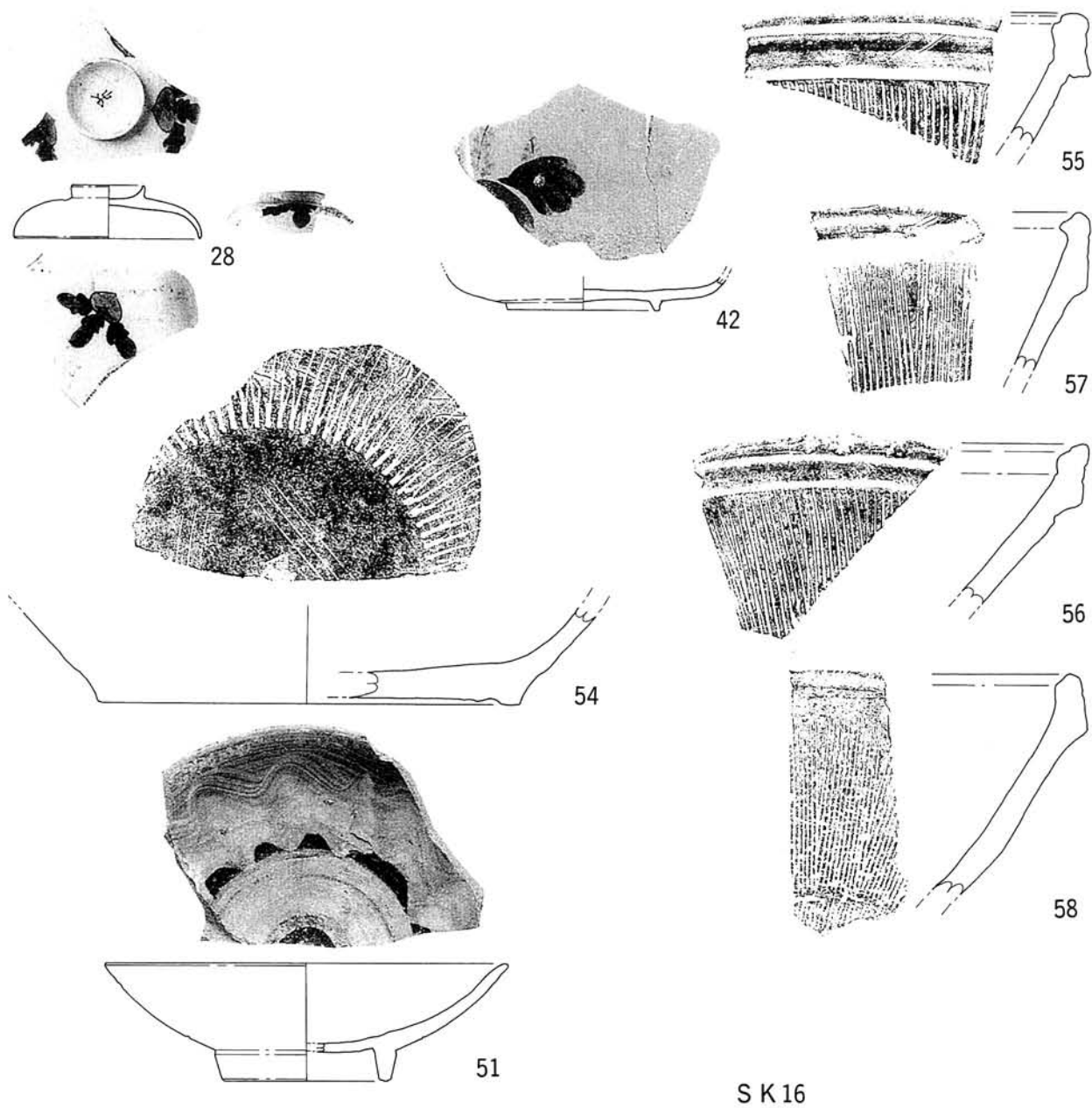
第42図 SX 5 実測図 (A A'以外は写測時の投影面をあらわしている)



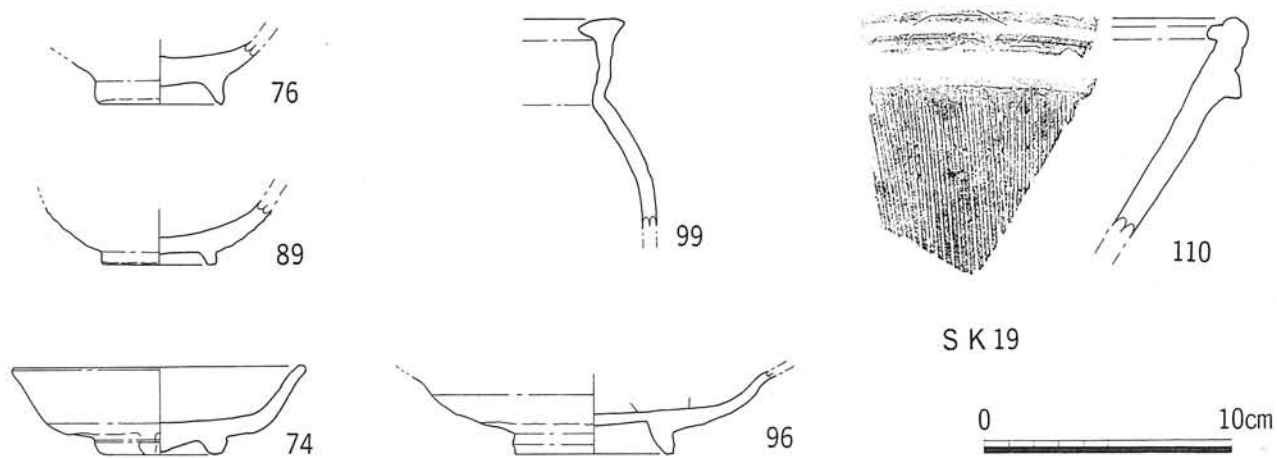
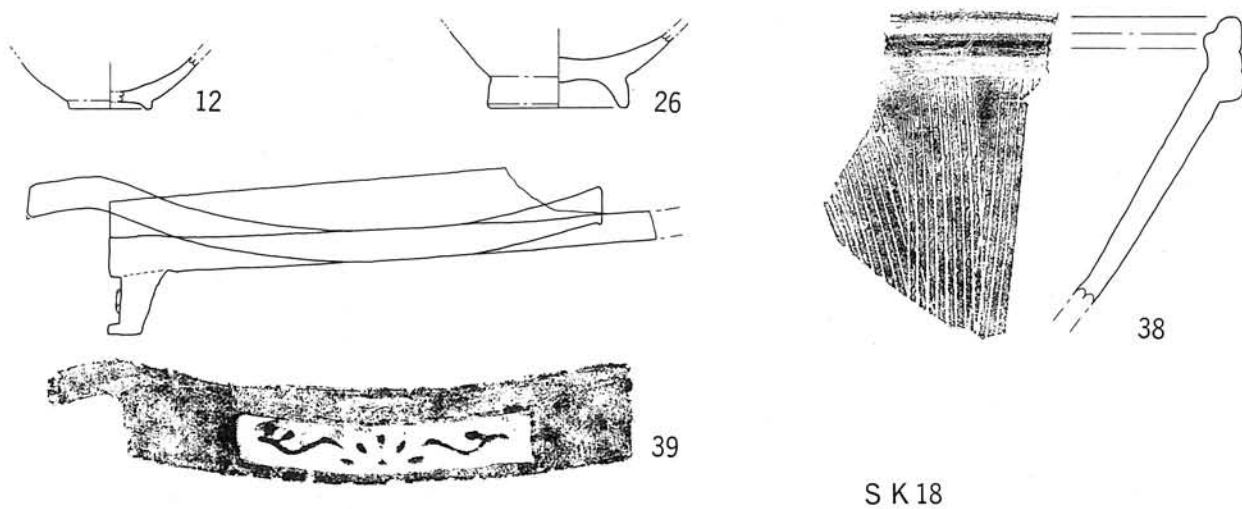
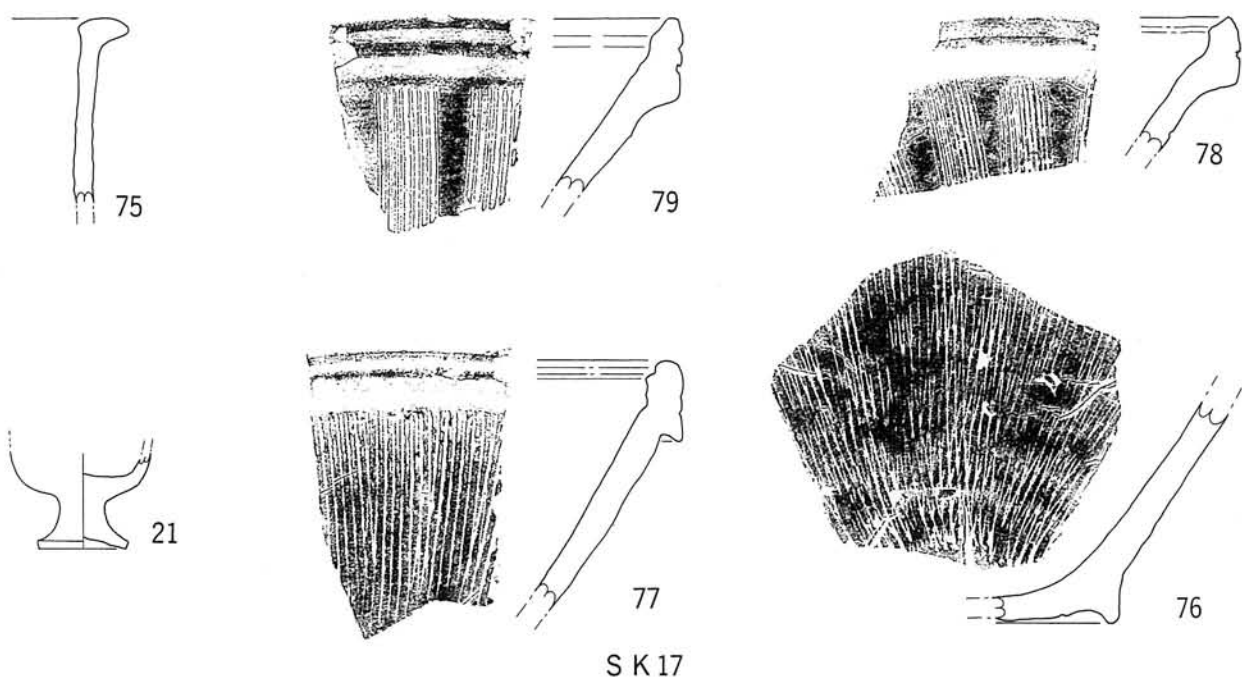
第43図 SK2, SK7, SK8, SK9, SK11, SK12 出土遺物



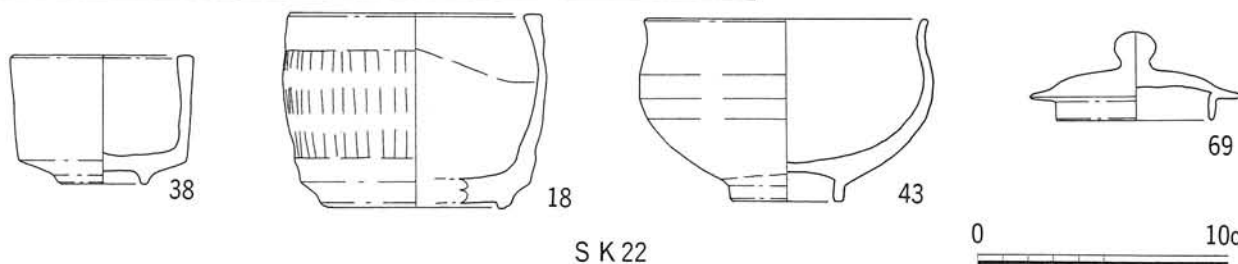
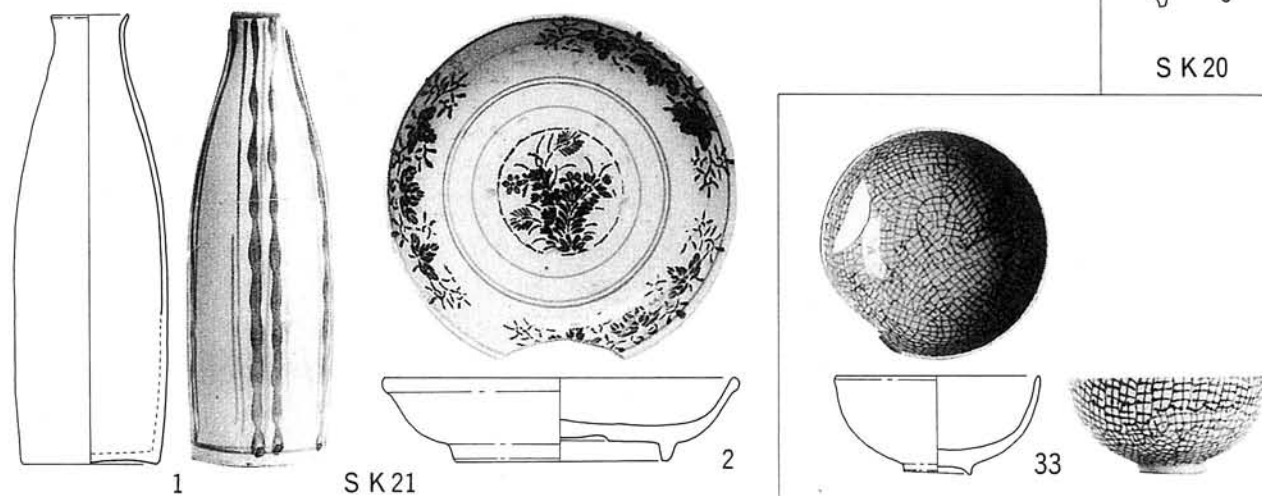
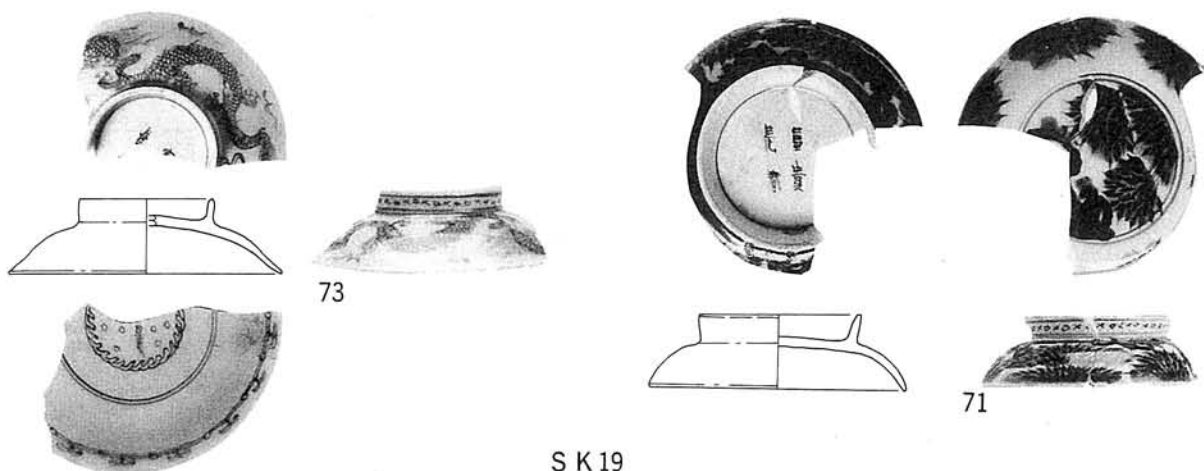
第44図 SK13, SK14, SK15 出土遺物



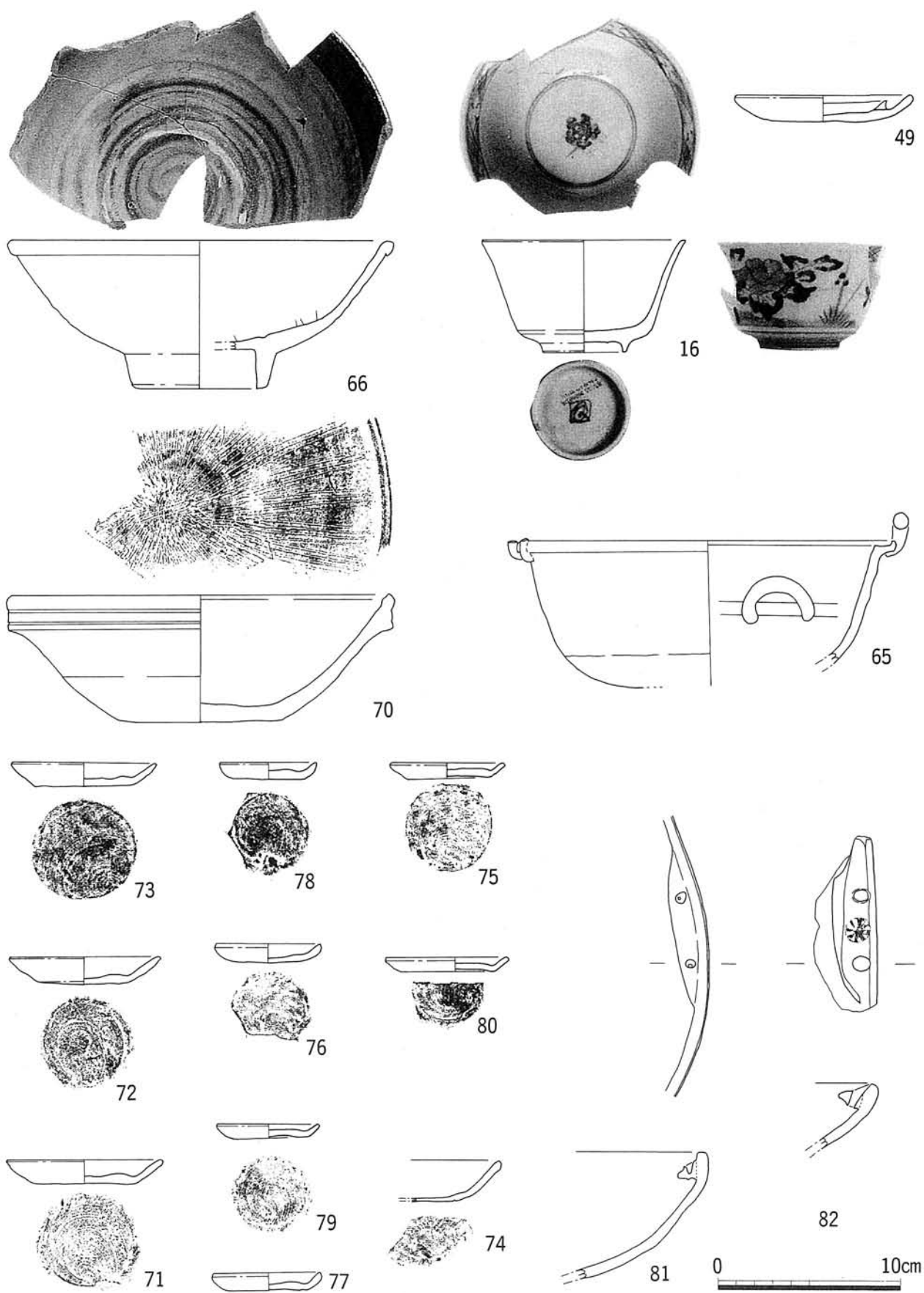
第45図 S K16, S K17 出土遺物



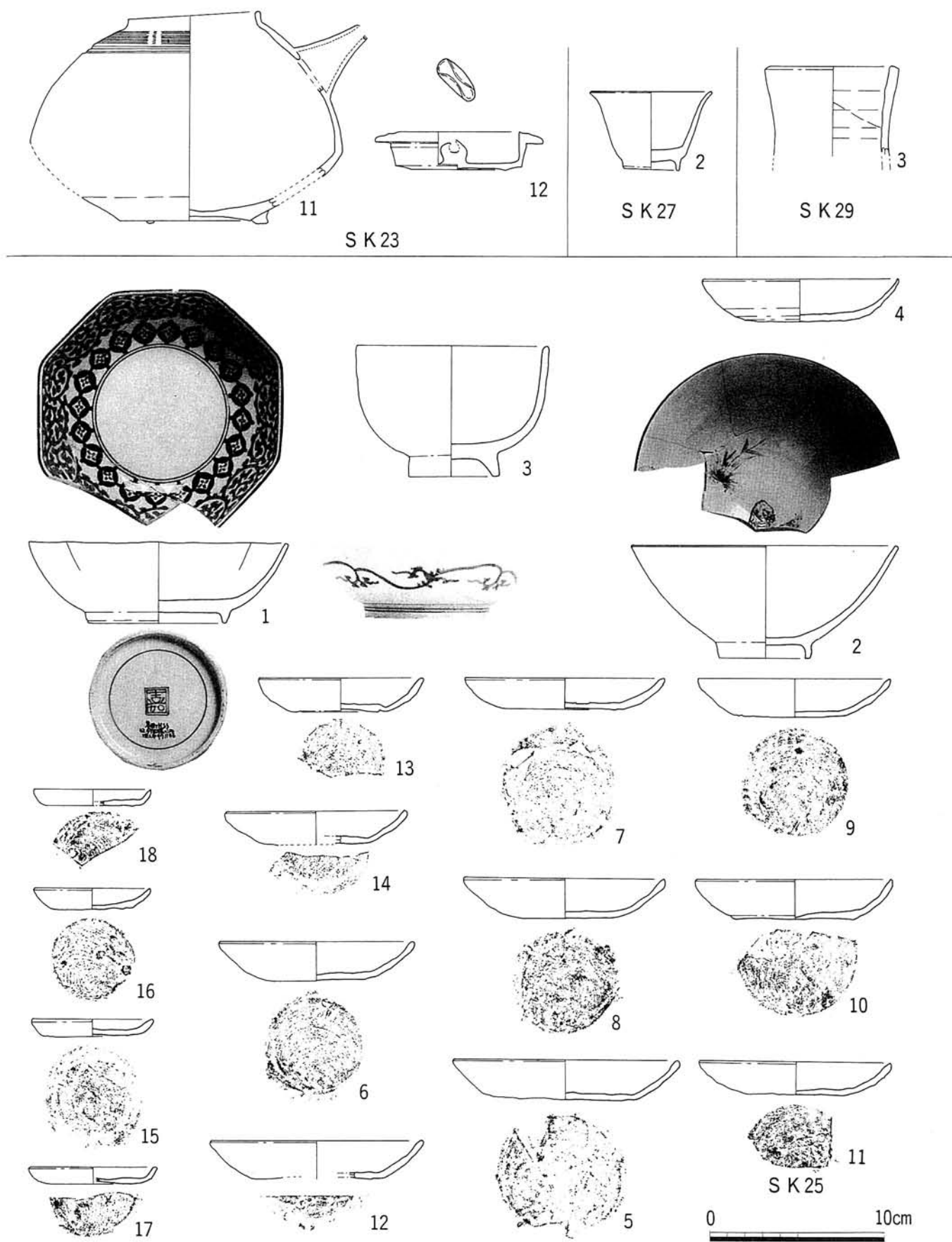
第46図 SK17, SK18, SK19 出土遺物



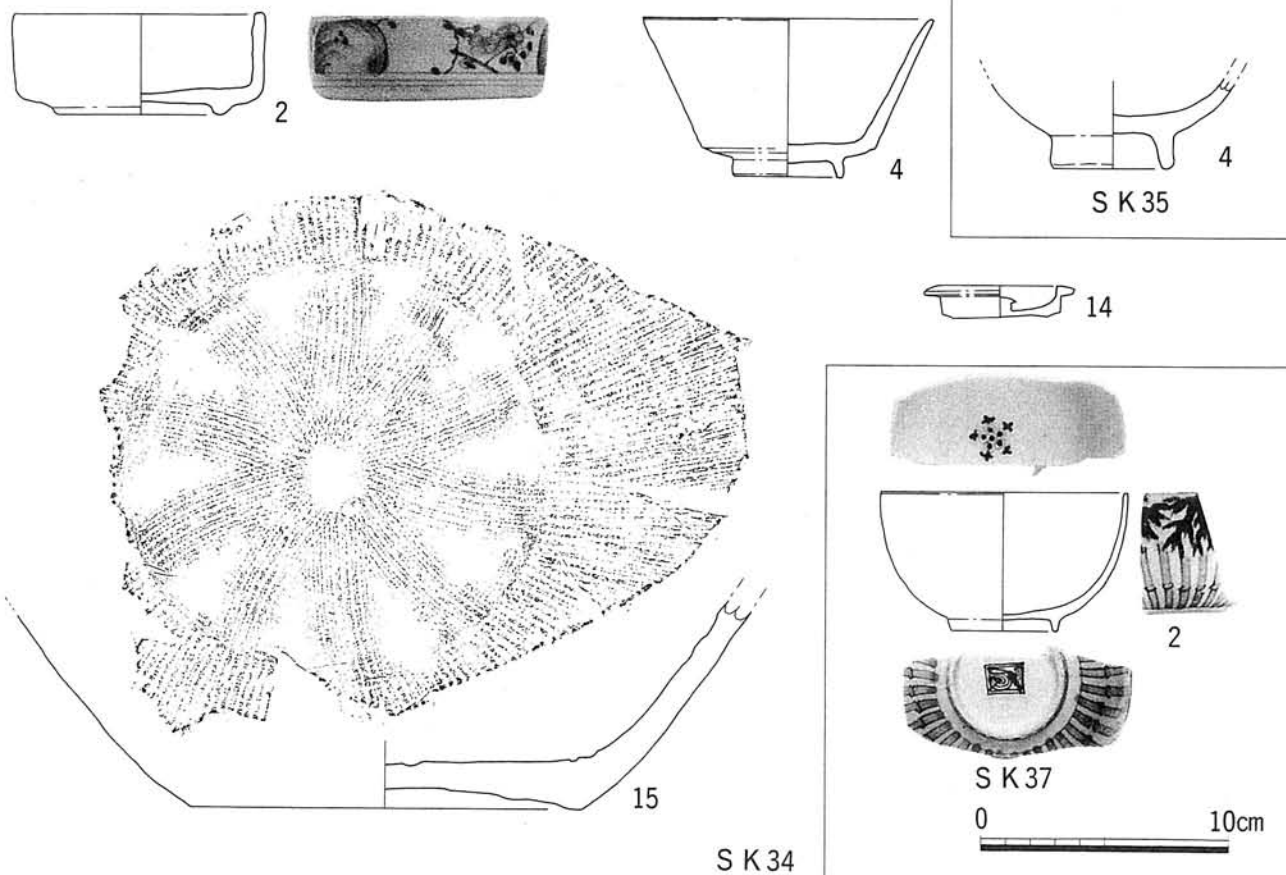
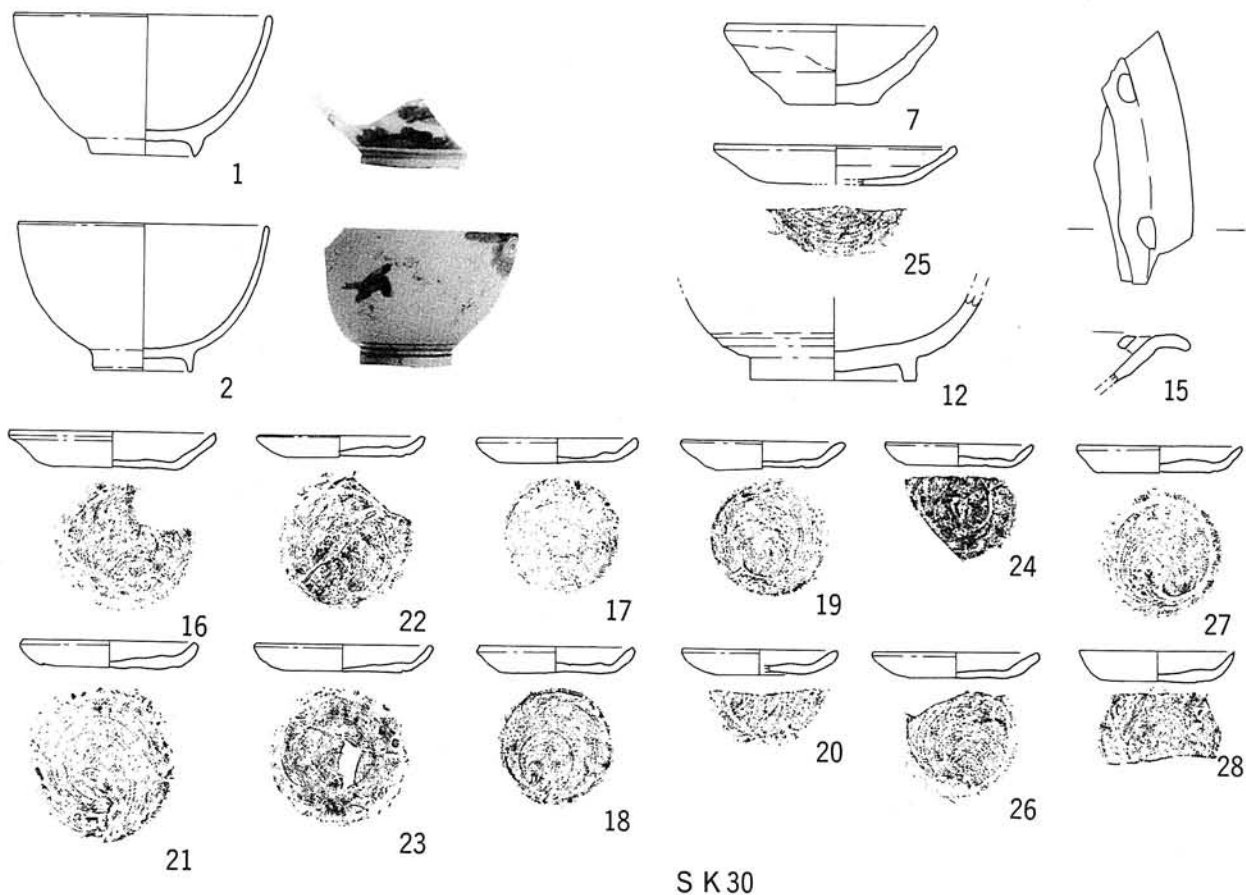
第47図 SK19, SK20, SK21, SK22 出土遺物



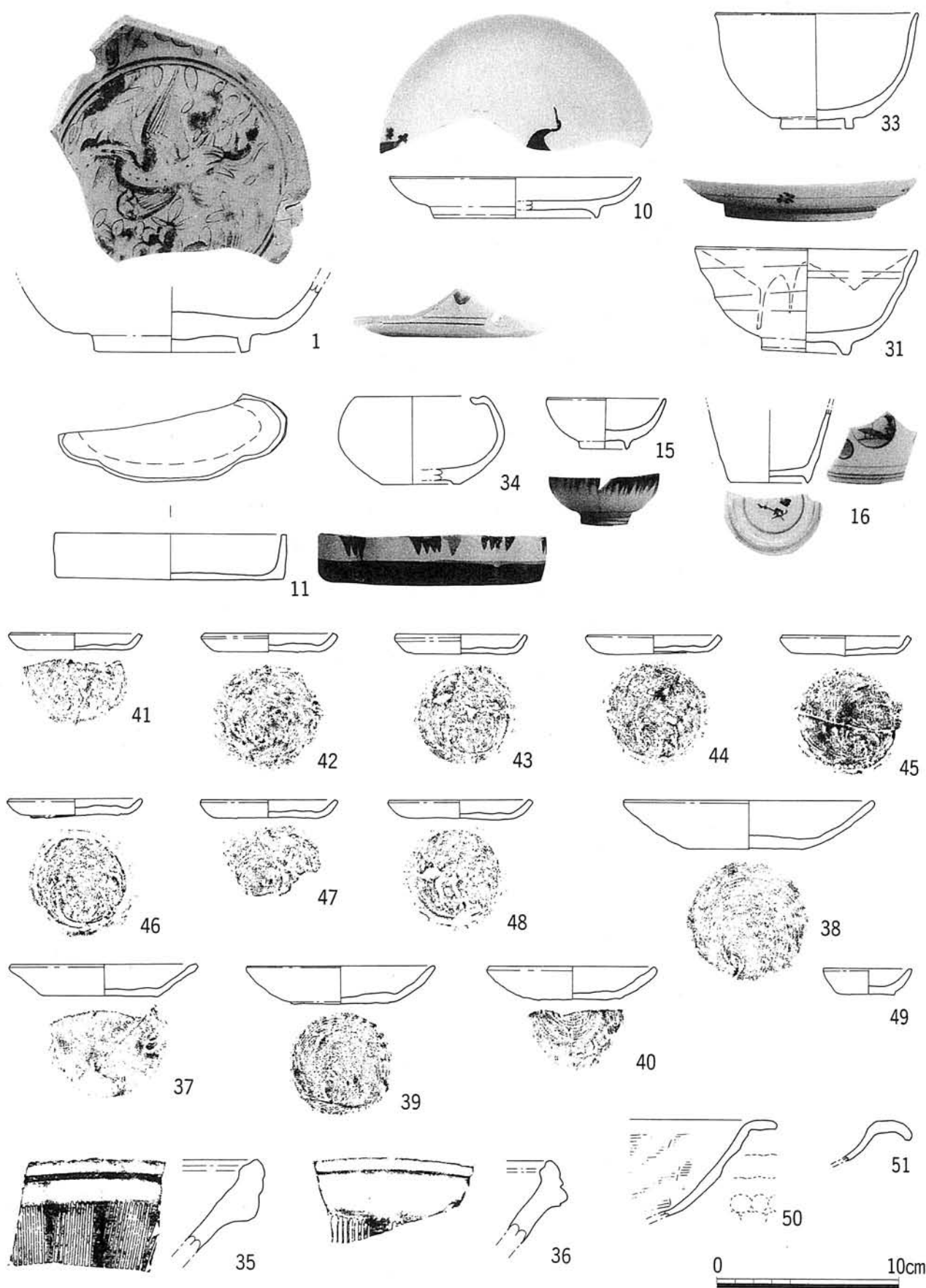
第48図 SK22 出土遺物



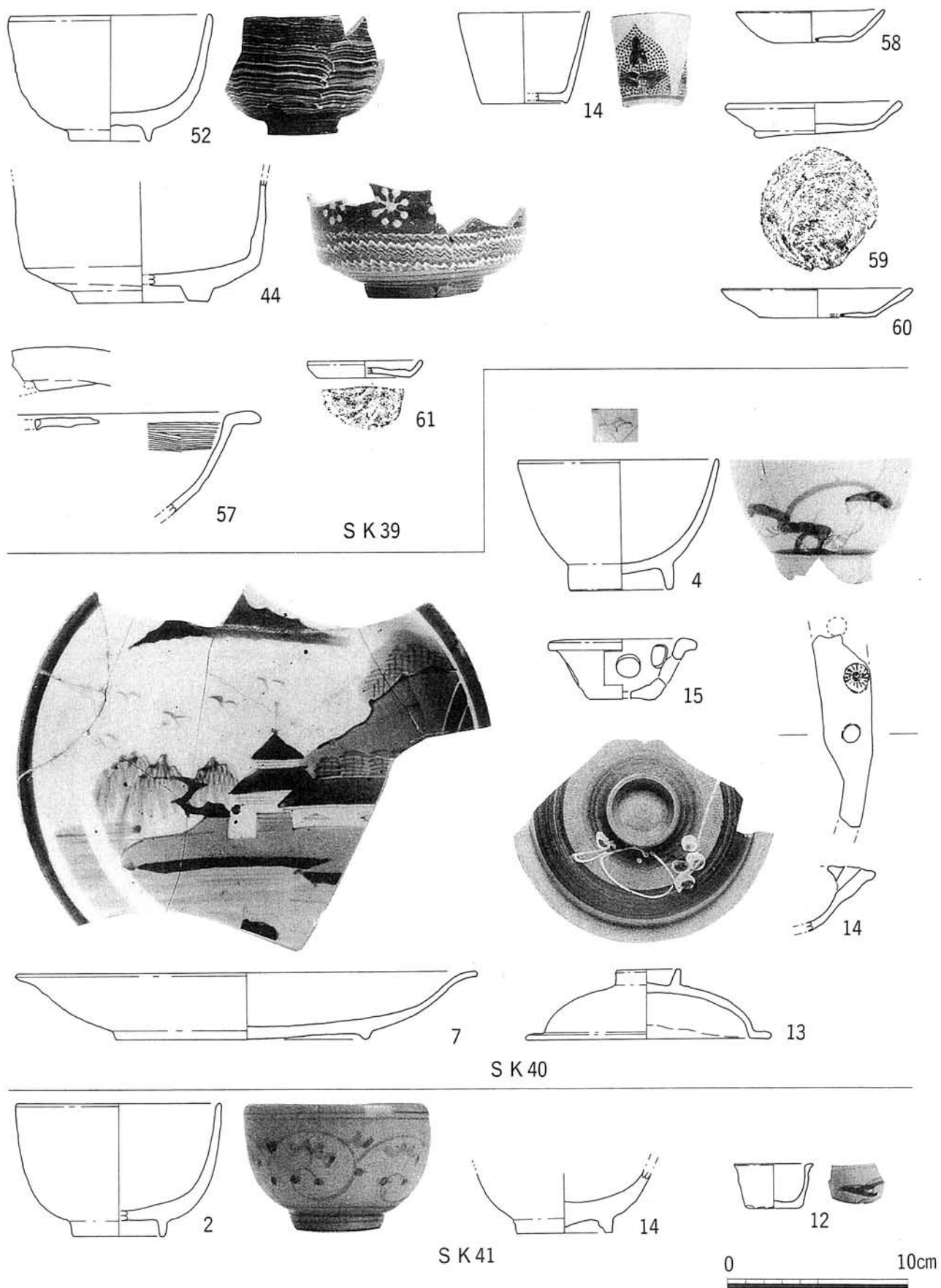
第49図 SK23, SK25, SK27, SK29 出土遺物



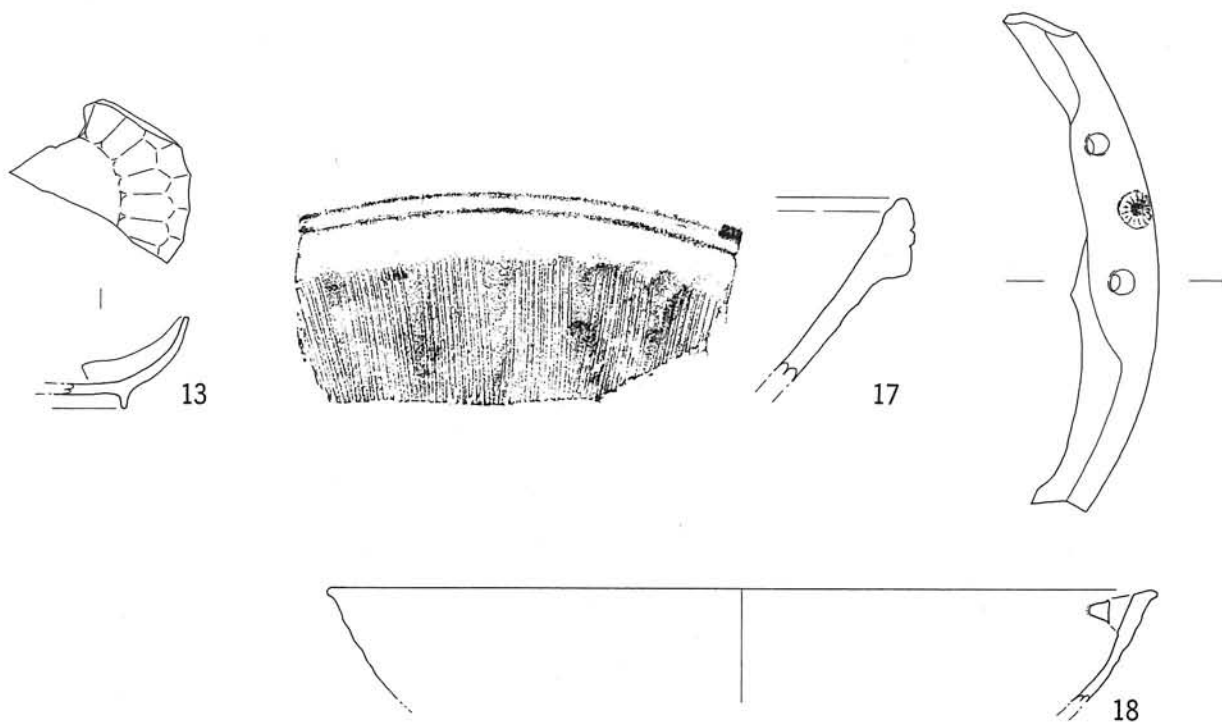
第50図 SK30, SK34, SK35, SK37 出土遺物



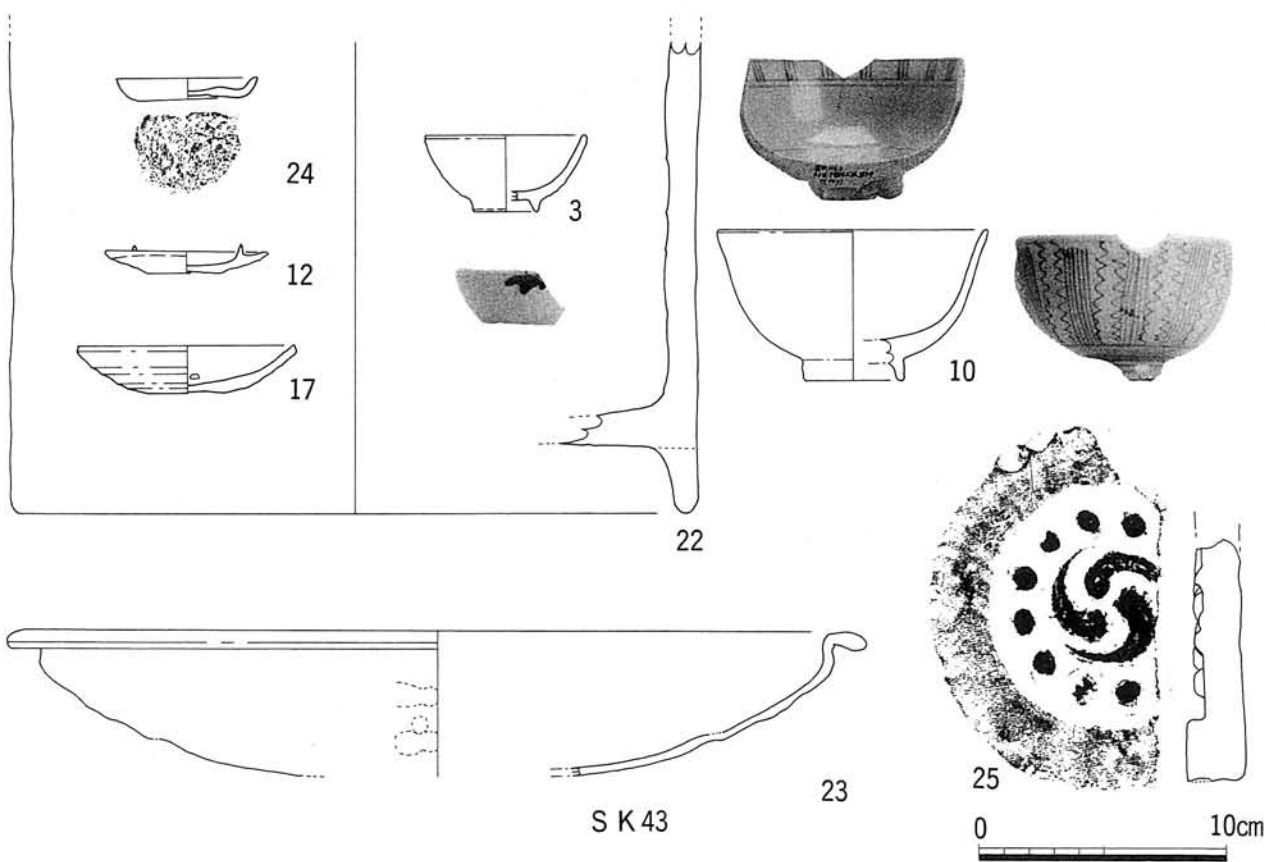
第51図 SK36 出土遺物



第52図 SK39, SK40, SK41 出土遺物

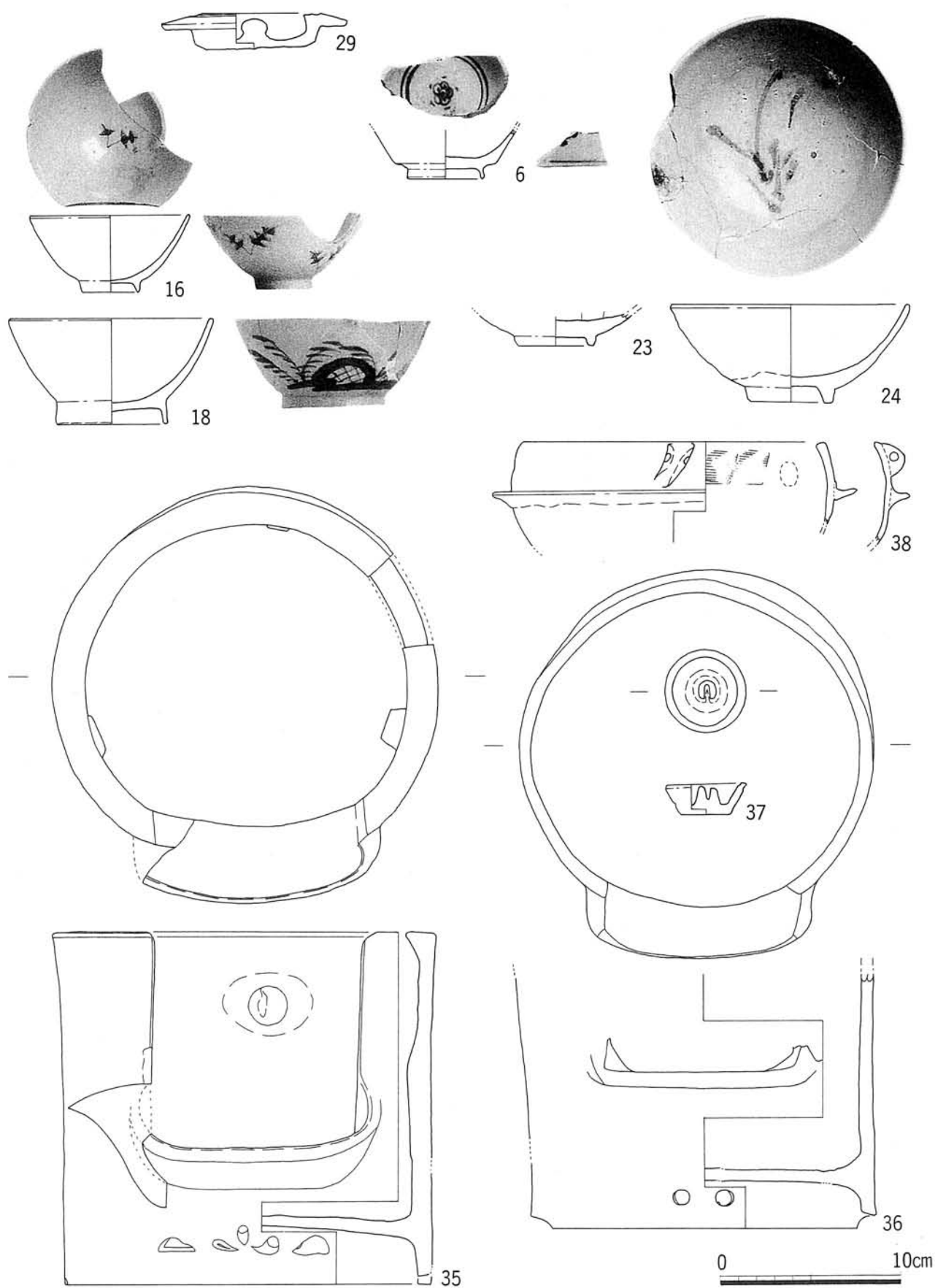


S K 41

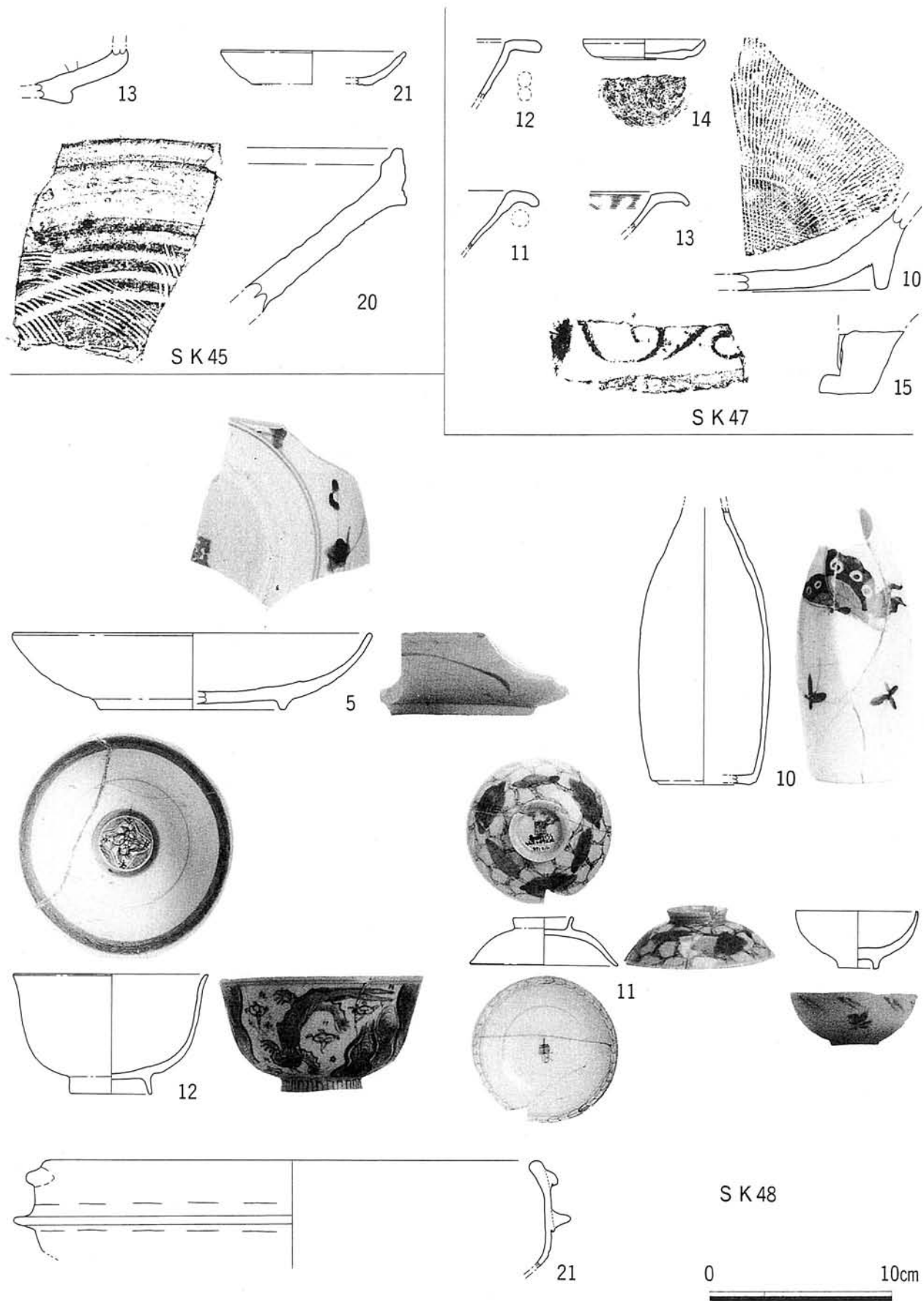


S K 43

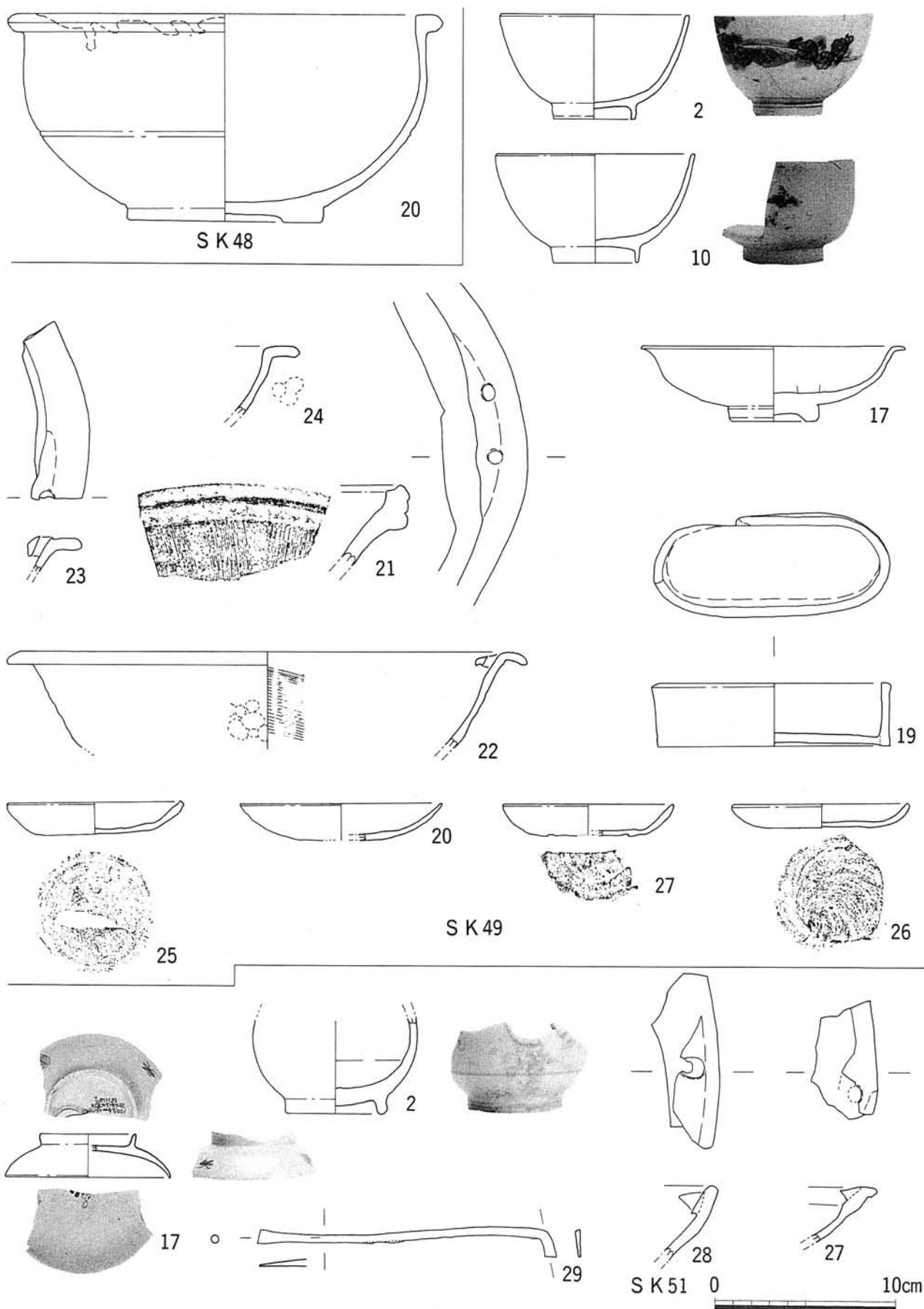
第53図 S K41, S K43 出土遺物



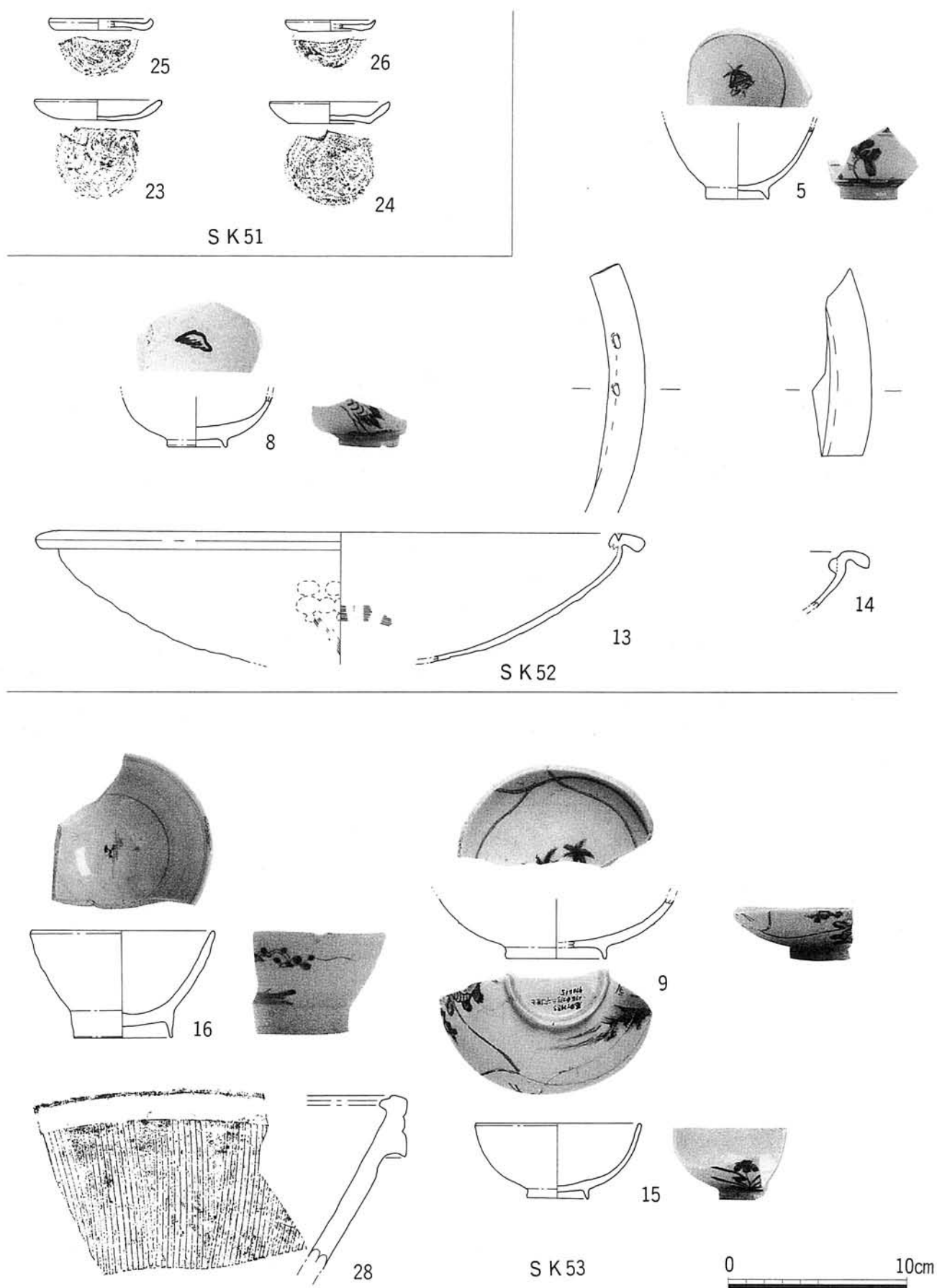
第54図 S K 44 出土遺物



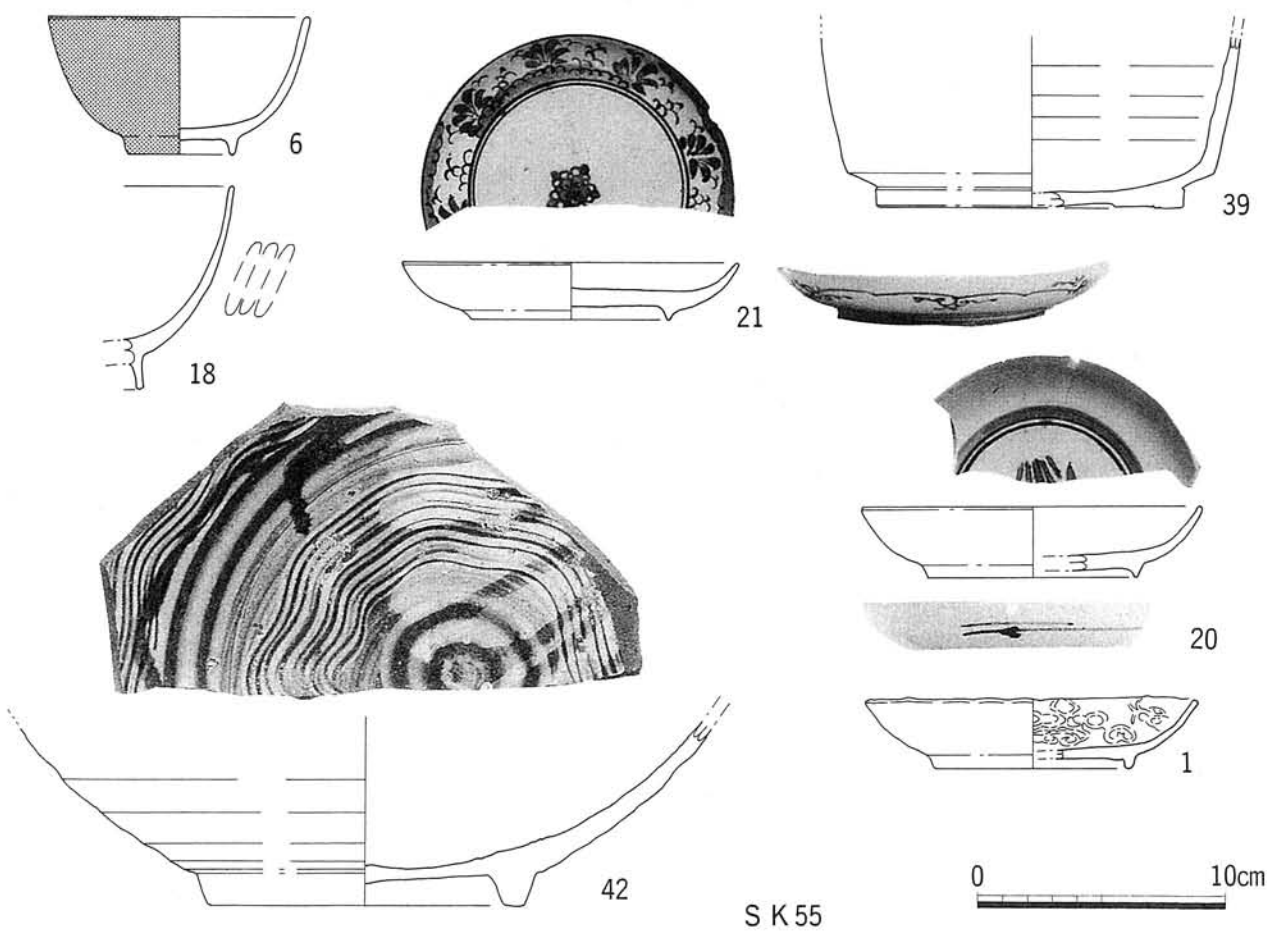
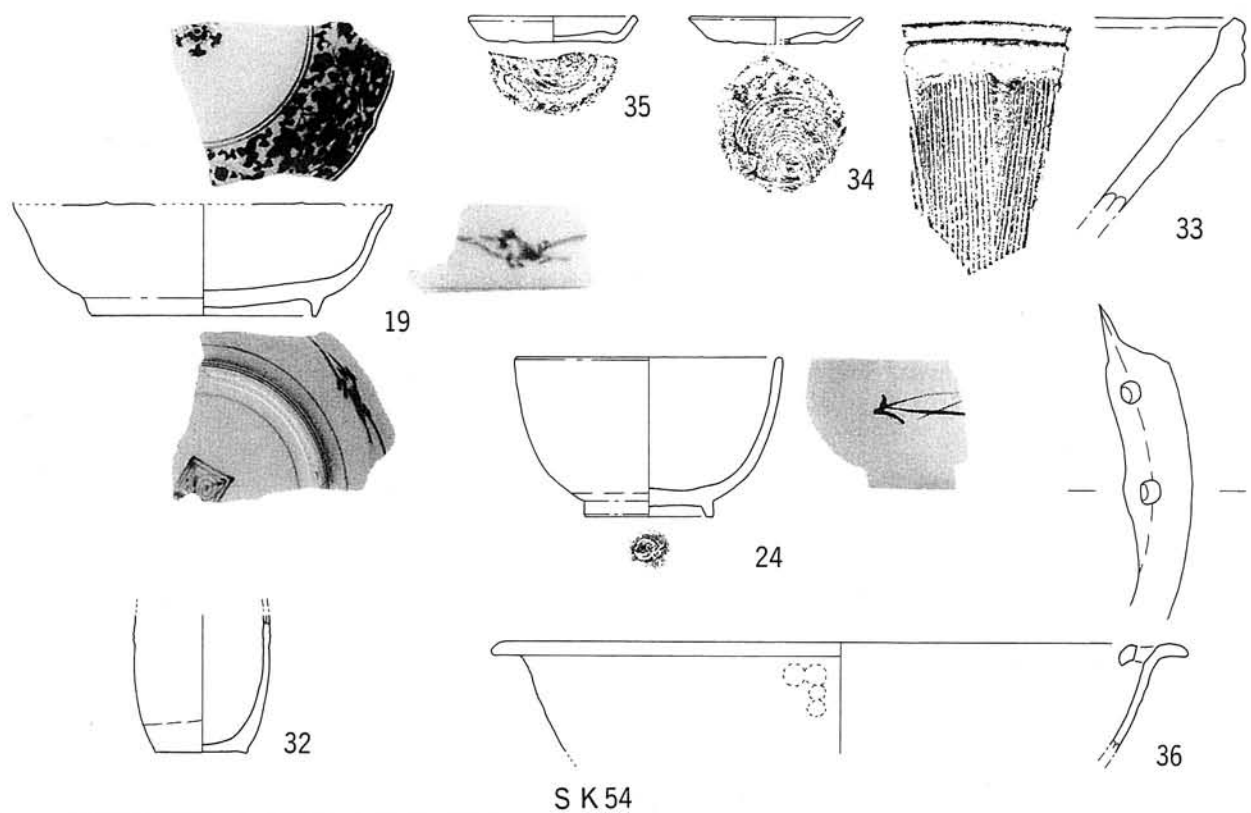
第55図 SK45, SK47, SK48 出土遺物



第56図 SK48, SK49, SK51 出土遺物

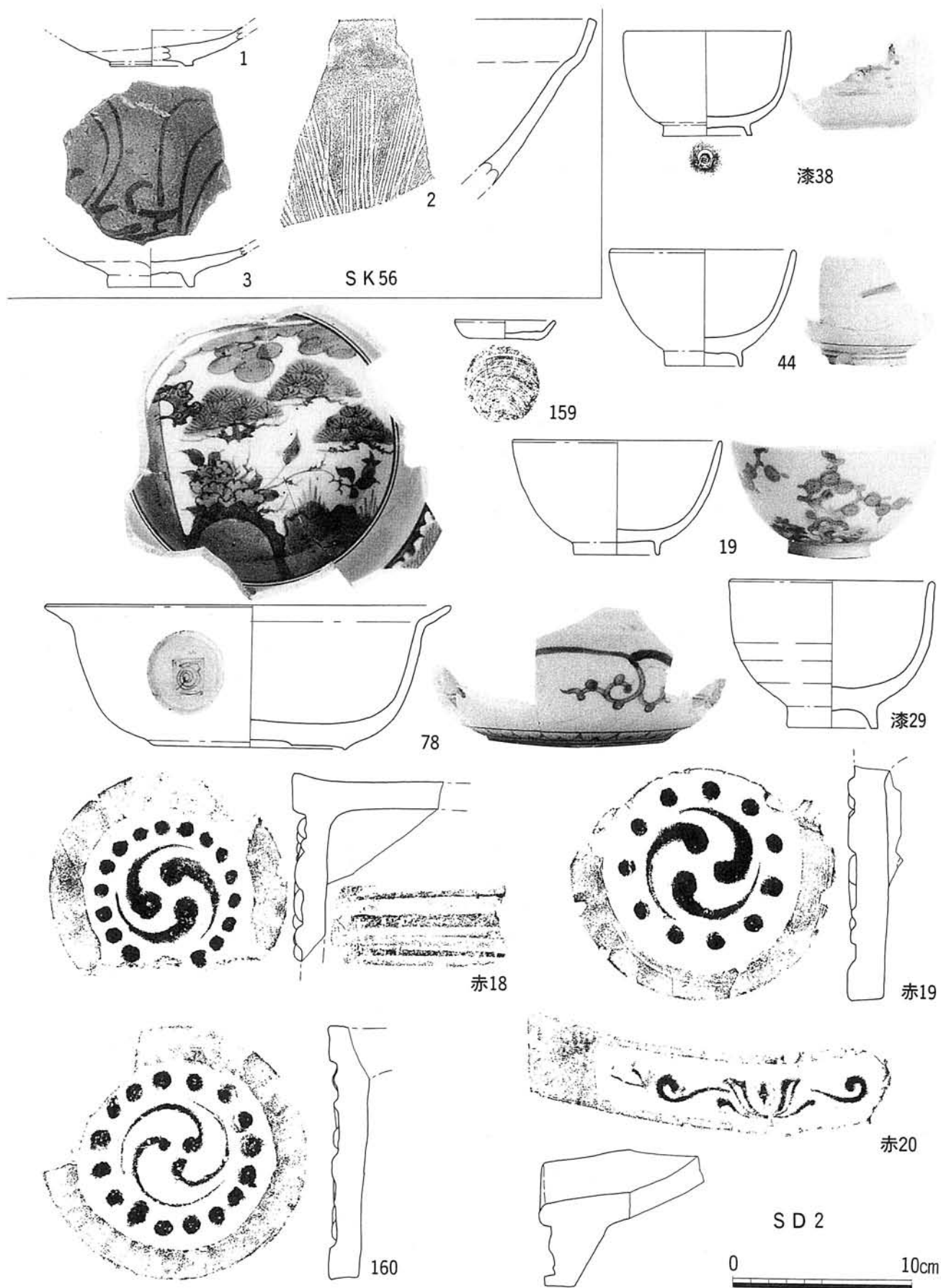


第57図 SK51, SK52, SK53 出土遺物

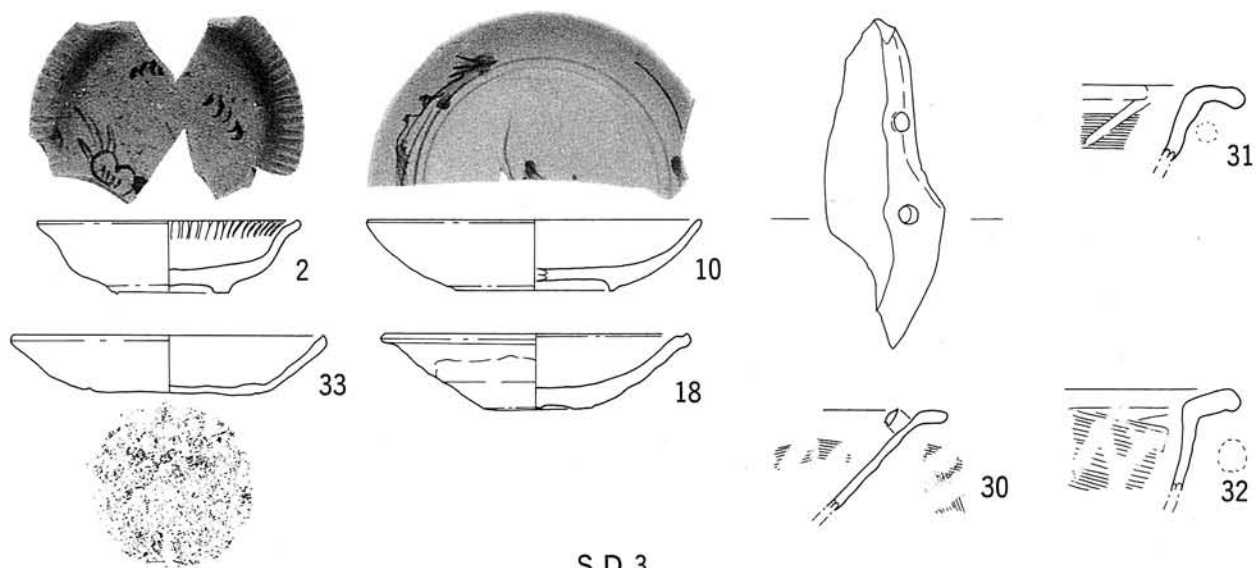


0 10cm

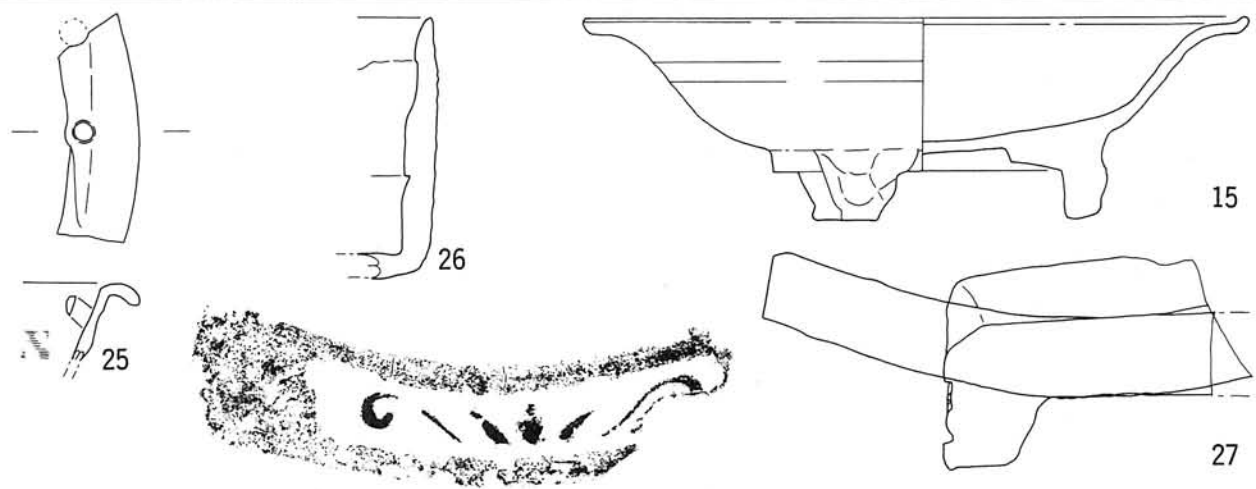
第58図 SK54, SK55 出土遺物



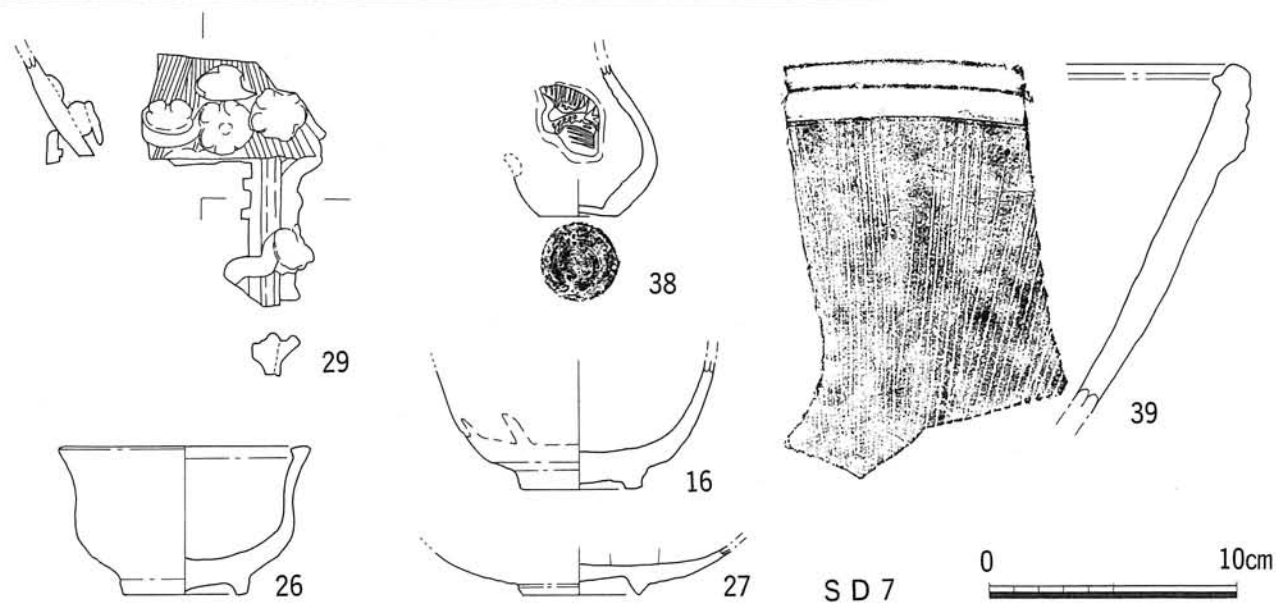
第59図 S K 56, S D 2 出土遺物



SD 3

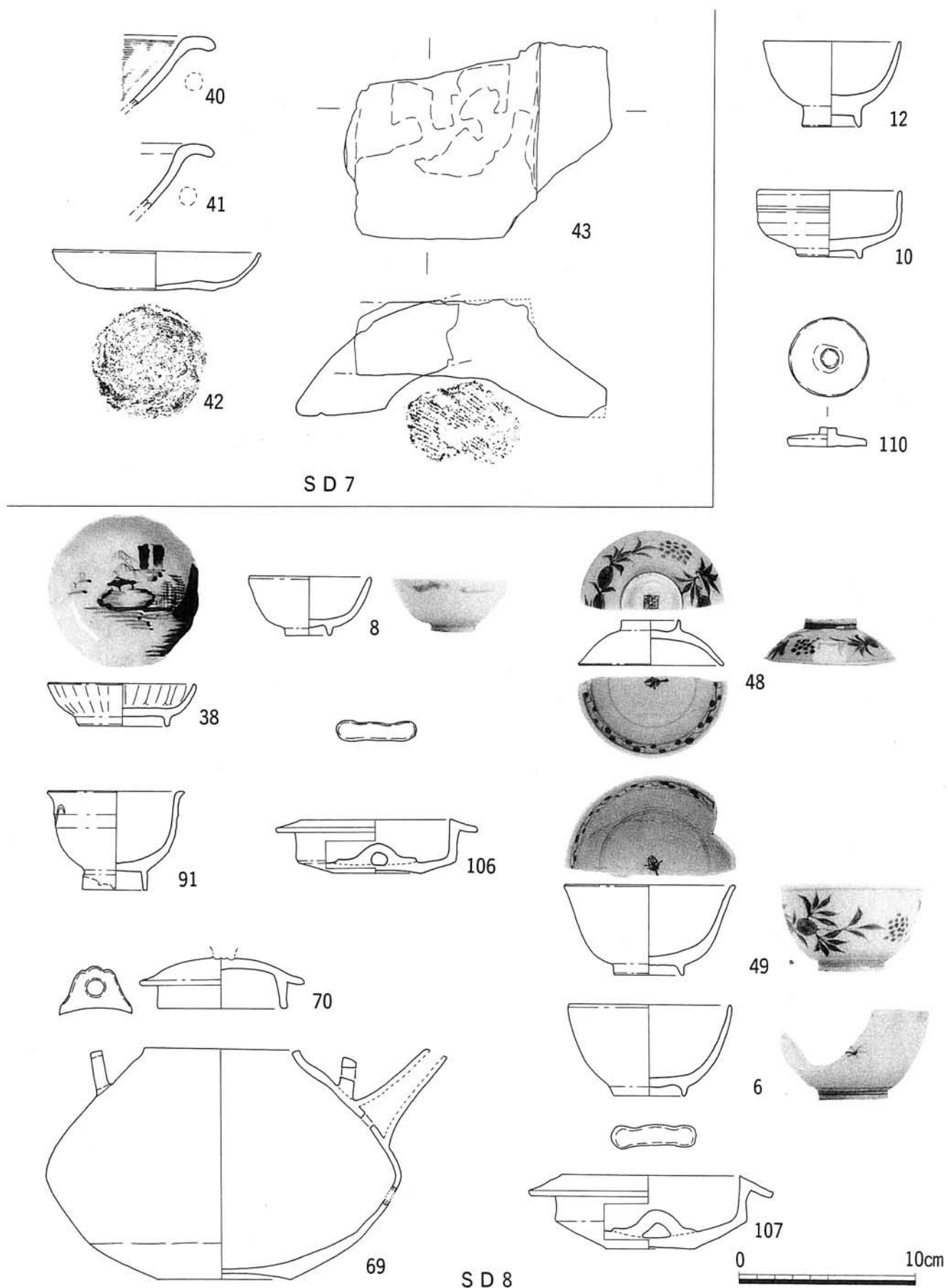


SD 4

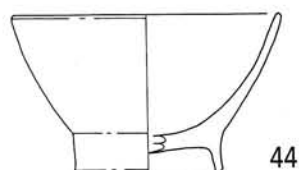
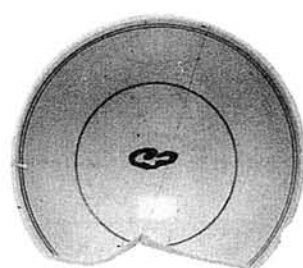


SD 7

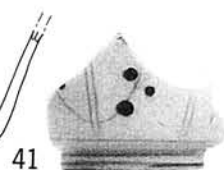
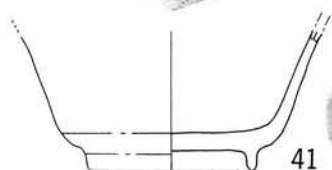
第60図 SD 3, SD 4, SD 7 出土遺物



第61図 SD 7, SD 8 出土遺物



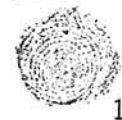
44



41



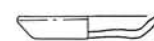
112



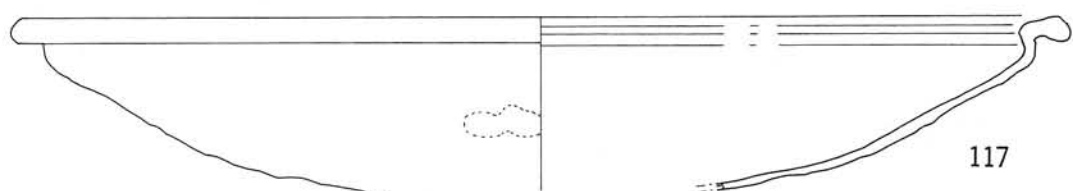
113



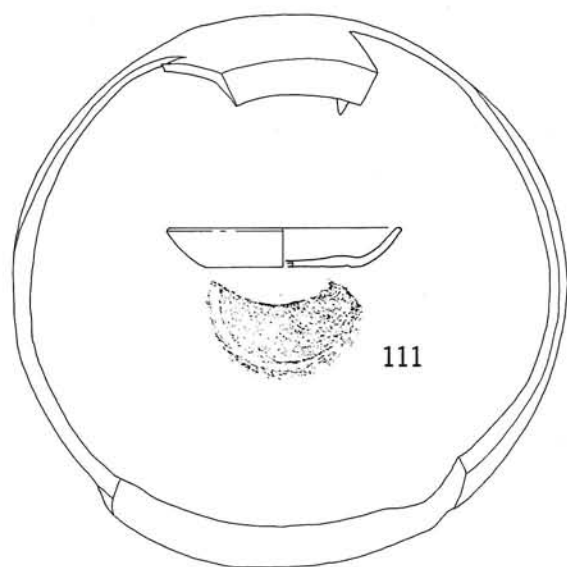
114



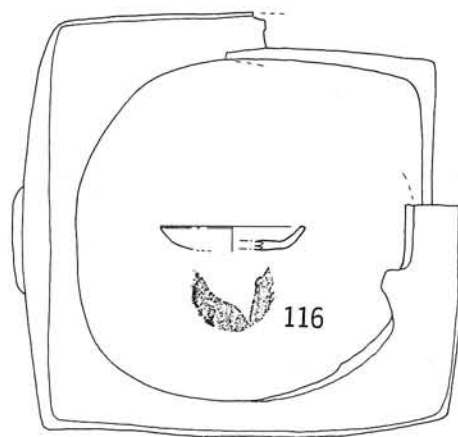
115



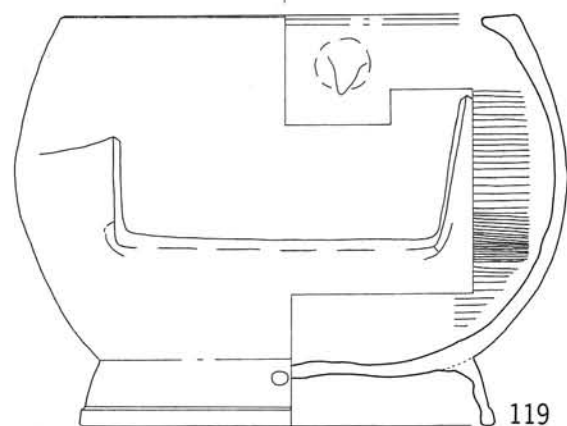
117



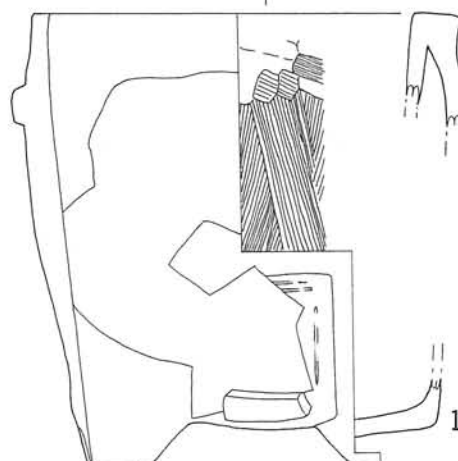
111



116



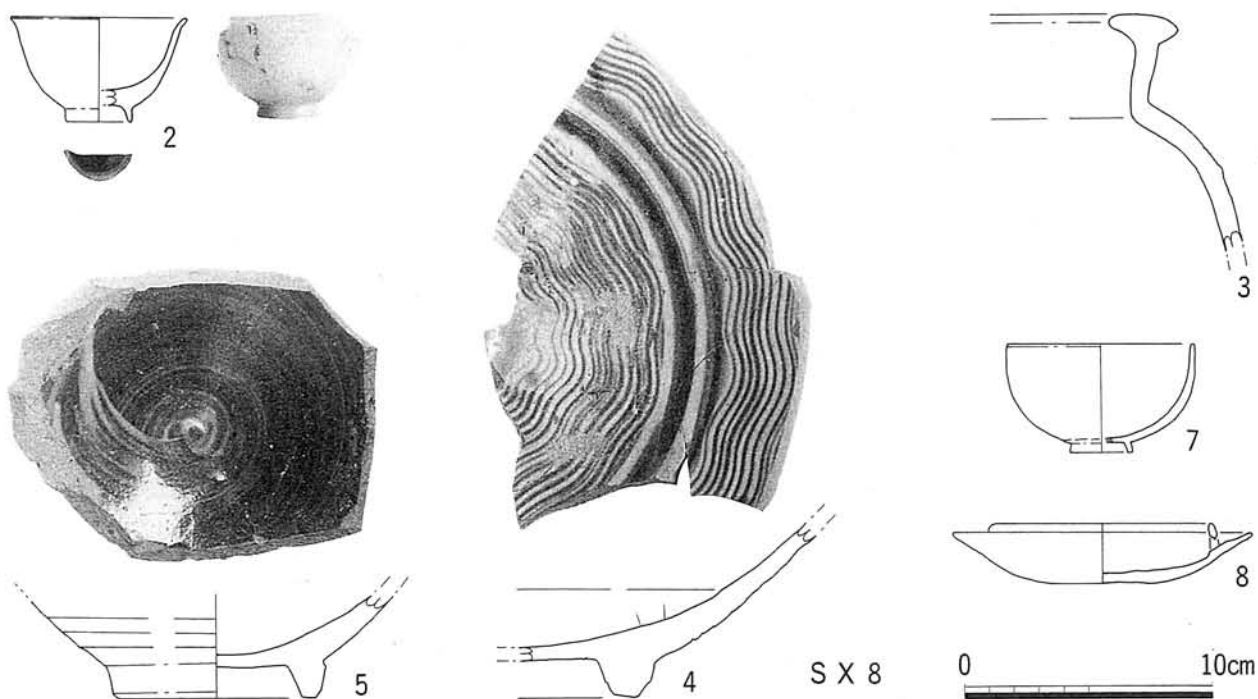
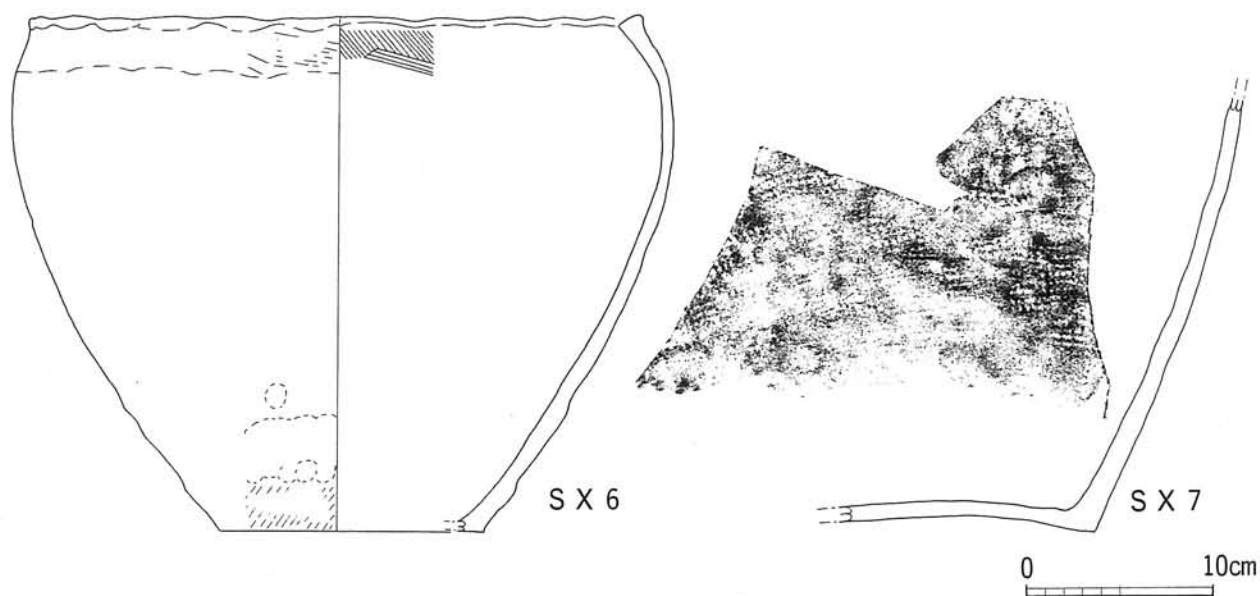
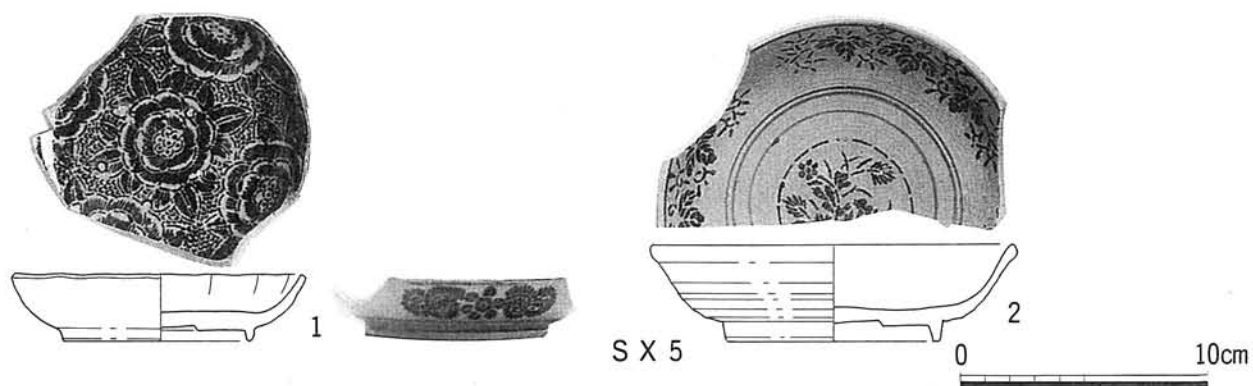
119



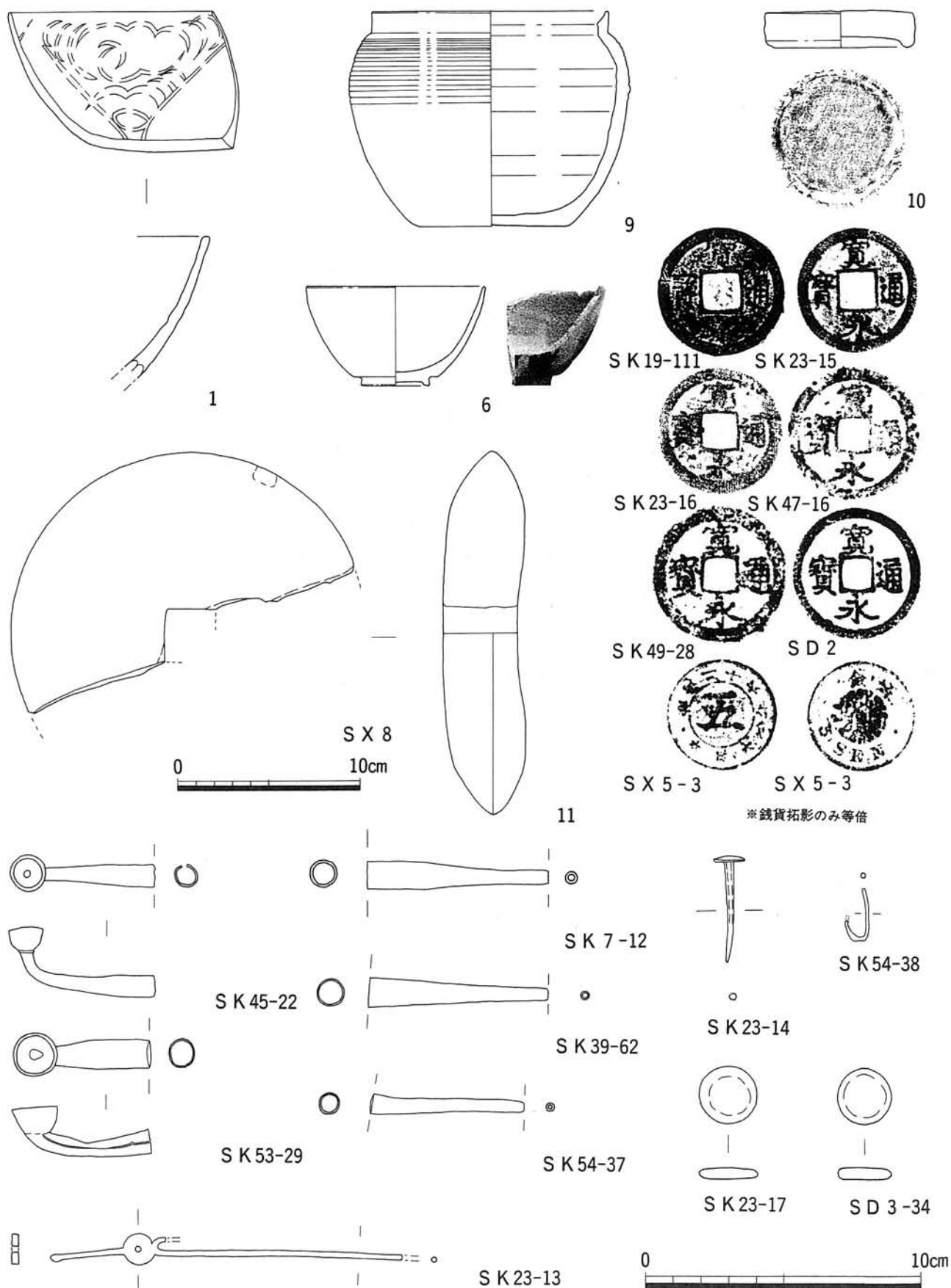
118



第62図 SD 8 出土遺物



第63図 SX5, SX6, SX7, SX8 出土遺物



第64図 SX 8 出土遺物等

Ⅳ ま と め

(1) 遺構について

本遺跡からは土坑56基、溝状遺構13本、建物跡4軒、井戸3基、その他の遺構11が確認された。そのうち、時期の明確でない遺構もあるが、多くの遺構については遺構内から出土した陶磁器の生産年代や切り合い関係からその時期を推測することができた。大部分の遺構については出土陶磁器のうち最も新しいものによってその時期を判断しているため、必然的にその遺構の廃絶時期の上限を示していることになり、必ずしもその遺構が機能していた時期を表しているものではないことを付け加えておく。

時期を推定できる遺構をまとめると以下の表のようになる。

表－2 遺構年代表

時期区分	年 代	遺 構
○ 「 」 、 ・ ヲ ア イ	17世紀初め	SK56
	17世紀前半	SK45
	1670	SD3
	17世紀末	SK25
	18世紀初め ～前半	SK30
	18世紀前半	(SK20)・(SK28)・(SK29)・SK36・(SK37)・ SK39・(SK41)・(SK47)・(SK49)・SK54・S K55・SD7
	18世紀後半	(SK24)・(SK35)
	1780	SK15・SK17・SK18
	1800	SK16・SK22・SX8
	19世紀初め	SK19・SE2・(SE3)
	19世紀前半	(SK51)・SJ52・SK53・(SD11)
	1850	DK40
	幕末	SK1・(SK7)・SK8・SK9・SK12・(SK27)・ SK43・SK48・SD2・SD8・SX2
	近代。	SK21・SD1・SD5・SD6・SD9・SD10・ SD12・SB3・SB4・SX5
	近代「	SK6・SD10・SB1・SB2・SE1・SX4・ SX10

()をつけたものは出土遺物の数が少なかったため明確にしがたかった遺構である。破線より右の遺構についてはある程度の幅を持った時期しか特定できなかった遺構で、年代的には左の「年代」欄にほぼ相当している。

最も古い遺構は17世紀初頭のSK56である。唯一の福島期の遺構であると思われる。絵図史料等からは、この地域の開発が本格的に始まるのは浅野期になってからと考えられるが、福島期にも多少の人の出入りはあったようである。逆に「寛永年間広島城下図」⁽¹⁾等の絵図では浅野期の早い時期

からこの地域は武家屋敷地としての地割りが行われていたことが知られるのであるが、17世紀代の遺構はわずかししか確認できなかった。18世紀前半になると遺構の数が急増する。しかしながらSD7を除いた他の土坑はすべて調査区西端部に集中している。また、17世紀代からの遺構をすべて含めてもSD3・SD7の2本の溝状遺構以外はここへ集中していることになる。

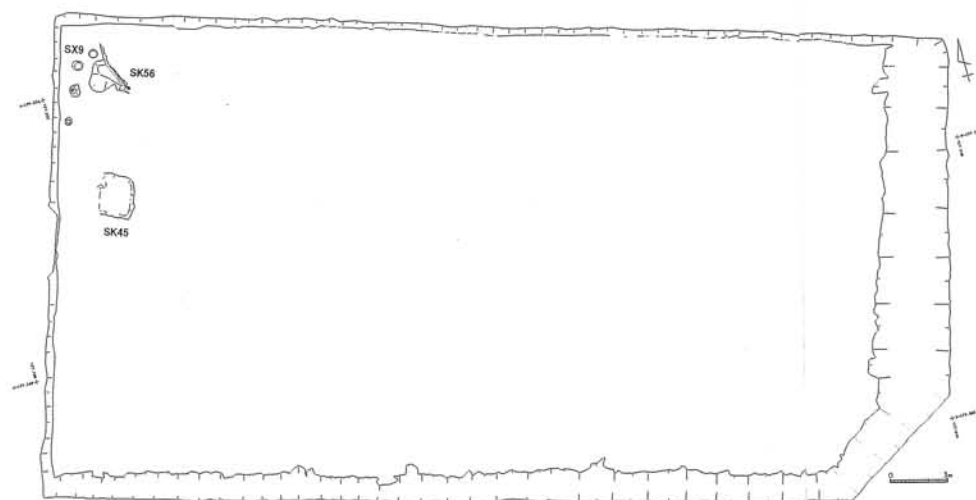
1729年の大火の後、城中への類焼を防ぐため、この地域の侍屋敷を撤去したとの記事が見られる⁽²⁾ことからこの頃までには侍屋敷が設けられ人の居住が始まっていたことは確実であるが、出土状況からみる限りそれは18世紀に入ってからであろう。

18世紀末から19世紀初めになると調査区北西部に土坑が集中してつくられる。SK15・SK16・SK17・SK18・SK19は出土陶磁器からは若干の時期差を認めているが、いずれも近接しており出土状況や規模も類似しており、同時につくられたものである可能性も高い。いずれにしろ20～30年までの短期間につくられたものである。また、SK22・SK35・SX8・SE2・SE3の各遺構もいずれも調査区西側につくられている。19世紀前半をとおしてこの傾向はかわらない。

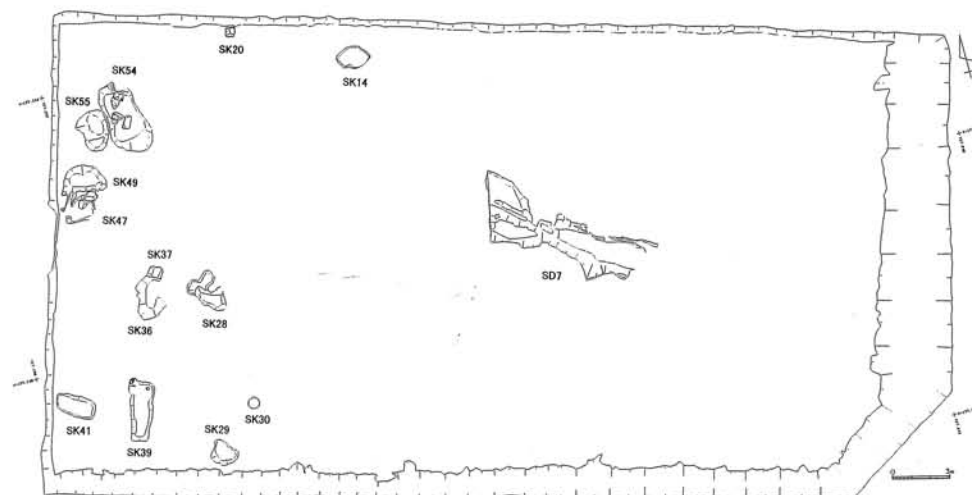
ところが幕末になると、SK1・SK7・SK9・SD8などが調査区東部から中央部に現れる。これらに加えてSK8・SK12・SD2なども近代の遺物を若干含むものの幕末から近代初頭に機能もしくは埋め戻されたものと考えられ、この時期明らかにこの地域の地割りが変化したことが例える。そしてそれは明らかに「松原講武所」の設置によるものである。「松原講武所」は1864年に設けられ、1871年まではその存在が確認できるため、⁽³⁾ これらの遺構の上下限はこの頃と見てよい。特にSD2は出土位置や規模・方向、出土遺物からみても「松原講武所」に伴うものであり、おそらく「松原講武所」の東端を区画する溝であったものと思われる。また、SK27・SK43・SK48など調査区西側部分にも引続き遺構が認められるが、これらは前代までの武家屋敷地に伴うものである可能性が高い。

このように近世から近代初頭には武家屋敷地から「松原講武所」であった当該地区であるが、その後広島が軍都へと変貌を遂げるにつれて軍用地となった。いつから軍の施設が置かれるようになったのかは明確でないが、おそらく北練兵場が置かれた1875年⁽⁴⁾頃であろう。したがって当遺跡で出土した近代以降の遺構についてはおそらくすべて軍の施設に関するものと考えられる。

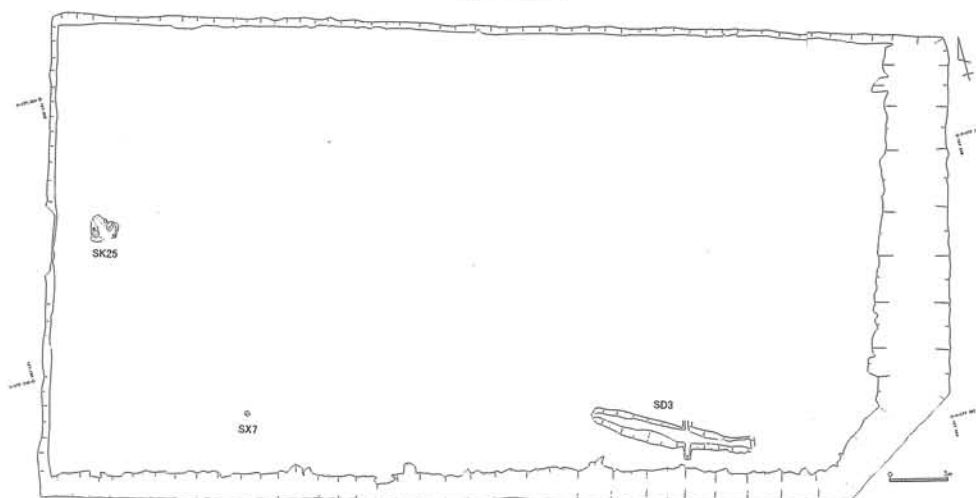
遺構の章で前述したことをまとめるとSD1・SD5・SD6はもともと1本の石組溝と考えられ、SB3の周囲の雨落ち溝の北東部に接続する。また、SB3・SB4及びSX5・SD9・SD12は一体のものとしてつくられている。すなわち近代以降のいずれかの時期にこれらの遺構が同時に存在していたことは間違いない。時期的にはSX5から明治26年の5銭硬貨が出土していること、SB4の瓦敷きの埋め土から昭和の磁器が出土していること、SB4から続く瓦敷きがSX5に接続する部分に明治30～40年頃のものと思われるレンガが埋められていることなどから考えて明治中頃から昭和期頃の遺構と考えられる。また、これらの遺構の中でSB3・SB4・SD9は城の内堀や正方位とは無関係な方向を向いている。1894（明治27）年の地図⁽⁵⁾では当該地に射的場が描かれており、その方向がこれらの遺構の向きと一致していることがわかる。時期的にも合致することからこうした施設に伴うものである可能性もある。



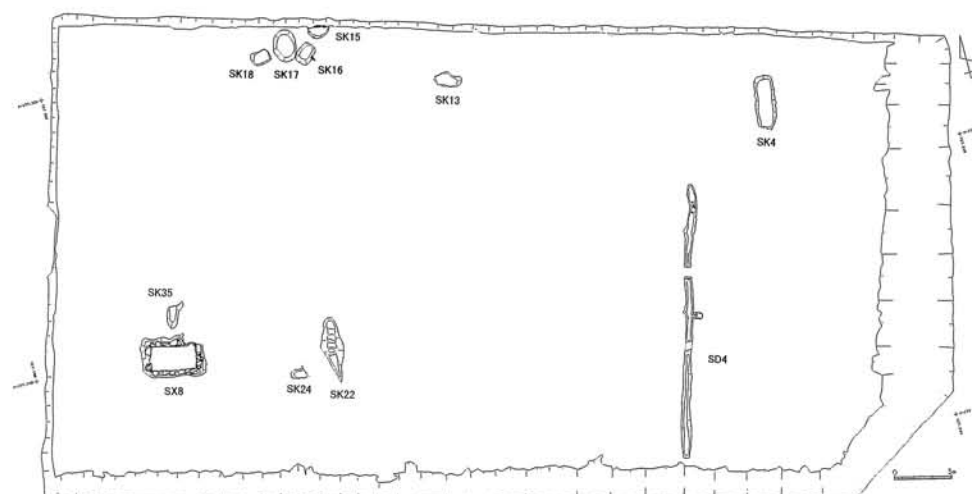
I期 17世紀前半



III期 18世紀前半

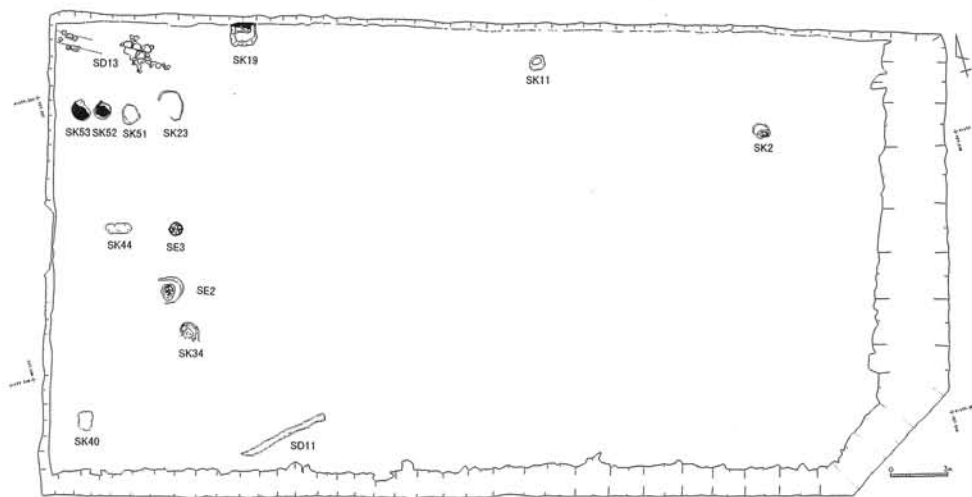


II期 17世紀後半

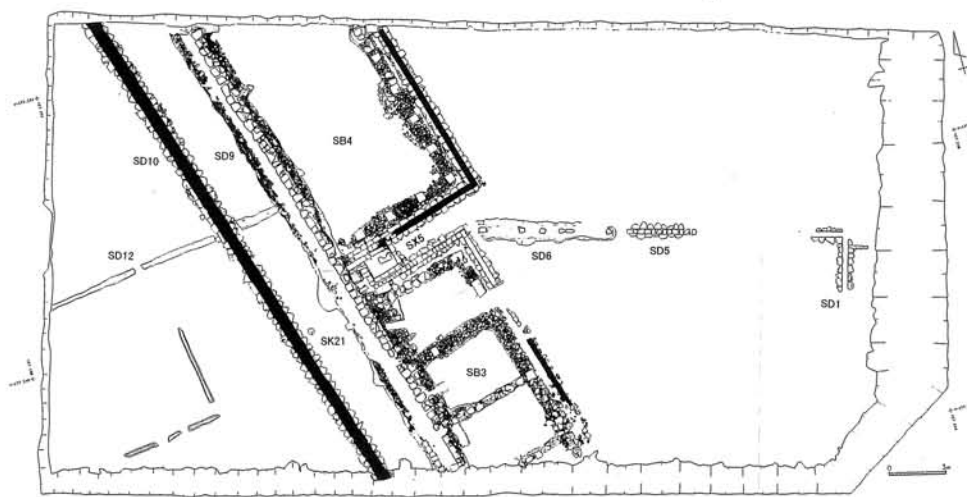


IV期 18世紀後半

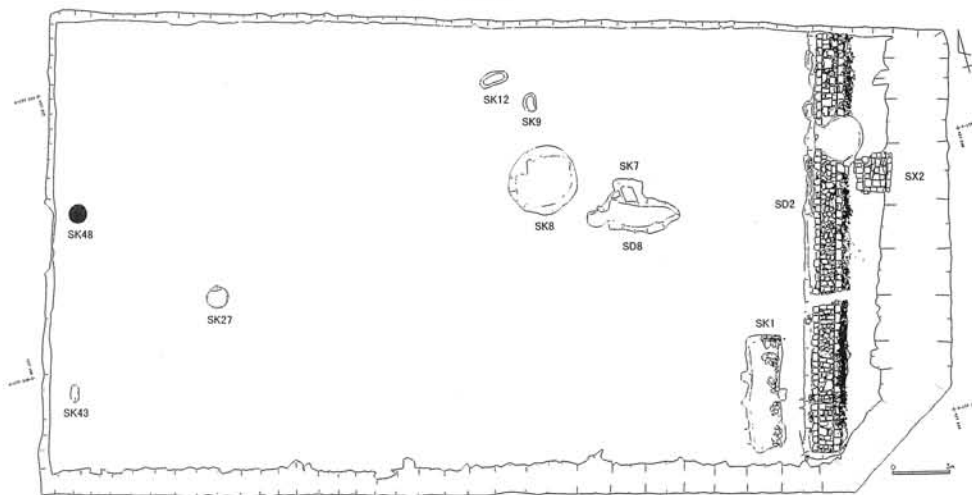
第65図 時期別遺構配置図(1)



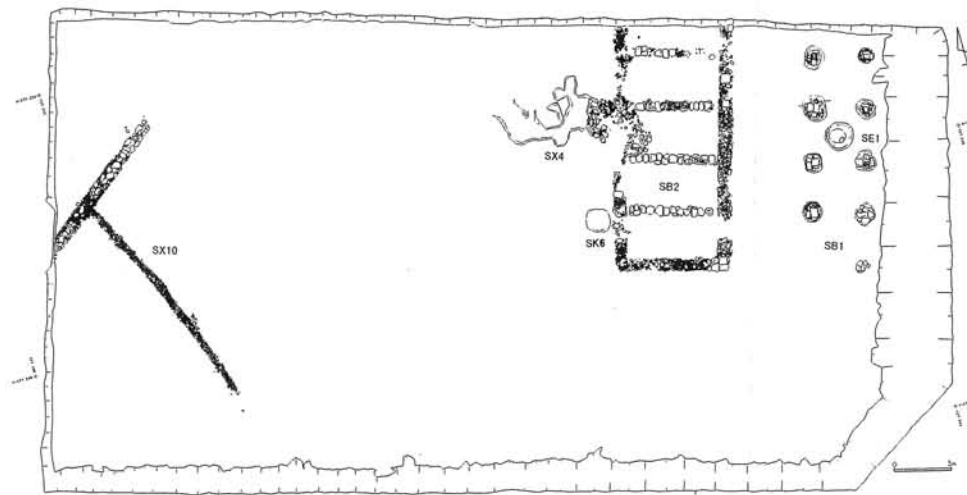
V期 19世紀前半



VII期 近代I期



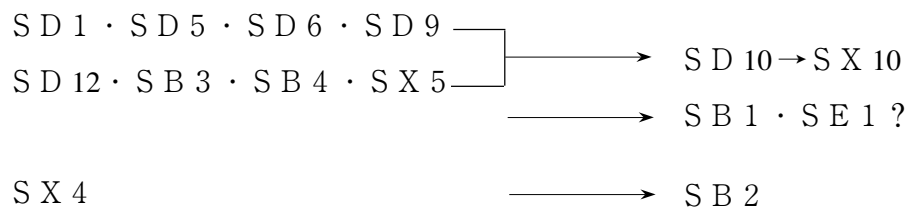
VI期 幕末



VIII期 近代II期

第66図 時期別遺構配置図(2)

その他、S B 1とS E 1はその位置関係から同時期に存在した可能性もあるが明確でない。またS D 1との前後関係も明確でないので前述の遺構群との前後関係も明確にしない。しかし、S B 1は方向はS B 2と一致するためこれと同時期であった可能性はある。S B 2とS D 5の関係についても明確ではないが、S B 2の内側にだけS D 5が遺存していたことから、S D 5が先行し、その後S B 2がつくられたと判断した。また、S D 10は土層観察の結果S D 9の後につくられており、S X 10はS D 10の後つくられている。S X 4はS B 2の建てられる前に整地したものと思われる。こうしたことから



という順で建て替えが行われたものと思われる。

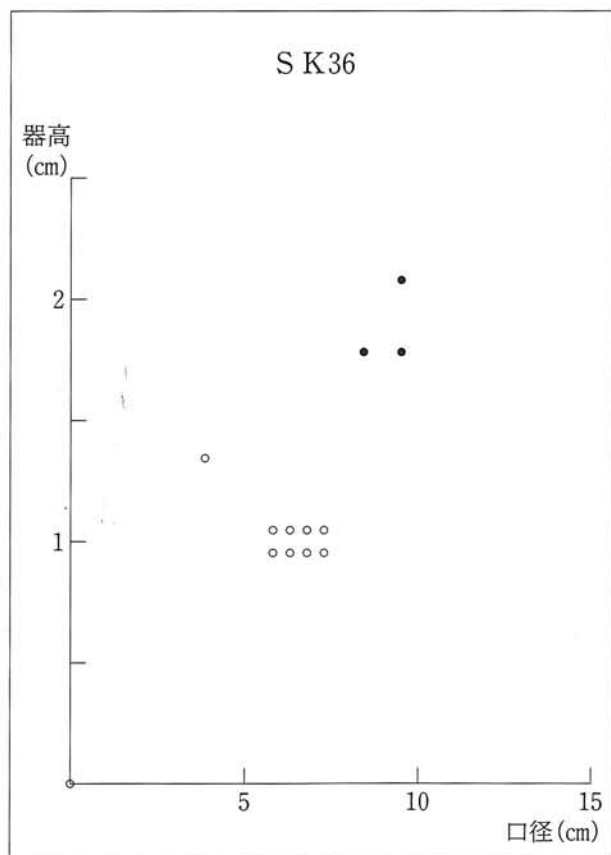
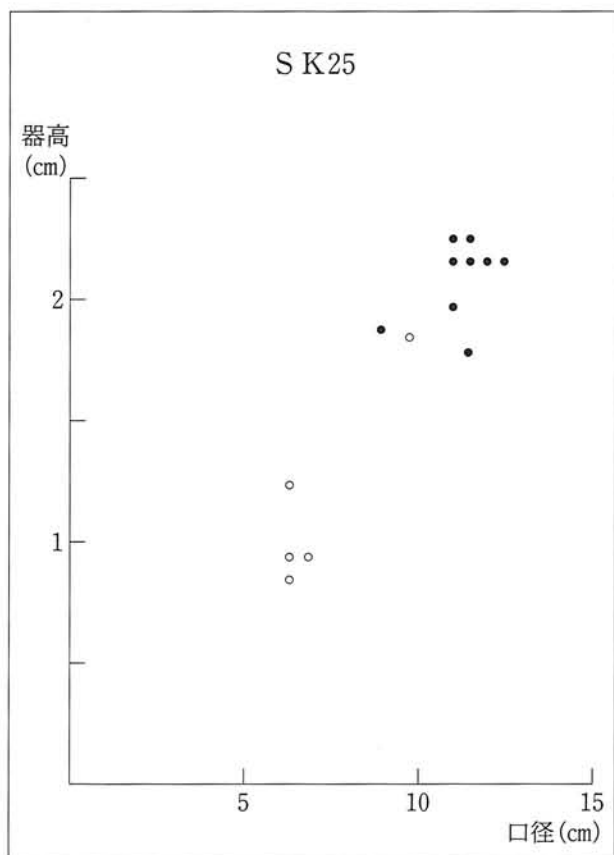
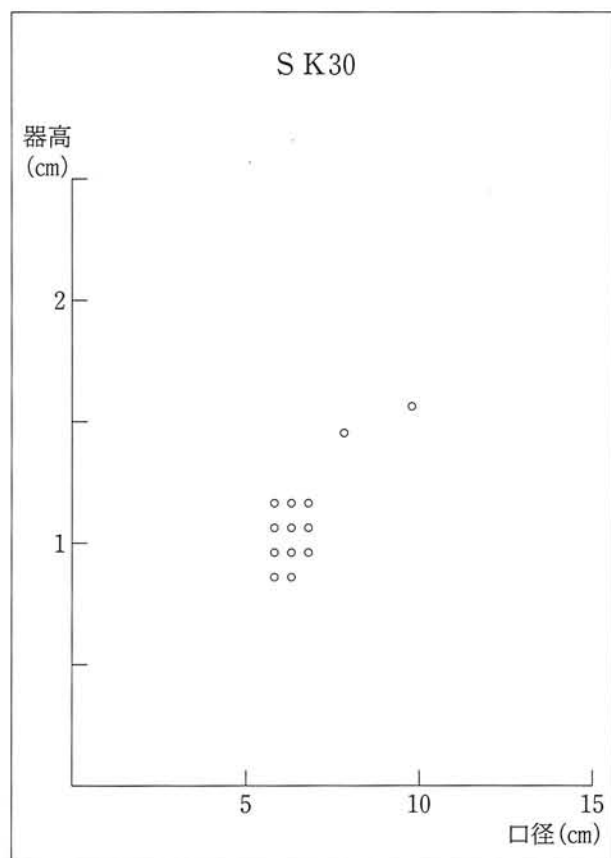
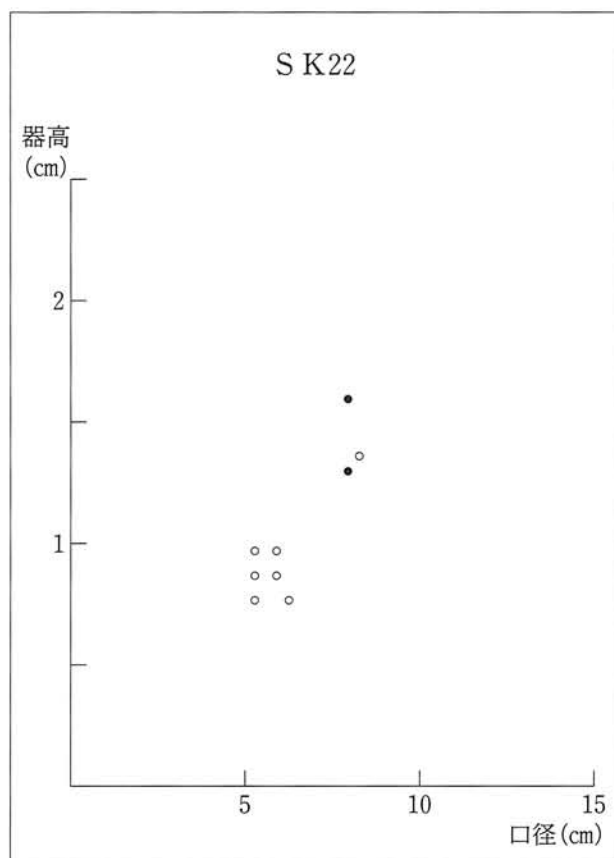
(2) 土師質瓦質皿について

本遺跡から出土した遺物のうちここではこれまで全く検討されてこなかった近世の土師質瓦質土器について、特に皿と内耳土器について考察する。

土師質瓦質の皿についてはその用途についていくつかのことが考えられる。まず食膳具としての用途である。2つ目は灯明皿としての用途である。今回本遺跡からは大量の土師質瓦質皿が出土しているが、これらのうちには食膳具としては余りにも小さくかつ浅いものがある。これは幕末になるほど顕著になるが、例えばS K 51-26は復元口径が4.9cm, 復元底径は4.4cm, 器高はわずか0.6cmしかない。これでは食膳具としての機能を果たせまい。また、灯明皿としての機能であるが、本遺跡出土の遺物には口縁部に大量のススが付着する一群があり、これらは間違いなく灯明皿として使用されたものであろう。しかし一方でススが全く付着しないもの、あるいはおそらく灯明芯の痕と思われるが1, 2か所にわずかにススが付着しすぐに廃棄されたような一群がある。

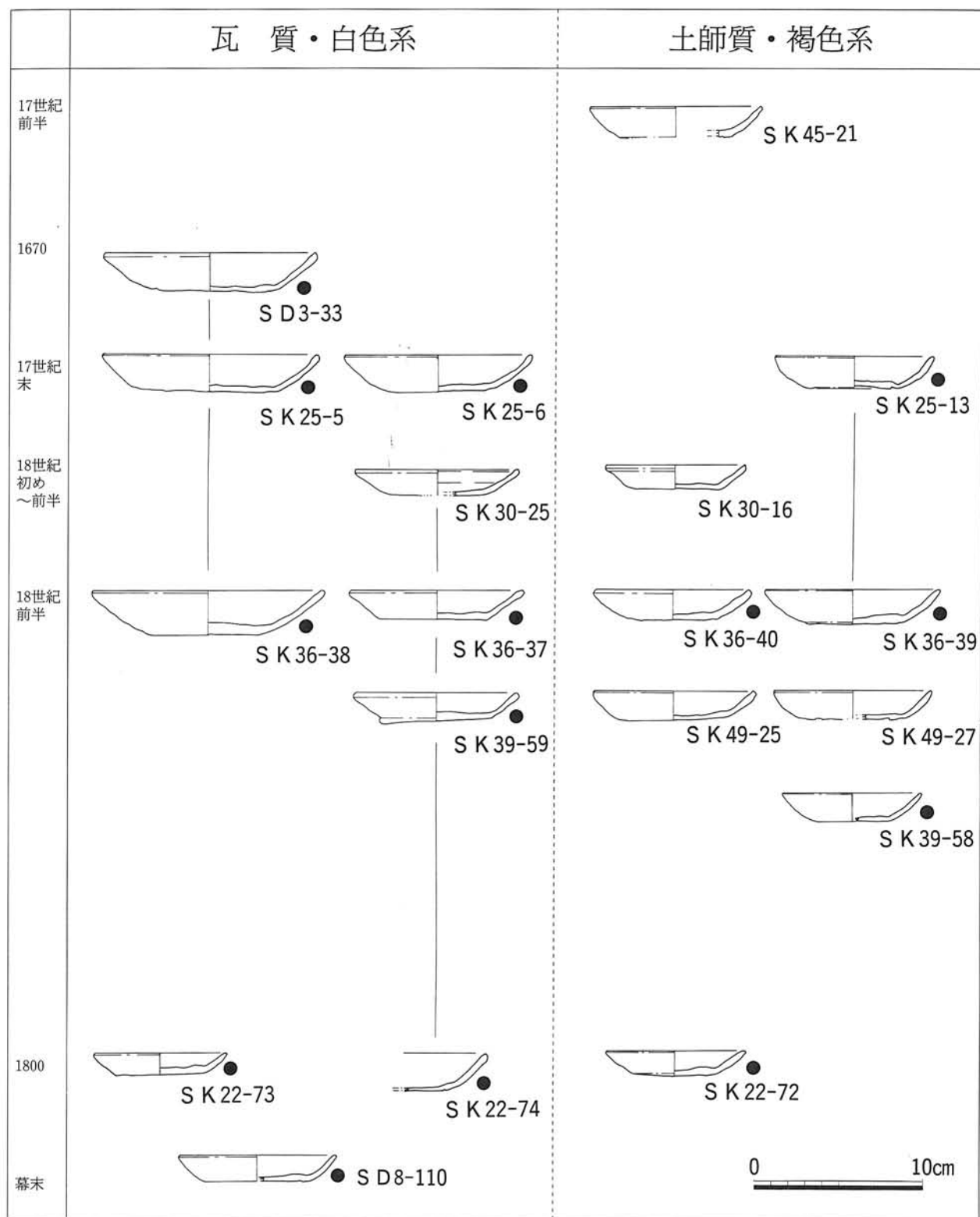
また、本遺跡の遺構から出土する土師質瓦質皿は口径が比較的大きく器高が高く、口縁部に大量のススが付着するものと、比較的口径が小さく器高が低く、口縁部にはススが全く付着しないか、しても少量のものの2種類がセットになっていることが多い。10点以上の実測可能な土師質瓦質皿の出土したS K 22, S K 25, S K 30, S K 36はすべてこうした傾向にある。その他の遺構でも同様であり、こうした傾向は本遺跡で遺構の多い17世紀末から幕末まで通して見られる。

このことは前述の機能に関する検討とあわせて考えると本遺跡出土の土師質瓦質皿には2種類の用途を持ったものが常に併存しているといえることができる。1つは明らかに灯明皿である。このグループの皿は前述のように比較的口径が大きく器高が高い。他の一群についてはいちがいにその機能を決めがたい。しかし、「土師質土器供膳形態は日常の食事に使われた食器ではなく、遺構を埋め戻す際の儀式の一環として埋められた土器」⁽⁶⁾との指摘や、岡遺跡の地鎮祭遺構⁽⁷⁾での土師質皿の使

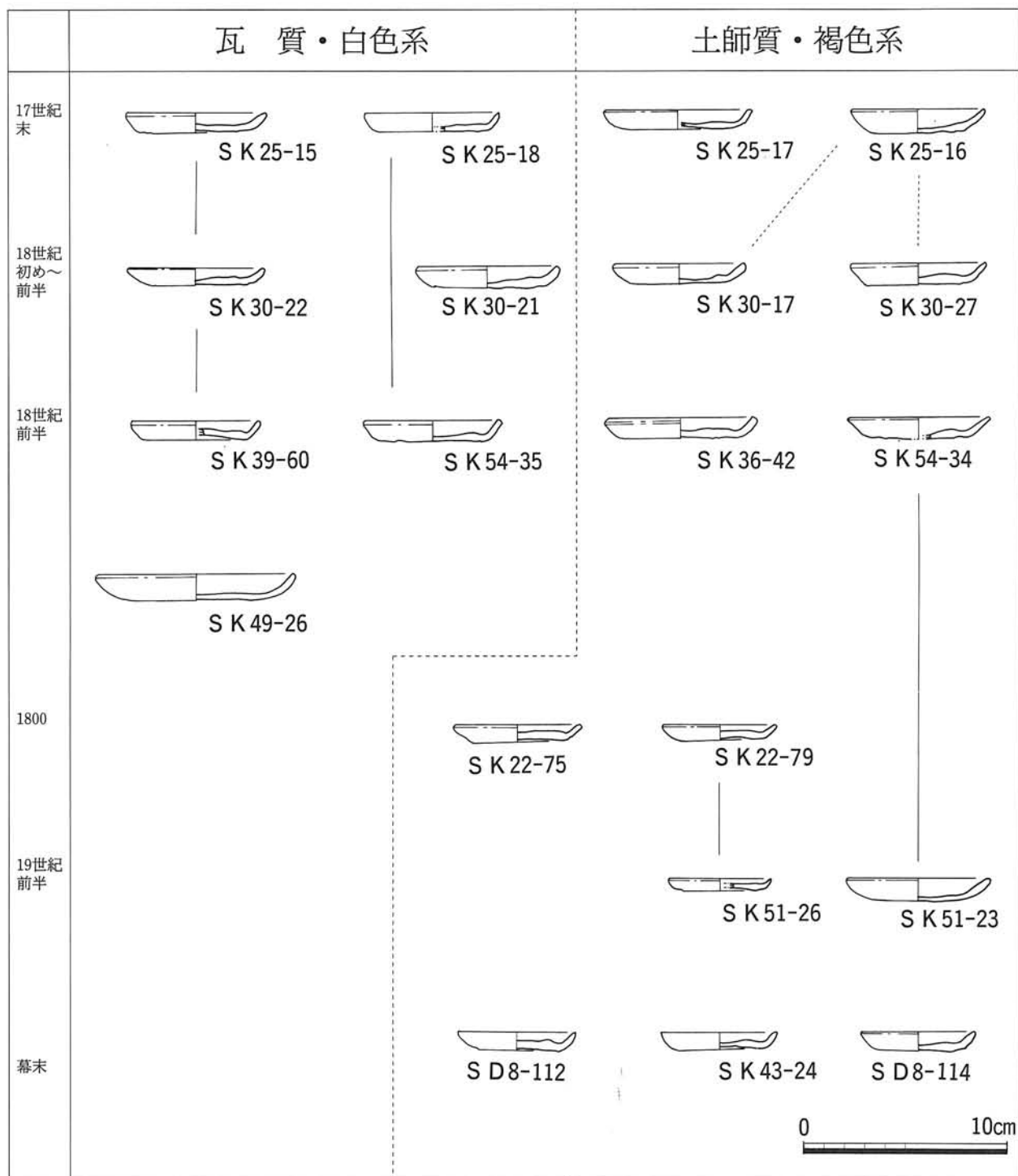


(○はススの付着しないもの、●はススの付着するもの)

第67図 S K22, S K25, S K30, S K36出土の土師質瓦質皿



第68図 土師質瓦質皿 A群 変遷表 (●は口縁部にススが大量に付着するもの)



第69図 土師質瓦質皿 B群 変遷表

用例が参考になる。特に岡遺跡の例は本遺跡のS K 30における合わせ口状での土師質皿の出土状況に類似しており、S K 30の特殊な形状からも納得できる。このように何らかの儀式に使用するための特殊な皿と考えるなら、これらの一群が数個体が重なりあうように出土することや、全く使用された痕跡や破損の形跡を止めないままに土坑内に埋められていることが理解されるとともに、食膳具としては余りにも小さく浅いものの存在も首肯できるのである。

ここでは比較的口径が大きく器高が高いグループ(A)と比較的口径が小さく器高が低いグループ(B)に分けその変遷を整理してみた。前者がススの付着する灯明皿、後者がススの付着しないそれ以外の用途のものにはほぼ当てはまる。しかし前者にもススが付着しないものもあり、今後の課題であろう。また、後者の一群のものは儀式用ということもあってか時代が下がるとともに口径・器高のより小さなものが現れてくる。

また、成形方法についてはいずれもロクロ成形によるもので、今回観察した遺物の中には1点も手づくね成形のものは見あたらなかった。糸切り痕も大部分は右回転で江戸遺跡などで左回転が多い⁽⁸⁾ ことと好対称をなしている。

(3) 内耳土器について

本遺跡からは土師質瓦質土器の「鍋」あるいは「焙烙」と考えられる遺物の一群が大量に出土した。これらは一般にその形状から器高の高いものを鍋、低いものを焙焼と呼ぶことが多かったが、「ともに内耳を持つという意味から内耳土器として捉え」⁽⁹⁾ するという両角氏の見解に倣い、本報告書ではすべて「内耳土器」とした。また、内耳の有無が直接確認できない破片も多かったが、いずれも形状から内耳土器とした他、内耳が退化してなくなったものも「型式学的に、明らかに内耳を持つ焙烙に連なるものであり」⁽¹⁰⁾ 内耳土器として扱っている。

本遺跡出土の内耳土器には大きく3種類ある。一つは口縁部が大きく外反するもの(A)、二つ目は口縁部が短く外反するもの(B)、最後に口縁部が外反しないもの(C)である。変遷表によればAタイプは近世初期には径が小さく器高が高いが、次第に口径が大きく、器高が低くなって行くことが分かる。そしてさらに重要な点は内耳が次第に退化してゆくことである。19世紀前半のS K 52-13では内耳を張りつけ穿孔するが穴は下まで貫通していない。S K 52-14では内耳と思われる粘土を貼りつけるものの耳状にはならず穿孔もしない。幕末のS D 8-117は口縁部は2破片2/3が遺存するが内耳は確認できない。いずれにせよ、穿孔されないのであるから、本来の吊るすための機能は無くなっているといつてよい。江戸遺跡においてみられる内耳の消滅については囲炉裏に吊るすのに適した形態から、煽炉に掛けるのに適した形態への変化、薪から炭への燃料の変化が関係しているとされる。⁽¹¹⁾ 本遺跡でも煽炉が出土するのは幕末の遺構からのみであり、広島においてもこうした都市化の傾向が19世紀になるとみられるということかもしれない。また、Aタイプは幕末になると体部が一旦内湾して口縁部に至る独特の器形になる。

変遷表や表3に見るように、B、Cタイプについては出土例も少なく時期的にも限られた時期のものしか実測できなかったため、その変化については明確でない。Bタイプは口縁部と内耳を段差

なく平らに接着しようとし、花状の刻印を持つものがある。元々は外反させるつもりであったのではなく内耳の接着時に抑圧によって外反してしまった可能性もある。Cタイプは土師質のものと瓦質のものがある。花状の刻印を持つものがある。

表－3 遺構別内耳土器出土状況

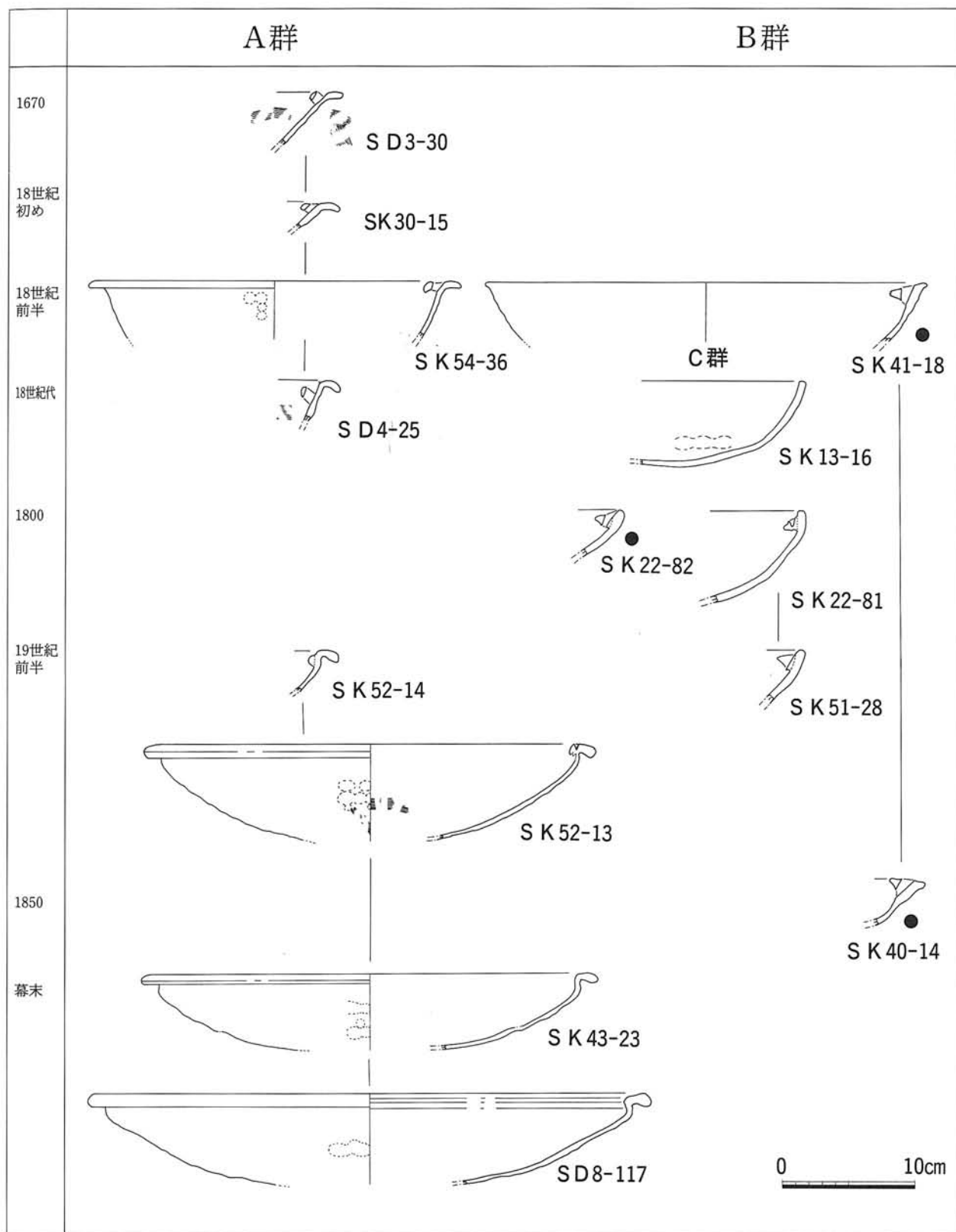
遺構	SD3	SK25	SK30	SK20	SK36	SK39	SK41	SK47	SK49	SK54	SK55	SD7	SK15
時期	1670	17世紀末	18世紀初	18世紀初									1780
合計	3	14	1	1	6	25	4	3	3	7	3	2	3
A	3	11	1	1	6	21	0	3	3	6	3	2	3
B	0	2	0	0	0	2	4	0	0	1	0	0	0
C	0	1	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0

遺構	SD17	SK16	SK22	SK19	SK51	SK52	SK53	SK40	SK12	SK43	SK48	SD8	合計
時期	1780	1800		19世紀初	19世紀前半			1850	幕末				
合計	2	2	13	1	5	3	5	1	1	7	1	4	124
A	2	2	7	1	2	3	4	0	1	7	1	4	99
B	0	0	0	0	2	0	0	1	0	0	0	0	13
C	0	0	6	0	1	0	1	0	0	0	0	0	12

表3からもわかるように時期によってこれらのグループの出土数に差異があるわけではなく、量的には少ないながらもB、Cグループともに17世紀末から19世紀前半までみられる。ただ、幕末についてはAグループしか見られず、消滅した可能性もある。また、Cグループについては県庁前地点の第2号溝状遺構からその系統に連なる可能性のある17世紀前半の遺物が出土している。

注)

- (1) 広島市立中央図書館編『広島城下町絵図集成』1990
- (2) 「知新集」『史跡広島城跡史料集成』第一巻，広島市教育委員会，1989
- (3) 広島市『新修広島市史』年表
- (4) (3)と同
- (5) 『新修広島市史』付図
- (6) 鈴木康之「土師質土器碗」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社・1995
- (7) 嶋谷和彦「“地鎮め” 遺構の諸相」『第3回関西近世考古学研究会大会 近世都市の構造 発表要旨』1991
- (8) 小林謙一「江戸在地系土器生産の成立に関する予察」『考古学研究』第41巻第2号，1994
- (9) 両角まり「内耳鍋から焙烙へ」『考古学研究』第42巻第4号，1996
- (10) (9)と同
- (11) 長佐古真也「近世江戸市場の動向と窯業生産への影響」『東京大学本郷構内の遺跡 法学部4号館・文学部3号館建設地遺跡』



第70図 内耳土器 変遷表 ●印は花状の刻印あり

表 -4 磁器観察表

()は復元数値

番 号	寸 法 (cm)			特 徴	高 台	文 様
	口径	器高	底径			
SK2-1	5.7	2.1	2.9	水平な底部から体部が内湾しつつ外上方へ伸び口縁部に至る。小坏。	断面三角形、畳付釉	外—笹文
SK7-3	(6.4)	3.1	2.7	底部から体部は内湾しつつ外上方に伸びる。	畳付釉、砂熔着	
SK8-2	-	-	-	水平な底部から体部が内湾しつつ外上方へ伸びる。	断面三角形 畳付釉、砂熔着	内—鳥文
SK8-9	-	-	-	口縁部は強く外反する。	遺存せず	
SK8-47	-	-	3.7	底部から体部は内湾しつつ外上方に伸び口縁部に至る。	砂熔着	外—大坂新町お笹紅
SK8-67	-	-	2.3	底部から体部は内湾しつつ外上方に伸びる。	断面三角形 畳付釉	外—星梅鉢文
SK8-69	5.6	1.0	3.4	水平な底部から体部が内湾しつつ外上方へ伸び、口縁端部は尖る。	畳付釉	内—竹文
SK9-6	6.4	3.0	2.2	底部から体部は内湾しつつ外上方に伸び口縁部に至る。	砂熔着	外—不明
SK12-7	-	-	-	水平な底部から体部が直線的に外下方へ伸び口縁部に至る。	畳付釉	内—蝶文 外—不明
SK12-20	(8.2)	-	-	体部は丸く袋状に内湾し口縁部が短く外反する。合わせ口部釉 ぎ。胴部最大径 (12.2) cm。	高台内釉	外—不明
SK12-21	(10.9)	2.4	(5.8)	水平な底部から体部が内湾しつつ外下方へ伸び口縁部に至る。	畳付釉	内—不明 外—雲文? 他
SK12-25	7.3	4.1	2.6	底部から体部は内湾しつつ外上方に伸び、口縁部は外湾する。	畳付釉 内側の削り深い	内—不明
SK13-5	10.9	7.0	4.8	底部から体部は内湾しつつ外上方に伸び口縁部に至る。	畳付釉	内—四方襷文、 見込五弁花印判
SK15-3	-	-	4.7	水平な底部から体部が直線的に立ち上がる。外面に陰刻。	底部無釉	なし
SK16-28	8.5	2.5	3.2	水平な底部から体部が内湾しつつ外下方へ伸び口縁部に至る。	畳付釉	内外—かぶ文
SK17-2	-	-	-	水平な底部から体部が直線的に外上方へ伸びる。	底部釉	外—不明
SK17-21	-	-	3.4	脚部はハの字状に開き、皿部は内湾しつつ外上方へ伸びる。	底部無釉	
SK17-36	-	-	4.5	水平な底部から体部が直線的に外上方へ伸びる。	断面三角形、畳付釉	外—草文
SK17-46	-	-	7.0	水平な底部から体部が内湾しつつ外上方へ伸びる。	断面三角形、畳付釉	外—粹なし渦福 内—五弁花印判
SK18-12	-	-	3.2	底部から体部は内湾しつつ外上方に伸びる。	畳付釉	なし
SK19-71	(10.3)	2.0	6.5	水平な底部から体部が内湾しつつ外下方へ伸び口縁部に至る。	畳付釉 富貴長春	内外—竹文
SK19-73	(11.0)	3.0	(5.4)	底部から体部は内湾しつつ外下方に伸び、口縁部はやや外湾する。	畳付釉 富貴長春	内—不明 外—龍文
SK21-1	(3.0)	17.8	5.6	水平な底部から体部が内湾しつつ上方に伸び袋状になり口縁部は外湾する。徳利。	底部無釉	外—不明
SK21-2	14.0	3.4	8.5	水平な底部から体部が内湾しつつ外上方へ伸び、口縁端部は玉縁状になる。皿。	蛇の目凹型高台	内—草花文

番 号	寸 法 (cm)			特 徴	高 台	文 様
	口径	器高	底径			
SK21-3	9.7	5.8	4.0	水平な底部から体部が内湾しつつ外上方へ伸び口縁部に至る。碗。	畳付釉	内—輪棒文 外—草花文
SK21-4	10.0	5.3	4.1	水平な底部から体部が内湾しつつ外上方に伸び口縁部は外湾する。碗。	畳付釉 焼成前の欠損あり	内—輪棒文 外—草花文
SK22-16	(11.0)	6.1	4.6	水平な底部から体部が外湾しつつ外上方に伸び口縁部に至る。	畳付釉 杵に渦福	内—四方襷文 見込五弁花印判 外—牡丹文
SK22-18	(8.7)	7.6	(7.7)	水平な底部から体部が内湾しつつ上方に伸び袋状になり口縁部に至る。外面に陰刻。	高台内無釉	なし
SK22-33	8.1	3.9	2.7	底部から体部は内湾しつつ外上方に伸び、口縁部に至る。	畳付釉	内外—氷裂文
SK22-38	(6.0)	5.1	(3.6)	水平な底部から体部が直立し口縁部に至る。	畳付釉	なし
SK25-1	14.5	4.6	7.9	水平な底部から体部が内湾しつつ外上方に伸び口縁部に至る。口縁端部に口紅。型打ち成形。鉢。	畳付釉 二重杵に「嘉」	内—タコ唐草文 七宝文 外—唐草文
SK25-2	15.0	6.4	5.1	水平な底部から体部が内湾しつつ外上方に伸び口縁部に至る。口縁端部に口紅。うがい碗。	畳付釉 内湾する	内—植物文
SK27-2	7.0	4.5	2.2	水平な底部から体部が直線的に外上方へ伸び、口縁部は外湾する。	砂熔着	なし
SK29-3	(7.8)	-	-	体部から口縁部はやや外湾する。	遺存せず	なし
SK30-1	(10.3)	5.6	4.3	底部から体部は内湾しつつ外上方に伸び、口縁部に至る。	断面三角形、内湾する、畳付釉	外—不明
SK30-2	(9.9)	5.9	4.1	底部から体部は内湾しつつ外上方に伸び、口縁部に至る。	畳付釉	外—如意頭文
SK34-2	10.0	4.1	6.8	水平な底部から体部が直立し口縁部に至る。合わせ口部釉。	断面逆台形 畳付釉	外—梅 or 桜文
SK34-4	11.5	6.3	4.3	水平な底部から体部が直線的に外上方へ伸び、口縁部は若干外湾する。	砂熔着	なし
SK36-1	-	-	8.6	やや中央部の盛り上がった底部から体部は内湾しつつ外上方に伸びる。	無釉 砂熔着	内—鳳凰文？
SK36-10	(13.8)	2.3	(9.0)	水平な底部から体部が内湾しつつ外上方に伸び口縁部に至る。	断面三角形、内湾する、畳付釉	内—鶴文 外—不明
SK36-11	(12.8)	2.6	(12.5)	水平な底部から体部が直立し口縁部に至る。口縁部釉。型押し成形。	無釉	外—雨降文 鉄漿
SK36-15	6.4	2.8	2.7	底部から体部は内湾しつつ外上方に伸び、口縁部に至る。	畳付釉	外—雨降文
SK36-16	-	-	4.1	水平な底部から体部は直線的に外上方へ伸びる。	断面三角形、畳付釉、大明年製	外—丸文
SK37-2	(9.8)	5.5	(4.3)	底部から体部は内湾しつつ外上方に伸び、口縁部に至る。	畳付釉、二重杵に渦福	内—見込五弁花 外—竹文
SK39-14	(7.1)	4.9	(4.6)	水平な底部から体部が直線的に外上方へ伸び口縁部に至る。口紅。	内からのみ削り出す、畳付釉 砂熔着	外—沢湯文
SK40-4	10.8	7.2	5.2	底部から体部は内湾しつつ外上方に伸び、口縁部に至る。	畳付釉	内—不明 外—ほうき、植物
SK40-7	25.1	3.7	14.0	底部から体部は内湾しつつ外上方に伸び、口縁部は外湾する。焼継ぎ痕。	断面逆台形 畳付釉 ハリ支え痕5カ所	内—楼閣山水文

番 号	寸 法 (cm)			特 徴	高 台	文 様
	口径	器高	底径			
SK41-2	(11.0)	7.2	(4.9)	底部から体部は内湾しつつ外上方に伸び、口縁部に至る。	畳付釉 砂熔着	外—唐草文
SK41-2	(4.3)	2.4	(3.2)	水平な底部から体部は直立し口縁部は外反する。	底部無釉	外—不明
SK41-13	-	3.7	-	水平な底部から体部が内湾しつつ外上方へ伸び口縁部に至る。型打ち成形。口紅。	畳付釉	なし
SK41-3	(6.4)	3.1	(2.6)	底部から体部は内湾しつつ外上方に伸び、口縁部に至る。	断面三角形、畳付釉、砂熔着	外—竹文
SK43-10	(10.6)	6.0	(3.8)	底部から体部は内湾しつつ外上方に伸び、口縁部は若干外湾する。	畳付釉、砂熔着	内—不明 外—並草葉文
SK43-6	-	-	4.0	水平な底部から体部が内湾しつつ外上方へ伸びる。	畳付釉	内—五弁花 外—不明
SK44-16	8.7	4.2	3.0	底部から体部は内湾しつつ外上方に伸び、口縁部に至る。	断面三角形、畳付釉	内外—羊歯文
SK44-18	11.1	5.7	6.0	底部から体部は内湾しつつ外上方に伸び、口縁部に至る。	内の削りが浅い 畳付釉、砂熔着	外—風景文
SK48-5	(19.5)	4.2	(10.3)	水平な底部から体部が内湾しつつ外上方に伸び口縁部に至る。見込み蛇の目釉。	断面逆台形、畳付釉、砂熔着	内—見込五弁花 印判、草花文 外—草花文
SK48-7	6.8	3.1	2.1	底部から体部は内湾しつつ外上方に伸び、口縁部に至る。	砂熔着	外—不明
SK48-10	-	-	5.7	水平な底部から体部が直立したのち内湾し袋状になる。焼継ぎ。	底部無釉 基筒底	外—蝶文、草花文
SK48-11	8.1	2.6	3.1	底部から体部は内湾しつつ外下方に伸び、口縁部は若干外湾する。焼継ぎ。	畳付釉 不明銘	内—「寿」の変 形字？ 外—花文
SK48-12	10.5	6.5	4.4	底部から体部は内湾しつつ外上方に伸び、口縁部は外湾する。焼継ぎ。	畳付釉 二重枠に「寿」の くずし字	内—見込鞠挟み 文、口縁部 沙綾形文 外—獅子文
SK49-2	10.2	5.7	4.5	底部から体部は内湾しつつ外上方に伸び、口縁部に至る。	内湾する 畳付釉	外—桜文
SK49-10	(10.7)	5.9	4.6	底部から体部は内湾しつつ外上方に伸び、口縁部に至る。色絵。	畳付釉	外—花文
SK51-2	-	-	5.4	底部から体部は内湾しつつ外上方に伸び、袋状になる。	畳付釉 砂熔着	外—不明
SK51-17	(9.0)	2.4	(5.2)	底部から体部は内湾しつつ外下方に伸び、口縁部に至る。	畳付釉	内—不明 外—蝶など
SK52-5	-	-	3.5	底部から体部は内湾しつつ外上方に伸びる。	断面三角形 畳付釉	内—寿字花 外—花文
SK52-8	-	-	3.2	底部から体部は内湾しつつ外上方に伸びる。	畳付釉	内—不明 外—鷺文
SK53-9	-	-	(5.5)	底部から体部は内湾しつつ外上方に伸びる。焼継ぎ。	内湾する 畳付釉	内—若松文 外—山水文、亀文
SK53-15	(9.1)	4.2	3.4	底部から体部は内湾しつつ外上方に伸び、口縁部に至る。	畳付釉	外—花卉文
SK53-16	(10.0)	5.9	5.5	底部から体部は内湾しつつ外上方に伸び、口縁部に至る。	畳付釉 砂熔着	内外—不明
SK54-19	(15.2)	4.5	(9.0)	水平な底部から体部が内湾しつつ外上方へ伸び、口縁部は外湾したのち内湾する。口紅。	内湾する 畳付釉 二重枠に渦福	外—唐草文 内—花唐草文 見込五弁花

番 号	寸 法 (cm)			特 徴	高 台	文 様
	口径	器高	底径			
SK55-1	(13.0)	2.8	(7.9)	水平な底部から体部が内湾しつつ外上方へ伸び、口縁部に至る。型打ち成形。	畳付釉 砂熔着	内—唐草文の陽刻
SK55-6	10.4	5.5	4.3	水平な底部から体部が内湾しつつ外上方に伸び口縁部に至る。	内湾する、畳付釉	なし
SK55-18	-	8.1	-	腰部から体部は内湾しつつ外上方に伸び、口縁部に至る。外面に陰刻。	畳付釉	なし
SK55-20	(13.4)	2.9	(8.4)	水平な底部から体部が内湾しつつ外上方に伸び口縁部に至る。	断面三角形、畳付釉	内—植物文 外—唐草文
SK55-21	(13.3)	2.3	(8.0)	水平な底部から体部が内湾しつつ外上方に伸び口縁部に至る。	断面三角形、畳付釉、砂熔着	内—見込五弁花 植物文 外—唐草文
SD2-19	(11.4)	6.4	4.8	水平な底部から体部は内湾しつつ外上方に伸び口縁部に至る。	畳付釉 砂熔着	外—松文
SD2-44	(10.1)	6.4	4.3	底部から体部は内湾しつつ外上方に伸び、口縁部に至る。	畳付釉	外—不明
SD2-78	(22.1)	8.0	10.7	水平な底部から体部は内湾しつつ外上方に伸び口縁部は外反する。	蛇の目凹型高台 砂熔着、二重枠に渦福	内—松文 外—唐草文
SD3-2	(10.4)	2.9	(4.8)	底部は緩やかに外上方に伸び腰部で内湾し、口縁部は外湾したのち短く立ち上がる。口縁部内面線彫り？	砂熔着	内—不明
SD3-10	(13.2)	2.9	(6.4)	水平な底部から体部が内湾しつつ外上方に伸び口縁部に至る。2種類の顔料で文様を描く。	内側の削りが深い	内—不明
SD8-6	(8.9)	5.1	3.9	底部から体部は内湾しつつ外上方に伸び、口縁部に至る。	畳付釉	外—もみじ文
SD8-8	6.8	3.3	2.6	底部から体部は内湾しつつ外上方に伸び、口縁部は直線的になる。	畳付釉 砂熔着	外—不明
SD8-10	8.0	3.8	3.7	底部は緩やかに外上方へ伸び、腰部で内湾し、体部から口縁部は直立する。外面体部に陽刻で圏線を表す。	畳付釉 砂熔着	なし
SD8-12	7.6	4.8	3.4	底部から体部は内湾しつつ外上方に伸び、口縁部に至る。	畳付釉 砂熔着、 打ちの削りが浅い	なし
SD8-38	8.1	2.4	5.2	水平な底部から体部が内湾しつつ外上方へ伸び、口縁部に至る。型打ち成形。	畳付釉	内—山水樓閣文
SD8-41	-	-	6.6	水平な底部から体部は直線的に外上方へ伸び、口縁部は外湾する。	畳付釉 砂熔着	内—不明 外—不明
SD8-44	10.6	6.3	5.7	底部から体部は内湾しつつ外上方に伸び、口縁部に至る。	砂熔着	内—不明 外—雨龍文
SD8-48	(8.0)	2.5	3.3	底部から体部は内湾しつつ外下方に伸び、口縁部は外湾する。	畳付釉 不明銘	内—寿文 外—植物文
SD8-49	(9.4)	6.0	3.9	底部から体部は内湾しつつ外上方に伸び、口縁部は外湾する。	畳付釉	内—寿文 外植物文
SX5-1	(11.4)	2.8	7.6	水平な底部から体部は内湾しつつ外上方に伸び口縁部に至る。型打ち成形。見込みにハマ熔着痕。銅版印刷。皿。	蛇の目凹型高台	内外—花文
SX5-2	(14.4)	4.9	8.6	水平な底部から体部は内湾しつつ外上方に伸び、口縁部はやや外湾し、玉緑状におさめる。型紙刷り。皿。	蛇の目凹型高台	内—草花文
SX8-1	-	-	-	体部は内湾しつつ外上方に伸び口縁部に至る。青磁。鉢。	遺存せず	外—草花文の線彫り
SX8-2	(7.9)	4.2	(2.5)	底部から体部は内湾しつつ外上方に伸び、口縁部は外湾する。色絵。小坏。	畳付釉	外—文字文

表-5 施釉陶器観察表

() は復元数値

番 号	寸 法 (cm)			特 徴	高 台	釉 薬	露胎部
	口径	器高	底径				
SK7-10	(4.4)	2.4	(4.9)	体部は内上方へ直線的に伸びる。	糸切り底	灰釉 淡緑灰色	黄白色
SK8-108	-	-	-	底部は水平に伸びる。見込みに笹文。	内の削りが浅い	灰釉 灰色	橙褐色
SK8-143	-	-	-	体部は内湾しつつ外上方へ伸びる。	輪高台	鉄釉 茶褐色	橙褐色
SK8-164	-	-	-	口縁部は強く外反する。	遺存せず	灰釉 淡緑灰色	淡黄白色
SK11-2	5.8	2.0	なし	つまみが付く。体部は内湾しつつ外下方へ伸び、口縁端部は外反する。鉄釉・緑釉で文様描く。	なし	白化粧土 透明釉	灰茶色
SK13-36	-	-	4.6	底部中央に焼成前の穿孔。へそ欠損。	糸きり底	鉄釉 茶褐色	灰茶色
SK14-5	-	-	-	体部は袋状になり口縁部は直立する。口縁端部に熔着痕。	遺存せず	鉄釉 茶褐色	橙茶褐色
SK14-7	-	-	5.3	水平な底部から体部は内湾しつつ外上方へ伸びる。高台内「清水」の刻印。外面に鉄絵。	内の削りが浅い	灰釉 黄褐色	黄茶色
SK15-14	-	-	11.5	底部から体部は内湾しつつ外上方に伸びる。	外に面取り	白化粧土 銅緑釉	茶褐色
SK15-15	-	-	5.9	底部から体部は内湾しつつ外上方に伸びる。	施釉	白化粧土 透明釉	黒茶色
SK15-17	-	-	11.9	底部から体部は内湾しつつ外上方に伸びる。砂目痕。	外に面取り	白化粧土 透明釉	赤褐色
SK15-20	-	-	-	体部は直線的に外上方に伸び、口縁部は外反する。	遺存せず	鉄釉	赤褐色
SK15-21	-	-	-	高台をつくり出す。		不明	茶褐色
SK16-42	-	-	6.9	水平な底部から体部は内湾しつつ外上方へ伸びる。見込みにハマの熔着痕。		灰釉 淡緑灰色	灰色
SK16-51	(18.6)	5.4	(7.9)	底部から体部は内湾しつつ外上方に伸び口縁部に至る。見込み蛇の目釉 ぎ。		鉄釉 茶褐色	橙褐色
SK17-75	-	-	-	体部は直立し、口縁部は外反する。鉢？	遺存せず	鉄釉・薬灰釉 青灰褐色	茶褐色
SK18-26	-	-	5.4	底部から体部は内湾しつつ外上方に伸びる。	施釉	透明釉	黄褐色
SK19-74	(11.5)	3.5	5.0	水平な底部から体部は直線的に外上方へ伸び、口縁部は外湾する。貝目痕2カ所。	三日月高台	灰釉 緑灰色	淡橙褐色
SK19-76	-	-	4.9	水平な底部から体部は内湾しつつ外上方へ伸びる。	施釉	灰釉 黄灰色	淡橙褐色
SK19-89	-	-	(4.6)	底部から体部は内湾しつつ外上方に伸びる。	施釉 暈付釉	外 - 鉄釉 黒褐色 内 - 薬灰釉？ 白色	橙黄色
SK19-96	-	-	(6.3)	水平な底部から体部は内湾しつつ外上方へ伸び、口縁部は外湾する。見込み蛇の目釉 。	内の削りが深い 遺存せず	鉄釉 黄褐色 鉄釉	黄茶色
SK19-99	-	-	-	体部は内湾しつつ内上方へ伸び袋状になり口縁部は直立し端部はT字状におさめる。		茶褐色	灰色

番 号	寸 法 (cm)			特 徴	高 台	釉 薬	露胎部
	口径	器高	底径				
SK20-6	-	-	-	体部は内湾しつつ外上方に伸び口縁部に至る。型押し成形。	貼付高台	灰釉 淡黄緑色	黄白色
SK22-43	(11.0)	7.2	4.4	底部から体部は内湾しつつ外上方に伸びたのち袋状になり口縁部は外湾する。	明瞭に削り出す	灰釉 淡黄緑色	黄白色
SK22-49	(9.6)	1.5	6.1	水平な底部から体部は内湾しつつ外上方へ伸び口縁部に至る。内側に返しを持ち3カ所に切り込みがある。	底部にヘラ削り	赤泥を塗る	橙褐色
SK22-65	20.4	7.9	(7.4)	水平な底部から体部は内湾しつつ外上方へ伸び口縁部は強く外反し端部は直立する。把手が2カ所に付く。	碁笥底状に削り込む	鉄釉 茶褐色	黄橙色
SK22-66	(20.5)	8.0	7.3	底部から体部は内湾しつつ外上方に伸び口縁部に至る。端部は玉縁状になる。見込み蛇の目釉。	畳付に白化粧土	白化粧土 鉄釉 黒褐色	茶褐色
SK22-69	6.2	3.5	なし	最大径8.5cm。つまみあり。土瓶蓋。底部から体部は内湾しつつ外下方に伸び、口縁部は外湾する。返しがつく。	なし	灰釉 淡緑灰色	緑橙色
SK23-11	7.7	12.0	7.5	底部から体部は内湾しつつ外上方に伸びた後袋状になり口縁部は短く直立する。三つ足付。把手の取付け部は欠損。胴部上半に線彫。	碁笥底状に削り込む	鉄釉 - 茶褐色 一部に銅緑釉 流し掛け 緑灰色	橙褐色
SK23-12	9.6	2.2	7.2	水平な底部から体部は直立し口縁部は強く外反する。つまみ付。	底部ヘラ削り	鉄釉 黒茶色	黄茶色
SK25-3	10.7	7.4	5.1	水平な底部から体部が内湾しつつ外上方に伸び口縁部は直立する。碗。	施釉 畳付釉	灰釉 淡黄緑色	黄白色
SK30-7	(8.4)	3.2	(3.6)	底部から体部は内湾しつつ外上方に伸び口縁部は直線的になる。	糸きり底 砂目熔着	淡釉 淡緑灰色	橙褐色
SK30-12	-	-	6.7	外上方へ直線的に伸びる底部から体部は内湾しつつ外上方に伸びる。	断面台形 輪高台	灰釉 淡緑灰色	灰茶色
SK34-14	6.0	1.3	4.8	水平な底部から体部は直立し口縁部は強く外反する。つまみ付。	底部ヘラ削り	鉄釉 黒褐色	黄橙色
SK35-4	-	-	4.9	水平な底部から体部は内湾しつつ外上方へ伸びる。	施釉 畳付釉	灰釉 緑茶色	灰茶色
SK36-31	12.1	5.8	4.8	底部から腰部は内湾しつつ外上方に伸び、体部は外湾する。口縁部との境で内湾したのち一旦外湾しさらに内湾する。	施釉 畳付釉	白化粧土 透明釉	灰茶色
SK36-33	(11.0)	6.3	3.9	底部から体部は内湾しつつ外上方に伸び口縁部は外湾する。	明瞭に削り出す 外面取り	藁灰釉 白褐色	黄橙色
SK36-34	(6.4)	4.8	(4.3)	底部から体部は内湾しつつ袋状に立ち上がり、口縁部は内湾したのち短く外湾する。合わせ口部釉。小壺。関西系。	内からのみ削り出す、施釉	柿釉 橙褐色	橙褐色
SK39-44	-	-	7.1	底部は内湾しつつ外上方へ伸び、体部はほぼ直立する。	輪高台	白化粧土 透明釉	茶褐色
SK39-52	(10.9)	6.8	4.3	底部から体部は内湾しつつ外上方に伸び口縁部は直線的になる。	施釉 砂熔着	白化粧土 透明釉	灰褐色
SK40-13	(13.3)	3.8	3.5	底部から体部は内湾しつつ外下方に伸び口縁部は強く外反する。飛びがんな。外面に鉄漿を塗り分け、白化粧土で文様を描く。	明瞭に削り出す	外 - 銅緑釉 緑色 内 - 灰釉 淡緑灰色	黄白色
SK41-14	-	-	(5.2)	底部から体部は内湾しつつ外上方に伸びる。	施釉 畳付釉	透明釉	赤褐色
SK43-12	6.4	1.1	3.1	水平な底部から体部は内湾しつつ外上方へ伸び、口縁部に至る。内側に返しを持つ。	底部ヘラ削り	灰釉 淡黄白色	黄白色

番 号	寸 法 (cm)			特 徴	高 台	釉 薬	露胎部
	口径	器高	底径				
SK43-17	(8.6)	1.9	(3.0)	水平な底部から体部は内湾しつつ外上方へ伸び、口縁部に至る。外面ヘラ削り。	底部ヘラ削り	灰釉 淡緑灰色	黄灰色
SK44-23	-	-	(4.2)	水平な底部から体部は内湾しつつ外上方へ伸びる。見込み蛇の目釉。		銅緑釉 青緑色	黄灰色
SK44-24	13.0	5.4	4.7	底部から体部は内湾しつつ外上方に伸び口縁部に至る。見込みに銕絵。	断面逆台形	灰釉 淡黄緑色	黄白色
SK44-29	10.3	2.0	5.5	水平な底部から体部は直立し口縁部は強く外反する。つまみあり。	底部ヘラ削り	鉄釉 黒褐色	赤灰色
SK45-13	-	-	-	底部から腰部は内湾しつつ外上方に伸びる。	内の削りが浅い	瀬戸黒釉 黒色	黄白色
SK48-20	(24.0)	11.3	10.8	底部から体部は内湾しつつ外上方に伸び口縁部は直立した後玉縁状におさめる。	輪高台	灰釉一暗緑灰色、口縁部に鉄釉を流し掛け一茶褐色	黄褐色 ～赤褐色
SK49-17	14.4	4.1	4.7	水平な底部から体部が内湾しつつ外上方に伸び口縁部は強く外反する。見込み蛇の目釉。	内の削りが浅い	鉄釉 黒色	灰色
SK49-19	12.2	3.5	12.8	水平な底部から体部は直立し口縁部に至る。	底部施釉	低火度釉（柿釉） 橙褐色	橙褐色
SK54-24	(10.5)	6.3	5.1	底部から体部は内湾しつつ外上方に伸び口縁部に至る。	刻印有外面取り	灰釉 淡黄白色	黄白色
SK54-32	-	-	3.6	底部から腰部は内湾しつつ外上方に伸び体部は直立する。茶入れ、瀬戸美濃。	右回転糸切り底	鉄釉 黒褐色	黄白色
SK55-39	-	-	(12.3)	緩やかに内湾し外上方に伸びる底部から体部は直線的に外上方に伸びる。	輪高台	灰釉 黄緑灰色	肌色
SK55-42	-	-	(4.2)	底部から体部は内湾しつつ外上方に伸びる。見込みに砂目痕。	断面逆台形	透明釉、緑釉 黄緑色	赤褐色
SK56-1	-	-	(4.6)	底部から体部は緩やかに内湾しつつ外上方に伸びる。内面口縁部と体部の境に段。皿。	内の削りが浅い	藁灰釉 灰色	黄白色
SK56-2	-	-	-	体部は内湾しつつ外上方に伸び、口縁部は若干外湾したのち内湾しつつ外上方に伸びる。揺目7条	遺存せず	藁灰釉 灰褐色	茶褐色
SK56-3	-	-	4.8	底部から体部は緩やかに内湾しつつ外上方に伸びる。見込みに植物文の鉄絵。皿。	内の削りが浅い	灰釉 灰色	茶褐色
SD2-漆29	(11.2)	8.2	4.9	底部から体部は内湾しつつ外上方へ伸び口縁部はやや外湾する。	施釉 暈付釉	灰釉 淡黄緑色	黄白色
SD2-漆38	(9.0)	5.8	5.0	水平な底部から体部は内湾しつつ外上方へ伸び口縁部は直立する。外面に呉須で山水文。	明瞭に削り出すハの字状刻印	灰釉 淡黄緑色	黄白色
SD3-18	12.1	3.1	4.4	水平な底部から体部は内湾しつつ外上方へ伸び口縁部は内側に溝を持って短く立ち上がる。見込みに砂目積み痕3か所。	内外とも削りが浅い	灰釉 灰色	橙褐色
SD4-15	(26.5)	8.1	11.7	外上方へ直線的に伸びる底部から体部は内湾しつつ外上方へ伸び口縁部は外湾したのち短く立ち上がる。三足付き。	輪高台	灰釉 緑灰色	黄褐色
SD7-16	-	-	4.9	水平な底部から体部は内湾しつつ外上方へ伸びる。外面腰部に段あり。 底部から体部は内湾しつつ外上方に伸び	三日月高台 施釉	藁灰釉 灰白色	橙褐色 ～黄褐色
SD7-26	(10.1)	5.9	5.0	口縁部は外湾し端部は内側へ突出する。見込みに砂目痕。	砂熔着	鉄釉 茶褐色	橙褐色

番 号	寸 法 (cm)			特 徴	高 台	釉 薬	露胎部
	口径	器高	底径				
SD7-27	-	-	4.7	水平な底部から体部は内湾しつつ外上方へ伸びる。	断面三角形	灰釉 暗緑灰色	黄橙色
SD7-29	-	-	-	家型をした置物。屋根には花が付き、柱にはつるが巻きついている。	遺存せず	低火度釉（緑釉、鉄釉）	黄白色
SD8-69	8.7	12.8	7.4	底部から体部は緩やかに内湾しつつ外上方に伸び、その後袋状に内上方へ屈曲する。口縁部は短く外湾する。注口と把手の取付け部2カ所を貼り付ける。外面に鉄絵。	碁笥底	灰釉 淡緑灰色	灰白色
SD8-70	9.7	-	7.3	底部から体部は外湾しつつ外下方に伸び、口縁部は外湾する。返しがつく。つまみが欠損。SD8-69の蓋	なし	灰釉 淡緑灰色	灰白色
SD8-91	(7.7)	5.5	(3.6)	底部から体部は内湾しつつ外上方に伸び口縁部は外湾する。外面に白化粧土で文様。	薄手	灰釉 緑灰色	橙褐色
SD8-106	11.4	3.0	4.9	碁笥底状の底部から腰部は緩やかに内湾しつつ外上方に伸びる。体部は直立し口縁部は強く外反する。底部内側につまみを持つ。	底部はヘラ削り	灰色 緑灰色、一部 白濁	黄褐色 ～茶褐色
SD8-107	13.8	4.1	4.9	碁笥底状の底部から腰部は緩やかに内湾しつつ外上方に伸びる。体部は直立し口縁部は強く外反する。底部内側につまみを持つ。SD8-106と同種の大型品。	底部はヘラ削り	灰釉 緑灰色	橙褐色
SD8-110	なし	1.0	4.3	円板状の体部につまみが付く。蓋。	なし	鉄釉 黄褐色	黄白色
SX8-3	-	-	-	袋状の体部から口縁部は直立したのち、T字状におさめる。内面格子タタキ目。壺。	遺存せず	鉄釉 茶褐色	茶褐色
SX8-4	-	-	-	水平な底部から体部は内湾しつつ外上方へ伸びる。内面底部と体部の境に段を持つ。見込みに砂目積痕。皿。	断面逆台形 外面取り	白化粧土 透明釉、緑釉 黄褐色	茶褐色
SX8-5	-	-	7.9	水平な底部から体部は内湾しつつ外上方へ伸びる。皿。	断面逆台形 外面取り	白化粧土 透明釉	茶褐色
SX8-6	(9.6)	5.4	3.6	底部から体部は内湾しつつ外上方に伸び口縁部に至る。外面に鉄絵。碗。	高台脇に平坦面を持つ	灰釉 淡青緑色	黄白色
SX8-7	(7.3)	4.3	(2.4)	底部から体部は内湾しつつ外上方に伸び口縁部は直立する。碗。	薄く小さく明瞭に削り出す	灰釉 淡青灰色	黄白色
SX8-8	(11.8)	2.4	(3.7)	水平な底部から体部は内湾しつつ外上方へ伸び口縁部に至る。返しを持つ。灯明皿。	糸切り底	鉄泥 紫褐色	赤褐色
SX8-9	(12.7)	11.7	8.0	水平な底部から体部は内湾しつつ外上方へ伸びその後袋状になる。口縁部は短く直立する。外面体部上半に線彫り。壺。	底部ヘラ削り 刻印	鉄泥 赤褐色	橙褐色

表－6 焼締め陶器観察表

() は復元数値

番 号	産地	器種	寸 法 (cm)			特 徴	色 調	胎土	焼成	生産年代
			口径	器高	底径					
SK9-46	堺	播鉢	-	-	-	播目 9 条	茶褐色	1.5mm 大の砂粒含む	やや軟調	
SK15-23	堺?	播鉢	-	-	-	播目 9 条?	橙褐色	黄白色の粘土塊含む	軟調	
SK15-24	堺?	播鉢	-	-	-	播目 7 条	茶褐色	3mm 大の砂粒含む	やや軟調	
SK16-54	堺?	播鉢	-	-	(19.4)	播目 6 条? 見込みはウールマーク状?	赤褐色	4mm 大の砂粒含む	やや軟調	
SK16-55	堺?	播鉢	-	-	-	外面口縁部に赤泥を塗る。	橙褐色	1.5mm 大の砂粒含む	軟調	
SK16-56	堺?	播鉢	-	-	-	播目 9 条	茶褐色	3mm 大の砂粒、黄白色粘土塊含む	やや軟調	
SK16-57	堺?	播鉢	-	-	-	播目 11 条	茶褐～紫褐色	2mm 大の砂粒含む	やや軟調	
SK16-58	備前系	播鉢	-	-	-	播目 12 条	橙褐色	3mm 大の砂粒含む	軟調	
SK17-76	中国地方	播鉢	-	-	-	播目 10 条	紫褐色	3mm 大の砂粒含む	堅緻	
SK17-77	中国地方	播鉢	-	-	-	播目 8 条	紫褐色	5mm 大の砂粒含む	堅緻	
SK17-78	備前系	播鉢	-	-	-	播目 11 条	赤褐色	1mm 大の砂粒含む	やや軟調	
SK17-79	堺系	播鉢	-	-	-	播目 11 条、全面に赤泥を塗る。	赤褐色	1mm 大の砂粒若干含む	軟調	
SK18-38	堺	播鉢	-	-	-	播目 9 条	茶褐色	1mm 大の砂粒、黄白色粘土塊含む	やや軟調	
SK19-110	堺 or 中国地方	播鉢	-	-	-	播目 13 条	赤褐～茶褐色	7mm 大の小石も含む	やや軟調	18C?
SK22-70	堺?	播鉢	(20.6)	6.9	(8.9)	播目 6 条	茶褐色	1mm 大の砂粒含む	やや軟調	
SK25-4	備前	皿	11.1	2.4	6.4	外面に火襷。口縁部大量のスス付着。	紫褐色	1mm 以下の砂粒若干含	堅緻	
SK34-15	明石 中国地	播鉢	-	-	10.7	播目 8 条、見込み中央からアールを持って外へ引く	橙褐色	7mm 大の小石も含む	軟調	
SK36-35	方?	播鉢	-	-	-	播目 9 条	茶褐色	1mm 大の砂粒含む	堅緻	
SK36-36	中国地方?	播鉢	-	-	-	口縁部下に熔着痕	赤褐～紫褐色	1mm 大の砂粒含む	堅緻	
SK41-17	堺?	播鉢	-	-	-	播目 10 条	赤褐色	1mm 大の砂粒若干含む	軟調	18C?
SK45-20	備前	播鉢	-	-	-	播目 9 条	茶褐色	2mm 大の砂粒含む	堅緻	16 世紀末
SK47-10	中国地方	播鉢	-	-	-	播目 14 条 見込み* 状	茶褐色	0.5mm 大の砂粒含む	堅緻	17C 後半～18C

番 号	産地	器種	寸 法 (cm)			特 徴	色調	胎土	焼成	生産年代
			口径	器高	底径					
SK49-20	関西～ 中国地方	皿	(10.9)	(2.0)	(4.5)	底部から口縁部まで内湾しつつ外上方に伸びる。糸切り底。外面ヘラ削り。口縁端部にスス付着。	茶褐色	精緻	堅緻	
SK49-21	備前	播鉢	-	-	-	播目 12 条	茶褐色	1mm 大の砂粒含む	堅緻	
SK53-28	中国地方	播鉢	-	-	-	播目 11 条？	茶褐色	2mm 大の砂粒含む	堅緻	
SK54-33	備前系？	播鉢	-	-	-	播目 14 条	茶褐色	0.5mm 大の砂粒含む	堅緻	
SD7-38	備前	茶入れ	-	-	6.5	水平な底部から体部は内湾しつつ外上方に伸び袋状になる。糸切り底。	茶褐色	0.3mm 大の砂粒含む	堅緻	16C 末～ 17C
SD7-39	備前	-	-	-	-	播目 10 条	茶褐色	3mm 大の砂粒含む	堅緻	17C～ 18C 前半

表－7 土師質瓦質土器観察表

() は復元数

番 号	器種	寸 法 (cm)				特 徴	色調	胎土	焼成
		口径	器高	底径	底径				
SK9-47	焙烙鍋	24.9	-	-	29.5	体部は内湾しつつ袋状となる。口縁端部で折り返し把手をつくる。	黒灰褐色	金雲母片多く含む	軟調
SK12-46	内耳土器	-	-	-	-	口縁部は強く外反する。内耳有無確認できず。内ナデ。外体部に指頭圧痕。	黒灰色	1mm 大の砂粒含む	やや軟調
SK13-16	内耳土器	-	-	-	-	体部は内湾しつつ外上方に伸び、口縁部に至る。端部は平らにおさめる。内外ともハケ目のちナデ一部指頭圧痕。	内一灰茶色 外一黒灰色	0.5mm 大の砂粒含む	良好
SK22-81	内耳土器	-	-	-	-	体部は内湾しつつ外上方に伸び、口縁部に至る。端部は平らにおさめる。内外ともナデ。	内一灰色 外一黒灰色	1mm 大の石粒も含む	良好
SK22-82	内耳土器	-	-	-	-	穿孔の間に花状の刻印あり。内外ともナデ。	黄灰色	0.5mm 大の砂粒含む	良好
SK30-15	内耳土器	-	-	-	-	口縁部は強く外反する。	灰色	1mm 大の砂粒含む	やや軟調
SK36-50	内耳土器	-	-	-	-	口縁部は強く外反する。内ハケ目のちナデ、外指頭圧痕。	内一橙灰色 外一黒色	2mm 大の砂粒含む	軟調
SK36-51	内耳土器	-	-	-	-	口縁部は強く外反する。内ハケ目のちナデ、外指頭圧痕。口縁部は強く外反する。内ハケ	黒色	5mm 大の石粒も含む	軟調
SK39-57	内耳土器	-	-	-	-	目のちナデ、外指頭圧痕。水平な底部から体部は内湾しつ	黒灰色	1mm 大の砂粒含む	良好
SK39-58	皿	(8.2)	1.8	(4.3)	-	つ外上方へ伸びる。口縁部にスス付着。糸切り底。回転方向不明。	淡橙褐色	1mm 大の砂粒若干含む	やや軟調

番 号	器種	寸 法 (cm)				特 徴	色 調	胎 土	焼 成
		口径	器高	底径	底径				
SK39-59	皿	(9.6)	1.9	6.6	-	水平な底部から体部は直線的に外上方へ伸びる。口縁端部にスス付着。右回転糸切り底。	肌色～灰肌色	1mm 大の砂粒含む	軟調
SK39-60	皿	(10.4)	2.6	(6.4)	-	水平な底部から体部は直線的に外上方へ伸びる。口縁部にスス少量付着。糸切り底。回転方向不明。	灰茶色	0.5mm 大の砂粒若干含む	良好
SK39-61	皿	(6.2)	0.9	4.9	-	水平な底部から体部は短く直線的に外上方へ伸びる。ススは付着しない。糸切り底。回転方向不明。	黄白色	2mm 大の砂粒含む	やや軟調
SK40-14	内耳土器	-	-	-	-	口縁部は短く外反する。内外ナデ。穿孔の間に花状の刻印あり。	内—橙褐色 外—黒灰色	1mm 大の砂粒含む	軟調
SK40-15	凉炉	8.1	3.3	3.7	-	水平な底部から体部は内湾しつつ外上方に伸び口縁部は強く外反する。底部及び体部に穿孔あり（4カ所確認）。体部内面に円形の貼付（2カ所確認）。右回転糸きり底。	黄白色	3mm 大の石砂も含む	軟調
SK41-18	内耳土器	(33.1)	-	-	-	口縁部は短く外反する。内外ナデ。外指頭圧痕。穿孔の間に花状の刻印あり。	内—橙褐色 外—黒灰色	1mm 大の砂粒含む	軟調
SK43-22	焜炉	-	-	(27.0)	-	水平な底部から体部は直立する。高台を貼りつける。内ヨコナデ、外ミガキ。外に赤泥。体部に焼成前の穿孔。（1カ所確認）	橙褐色	1mm 大の砂粒含む	軟調
SK43-23	内耳土器	(34.4)	-	-	(31.8)	底部から体部は内湾しつつ外上方に伸び、口縁部は短く直立したのち強く外反する。内丁寧なナデ、外指頭圧痕。内耳の有無確認できず。	黒灰色	2mm 大の石粒も含む	良好
SK43-24	皿	5.7	1.0	4.2	-	ほぼ水平な底部から体部は短く外上方へ伸びる。口縁部にスス若干付着。右回転糸切り底。	橙褐色	1mm 大の砂粒含む	軟調
SK44-35	焜炉	27.7	25.5	26.7	-	水平な底部から体部は直立する。体部に削り込みがある。高台は貼りつけか。内ナデ、外ミガキ。外に赤泥。内面体部上半に突起が3カ所、体部下半正面に彫り込み。高台に切り込み。	橙褐色	1mm 大の砂粒含む	良好
SK44-36	焜炉	-	-	25.0	-	水平な底部から体部は直立する。体部に削り込みがある。高台は貼りつけか。内に網目痕、外ミガキ。体部下半正面に穿孔2カ所。高台に切り込み。	黄褐色	2mm 大の砂粒多量に含む	軟調
SK44-37	平仄	4.5	1.8	2.8	-	水平な底部から体部は外上方へ直線的に伸びる。見込み部にへそを後付けする。型押し成形。へその先端にススが若干付着。	橙褐色	0.5mm 大の砂粒含む	良好
SK44-38	焙烙鍋	(16.5)	-	-	(20.0)	体部から口縁部は内湾し袋状になる。体部中央には凸帯が貼りつく。また、穿孔した外耳が1つ確認できる。外下半にはススが大量に付着。	灰色	1mm 大の砂粒含む	軟調
SK45-21	皿	(10.0)	1.9	(6.7)	-	体部は内湾しつつ外上方に伸び、口縁部に至る。スス付着せず。糸切り底。回転方向不明。	橙灰色	0.5mm 大の砂粒含む	やや軟調

番 号	器種	寸 法 (cm)				特 徴	色 調	胎 土	焼 成
		口径	器高	底径	底径				
SK47-11	内耳土器	-	-	-	-	口縁部は強く外反する。内耳の有無は確認できず。内ハケ目のちナデ、外指頭圧痕。	黒色	0.5mm 大の砂粒含む	やや軟調
SK47-12	内耳土器	-	-	-	-	口縁部は強く外反する。内耳の有無は確認できず。内外ともナデ。	黒灰色	0.5mm 大の砂粒含む	良好
SK17-13	内耳土器	-	-	-	-	口縁部は強く外反する。内耳の有無は確認できず。内ハケ目のちナデ、外指頭圧痕。口縁部を強くナデするため端部が下垂する。	黒色	1mm 大の砂粒含む	やや軟調
SK47-14	皿	(6.6)	1.1	(4.5)		水平な底部から体部は直線的に外上方へ伸び口縁部に至る。口縁端部にススが点々と付着。右回転糸切り底。	橙茶色	0.5mm 大の砂粒含む	やや軟調
SK48-21	焙烙鍋	26.5	-	-	30.4	体部から口縁部は内湾し袋状になる。体部中央には凸帯が貼りつく。また、外面体部上方に粘土貼り付けによる把手が2つ付く。内及び外上半はナデ、外下半は指頭圧痕。	黒灰色	0.5mm 大の砂粒含む	軟調
SK49-22	内耳土器	(28.4)	-	-	-	体部は内湾しつつ外上方へ伸び口縁部は強く外反する。内ハケ目のうちナデ、外指頭圧痕。	黒灰色	2mm 大の砂粒含む	やや軟調
SK49-23	内耳土器	-	-	-	-	口縁部は強く外反する。内ハケ目のうちナデ、外指頭圧痕。	橙灰色	1mm 大の砂粒含む	良好
SK49-24	内耳土器	-	-	-	-	口縁部は強く外反する。内耳の有無は確認できず。内外ともナデ。外指頭圧痕。	灰色	1mm 大の砂粒含む	良好
SK49-25	皿	9.4	1.8	6.5	-	水平な底部から体部は直線的に外上方へ伸び口縁部に至る。口縁端部にススが若干付着。右回転糸切り底。	茶褐色	1mm 大の砂粒含む	やや軟調
SK49-26	皿	9.5	1.3	6.1		水平な底部から体部は内湾しつつ外上方へ伸び口縁部に至る。スス付着せず。右回転糸切り底。	黄白色	2mm 大の砂粒含む	やや軟調
SK49-27	皿	-	-	-		水平な底部から体部は内湾しつつ外上方へ伸び口縁部に至る。スス付着せず。右回転糸切り底。	灰色～肌色	1mm 大の砂粒多量に含む	やや軟調
SK51-23	皿	6.9	1.1	4.5	-	水平な底部から体部は内湾しつつ外上方へ伸び口縁部に至る。スス付着せず。右回転糸切り底。	肌白色	1mm 大の砂粒含む	やや軟調
SK51-24	皿	6.6	1.2	4.6	-	水平な底部から体部は直線的に外上方へ伸び口縁部に至る。スス付着せず。右回転糸切り底。	橙褐色	1mm 大の砂粒含む	やや軟調
SK51-25	皿	(5.6)	0.7	(5.1)	-	水平な底部から体部は内湾しつつ外上方へ伸び口縁部に至る。スス付着せず。右回転糸切り底。	赤褐色	1mm 大の砂粒含む	やや軟調
SK51-26	皿	(4.9)	0.6	(4.4)		水平な底部から体部は内湾しつつ外上方へ伸び口縁部に至る。スス付着せず。糸切り底。回転方向不明。	肌色	精緻	やや軟調
SK51-27	内耳土器	-	-	-	-	口縁部は短く外反する。内外ナデ。外指頭圧痕。	内—橙褐色 外—黒灰色	2mm 大の砂粒含む	やや軟調

番 号	器種	寸 法 (cm)				特 徴	色 調	胎 土	焼 成
		口径	器高	底径	底径				
SK51-28	内耳土器	-	-	-	-	体部は内湾しつつ口縁部に至り、端部は丸くおさめる。外面にスス府付着。内外ナデ、外指頭圧痕。	灰色	1mm 大の砂粒含む	良好
SK52-13	内耳土器	(34.0)	-	-	(31.2)	底部から体部は内湾しつつ外上方に伸び口縁部は強く外反し肥厚させる。内耳は粘土の張りつけが少なく下まで穿孔しない。内ハケ目のちナデ、外下半ハケ目、中央部指頭圧痕及びハケ目、上半ナデ。	黒色	0.5mm 大の砂粒含む	良好
SK52-14	内耳土器	-	-	-	-	口縁部は強く外反する。内耳は粘土の張りつけが少なく穿孔はしない。内外ともナデ。	灰黒色	0.5mm 大の砂粒含む	良好
SK54-34	皿	(6.9)	(1.1)	(5.0)	-	水平な底部から体部は直線的に外上方へ伸び口縁部に至る。右回転糸切り底。口縁端部1か所スス付着。	橙褐色	1mm 大の砂粒大量に含む	やや軟調
SK54-35	皿	(6.6)	1.0	5.1	-	水平な底部から体部は直線的に外上方へ伸び口縁部に至る。右回転糸切り底。スス付着せず。精製品。	灰茶色	1mm 大の砂粒若干含む	良好
SK54-36	内耳土器	(28.0)	-	-	(25.6)	口縁部は強く外反する。内外ともナデ、外指頭圧痕。	黒灰色	0.5mm 大の砂粒若干含む	良好
SD2-159	皿	5.5	1.1	4.2	-	水平な底部から体部は直線的に外上方へ伸び口縁部に至る。右回転糸切り底。4か所にスス付着。	橙褐色	0.5mm 大の砂粒、橙褐色粘土塊含む	良好
SD3-30	内耳土器	-	-	-	-	口縁部は強く外反する。内ハケ目のちナデ、外ハケ目のちナデ、指頭圧痕。	内—黄灰色 外—黒灰色	2mm 大の砂粒も含む	良好
SD3-31	内耳土器	-	-	-	-	口縁部は強く外反する。内耳の有無は確認できず。内ハケ目のちナデ、外ナデ、指圧頭圧痕。	黒灰色	0.5mm 大の砂粒含む	良好
SD3-32	内耳土器	-	-	-	-	口縁部は強く外反する。内耳の有無は確認できず。内ハケ目のちナデ、外ナデ、指圧頭圧痕。	黒灰色	0.5mm 大の砂粒含む	やや軟調
SD3-33	皿	12.5	2.4	7.3	-	水平な底部から体部は直線的に外上方へ伸び口縁部に至る。右回転糸切り底。口縁部にススが大量に付着。	黄白色	1mm 大の砂粒含む	軟調
SD4-25	内耳土器	-	-	-	-	口縁部は強く外反する。内ハケ目のちナデ、外ナデ、指頭圧痕。	黒灰色	0.5mm 大の砂粒含む	良好
SD4-26	焼塩壺	-	-	-	-	水平な底部から体部が直立し口縁部に至る。	橙褐色	3mm 大の砂粒含む	軟調
SD7-40	内耳土器	-	-	-	-	口縁部は強く外反する。内耳の有無は確認できず。内ハケ目、外ナデ、指頭圧痕。	黒灰色	0.5mm 大の砂粒含む	やや軟調
SD7-41	内耳土器	-	-	-	-	口縁部は強く外反する。内耳の有無は確認できず。内外ナデ、外指頭圧痕。	灰褐色	1mm 大の砂粒含む	良好
SD7-42	皿	(11.7)	2.2	6.5	-	水平な底部から体部は内湾しつつ外上方へ伸び口縁部に至る。右回転糸切り底。内外に黒斑。ススは付着せず。	橙褐色	1mm 大の砂粒含む	やや軟調

番 号	器種	寸 法 (cm)				特 徴	色 調	胎土	焼成
		口径	器高	底径	底径				
SD8-111	皿	(9.2)	1.6	6.3	-	水平な底部から体部は内湾しつつ外上方へ伸び口縁部に至る。右回転糸切り底。口縁部にスス少量付着。	黄白色	0.5mm 大の砂粒含む	やや軟調
SD8-112	皿	5.7	2.0	4.2	-	水平な底部から体部は内湾しつつ外上方へ伸び口縁部に至る。右回転糸切り底。口縁部にスス少量付着。精製品。	黄橙色	1mm 大の砂粒含む	良好
SD8-113	皿	5.9	1.0	4.0	-	水平な底部から体部は内湾しつつ外上方へ伸び口縁部に至る。左回転糸切り底。口縁部にスス付着。	橙褐色	2mm 大の砂粒含む	やや軟調
SD8-114	皿	5.5	1.5	3.7	-	水平な底部から体部は直線的に外上方へ伸び口縁部に至る。右回転糸切り底。スス付着せず。	橙褐色	0.5mm 大の砂粒含む	やや軟調
SD8-115	皿	5.6	0.9	4.2	-	水平な底部から体部は直線的に外上方へ伸び口縁部に至る。右回転糸切り底。スス付着せず。	橙褐色	0.5mm 大の砂粒含む	やや軟調
SD8-116	皿	5.8	1.0	4.2	-	水平な底部から体部は直線的に外上方へ伸び口縁部に至る。右回転糸切り底。スス付着せず。	橙褐色	0.5mm 大の砂粒含む	やや軟調
SD8-117	内耳土器	(42.4)	-	-	(39.4)	体部は内湾しつつ外上方に伸び短く立ち上がり口縁部は肥厚させて強く外反する。内耳の有無は確認できない。内ナデ、外指頭圧痕。	黒灰色	1mm 大の砂粒若干含む	良好
SD8-118	焜炉	17.1	18.1	14.0	-	水平な底部から体部は直立し、口縁部は一旦平らな面をつくった後漏斗状に下へ下がる。外面口縁部やや下に貼りつけの把手か。正面下部に開口部あり。脚部は四隅にL字状に付く。内ハケ目、外ミガキ？	内—橙灰色 外—黒灰色	5mm 大の砂粒も含む	やや軟調
SD8-119	焜炉	(24.3)	21.8	22.2	29.5	水平な底部から体部は内湾しつつ、立ち上がり袋状になる。ハの字状に開く脚部を貼りつける。内ハケ目、外ミガキ。	内—橙灰色 外—黒灰色	精緻であるが2mm 大の砂粒も含む	良好
SX8-10	焼塩壺蓋	7.3	2.0	8.2	-	凹部に布目圧痕。	橙褐色	1mm の砂粒含む	軟調

表－８ その他製品観察表

() は復元数値

番 号	種類	材質	寸 法 (cm)	特 徴
SK7-12	キセル 吸い口	青銅	全長 6.6。肩径 1.0 厚さ 0.1。吸口径 0.45	厚手でくびれが大きい
SK23-13	簪	青銅	現存長 12.7、径 0.15	円板状の飾り部分で二股に分かれる。耳搔きが付く。
SK23-14	鋌	青銅	全長 3.8、径 0.2 頭部径 1.1	頭部は丸。体部は断面六角形。
SK23-17	基石	石	径 2.1、厚さ 0.4	黒
SK39-62	キセル 吸い口	青銅 青銅	全長 6.6、肩径 1.0 厚さ 0.05、吸口径 0.3	
SK45-22	キセル 雁首		全長 5.2、火皿径 1.25 厚さ 0.05、首部径 0.8	補強帯あり。

(○は実測図を掲載したものである)

表-12 SK7 出土遺物生產年代表

(○は実測図を掲載したものである)

表-13 SK8 出土遺物生產年代表

(○は実測図を掲載したものである)

SK8	1600	1650	1700	1750	1800	1850	1900	特 徴	器 種	生産地
1	1600	1650	1700	1750	1800	1850	1900	青花	皿	景德镇
2	1600	1650	1700	1750	1800	1850	1900	花付	碗	景德镇
3	1600	1650	1700	1750	1800	1850	1900	?	碗	景德镇
4	1600	1650	1700	1750	1800	1850	1900	?	碗	景德镇
5	1600	1650	1700	1750	1800	1850	1900	?	碗	景德镇
6	1600	1650	1700	1750	1800	1850	1900	?	碗	景德镇
7	1600	1650	1700	1750	1800	1850	1900	?	碗	景德镇
8	1600	1650	1700	1750	1800	1850	1900	?	碗	景德镇
9	1600	1650	1700	1750	1800	1850	1900	?	碗	景德镇
10	1600	1650	1700	1750	1800	1850	1900	?	碗	景德镇
11	1600	1650	1700	1750	1800	1850	1900	?	碗	景德镇
12	1600	1650	1700	1750	1800	1850	1900	?	碗	景德镇
13	1600	1650	1700	1750	1800	1850	1900	?	碗	景德镇
14	1600	1650	1700	1750	1800	1850	1900	?	碗	景德镇
15	1600	1650	1700	1750	1800	1850	1900	?	碗	景德镇
16	1600	1650	1700	1750	1800	1850	1900	?	碗	景德镇
17	1600	1650	1700	1750	1800	1850	1900	?	碗	景德镇
18	1600	1650	1700	1750	1800	1850	1900	?	碗	景德镇
19	1600	1650	1700	1750	1800	1850	1900	?	碗	景德镇
20	1600	1650	1700	1750	1800	1850	1900	?	碗	景德镇
21	1600	1650	1700	1750	1800	1850	1900	?	碗	景德镇
22	1600	1650	1700	1750	1800	1850	1900	?	碗	景德镇
23	1600	1650	1700	1750	1800	1850	1900	?	碗	景德镇
24	1600	1650	1700	1750	1800	1850	1900	?	碗	景德镇
25	1600	1650	1700	1750	1800	1850	1900	?	碗	景德镇
26	1600	1650	1700	1750	1800	1850	1900	?	碗	景德镇
27	1600	1650	1700	1750	1800	1850	1900	?	碗	景德镇
28	1600	1650	1700	1750	1800	1850	1900	?	碗	景德镇
29	1600	1650	1700	1750	1800	1850	1900	?	碗	景德镇
30	1600	1650	1700	1750	1800	1850	1900	?	碗	景德镇
31	1600	1650	1700	1750	1800	1850	1900	?	碗	景德镇
32	1600	1650	1700	1750	1800	1850	1900	?	碗	景德镇
33	1600	1650	1700	1750	1800	1850	1900	?	碗	景德镇
34	1600	1650	1700	1750	1800	1850	1900	?	碗	景德镇
35	1600	1650	1700	1750	1800	1850	1900	?	碗	景德镇
36	1600	1650	1700	1750	1800	1850	1900	?	碗	景德镇
37	1600	1650	1700	1750	1800	1850	1900	?	碗	景德镇
38	1600	1650	1700	1750	1800	1850	1900	?	碗	景德镇
39	1600	1650	1700	1750	1800	1850	1900	?	碗	景德镇
40	1600	1650	1700	1750	1800	1850	1900	?	碗	景德镇
41	1600	1650	1700	1750	1800	1850	1900	?	碗	景德镇
42	1600	1650	1700	1750	1800	1850	1900	?	碗	景德镇
43	1600	1650	1700	1750	1800	1850	1900	?	碗	景德镇
44	1600	1650	1700	1750	1800	1850	1900	?	碗	景德镇
45	1600	1650	1700	1750	1800	1850	1900	?	碗	景德镇
46	1600	1650	1700	1750	1800	1850	1900	?	碗	景德镇
47	1600	1650	1700	1750	1800	1850	1900	?	碗	景德镇
48	1600	1650	1700	1750	1800	1850	1900	?	碗	景德镇
49	1600	1650	1700	1750	1800	1850	1900	?	碗	景德镇
50	1600	1650	1700	1750	1800	1850	1900	?	碗	景德镇
51	1600	1650	1700	1750	1800	1850	1900	?	碗	景德镇
52	1600	1650	1700	1750	1800	1850	1900	?	碗	景德镇
53	1600	1650	1700	1750	1800	1850	1900	?	碗	景德镇
54	1600	1650	1700	1750	1800	1850	1900	?	碗	景德镇
55	1600	1650	1700	1750	1800	1850	1900	?	碗	景德镇
56	1600	1650	1700	1750	1800	1850	1900	?	碗	景德镇
57	1600	1650	1700	1750	1800	1850	1900	?	碗	景德镇
58	1600	1650	1700	1750	1800	1850	1900	?	碗	景德镇
59	1600	1650	1700	1750	1800	1850	1900	?	碗	景德镇
60	1600	1650	1700	1750	1800	1850	1900	?	碗	景德镇
61	1600	1650	1700	1750	1800	1850	1900	?	碗	景德镇
62	1600	1650	1700	1750	1800	1850	1900	?	碗	景德镇
63	1600	1650	1700	1750	1800	1850	1900	?	碗	景德镇
64	1600	1650	1700	1750	1800	1850	1900	?	碗	景德镇

[illegible]

表-14 SK9出土遺物生産年代表 (○は実測図を掲載したものである)

表-15 SK11 出土遺物生産年代表 (○は実測図を掲載したものである)

表-16 SK12 出土遺物生産年代表 (○は実測図を掲載したものである)

SK12	1600	1650	1700	1750	1800	1850	1900	特 徵	器 種	生產地
○ 1								染付碗	肥前	肥前
2								付小碗	坏	肥前
3								染付碗	?	肥前
4								染付碗	? or 白磁	肥前
5								染付碗	皿蓋	肥前
6								染付碗	碗	肥前
7								染付碗	碗	肥前
8								染付碗	碗	肥前
9								染付碗	碗	肥前
10								染付碗	碗	肥前
11								染付碗	碗	肥前
12								染付碗	碗	肥前

(○は実測図を掲載したものである)

(○は実測図を掲載したものである)

(○は実測図を掲載したものである)

SK17	1600	1650	1700	1750	1800	1850	1900	特 徴	器 種	生産地
1	[Timeline bar from 1600 to 1650]							青花磁付	皿	州
2	[Timeline bar from 1600 to 1650]							青花磁付	物	景徳窯
3	[Timeline bar from 1600 to 1650]							青花磁付	瓶	肥前
4	[Timeline bar from 1600 to 1700]							青花磁付 or 青磁	瓶	肥前
5	[Timeline bar from 1625 to 1650]							青花磁付	碗	肥前
6	[Timeline bar from 1625 to 1650]							青花磁付	碗	肥前
7	[Timeline bar from 1625 to 1700]							青花磁付	皿	肥前
8	[Timeline bar from 1625 to 1700]							青花磁付	皿	肥前
9	[Timeline bar from 1625 to 1700]							青花磁付	物	肥前
10	[Timeline bar from 1625 to 1700]							青花磁付	袋物	肥前
11	[Timeline bar from 1625 to 1700]							青花磁付	皿	肥前
12	[Timeline bar from 1625 to 1700]							青花磁付	皿	肥前
13	[Timeline bar from 1625 to 1700]							青花磁付	瓶	肥前
14	[Timeline bar from 1625 to 1700]							青花磁付	瓶	肥前
15	[Timeline bar from 1625 to 1700]							青花磁付	皿	肥前
16	[Timeline bar from 1625 to 1700]							青花磁付	蓋	肥前
17	[Timeline bar from 1625 to 1725]							青花磁付 or 青磁	うがい碗	肥前
18	[Timeline bar from 1625 to 1725]							青花磁付 or 青磁	瓶	肥前
19	[Timeline bar from 1625 to 1725]							青花磁付	碗	肥前
20	[Timeline bar from 1625 to 1725]							青花磁付	碗	肥前
21	[Timeline bar from 1625 to 1750]							青花磁付	飯器	肥前
22	[Timeline bar from 1625 to 1750]							青花磁付	碗	肥前
23	[Timeline bar from 1625 to 1750]							青花磁付	瓶	肥前
24	[Timeline bar from 1625 to 1750]							青花磁付	瓶	肥前
25	[Timeline bar from 1625 to 1775]							青花磁付	皿	肥前
26	[Timeline bar from 1675 to 1725]							青花磁付	碗	肥前
27	[Timeline bar from 1675 to 1750]							青花磁付	付	肥前
28	[Timeline bar from 1675 to 1750]							青花磁付	碗	田

[illegible]

(○は実測図を掲載したものである)

SK19	1600	1650	1700	1750	1800	1850	1900	特 徴	器 種	生産地
1								色繪	大皿	州窯
2								白磁物？	蓋物？	肥前
3								青磁袋物	袋物	肥前
4								青磁袋物	袋物	肥前
5								青磁袋物	袋物	肥前
6								青磁袋物	袋物	肥前
7								青磁袋物	袋物	肥前
8								青磁袋物	袋物	肥前
9								青磁袋物	袋物	肥前
10								青磁袋物	袋物	肥前
11								青磁袋物	袋物	肥前
12								青磁袋物	袋物	肥前
13								青磁袋物	袋物	肥前
14								青磁袋物	袋物	肥前
15								青磁袋物	袋物	肥前
16								青磁袋物	袋物	肥前
17								青磁袋物	袋物	肥前
18								青磁袋物	袋物	肥前
19								青磁袋物	袋物	肥前
20								青磁袋物	袋物	肥前
21								青磁袋物	袋物	肥前
22								青磁袋物	袋物	肥前
23								青磁袋物	袋物	肥前
24								青磁袋物	袋物	肥前
25								青磁袋物	袋物	肥前
26								青磁袋物	袋物	肥前
27								青磁袋物	袋物	肥前
28								青磁袋物	袋物	肥前
29								青磁袋物	袋物	肥前
30								青磁袋物	袋物	肥前
31								青磁袋物	袋物	肥前
32								青磁袋物	袋物	肥前
33								青磁袋物	袋物	肥前
34								青磁袋物	袋物	肥前
35								青磁袋物	袋物	肥前
36								青磁袋物	袋物	肥前
37								青磁袋物	袋物	肥前
38								青磁袋物	袋物	肥前
39								青磁袋物	袋物	肥前
40								青磁袋物	袋物	肥前
41								青磁袋物	袋物	肥前
42								青磁袋物	袋物	肥前
43								青磁袋物	袋物	肥前
44								青磁袋物	袋物	肥前
45								青磁袋物	袋物	肥前
46								青磁袋物	袋物	肥前
47								青磁袋物	袋物	肥前
48								青磁袋物	袋物	肥前
49								青磁袋物	袋物	肥前
50								青磁袋物	袋物	肥前
51								青磁袋物	袋物	肥前
52								青磁袋物	袋物	肥前
53								青磁袋物	袋物	肥前
54								青磁袋物	袋物	肥前
55								青磁袋物	袋物	肥前
56								青磁袋物	袋物	肥前
57								青磁袋物	袋物	肥前
58								青磁袋物	袋物	肥前
59								青磁袋物	袋物	肥前
60								青磁袋物	袋物	肥前
61								青磁袋物	袋物	肥前
62								青磁袋物	袋物	肥前
63								青磁袋物	袋物	肥前
64								青磁袋物	袋物	肥前
65								青磁袋物	袋物	肥前
66								青磁袋物	袋物	肥前
67								青磁袋物	袋物	肥前
68								青磁袋物	袋物	肥前
69								青磁袋物	袋物	肥前
70								青磁袋物	袋物	肥前
71								青磁袋物	袋物	肥前
72								青磁袋物	袋物	肥前
73								青磁袋物	袋物	肥前
74								青磁袋物	袋物	肥前
75								青磁袋物	袋物	肥前
76								青磁袋物	袋物	肥前
77								青磁袋物	袋物	肥前
78								青磁袋物	袋物	肥前
79								青磁袋物	袋物	肥前
80								青磁袋物	袋物	肥前
81								青磁袋物	袋物	肥前
82								青磁袋物	袋物	肥前
83								青磁袋物	袋物	肥前
84								青磁袋物	袋物	肥前

表-24 SK20 出土遺物生産年代表 (○は実測図を掲載したものである)

表-25 SK22 出土遺物生産年代表 (○は実測図を掲載したものである)

[illegible]

表-26 SK23 出土遺物生產年代表

[illegible]

表-27 SK24 出土遺物生產年代表

SK24	1600	1650	1700	1750	1800	1850	1900	特 徵	器 種	生 産 地
1			?					磁付?	碗?	肥前
2								青磁付?	碗	肥前
3								白磁付?	碗	肥前
4								白磁付?	皿 or 鉢	肥前田
5					?			白磁付?	碗	肥有
6								染磁付?	碗	肥前
7			?						碗	肥前
8									碗	肥前
9									碗	肥前
10									碗 or 皿	瀬戸美濃
11					?				蓋物	関西系?

表-28 SK27 出土遺物生產年代表

SK27	1600	1650	1700	1750	1800	1850	1900	特 徵	器 種	生 產 地
○ 1	-----		?					付 or 白磁	皿 ?	肥前
2	-----							染付 or 白磁	小坏 ?	肥前
3		-----						染付 ?	碗	肥前
4			-----					染付 or 白磁	碗 or 坏	肥前
5			-----		-----			染付	碗	肥前系

表-29 SK28 出土遺物生產年代表

SK28	1600	1650	1700	1750	1800	1850	1900	特 徴	器 種	生産地
1								染付	碗	肥前
2								染付	皿	肥前
3								染付	碗	肥前
4								染付	鉢	肥前
5								染付	鉢	肥前
6								染付	鉢	肥前
7								染付	鉢	肥前
8								染付	鉢	肥前
9								染付	鉢	肥前

表-30 SK29 出土遺物生產年代表

SK29	1600	1650	1700	1750	1800	1850	1900	特 徵	器 種	生 產 地
1								付 or 白磁 染付 青磁	皿 碗 袋物 碗	肥前 肥前 肥前 肥前?
2										
3										
4										
5								刷毛目	皿 碗 血 or 鉢	肥前 肥前 肥前?
6										
7										

表-31 SK30 出土遺物生產年代表

SK30	1600	1650	1700	1750	1800	1850	1900	特 徴	器 種	生産地
○ 1	┆	┆	┆	┆	┆	┆	┆	染付	碗 碗？ 皿	肥前 肥前 田原 肥前
○ 2	┆	┆	┆	┆	┆	┆	┆	付		
○ 3	┆	┆	┆	┆	┆	┆	┆	付		
○ 4	┆	┆	┆	┆	┆	┆	┆	付		

(○は実測図を掲載したものである)

(○は実測図を掲載したものである)

SK36	1600	1650	1700	1750	1800	1850	1900	特 徵	器 種	生 產 地
○ 1								陶胎染付	碗	肥前
2								陶胎染付	碗	肥前
3								陶胎染付	碗	肥前
4								陶胎染付	碗	肥前
5								染付	蓋碗	肥前
6								染付	碗	肥前
7								染付	皿	肥前
8								染付	碗	肥前

表-39 SK43 出土遺物生産年代表 (○は実測図を掲載したものである)

表-40 SK44 出土遺物生産年代表 (○は実測図を掲載したものである)

表 41 SK45 出土遺物生産年代表 (○は実測図を掲載したものである)

SK45	1600	1650	1700	1750	1800	1850	1900	特 徴	器 種	生産地
1								青花 ?	?	州窯
2								白磁 ?	碗 ?	景德鎮窯
3								白磁付	碗 ?	肥前
4								染付 or 白磁	碗 ?	肥前
5								青磁 ?	碗 ?	肥前
6								素灰釉	碗 ?	山瀬窯
7										肥前 ?
8										肥前
9										肥前
10										瀬戸美濃
11								黄瀬戸 胎土夕キ	碗皿 口碗	肥前濃
12									片碗	肥前濃
○13									茶碗	肥前濃
14									皿	肥前

(○は実測図を掲載したものである)

(○は実測図を掲載したものである)

(○は実測図を掲載したものである)

(○は実測図を掲載したものである)

(○は実測図を掲載したものである)

表-47 SK53 出土遺物生產年代表

(○は実測図を掲載したものである)

表-48 SK54 出土遺物生產年代表

(○は実測図を掲載したものである)

表-49 SK55 出土遺物生產年代表

(○は実測図を掲載したものである)

SK55	1600	1650	1700	1750	1800	1850	1900	特 徴	器 種	生産地
○ 1								白磁 青磁 青染付	皿 香炉 皿 碗	景德鎮窯 肥前 肥前 肥前
2										
3										
4										

表-50 SD2 出土遺物生産年代表

(○は実測図を掲載したものである)

[illegible]

133							二彩手	皿?	肥前
134								???	関西?
135								???	関西?
136								???	関西?
137							銅緑釉	皿皿皿	内野山窯
138							銅緑釉	皿皿皿	内野山窯
139							銅緑釉	皿皿皿	内野山窯
140								甕 or 壺	中国地方?
141								甕 or 壺	肥前
142								甕 or 壺	瀬戸美濃
143								甕 or 壺	肥前
144							刷毛目	皿皿皿	肥前
145							刷毛目	皿皿皿	肥前
146							刷毛目	皿皿皿	肥前
147							刷毛目	皿皿皿	肥前
148							刷毛目	大袋物	肥前
149								碗碗碗	関西系
150								碗碗碗	関西系
151								碗碗碗	関西系
152								碗碗碗	関西系
153								碗碗碗	関西系
154								袋物	関西系
155								袋物	関西系
156								土瓶	関西系
157								鍋	関西系
158									関西系

SD2 漆喰	1600	1650	1700	1750	1800	1850	1900	特 徴	器 種	生産地
1	14c末~15c							青花付磁	花瓶	龍泉窯
2								青染付磁	碗碗碗	景德鎮
3								青染付磁	皿皿皿	肥前
4								青染付磁	皿皿皿	肥前
5								青染付磁	皿皿皿	肥前
6								青染付磁	瓶瓶瓶	肥前
7								青染付磁	小瓶	肥前
8								青染付磁	鉢鉢鉢	肥前
9								青染付磁	鉢鉢鉢	肥前
10								青染付磁	鉢鉢鉢	肥前
11								青染付磁	鉢鉢鉢	肥前
12								青染付磁	鉢鉢鉢	肥前
13								青染付磁	鉢鉢鉢	肥前
14								青染付磁	鉢鉢鉢	肥前
15								青染付磁	鉢鉢鉢	肥前
16								青染付磁	鉢鉢鉢	肥前
17								青染付磁	鉢鉢鉢	肥前
18								青染付磁	鉢鉢鉢	肥前
19								青染付磁	鉢鉢鉢	肥前
20								青染付磁	鉢鉢鉢	肥前
21								青染付磁	鉢鉢鉢	肥前
22								青染付磁	鉢鉢鉢	肥前
23								青染付磁	鉢鉢鉢	肥前
24								青染付磁	鉢鉢鉢	肥前
25								青染付磁	鉢鉢鉢	肥前
26								青染付磁	鉢鉢鉢	肥前
27								青染付磁	鉢鉢鉢	肥前
28								青染付磁	鉢鉢鉢	肥前
29								青染付磁	鉢鉢鉢	肥前
30								青染付磁	鉢鉢鉢	肥前
31								青染付磁	鉢鉢鉢	肥前
32								青染付磁	鉢鉢鉢	肥前
33								青染付磁	鉢鉢鉢	肥前
34								青染付磁	鉢鉢鉢	肥前
35								青染付磁	鉢鉢鉢	肥前
36								青染付磁	鉢鉢鉢	肥前
37								青染付磁	鉢鉢鉢	肥前
38								青染付磁	鉢鉢鉢	肥前
39								青染付磁	鉢鉢鉢	肥前
40								青染付磁	鉢鉢鉢	肥前
41								青染付磁	鉢鉢鉢	肥前
42								青染付磁	鉢鉢鉢	肥前
43								青染付磁	鉢鉢鉢	肥前

SD2 赤土	1600	1650	1700	1750	1800	1850	1900	特 徴	器 種	生産地
1								染付磁	皿皿皿	肥前
2								白染付磁	皿皿皿	肥前
3								油蓋物?	油蓋物?	肥前
4								染付磁	碗碗碗	肥前
5								染付磁	碗碗碗	肥前
6								染付磁	碗碗碗	肥前
7								青染付磁	碗碗碗	肥前
8								青染付磁	碗碗碗	肥前
9								青染付磁	碗碗碗	肥前
10								青染付磁	碗碗碗	肥前
11								青染付磁	碗碗碗	肥前
12								青染付磁	碗碗碗	肥前

SD6	1600	1650	1700	1750	1800	1850	1900	特 徴	器 種	生産地
1								染付 or 白磁	皿	肥前
2								染付	碗	肥前
3								染付	?	肥前
4								染付	碗	肥前
5								染付	猪口	肥前
6								染付	皿	肥前
7								染付	飯器	肥前
8								染付	碗	肥前
9								染付	碗	肥前
10								染付	飯器	肥前
11								染付	碗	肥前
12								染付	皿	肥前
13								染付	碗	肥前
14								白磁付	碗	肥前
15								青磁付	碗	肥前
16								青磁付	碗	肥前
17								青磁付	蓋物	肥前
18								染付	碗	肥前
19								染付	塩皿	肥前

表-54 SD7 出土遺物生産年代表

SD7	1600	1650	1700	1750	1800	1850	1900	特 徴	器 種	生産地
1	14	15C						青磁	盤足	龍泉窯
2								青花	皿	州窯系？
3								青花	碗	福建系？
4								青染	肥前	
5								付付	肥前	
6								付付	肥前	
7								付付	肥前	
8								白磁	猪口	肥前
9								付付	碗	肥前
10								白磁	小坏	肥前
11								白磁	小瓶	肥前
12								白磁	碗	肥前
13								白磁 or 白磁	小坏	肥前
14								付付	碗	肥前
15								色絵	碗	肥前
16								陶胎染付	碗	肥前
17								藁灰釉	碗	岸岳？
18								鉄絵	皿	肥前
19									皿	肥前
20									皿	肥前
21									皿	肥前
22								砂目、溝緑	皿	肥前
23									皿	内野山窯
24									碗	肥前
25									碗	肥前
26								鉄釉	火入れ	肥前
27								蛇の目釉	皿	肥前
28								鉄釉	片口	肥前
29								低度釉	置物	肥前
30								刷毛目	碗	肥前
31								刷毛目	碗	肥前
32								刷毛目	碗	肥前
33								銅緑釉	碗	肥前
34									碗	肥前
35								刷毛目	皿	京焼？
36								刷毛目	碗	肥前
37								刷毛目	鉢	肥前

(○は実測図を掲載したものである)

SD8	1600	1650	1700	1750	1800	1850	1900	特 徵	器 種	生 產 地
1								陶胎 染付無釉 高台付 染	?碗 碗皿	州窯
2										肥前
3										肥前
4										肥前

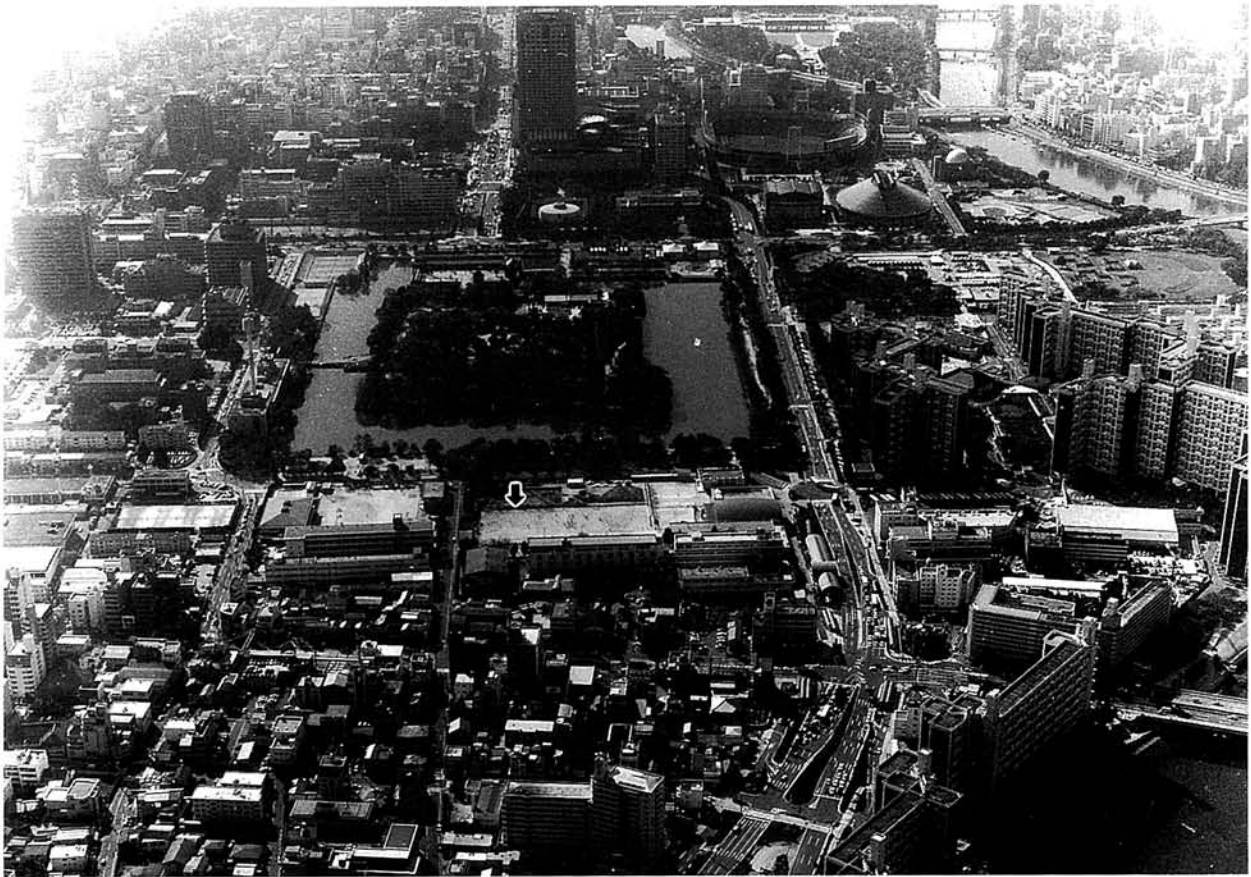
[illegible]

表-56 SD11 出土遺物生産年代表 (○は実測図を掲載したものである)

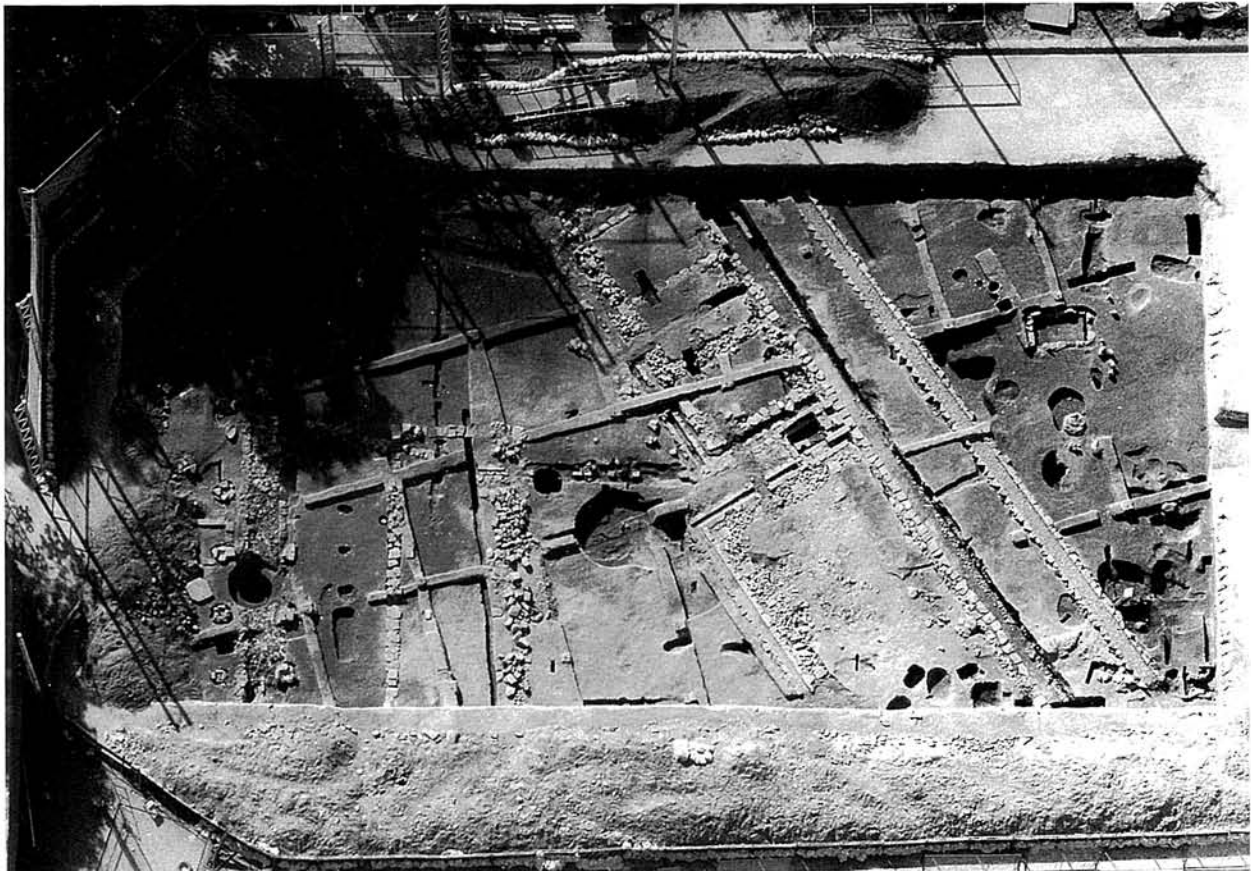
表-57 SD12 出土遺物生産年代表 (○は実測図を掲載したものである)

(注) 破線より上が磁器、破線より下が陶器である。なお、ここに掲載したものは生産年代の明らかな陶磁器にのみであって、その遺構から出土した全陶磁器ではない。

圖 版



a 遺跡遠景（北より）



b 調査区全景（北より）



a SK1 (北より)



b SK1 (完掘後, 北より)



a SK 2, SK 3, SK 4, SX 3-P 3 (西より)



b SK 8 (東より)



a SK3 (北より)



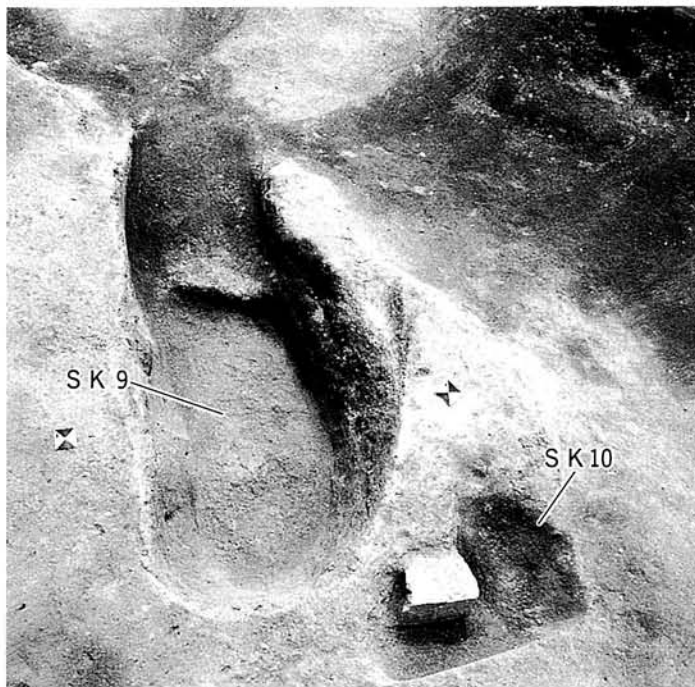
b SK5 (南より)



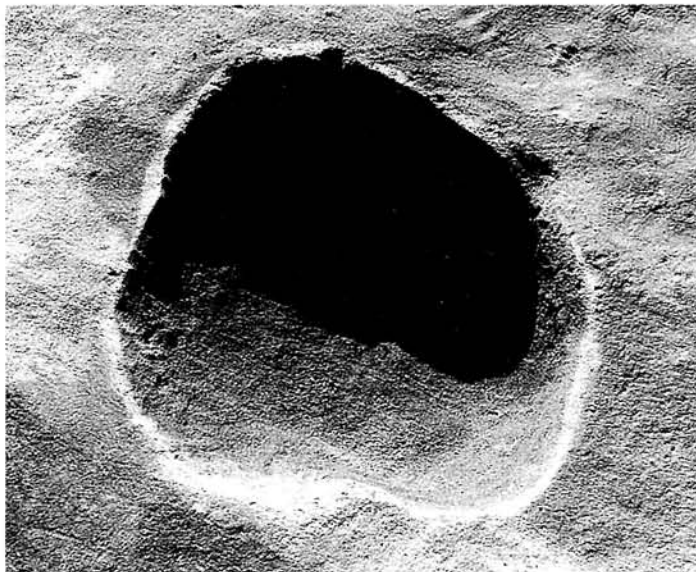
c SK6 (東より)



a SK7 (東より)



b SK9, SK10 (北より)



c SK11 (東より)



a SK12 (北より)



b SK14 (南西より)



c SK18 (西より)



a SK15 (南西より)



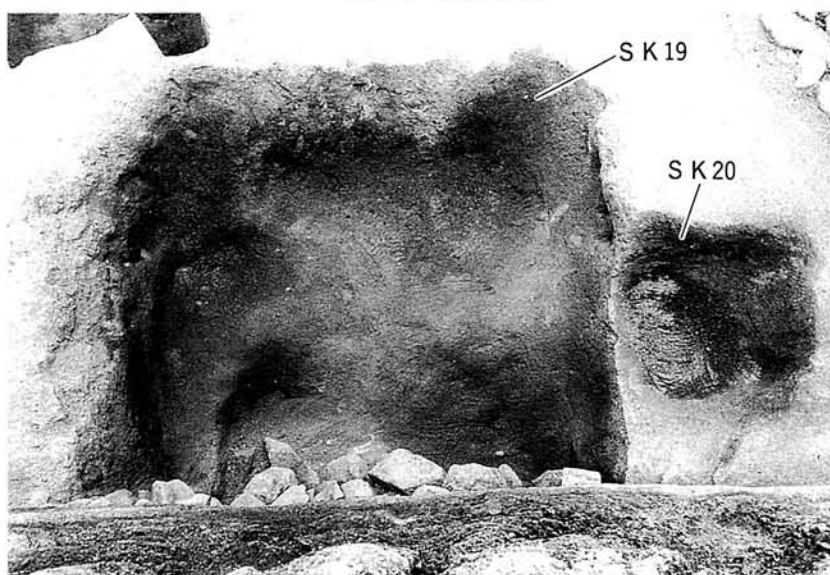
b SK16 (北東より)



c SK17 (西より)



a SK19 (南西より)



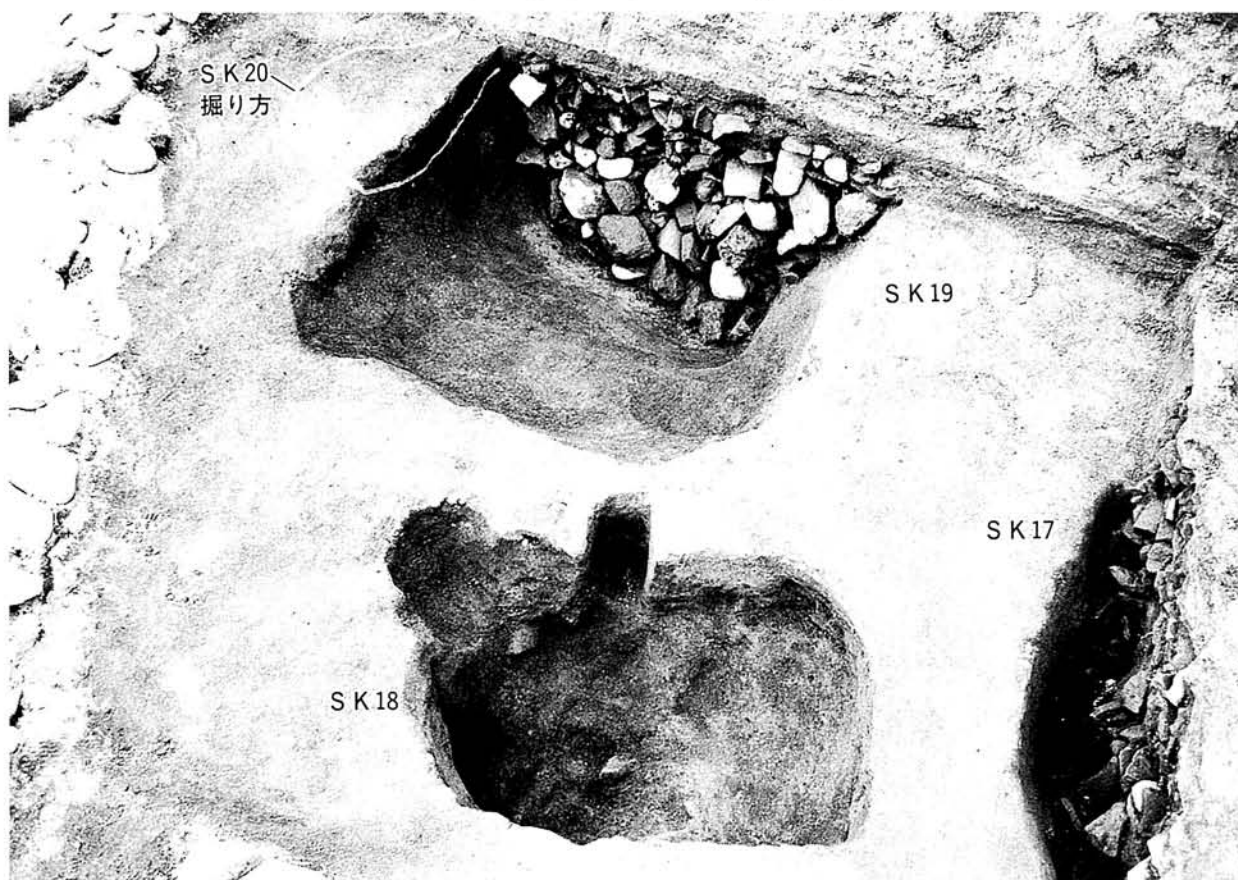
b SK19, SK20 (北より)



c SK23 (北より)



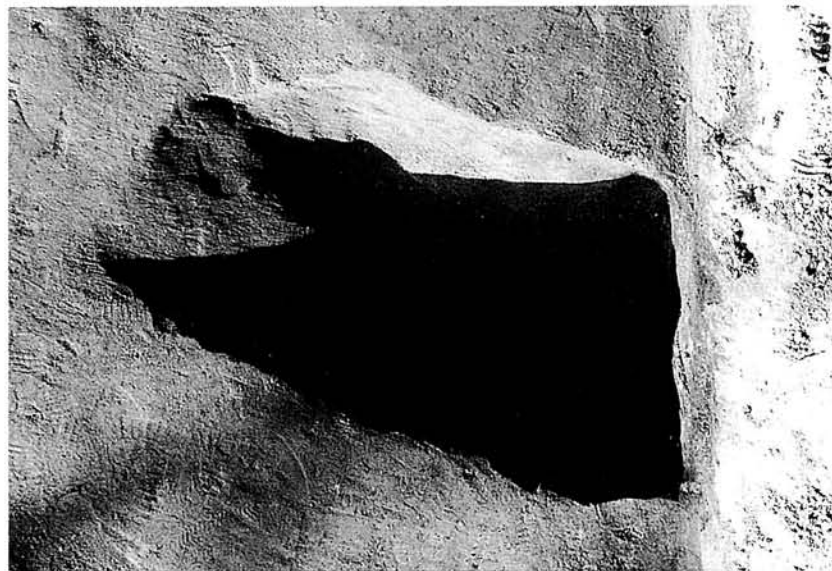
a SK15, SK16, SK17 (北より)



b SK17, SK18, SK19, SK20 (南より)



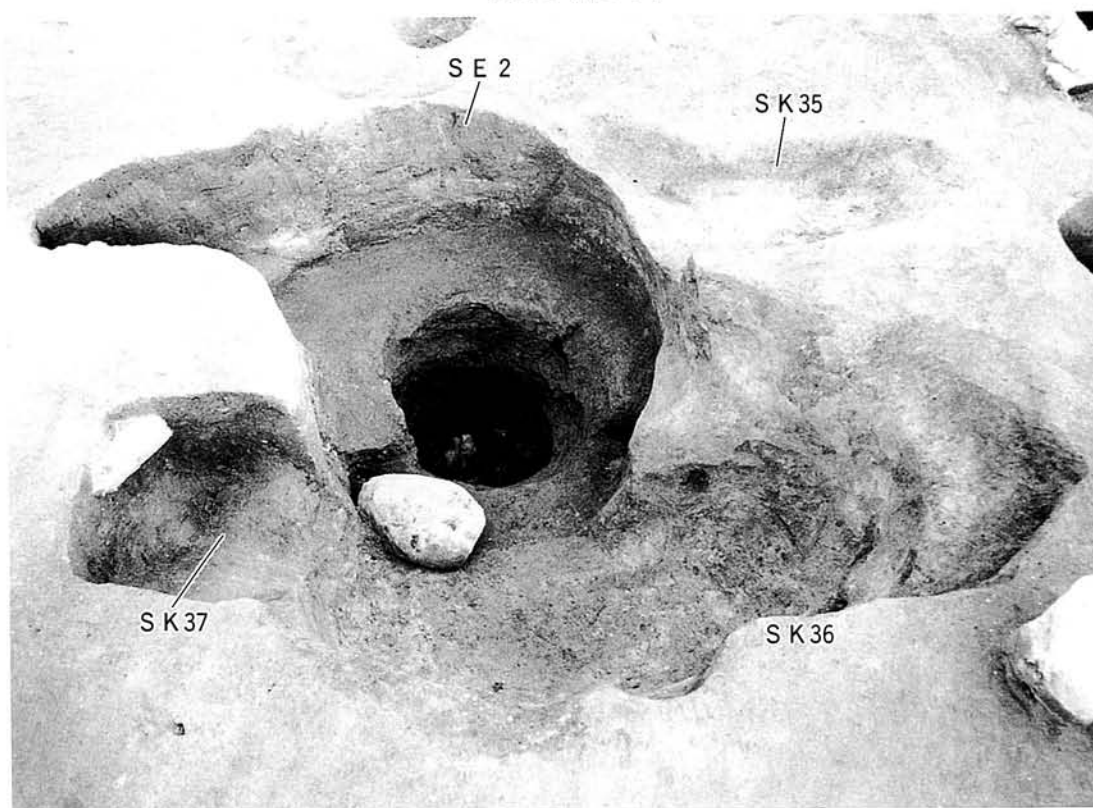
a SK21, SK22 (南より)



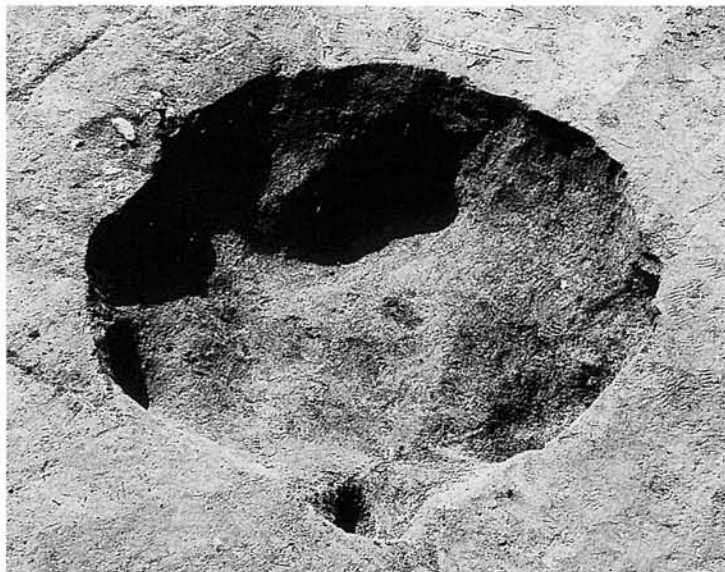
b SK24 (南より)



a SK26 (北より)



b SK35, SK36, SK37, SE 2 (西より)



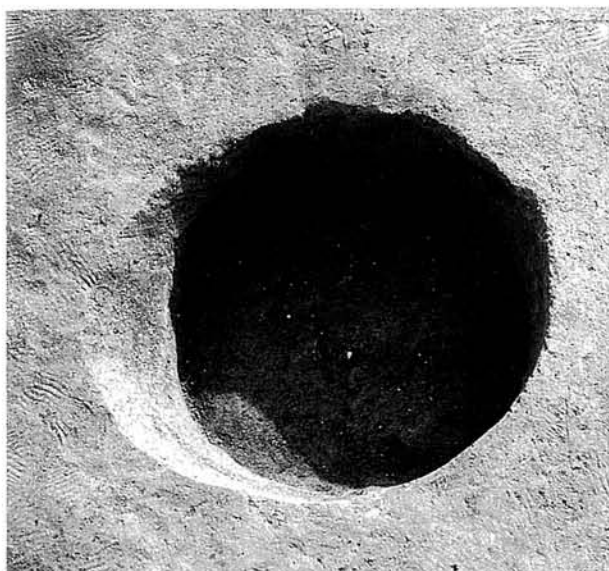
a SK27 (北より)



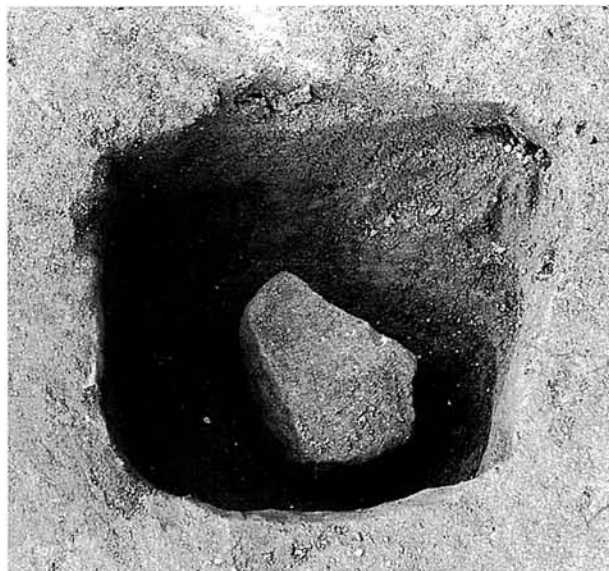
b SK28 (北より)



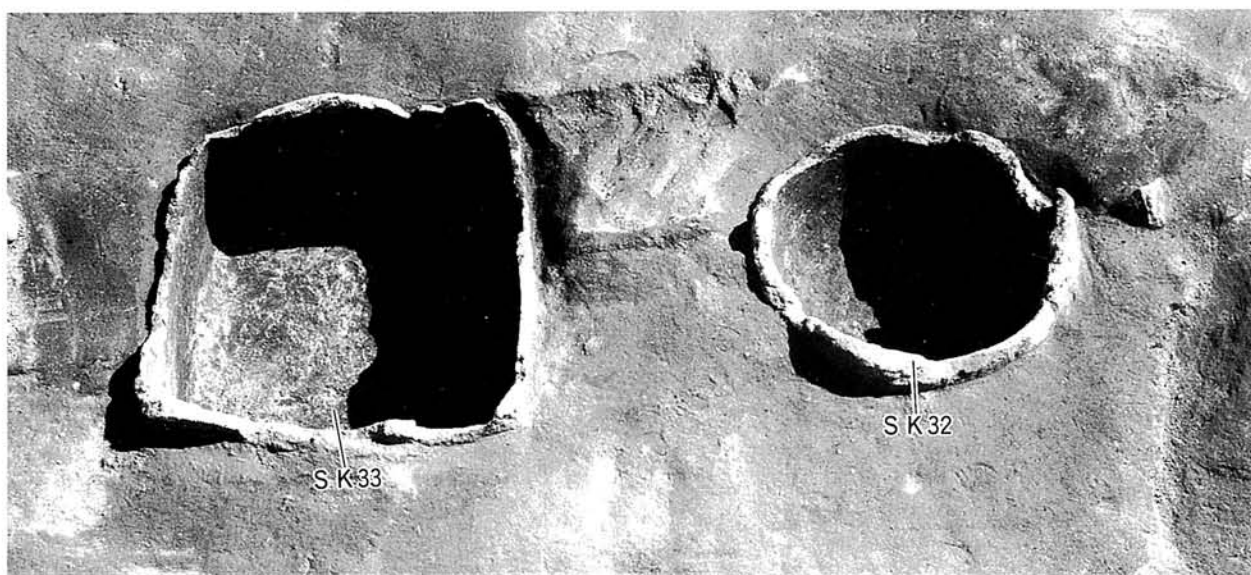
c SK29 (北東より)



a SK30 (北より)



b SK31 (東より)



c SK32, SK33 (西より)



d SK32, SK33 土層断面 (東より)



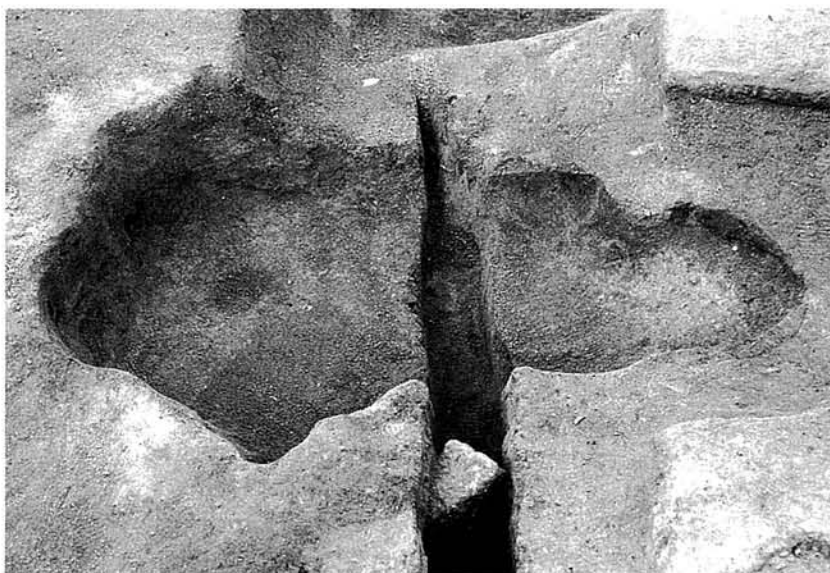
a SK34 (東より)



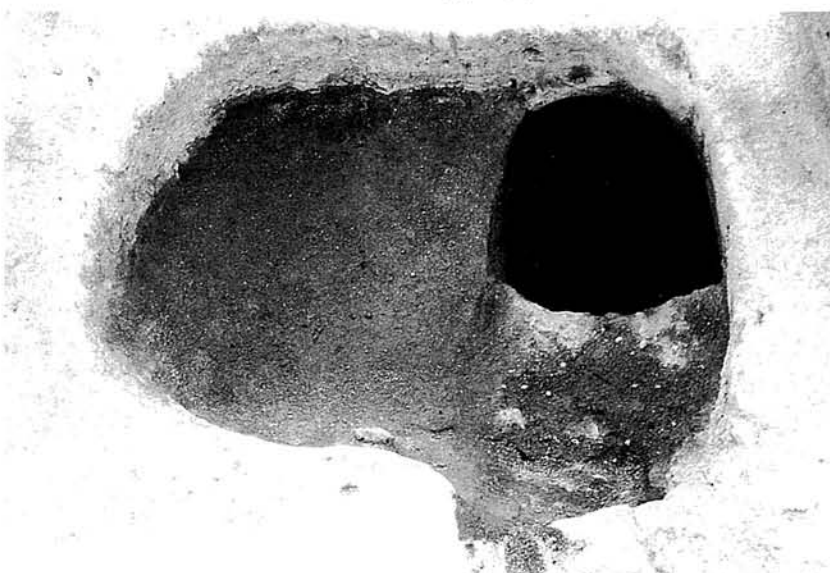
b SK36, SK37 (北より)



a SK36 遺物出土状況（西より）



b SK38（南より）



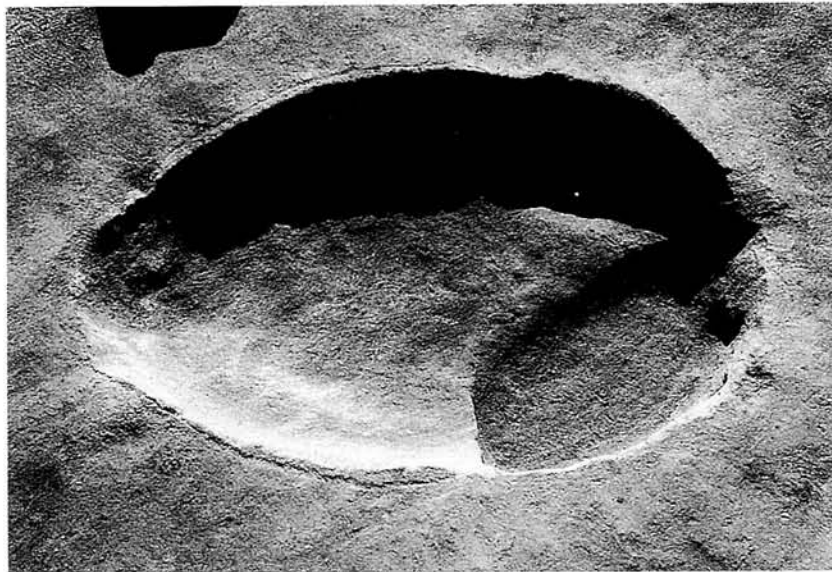
c SK40（東より）



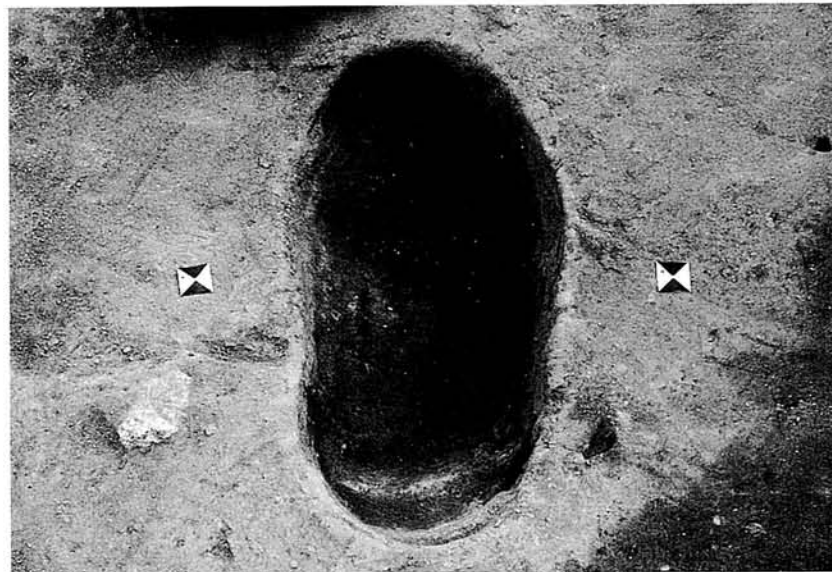
a SK39 (東より)



b SK41 (北より)



a SK42 (西より)



b SK43 (北より)



c SK44 (北より)



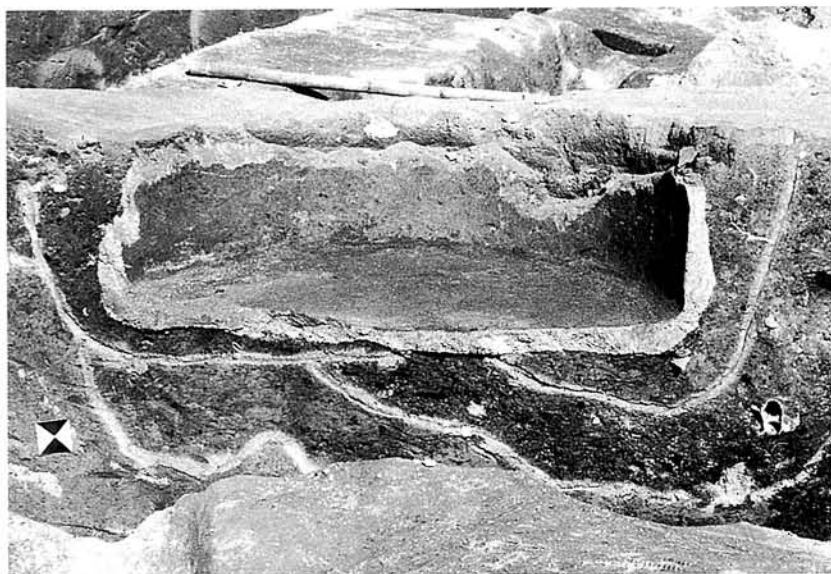
a SK25, SK45, SK46, SK47, SK49 (西より)



b SK50, SK54, SK55, SK56, SX 9 (西より)



a SK48 (南より)



b SK48 土層断面 (南より)



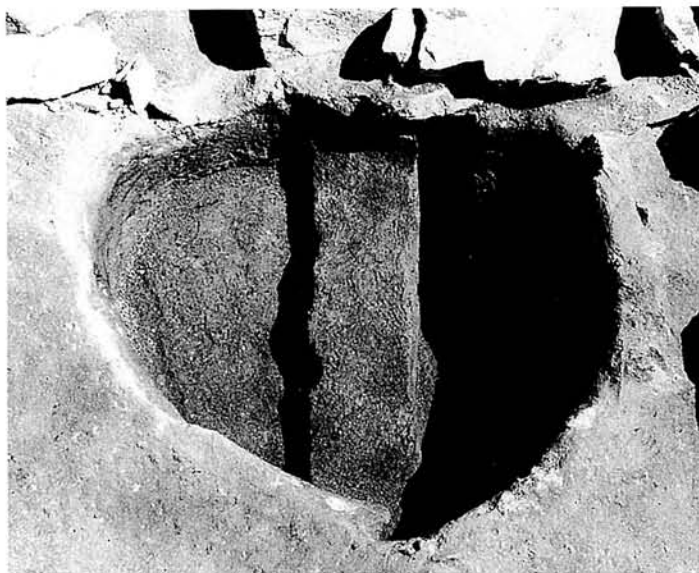
c SK49 (北より)



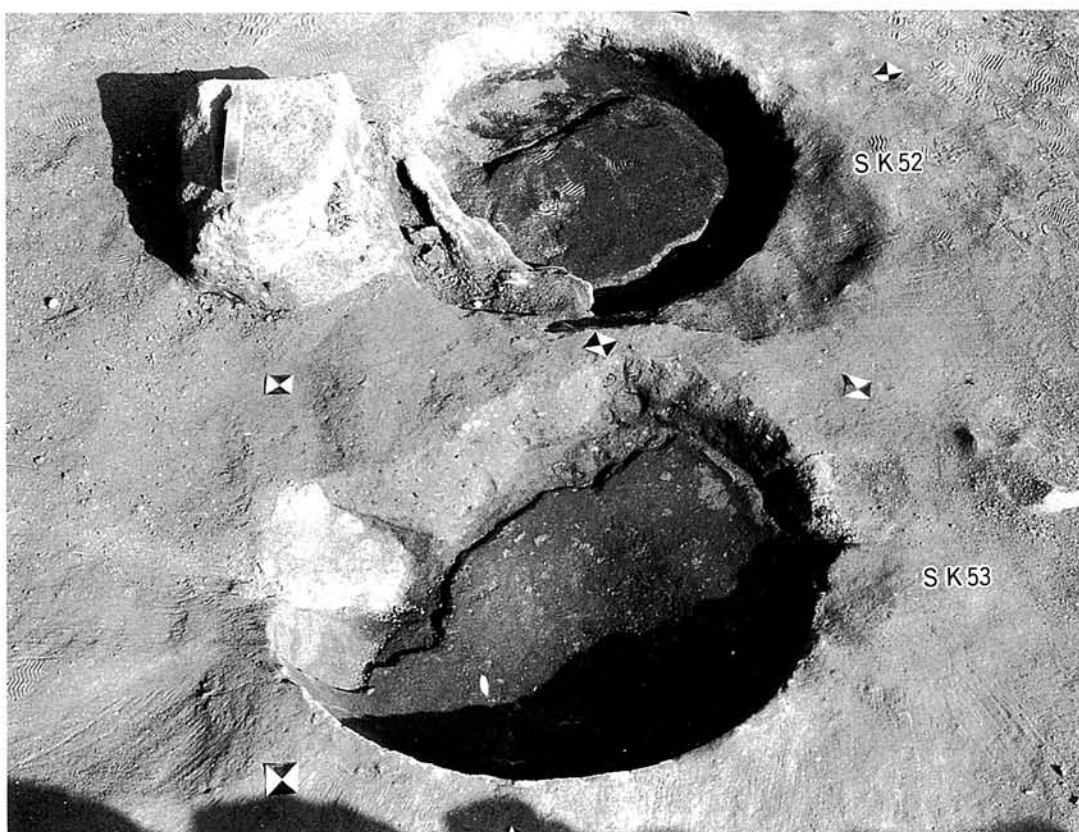
a SK50 (西より)



b SK50 土層断面 (西より)



c SK51 (西より)



a SK52, SK53 (西より)



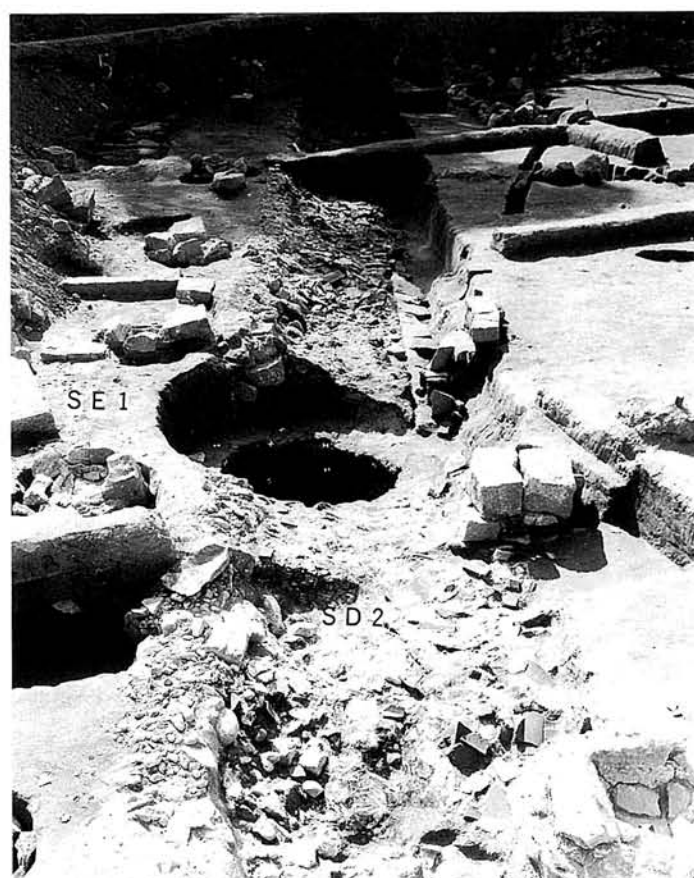
b SK54, SK55, SK56, SX9 (北より)



a SK55 炭化物出土状況（西より）



b SD1（西より）



a SD 2 溝内堆積状況, SE 1 (北より)



b SD 2 溝内堆積状況 (北より)



a SD 2 完掘後（南より）



b SD 2 溝内土層断面（南より）



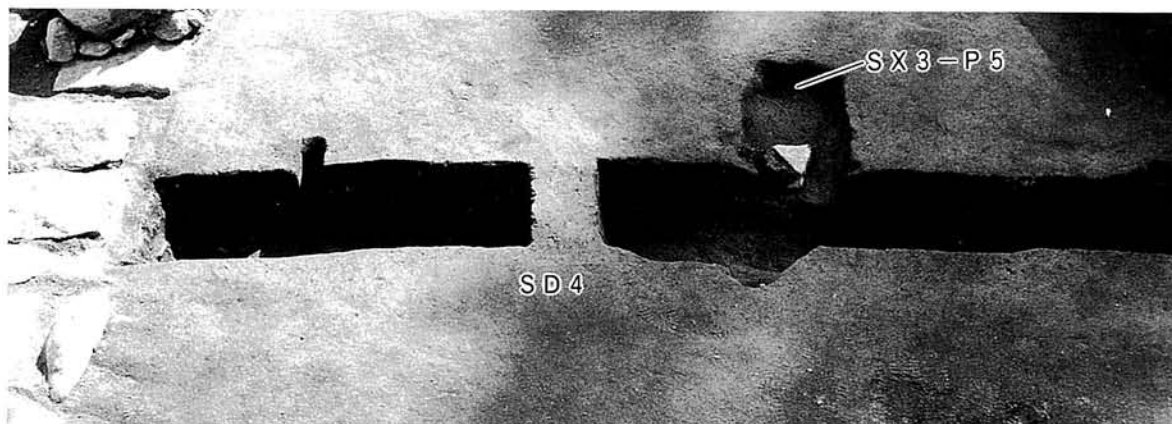
a SD2 土層断面（南より）



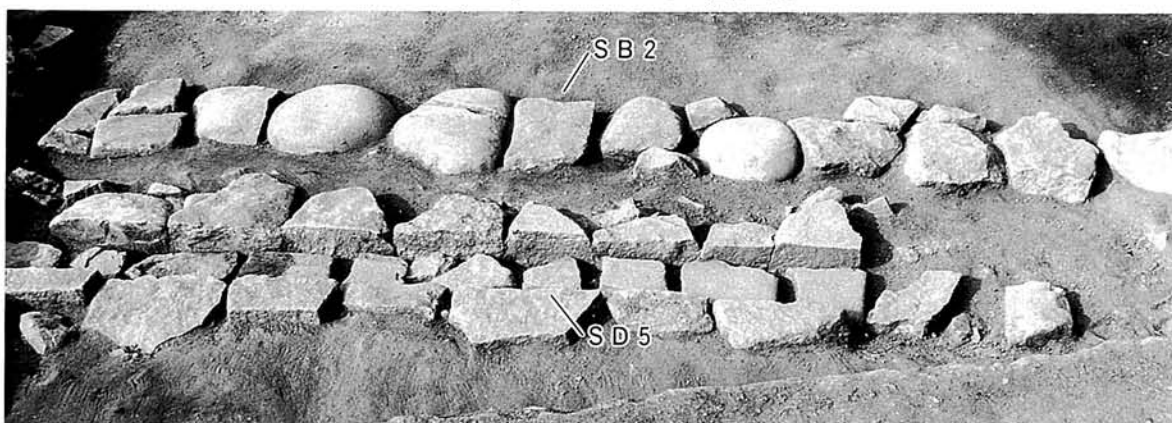
b SD3（西より）



a SD 4 (南より)



b SD 4, SX 3-P 5 (西より)



c SD 5, SB 2 (南より)



a SD 5, SB 2 土層断面 (東より)



b SD 5, SD 6 (西より)



a SD7, SD8 (東より)



b SD7, SD8, SK7 (東より)



a SD 8 遺物出土状況 (北より)



b SD 9 溝内堆積状況 (北より)



a SD9 (南より)



b SD10 (北より)



a SD11, SX6 (西より)



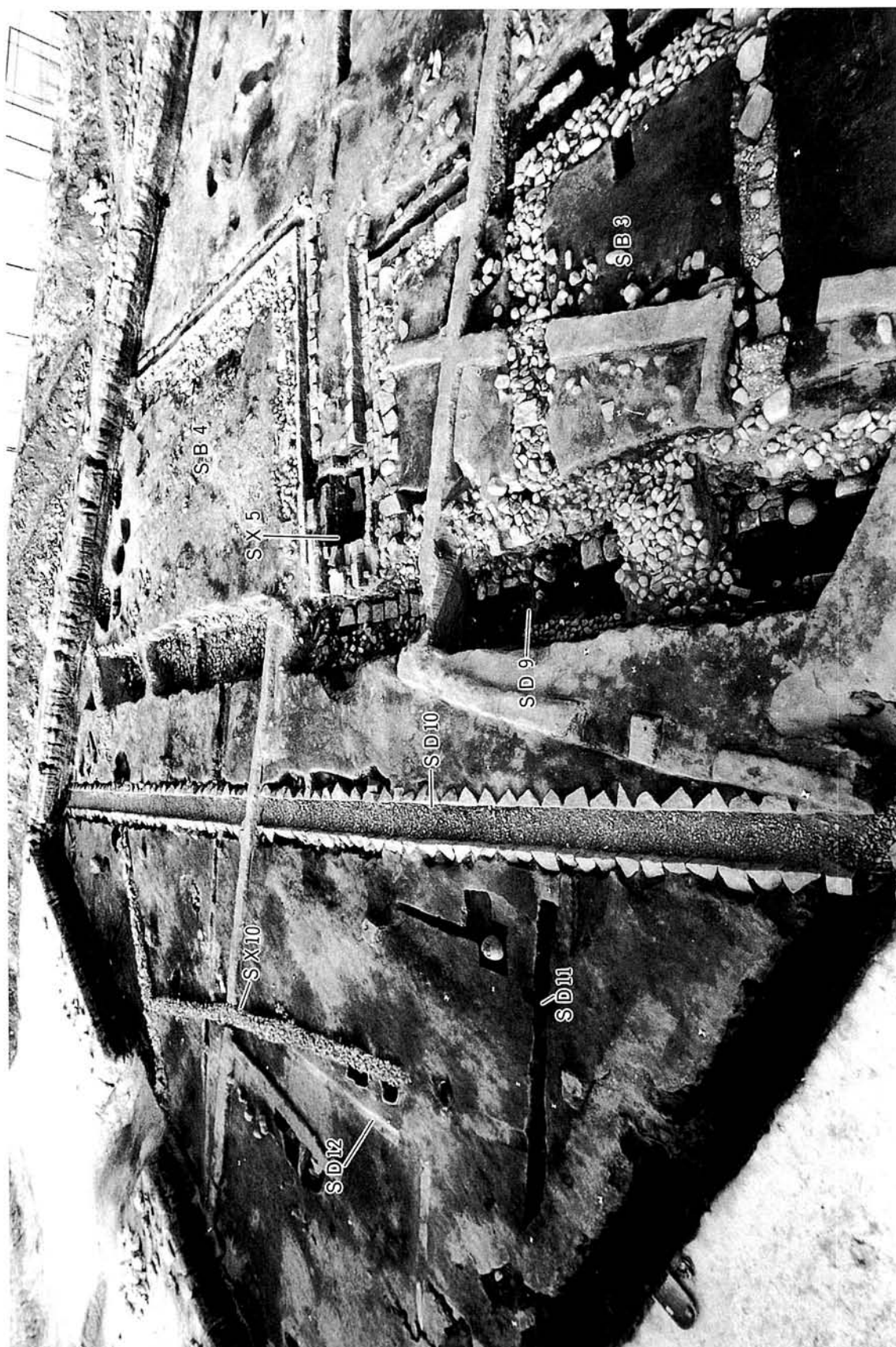
b SD9, SD10, SD12, SE3, SX10 (西より)



a SD13 東半部（北より）



b SD13 西半部（北より）



調査区西半部 (南より)



a SB1, SE1 (北より)



b SB1-P1 (東より)



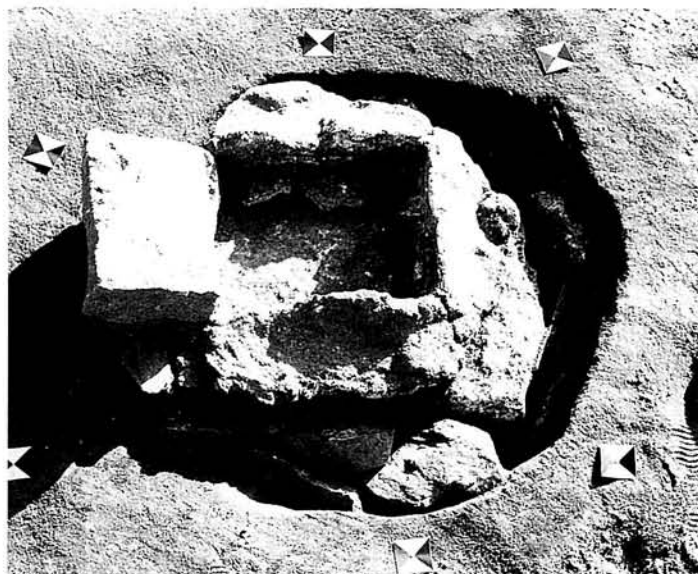
a SB1-P2 (東より)



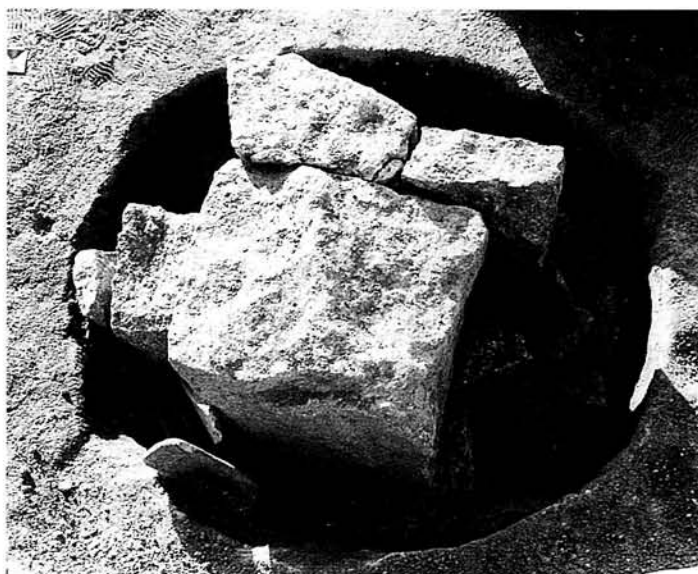
b SB1-P3 (北より)



c SB1-P4 (東より)



a SB1-P5 (北より)



b SB1-P6 (西より)



c SB1-P7 (北より)



a SB1-P8 (南より)



b SB1-P9 (北より)



c SB3 暗渠断面 (西より)



a SB2 (北より)



b SB3 (北東より)



a SB3 溝内せきとめ石 (北より)



b SB4 (南東より)



a SE1 蓋石出土状況（東より）



b SE1（西より）



a SE 2 埋石出土状況（西より）



b SE 2（北より）



a SE 3 (東より)



b SE 3 (東より)



a SX1 (西より)



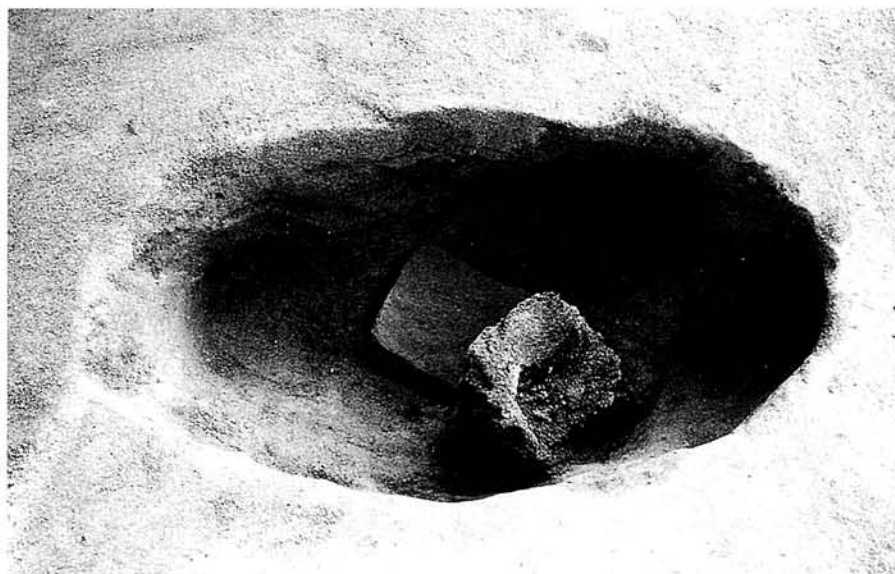
b SX2 (南より)



a SX2 排水口 (西より)



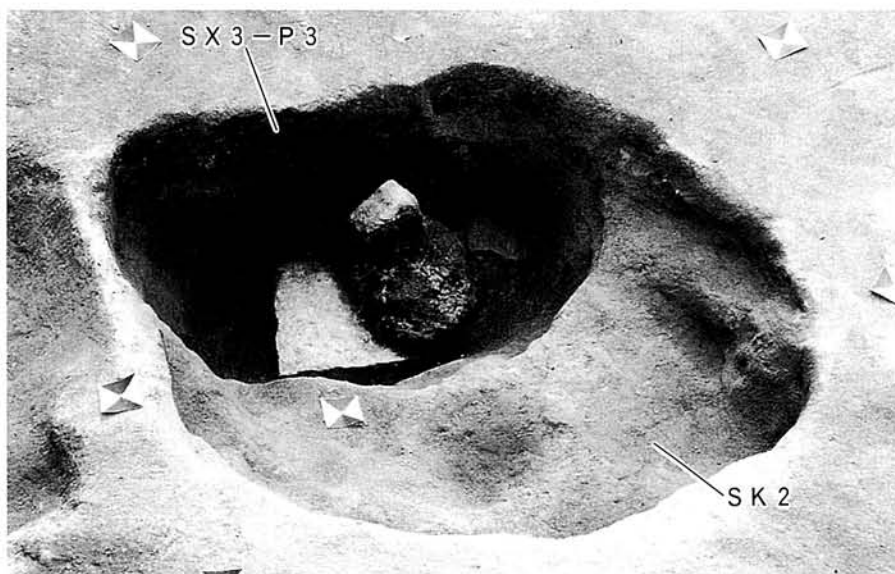
b SX3 (北より)



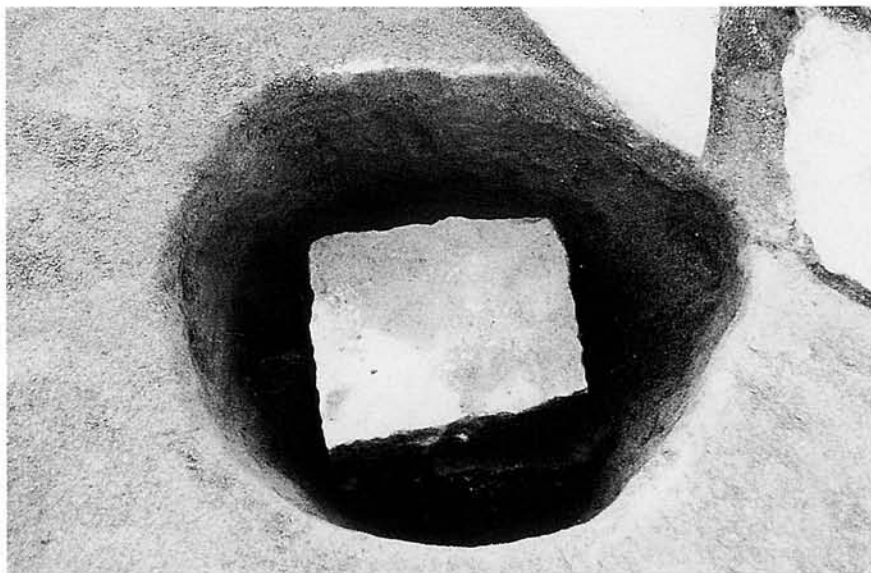
a SX3-P1 (北より)



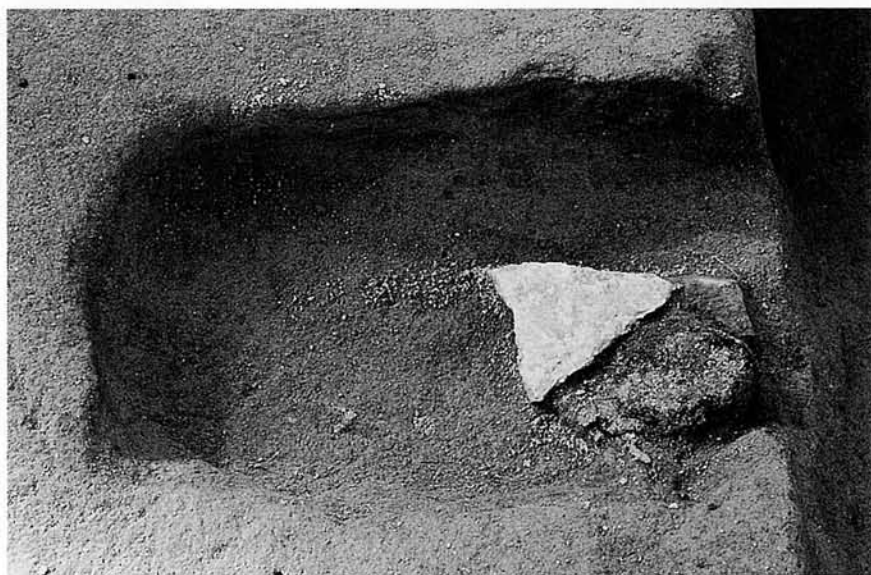
b SX3-P2 (南より)



c SK2, SX3-P3 (北より)



a SX3-P4 (北より)



b SX3-P5 (北より)



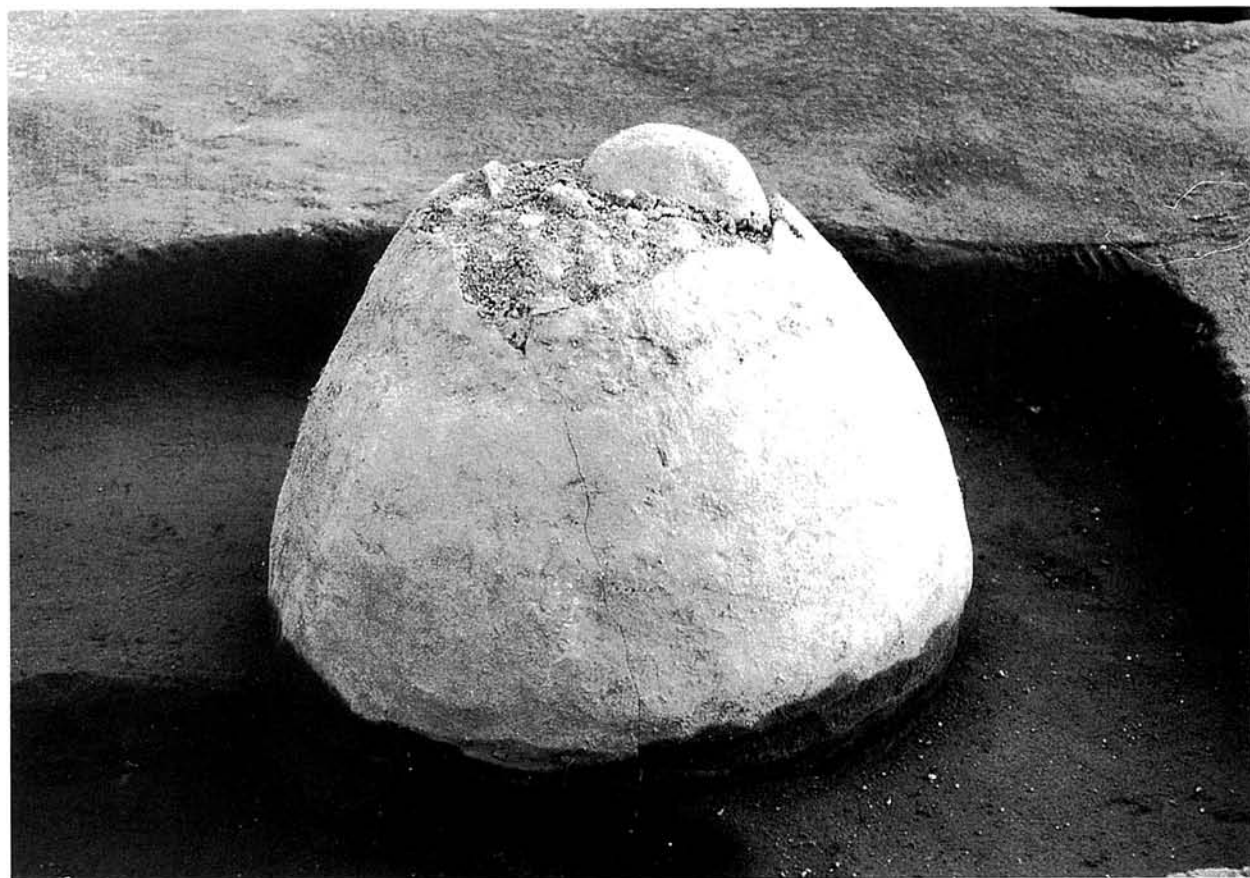
c SX7 (北より)



a SX5 (北より)



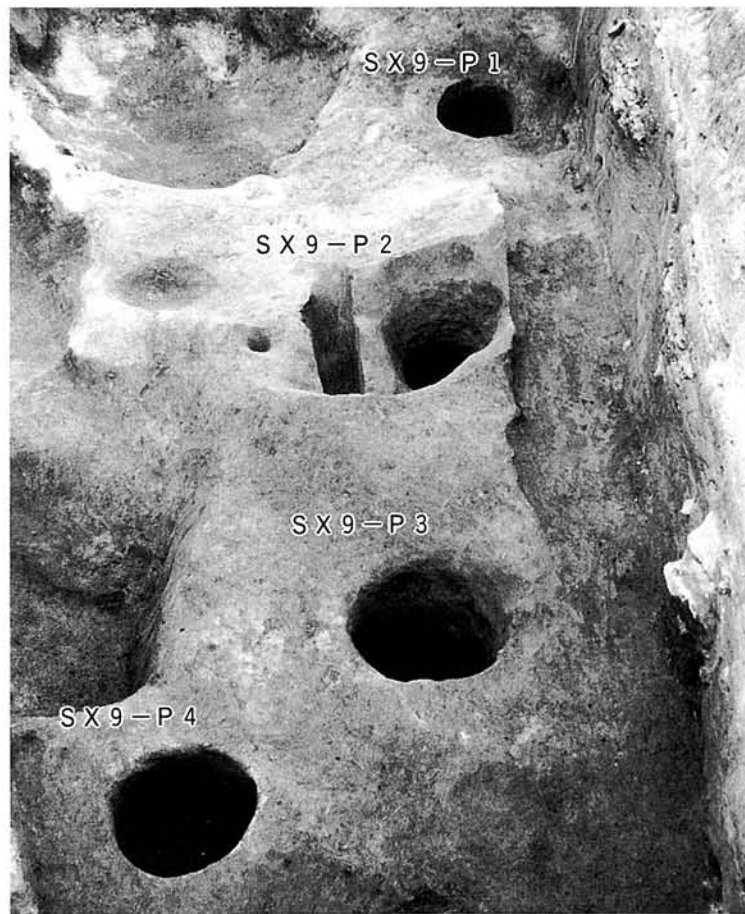
b SX5 排水口 (西より)



a SX6 (北より)



b SX8 (北より)



a SX9 (北より)



b SX10 (南西より)



S X11 (東より)



S K 8-69



S K 2-1



S K 11-2



S K 12-21



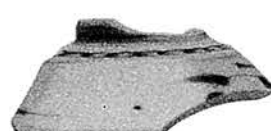
S K 8-2



S K 9-6



S K 7-10



S K 12-7



S K 8-108



S K 12-25



S K 8-9



S K 12-36



S K 8-143



S K 7-3



S K 8-164



S K 8-47



S K 8-67



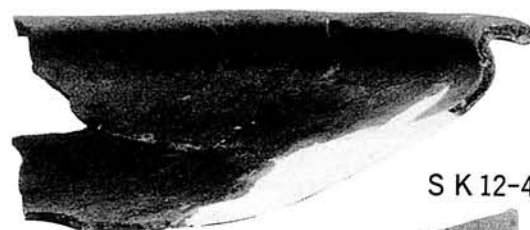
S K 12-20



SK 9-46



S K 9-47



S K 12-46



S K 7-12



S K 2-2



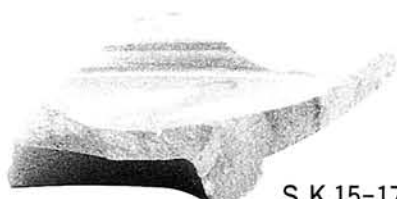
S K 16-51



S K 14-7



S K 15-3



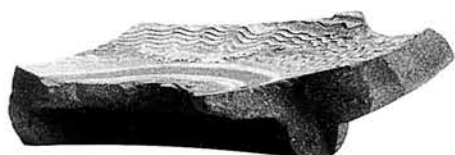
S K 15-17



S K 15-15



S K 14-5



S K 15-14



S K 13-5



S K 16-28



S K 16-42



S K 13-16



S K 15-23



S K 16-55



S K 15-24



S K 15-20



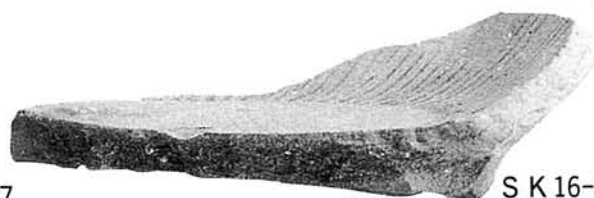
S K 16-56



S K 16-58



S K 16-57



S K 16-54



S K 15-21



S K 17-46



S K 18-12



S K 19-74



S K 19-89



S K 19-99



S K 17-75



S K 19-76



S K 17-36



S K 18-26



S K 17-21



S K 17-2



S K 17-79



S K 17-78



S K 17-77



S K 19-110



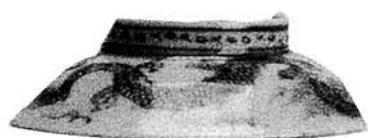
S K 18-38



S K 17-76



S K 18-39



S K 19-73



S K 19-71



S K 22-38



S K 21-3



S K 21-4



S K 22-69



S K 19-96



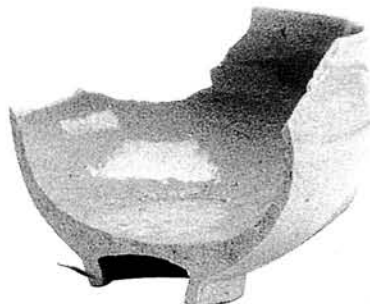
S K 20-6



S K 22-33



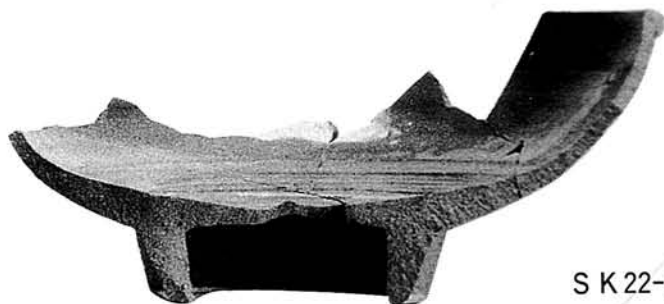
S K 22-18



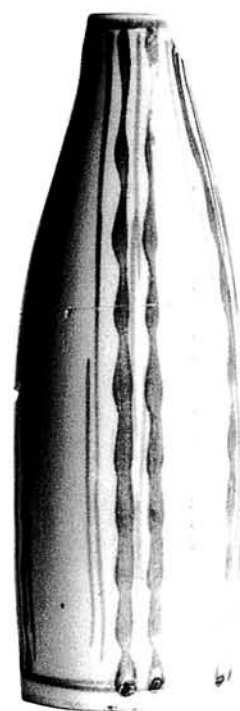
S K 22-43



S K 21-2



S K 22-66



S K 21-1



S K 22-72



S K 22-73



S K 22-71



S K 22-76



S K 22-75



S K 22-78



S K 22-49



S K 22-74



S K 22-77



S K 22-79



S K 22-80



S K 22-82



S K 22-81



S K 23-11



S K 22-70



S K 22-16



S K 22-65



S K 23-12



S K 23-13



S K 23-17



S K 23-14



S K 25-2



S K 29-3



S K 30-2



S K 25-1



S K 27-2



S K 30-1



S K 30-12



S K 30-15



SK25-3



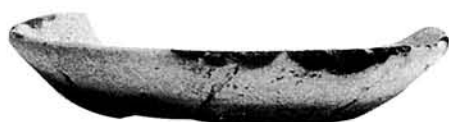
S K 25-4



S K 25-9



S K 25-14



S K 25-5



S K 25-10



S K 25-15



S K 25-6



SK25-11



S K 25-16



S K 25-7



S K 25-12



S K 25-17



S K 25-8



S K 25-13



S K 25-18



S K 30-7



S K 30-16



S K 30-17



S K 30-21



S K 30-25



S K 30-18



S K 30-22



S K 30-26



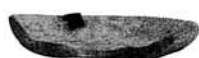
S K 30-19



S K 30-23



S K 30-27



S K 30-20



S K 30-24



S K 30-28



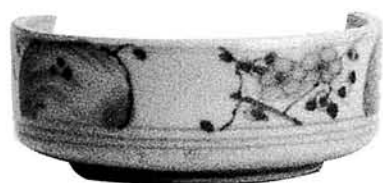
S K 35-4



S K 37-2



S K 34-14



S K 34-2



S K 34-4



S K 34-15



S K 36-11



S K 36-16



S K 36-33



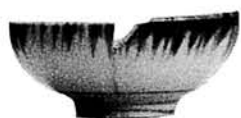
S K 36-10



S K 36-1



S K 36-31



S K 36-15



S K 36-35



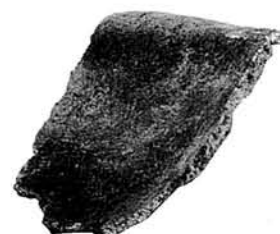
S K 36-36



S K 36-34



S K 36-51



S K 36-50



S K 36-40



S K 36-42



S K 36-49



S K 36-39



S K 36-43



S K 36-47



S K 36-37



S K 36-44



S K 36-41



S K 36-38



S K 36-45



S K 36-46



S K 36-48



S K 41-14



S K 39-61



S K 39-59



S K 41-2



S K 39-58



S K 39-60



S K 41-12



S K 41-13



S K 39-52



S K 39-14



S K 40-4



S K 39-44



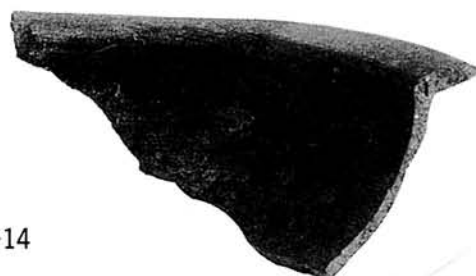
S K 40-13



S K 40-15



S K 40-14



S K 39-57



S K 40-7



S K 39-62



S K 43- 3



S K 43-12



S K 44-37



S K 44-16



S K 44-23



S K 43-24



S K 44- 6



S K 43-17



S K 43-10



S K 44-29



S K 44-18



S K 44-24



S K 43-23



S K 41-18



S K 44-38



S K 43-25



S K 43-22



S K 41-17



S K 48-11



S K 48- 7



S K 45-22



S K 45-21



S K 47-14



S K 45-13



S K 48- 5



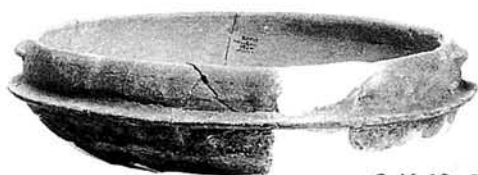
S K 47-13



S K 47-15



S K 47-11



S K 48-21



S K 47-12



S K 45-20



S K 48-10



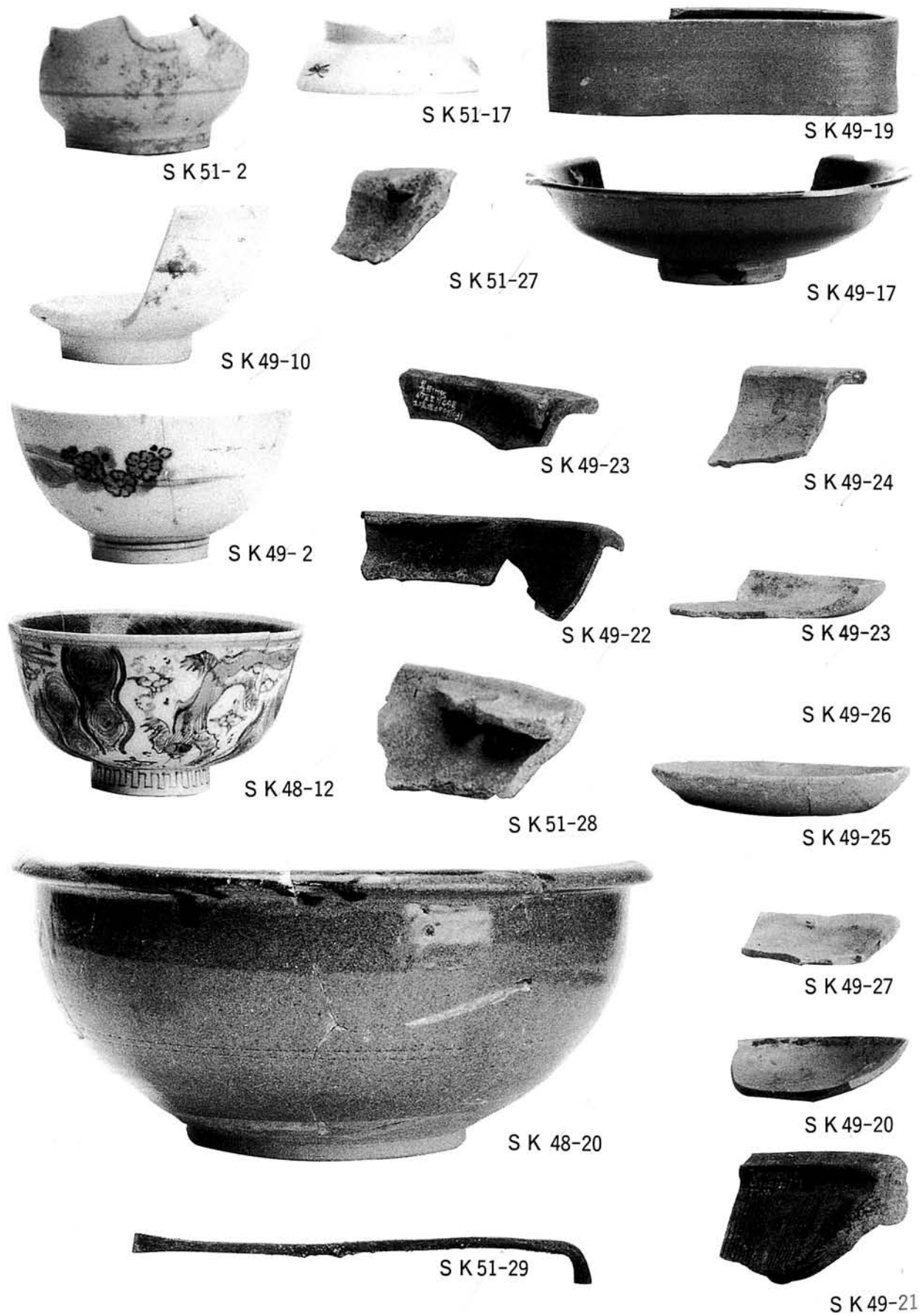
S K 47-10



S K 44-36



S K 44-35





S K 54-19



S K 52-5



S K 51-26



S K 53-15



S K 52-8



S K 51-25



S K 53-16



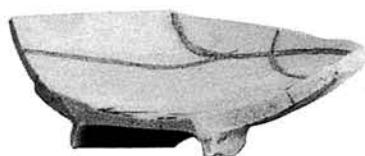
S K 54-24



S K 54-34



S K 51-24



S K 53-9



S K 54-32



S K 51-23



S K 54-35



S K 52-14

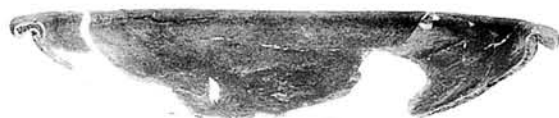


S K 54-37



S K 53-29

S K 54-38



S K 52-13



S K 54-33



S K 54-36



S K 53-28



S D2-44



S K55-6



S D2-19



S D2-漆38



S D2-漆29



S K55-18



S K56-1



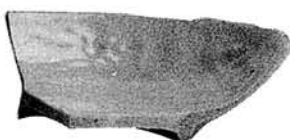
S K56-3



S K55-20



S D2-159



S K55-1



S K55-21



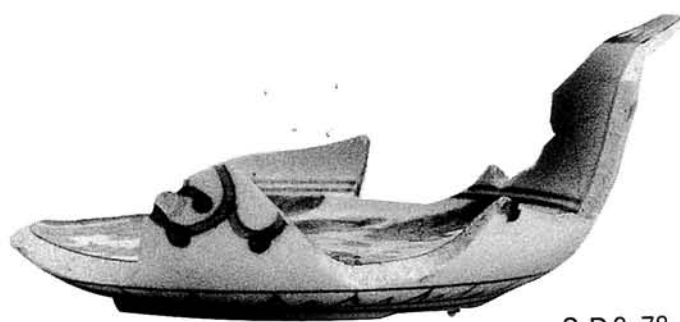
S K55-39



S K55-42



S K56-2



S D2-78



SD 3-10



SD 3-2



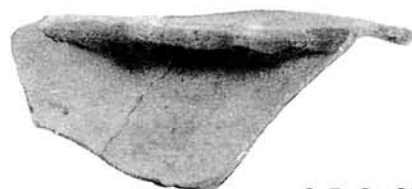
SD 3-33



SD 3-18



SD 2-160



SD 3-30



SD 3-34



SD 3-32



SD 2-赤18



SD 2-赤19



SD 2-赤20



SD 3-31



SD 7-16



SD 7-38



SD 7-40



SD 7-26



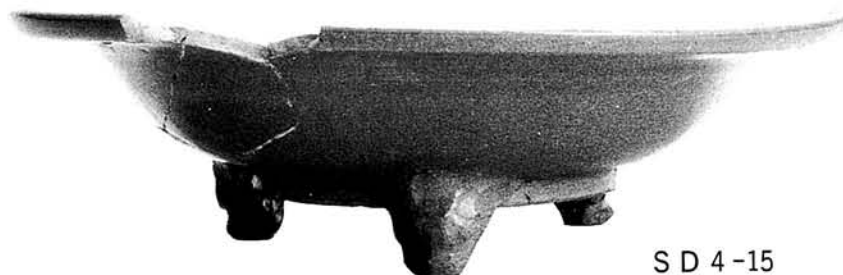
SD 7-42



SD 7-41



SD 7-27



SD 4-15



SD 4-25



SD 7-43



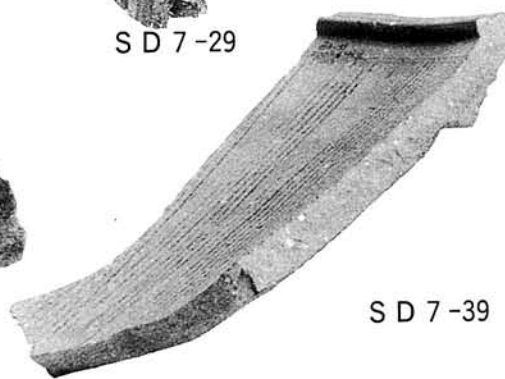
SD 7-29



SD 4-26



SD 4-27



SD 7-39



SD 8-8



SD 8-91



SD 8-38



SD 8-48



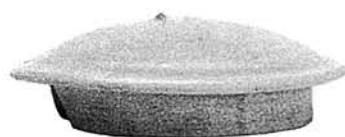
SD 8-12



SD 8-10



SD 8-49



SD 8-70



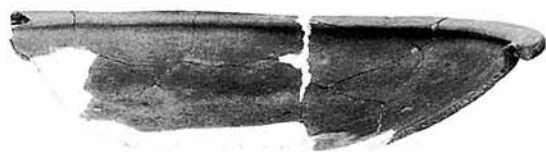
SD 8-6



SD 8-44



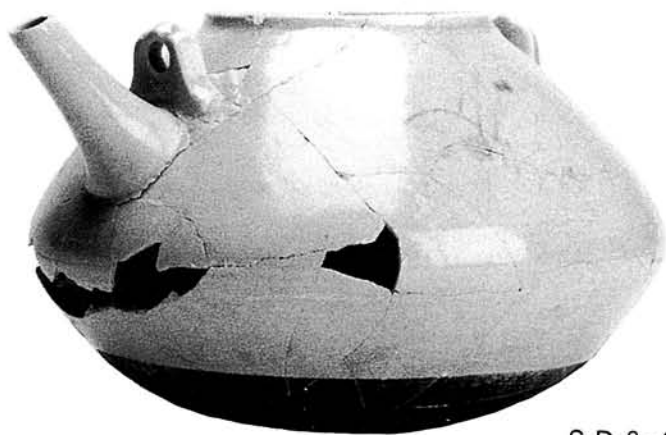
SD 8-41



SD 8-117



SD 8-119



SD 8-69



SD 8-118



SD 8-113



SD 8-115



SD 8-110



SD 8-114



SD 8-116



SD 8-112



SD 8-111



SX 8-8



SD 8-106



SX 5-1



SD 8-107



SX 5-2



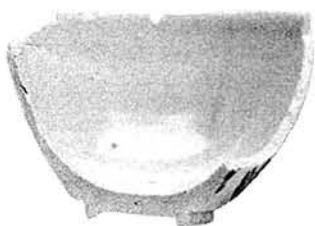
SX 6



SX 8-10



SX 7



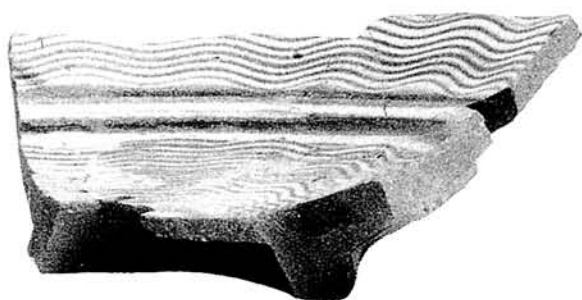
S X 8-6



S X 8-7



S X 8-2



S X 8-4



S X 8-5



S X 8-9



S X 8-3



S X 8-11



S X 8-1

報告書抄録

ふ り が な	ひろしまじょういせき もとまちこうこうぐらうんどちてん							
書 名	広島城遺跡 基町高校グラウンド地点							
副 書 名								
巻 次								
シ リ ー ズ 名	財団法人広島市文化財団発掘調査報告書							
シ リ ー ズ 番 号	第3集							
編 著 者 名	福原茂樹							
編 集 機 関	財団法人広島市文化財団文化科学部文化財課							
所 在 地	〒730-0812 広島県広島市中区加古町4番17号 アステールプラザ内							
発 行 年 月 日	西暦1999年3月19日							
ふ り が な	ふ り が な	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所 収 遺 跡 名	所 在 地	市町村	遺跡番号	° ’ ”	° ’ ”			
ひろしまじょういせき 広島城遺跡	ひろしまけんひろしましあきく 広島県広島市安芸区 なかのひがしにちょうめ 中野東二丁目	34107	一	34° 24’ 03”	132° 27’ 46”	19970901 } 19971115	1,200m ²	広島市立 基町高等 学校の改 築工事
所 収 遺 跡 名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特 記 事 項	
広島城遺跡	武家屋敷他 軍施設	近世 近代	土坑56基 溝状遺構13本 建物跡4軒 井戸3基 その他11		陶磁器 土師質瓦質土器 瓦 青銅製品 銭貨			

財団法人広島市文化財団発掘調査報告書 第3集	
広島市中区西白島町所在	
広島城遺跡 ー 基町高校グラウンド地点 ー	
1999年3月	
編集発行 財団法人広島死文化財団	
広島市中区加古町4-17 TEL (082) 248-0427	
印刷 産興株式会社	
広島市中区舟入南一丁目1番18号	